Illustration by I-IV

機動戦士ガンダム MOBILE SUIT GUNDAM THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT II U.C.0079 モビルスーツ開発秘録 II

MEGALOMANIA 編著

竹書房

Illustration by Hideaki Tenjin

苛烈かつ多様な戦況を体現する
モビルスーツ・バリエーションの存在

U.C.（宇宙世紀）0079に勃発した一年戦争は、ミノフスキー粒子散布環境下に対応した新兵器モビルスーツ（以下MS）の揺籃期であった。絶大な戦闘能力、全高20mクラスの巨体、そして人間を模したスタイルを持つMSは、一年戦争以後も「宇宙世紀のギガンテス（巨人）」として戦場に絶対的な存在感を示している。

宇宙世紀最強の兵器体系として認知されているMSではあるが、単純な「最強」を連想させる戯画的な機体は少数派である。大量の兵器の装備や、大型推進器の搭載といった極端なシルエットを持つ機体は、意外に少ないことは知られていない。

特に一年戦争期のMSの機能および意匠は、簡素な「巨大な歩兵」の域を出ないものがほとんどとえる。これはMS-06ザクⅡやMS-14ゲルググ、RGM-79ジムに代表される一年戦争時の主力MSを見ればよく分かる。

しかし、一年戦争期にも「簡素」というセオリーを破ったMS――大型ランドセルと巨大化した脚部を持つザクⅡ、右の肩口からビーム・キャノンをのぞかせるゲルググ、増加

装甲と増設火器をまとったガンダムなど――が存在した。ザクやグフといった一般的なMSのみを知る者には不自然にも見えるこれらのMSは、「モビルスーツ・バリエーション（MSV）」と呼ばれる派生機群の一部である。

MSVは一年戦争中かその前後に実在、あるいは実機が製造されなくても計画が進行、もしくはプランの検討が行われていたMS群だった（一年戦争前後に開発、検討された派生MSの総称が「MSV」だといってもいい。ジオン公国軍と地球連邦軍は関係がない）。多くは従来機を改修したMSで開発目的は様々であるが、一年戦争の戦争形態と時代背景抜きにその存在意義を語ることはできない。

ジオン独立戦争こと一年戦争は、戦争をしかけたジオン公国の目論見に反して短期決戦にはならなかった。それは地球上にも戦線が拡大することを意味し、宇宙、スペース・コロニー、地上、空、海など地球圏のすべての場所、あらゆる環境が戦場となった。

戦争の長期化、戦場の拡大と多様化は地球連邦・ジオン公国双方の兵器開発を加速させた。その洗礼が戦場の主役となったMSにも及ぶことは当然であった。

結果、一年戦争中に膨大な種類のMSの開発が進められた。それがMS-09ドムのような陸戦用重MS、MSM-07ズゴックに代表される水陸両用MS、MSN-02ジオングなどに見られるニュータイプ用MSといった形で結実した。

ただし一年戦争中に実用化された新型MS群は、一足飛びに開発されたものではなかっ

た。旧型機と新型機を繋ぐMSや、汎用MSに水中運用能力を付与した機体、サイコミュ・システムの試験機といった技術系譜上無視できないMS――こうした旧型MSをベースとした技術実証機や実験機による技術蓄積があって、初めて戦力化されたものがほとんどなのである。

また、完全新型機配備までの暫定的処置や開発期間の短縮、従来機のアップデートや局地戦能力の付与、新戦術への対応といった理由から、旧型MSの改修型が開発されたケースも目立っている（完全新設計の試作機や新型機として開発されながらも制式採用されないケースや、生産数が極端に少ないといった理由から、ほとんど知られずに終戦を迎えたMSも存在した）。MS-09R リック・ドム、MS-07B-3 グフ・カスタム、MS-06J ザクⅡJ型などがこうした背景を持つMSの代表で、MSVも同様の流れの中にある機体群だったのである。

ただし、リック・ドムやザクⅡJ型とMSVとは決定的に異なる面もある。前者が原型機の基本形状からほとんど変わっていないのに対して、後者、つまりMSVには少なからぬ形状変更が見られることだ。機体によって程度の差はあるが、中にはMS-06Z サイコミュ・システム試験用ザクのように原型機の面影がほとんどない機体も存在する。

MSV特有の原型機からの形状変更は、大幅な仕様変更や原型機では想定されていなかった新デバイスの搭載に因るところが大きい。一般的なMSを局地戦用機や実験機など

の特殊仕様にするためには、仕方がない処置だったといえる（ＭＳＶに分類される機体でも、ＹＭＳ－07Ａプロトタイプ・グフやＹＭＳ－09プロトタイプ・ドムなどの試作ＭＳや、主力ＭＳを転用した一部の専用機は比較的シンプルな機体となっていた）。

だが、ここである疑問が生じる。

単純な改修やアップデートは、ＭＳに限らずあらゆる兵器や機器で見られるものである。主力戦車の車体を流用して自走砲を作ることが可能なように、ＭＳの兵装や火器管制システムを換装して砲戦用ＭＳとするのも難しくないだろう。実際、ＭＳ－06Ｋザク・キャノンやＭＳ－14Ｃゲルググ・キャノンのように、主力ＭＳを改装・換装した砲戦用ＭＳは少なからず存在していた。

だが、元々宇宙／スペース・コロニー内での運用を想定していたＭＳを局地戦用、特に熱帯用や水陸両用へと改造できるのだろうか？　宇宙船を砂漠対応の自動車や潜水艦に改造するのと同じで、無理な話なのではないだろうか？

この疑問への回答は、ザクⅡをベースとしたＭＳＶであるＭＳ－06Ｄザク・デザートタイプやＭＳ－06Ｍ（ＭＳＭ－01）水中用ザクの存在が示している。このことから、ＭＳを局地戦用タイプに改造することは可能なのだ。

ＭＳの雛形となったＭＳ－01（ＺＩ－ＸＡ3）が宇宙とスペース・コロニー内の双方に対応していたことからも分かるように、元来ＭＳは優れた汎用性を持っている。

ならば実戦用ＭＳの汎用性をもってすれば、宇宙のみならず、地球上での運用にも耐えられることは容易に想像できる。例えばザクⅡは数多くのＭＳＶのベースとなったが、それは、単に生産数が多かっただけではなく、設計段階から盛り込まれた汎用性と拡張性が極めて優れていたためだった。

もちろん無改造では過酷な環境には対応できないが、全領域運用性を犠牲にして局地専用の改修を施すのであれば、砂漠や寒冷地、海洋といった環境下でもＭＳは運用可能である。この点が、ＭＳとそれ以前の兵器を分かつファクターのひとつなのである。

こうした状況は、ＭＳ開発でジオン公国の後塵を拝していた地球連邦においても同じだった。一年戦争開戦以前からザクⅡをベースとしたＭＳＶを開発していたジオン公国軍に対して、地球連邦軍は戦争後期になってようやくＭＳの実戦投入に漕ぎ着けたに過ぎない。だが一度ＭＳを戦力化するや、地球連邦軍もＲＸ系ＭＳや主力ＭＳジムを中心に、多様なＭＳＶを生み出していった。

こうして一年戦争の長期化と戦場の多様化、ＭＳ固有の高度な汎用性が相まって生み出されたＭＳＶは、生産数こそ主力ＭＳに及ばないものの、既存のＭＳをベースとした実験機や局地戦用機、任務特化型などとして完成し、後のＭＳ開発や戦局に少なからぬ影響を与えた。そして、Ｕ．Ｃ．００７０年代後期から一年戦争の間に無数のＭＳＶが開発されたという事実は、戦争期ならではの急速な兵器の高性能化、そして陳腐化があったことも

示しているのだ。バリエーションの展開という形で戦争の推移を体現したＭＳＶは、物言わぬ歴史の証言者といってもいいのかもしれない。

本書では、伝説的な活躍で勇名を馳せたＲＸ－78－2 ガンダムや、ジオン公国軍のワークホースとして一年戦争を戦い抜いたＭＳ－06Ｆ ザクⅡＦ型といった著名なＭＳの陰に隠れたＭＳＶをクローズアップし、その開発経緯や性能、エピソードを紹介していく。

ＭＳ開発史の狭間に存在する機体やマイナーなＭＳが多いＭＳＶではあるが、単純にマイノリティなものと決めつけることはできない。これらＭＳＶを知ることは、ＭＳ開発や技術系譜といったテクノロジー面だけでなく、各軍の置かれた状況や戦術の変化、一年戦争の各時期における戦略環境といった政治的・軍事的側面を語る上でも有用なのである。

CONTENTS

INTRODUCTION 006

第一章　局地戦専用機からハイエンド機まで、多様なバリエーション展開
ザク系MSV 014

最大のバリエーション数を誇るザクⅡの派生機 016
MSの利点を偵察任務に活かしたザク強行偵察型 025
新主力MSとして機体されたS型以上の宇宙用高性能機、高機動型ザク 034
地球上での運用に特化した局地戦用のザクⅡ系MSV 058
前線で急造された再利用型のザクⅡ系MSV 081
ジオンへの過渡期的機体となったニュータイプ用MSV 087
COLUMN01　スタンダードな形式のザクⅡ系MSV　01 022
COLUMN02　スタンダードな形式のザクⅡ系MSV　02 056
COLUMN03　他機種の影響を受けたザクⅡ系陸戦バリエーション 080

第二章　活動範囲の拡大と重装化への解決策　グフ系MSV 094

新型MSや画期的新機構の礎となったグフ系の派生機 096
グフの実用化と熟成に貢献したプロトタイプ・グフの開発 104
戦場の状況への個別対応を図ったMS-07Cシリーズ 113
MSの単独飛行を目指したグフ飛行試験型シリーズの開発 123
COLUMN04　グフB型の個人専用機 102
COLUMN05　「MS-08」ナンバーの陸戦機 109

THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT II

第三章　基本仕様と踏襲した局地戦専用機への特化　ドム系MSV ____ 130

原型機の基本仕様をそのままに性能向上を目指したドムの派生機 ____ 132

陸戦MSにさらなる進化を促したプロトタイプ・ドムとその改修機 ____ 138

COLUMN06　ジャブロー攻略用の開発された特殊仕様の水陸両用MS群 ____ 155

第四章　拡張装備のオプション化によるバリエーション展開
ゲルググ系MSV ____ 164

オプション換装によって性能の幅を広げたゲルググ・バリエーション ____ 166

オプション装備の研究によるゲルググ系MSVの開発 ____ 174

COLUMN07　「パーフェクト」の名を冠されたジオング系MSV ____ 190

COLUMN08　MSVとは異なる派生MS群――MSXの存在 ____ 193

第五章　試作機と量産機を問わずに開発されたバリエーション機
地球連邦軍系MSV ____ 202

試作、量産を問わず多数が開発された地球連邦軍MSの派生機群 ____ 204

最強のMSシリーズとなったガンダムのバリエーション ____ 207

中距離支援能力を発展させたガンキャノンのバリエーション ____ 227

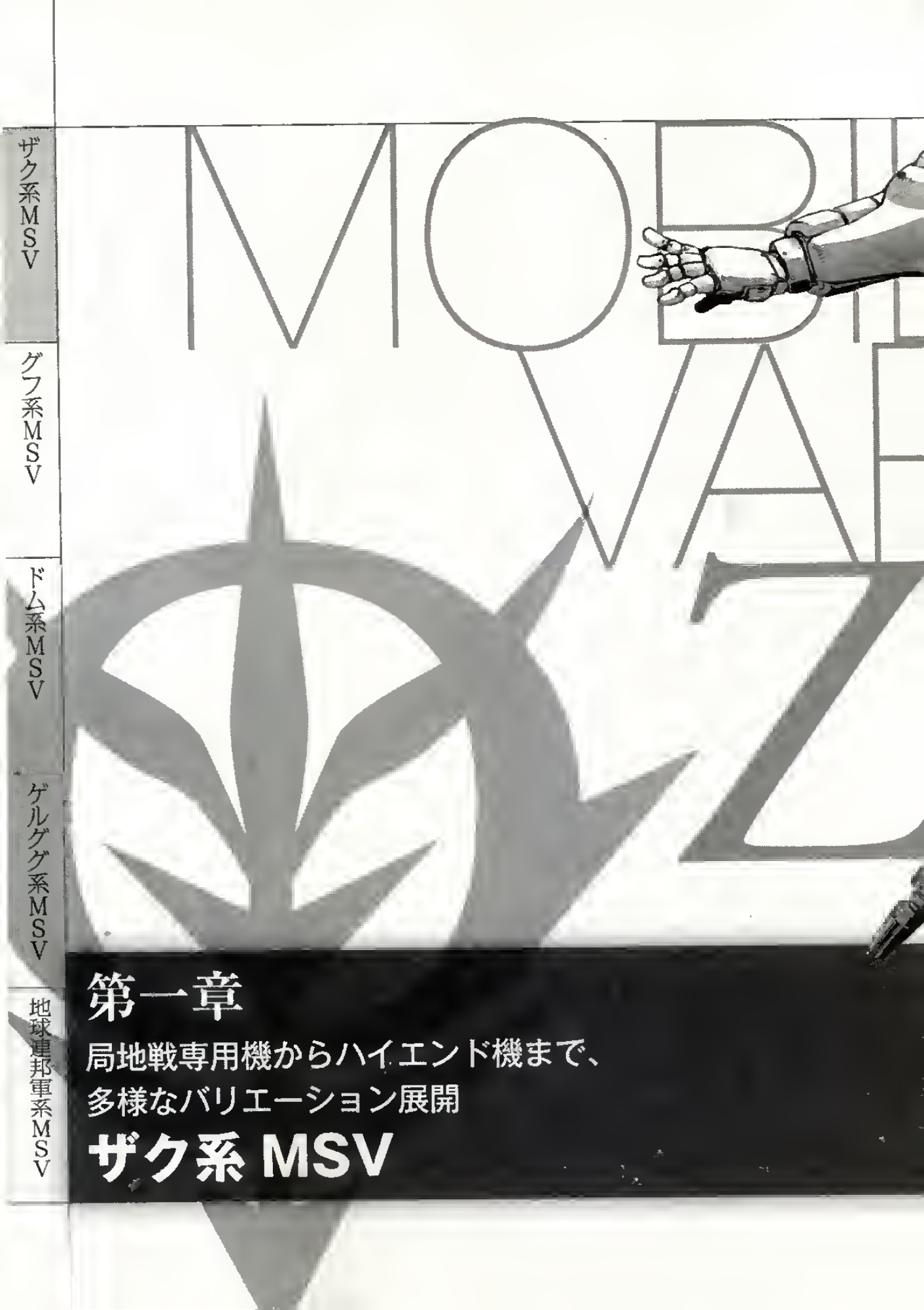
地球連邦軍的発想に立った主力MSジムの派生機群 ____ 244

COLUMN09　地球連邦軍の非MS系支援用機動兵器とそのバリエーション機 ____ 239

COLUMN10　「ジム」の名を持ちながらもジム・シリーズには属さないMSV ____ 261

COLUMN11　航空／航宙機を中心とした非機動兵器型のMS支援機 ____ 264

CONCLUSION ____ 270



第一章

局地戦専用機からハイエンド機まで、
多様なバリエーション展開

ザク系 MSV

最大のバリエーション数を誇るザクⅡの派生機

原型機の開発時期、生産数、汎用・拡張性などを活かし一年戦争を通じて開発され続けたザクⅡ系MSV

「MSの代名詞」とまで呼ばれる名機ザクⅡは、一年戦争を通して事実上の主力MSとして運用されたジオン公国軍のワークホースである。最もスタンダードな汎用型のMS-06FザクⅡ F型、〝赤い彗星〟シャア・アズナブルの乗機としても有名な総合性能向上型のMS-06S ザクⅡS型、一年戦争初期に絶対的な破壊力を見せ付けた核兵器運用型のMS-06C ザクⅡC型、地球上の陸戦におけるMSの優位性を証明したMS-06J ザクⅡJ型（陸戦用ザクⅡ）といったタイプが特に知られている。

ただし「MS-06」の型式番号を与えられた、いわゆる「ザク（Ⅱ）」のバリエーションはこれだけではない。地球侵攻作戦の決定に伴う局地戦用MSの研究、一年戦争の長期化を受けた高性能MSの必要性といった状況は、ザクⅡの派生機の開発を加速していった。この結果、誕生したザクⅡ系MSVには、前述のF型やJ型のようにC型で決定されたザクⅡの基本形状を逸脱した機体が多く見られ、またそのバリエーション数も一年戦争

期最多となっている。

ザクⅡのバリエーション数が多いのは、ザクⅡそのものの生産開始時期が早かったこと、生産数が多かった（生産ラインを流用できた）こと、そして汎用性や拡張性を重視した設計が大きな理由と考えられる。

その生産開始時期は、一年戦争が開戦する1年以上前のことだった。最初期型のMS-06Aザクの量産開始がU.C.0077年7月、C型の量産開始がU.C.0078年1月、F型の生産が主軸に据えられたのがU.C.0078年12月で、いずれも一年戦争開戦前である。陸戦用のJ型も、生産自体は一年戦争以前に開始されている。この時点ではザクⅡが最新のMSで、局地戦用MSや高性能機などのMSVのベースに本機が選ばれたことは当然であった。

MS-06F ザクⅡF型

生産数、つまりジオン公国軍におけるザクⅡの絶対数が多かったことも事実である。ザクⅡシリーズの総生産数は8000機以上、F型だけでも3000機または3246機といわれている。この数は、生産ラインが充実していたことを意味し、ザクⅡのラインを可能な限り流用しつつ、局地戦用機や高性能機を生産できたことを示している（一年戦争開戦以前から戦争前期頃までは充実した

生産ラインが、戦争中期から後期にかけては絶対数の多さが、ザクⅡバリエーションが開発された大きな理由と考えてもいい。なお、統合整備計画の推進や新型MSの生産の本格化により、戦争中期以降はザクⅡの生産自体が縮小傾向にあったようである）。

設計上の特徴である汎用性や拡張性の高さも、重要なファクターだったことは間違いがない（ザクⅡの高度な汎用性は、ジオン公国首脳部が地球侵攻を決定したことから盛り込まれたものといわれ、局地戦用機を中心としたMSVとも密接な関係がある）。ザクⅡの相対的性能が低下した一年戦争後期にあってもザクⅡ系のMSVが開発されたのは、旧式化したMSの有効利用だけではなく、その拡張性からほかの機体と比べて改修が容易だったことが影響していると考えられる。これは、同じく旧式化しながらも設計余裕の少なさからか、派生機があまり開発されなかったMS-05ザクIと対照的だった。

こうした要素から幾多のバリエーションが生み出されたが、ザクⅡ系派生機全体の性能傾向に統一性は見られない。グフやドム、ゲルググといったほかのジオン公国系MSの派生機の開発には、系列ごとに一定の傾向が見受けられるが、ザクⅡ系MSVは局地戦用機や実験機、または前線レベルの急造改修機と開発の裾野が極めて広いのである。

この背景には、ザクⅡの配備期間が長かったため、地球侵攻作戦や戦争の長期化、戦線膠着やジオン公国軍の劣勢といった各時期の影響を受け（またはその状況を見越して）、その度に派生機が開発されたことがある。結果、ザクⅡのバリエーション開発は一年戦争

におけるジオン公国軍の推移を如実に体現することになった。

MSの可能性の証明したザクⅡ系MSVの歴史

ザクⅠの実用化に伴い対地球連邦戦争を決意したジオン公国は、それとほぼ同時期のU.C.0076年12月、地球侵攻作戦を前提とした局地戦用MSの開発に着手した。開戦に新設計の局地戦用MSは間に合わなかったが、戦争が進行する間もザクⅡとそのバリエーションの開発は進んでいった。

地球侵攻作戦やそれに備えた局地戦用MSの開発との兼ね合いにより、ザクⅡは「想定されるあらゆる環境に対応可能な、MSの持つべき汎用性の拡大」という要求の下、開発が行われた。最初期型のザクⅡであるA型のロールアウトがU.C.0077年7月だったのは、このような時系列の上でのものだった。

ザクⅡA型は、両肩にスパイク・アーマーなしの球形装甲が取り付けられたほか、ザクⅠ用に近いランドセルが設置されており、後に誕生したF型やJ型などの一般的なザクⅡとは異なる外観を持っていた。なお、当初の武装はザクⅠ用で、試験時にザクⅠのような緑と青のカラーリングが施されたケースもあったとされる。

84機が生産されるに止まったといわれるA型だが、その後C型やF型に準ずる改修が行

われ（このためA型として生産されたザクⅡを、外観で見分けることは難しくなった）、一年戦争に投入された。

A型以降、一年戦争開戦までに重力下運用能力を付与された核兵器運用仕様のC型、最もスタンダードな汎用仕様のF型、高練度パイロットの要求によって生まれた総合性能向上型のS型、空間戦能力を廃して地球上での運用に特化した陸戦仕様のJ型などが開発、製造されている。こうして一週間戦争やルウム戦役、そして地球侵攻作戦で猛威を振るったザクⅡの各タイプが生まれたが、ザクⅡ系MSVの開発は進んでいたのだろうか？

結論からいえば、一年戦争開戦以前からザクⅡ系MSVは開発されていた。当時、充分な拡張性や性能を持っていたMSはザクⅡだけで、局地戦用機を含めたほかのMSの実用化が遅れる中、ザクⅡのバリエーション開発が優先されるのは当然だった。ただし、一年戦争開戦直前のジオン公国では1機でも多くのMSを必要としていたため、生産性が重視されており、スタンダードな形状から逸脱したMSVは生産数が少なく、また、ペーパープランに終わることもあった（C型、F型、S型、J型といったザクⅡの形状が、ほとんど同じなのはこれが要因である）。

ルウム戦役で地球連邦軍艦艇を攻撃するF型（上）と、地球降下作戦に投入されたJ型（下）。実戦における有効性の証明がMSV開発を加速させた。

こうした中にあっても、MS-06M 水中用ザクなどの局地戦用ザクⅡの開発が行われる一方で、実働試験で実証されたMSの性能から特殊任務用MSの研究開発も進められることになった。その代表と考えられる機体がMS-06E ザク強行偵察型で、ザクⅡのバリエーション開発は、MSが戦闘兵器の域を越えた存在であることを証明した。

そして一年戦争が開戦し、「ブリティッシュ作戦」の失敗と南極条約締結を受けた戦争の継続、地球侵攻作戦の実施によって戦局が推移すると、ザクⅡ系MSVも新たな姿を見せていく。この結果、グフ配備までの過渡期的な処置として砂漠用のMS-06D ザク・デザートタイプが開発されたほか、地球連邦軍のキャノン・タイプMSの影響を受けたMS-06K ザク・キャノンなどが実用化されるに至った。また戦争の長期化で、高性能な宇宙用主力MSの必要性が高まった結果、MS-06R 高機動型ザクが開発されている。

一年戦争後期に入ると前線は宇宙へと戻り、MS-09R リック・ドムやMS-14 ゲルググといった新型MSの配備が進んだため、局地戦用のザクⅡ系MSVの必要性は低下し、宇宙用の新主力機として期待された高機動型ザクも大量配備は見送られた。

しかし、ザクⅡの高度な汎用性や拡張性は後発機を上回るものがあり、MS-06Z サイコミュ・システム試験用ザクやMSN-01 高機動サイコミュ試験用ザクといった技術実験機が開発されている（同じく一年戦争後期、「ペズン計画」においてザクⅡをベースとした高性能機MS-11 アクト・ザクが開発された）。

MSVは大半が試作や局地戦用機、実験機などのため、一般的な量産機からは形状が逸脱する傾向にある。これは高機動型ザクやザク・キャノンなどに顕著で、中にはサイコミュ・システム試験用ザクのように原型機の面影がほとんど見られない機体も存在する。

それでもF型系列やJ型系列のザクⅡ系MSVの中には、一般機と大差ないシルエットを持つモデルも存在している。それがMS-06F ザクⅡF型ドズル・ザビ専用機とMS-06FS ザクⅡFS型、MS-06J ザクⅡJ型湿地戦仕様である。

ドズル・ザビ専用機は、その名の通り宇宙攻撃軍司令ドズル・ザビ中将が搭乗した機体だった。特殊形状のマルチブレード・アンテナ（Type MH8-512というモデルらしい）、両肩のスパイク・アーマー、スパイクを追加装備した手甲部、唐草模様のレリーフなどが施されたほか、コクピットがドズル中将の体格に合わせて大型化されている（ドズル中将は、身長2mを遥かに越える巨漢として知られる）。この機体の兵装としてType-L2と呼ばれる大型ヒート・ホークが有名である。

このように特殊な外見や兵装を持つ機体ではあるが、大型ヒート・ホークはM

MS-06F ザクⅡF型
ドズル・ザビ専用機

Ｓ・05Ｂ ザクⅠＢ型ランバ・ラル大尉機などでも使用されたといわれるモデルで、コクピット以外の内部構造はほとんど変わっていないと思われる。これは、型式番号が一般機と同じＭＳ・06Ｆであることからもうかがえる。

ドズル中将は、本機を戦場視察の名目で実戦に使用したとされる（余談だが、〝ソロモンの白狼〟シン・マツナガがドズル中将機を護衛したことがある）。また、本機が艦上に立ちながらジオン公国軍旗を掲げるプロパガンダ用の写真が存在したという説や、サイド3で本機の模型が販売されていたという説もある。

ＦＳ型は、ガルマ・ザビ大佐やギャビー・ハザード中佐（最終階級）らの乗機として知られる機体で、外見はＳ型に近くマルチブレード・アンテナを装備する。Ｓ型との相違点は頭部に多く見られ、マルチブレード・アンテナの形状（高機動型ザクと同じＴｙｐｅＦ・12ＢＺと思われる）、頭部に４門装備された40㎜ガトリングガン（口径は30㎜ともいわれる）などが外見上の特徴となっている。なお、ガルマ・ザビ大佐機は特殊形状のヒート・ホークを装備していたとされる。

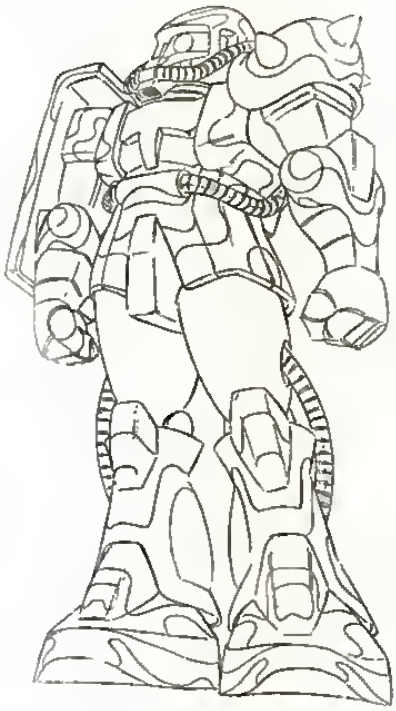
ＦＳ型の性能や仕様については不明な点が多い。Ｆ型の生産ラインから状態のいい機体（い

MS-06FS ザクⅡFS型
ガルマ・ザビ専用機

わゆる「当り」）を引き抜いて改修した機体とも、F型とS型のハイブリッドカスタム機とも、白兵戦能力と陸戦能力を強化したモデルともいわれている。ただし性能はS型には劣るようで、高性能機ではなく高級機に位置付けられる。これは、ザビ家に代表される政治的に高位の人物を中心に与えられたことからも推測でき、儀礼用とされることもある一因となっている。

運用例はあまり知られておらず、ガルマ大佐が実戦で使用したかも分かっていない。一説には一年戦争末期、ガルマ・ザビを騙る人物が北米戦線で使用したともいわれている。

J型の湿地戦仕様は、前述の2機のような高級機ではなく、陸戦用の一般機と考えられる。通常のJ型からの変更点は迷彩塗装が施されたことで、内部機器に改修が加えられているかは不明である（本機は単純にMS-06J ザクⅡJ型と記されるため、塗装以外の変更はなかった可能性も否定できない）。



MS-06J ザクⅡJ型湿地戦仕様

これら3機種は他のMSVと比べて特徴に乏しい機体であるため見落とされがちだが、一年戦争開戦以前からのMSの生産性重視方針や、軍事独裁国家にありがちな公私混同などを体現しており、ザク系MSVのみならずジオン公国の有り様を知る上で重要なMSとなっているのである。

MSの利点を偵察任務に活かした
ザク強行偵察型

ザク強行偵察型の開発

MS-06E ザク強行偵察型は、最初期に開発されたMSVのひとつで、その名の通り偵察任務用の機体となっている。

そもそも「MSが偵察に適しているか?」という疑問が浮かぶが、ジオン公国軍はMSの試験運用が行われる中で、MSによる偵察活動に興味を示していたと見られる。これは一年戦争開戦以前、第1次MS機動部隊（教導機動大隊のことか）での試験運用において、ザクIが偵察に投入されていたことからも推測できる。

ジオン公国軍が偵察活動へのMS投入に興味を示した背景には、MS特有の能力への評価があった。

高性能な光学装置や複合センサーを搭載するMSはミノフスキー粒子散布環境下における監視能力が高く、ジオン公国軍が想定する戦術環境に適合

MS-06E ザク強行偵察型

していた。これはザクⅡのモノアイを流用した観測ポッドOP-02cが、宇宙における試作兵器のデータ収集に用いられたことからも分かる（外部監視装置として、モノアイを搭載したムサイ級軽巡洋艦が存在したともいわれる）。

では、モノアイやそれに相当する機器を搭載した偵察用航宙機を開発すべきではないのか？　実際、ジオン公国軍は偵察機ルッグンを開発し、地球での偵察活動に使用している。しかしこれは、大気圏内においては航空機が偵察用として優れていたため採用されたに過ぎず、飛行、高度、最高速度といった概念がない宇宙空間では事情が異なる。

宇宙と重力下の双方に対応したMSは航宙機と異なり、地表に降下後、歩行による移動や待機を繰り返せる点も偵察には有利となる。これにより、スペース・コロニー内へ侵入しての高精度な偵察、月面への降下後、機体を隠匿しながらの偵察など、航宙機には不向きな活動が可能となる。

ただし、優秀なモノアイがあるとしても、ミノフスキー粒子散布環境下での索敵範囲は広くないため、偵察時にはターゲットに接近せざるをえず、特に敵艦隊や基地施設などへの偵察が危険であることに変わりはなかった。実際、一年戦争末期の星一号作戦時、コンペイトウ（地球連邦軍によって制圧、占拠された宇宙要塞ソロモンの変名）を発つ地球連邦艦隊を偵察したザクⅡ部隊が、迎撃を受けて壊滅している。この際に用いられたザクⅡはF型（S型もあったようだ）と見られるが、黒系のロービジリティー塗装が施されてい

たにも拘らず発見され撃墜の憂き目を見たことからも、MSであっても脅威度が高い目標への偵察は危険なことが理解できる。

それでもMSは機動性に優れているため、目標への急速接近と離脱が容易であり、ミノフスキー粒子の散布と優れた装甲防御力によって高度な生存性を確保できること、被発見時に追撃を受けても兵装を携行していれば反撃が可能な点などが評価され、開戦前からジオン公国軍は偵察用MS——後のザク強行偵察型——の開発に着手した。

偵察用MSの研究開発は、一年戦争開戦以前にスタートしている。ただし、完全新設計機を開発するのではなく、既存のMSを改修する形で進められた。

ベースに選ばれたのはザクⅡC型である。これはザクⅡならば、高脅威目標への急速接近と離脱を前提とする、強行戦略偵察用として充分な機動性を発揮できるという性能面での理由からだが、C型が選ばれたのには別の理由がある。

それは偵察用MSの設計段階で、C型がザクⅡの生産主力だったためである。ただし、設計が完了した頃にはF型の生産が主軸に据えられており、実機はア・バオア・クーおよ

コンペイトウを発った地球連邦軍艦隊への強行偵察は、危険度の高い偵察行動の最たる例であり、部隊は発見された末に全滅している。

MS-06F ザクⅡF型
偵察部隊所属機

びソロモンのF型用生産ラインで製造された（一連の推移から、ザク強行偵察型の生産はU.C.0078年12月以降だと分かる）。

こうして誕生した機体がザク強行偵察型だった。当初の型式番号はRMS-06だったが、ジオン公国軍の型式番号統一に伴い、今日知られる「MS-06E」となった。

ザク強行偵察型は、ジオン公国軍が特殊形状機の生産に積極的でない時期に開発されたためか、MSVの中では原型機に近い形状を維持している。その一方で、強行偵察任務に対応するための外部監視装置や推進器の強化、シールドやスパイク・アーマーの撤去などが施されており、一般的なザクⅡとの互換性を維持しながらも、特殊任務仕様機として優れた性能を持つに至ったのだった。

しかし、ザク強行偵察型のカメラシステムは光学式のみであったため、一年戦争中期になると複数のタイプのセンサーを増設した改良機MS-06E-3 ザク・フリッパー（名称はブーム状背部構造の動作から付けられた愛称）が開発されている。ザク・フリッパーは、スタンダードなザク強行偵察型からの改修機を含めて16機が製造された。

MS-06E-3 ザク・フリッパー

ザク強行偵察型の構造

ザク強行偵察型の特徴は、モノアイの大口径化と機体各部への大型カメラシステムの増設、推進器の強化と増設、武装排除とそれに伴うプロペラントタンクの大容量化（10％の拡張）などである。

頭部は、メインの外部監視装置であるモノアイの大口径化に伴い、ガラス・シールドの廃止や、モノアイ走査レールの頭頂部方向への拡大が図られた（ほかにも左側面にアンテナが増設されている）。

これにより、高精度な画像情報を遠距離から得られるようになったうえ、モノアイの可動域拡大によって姿勢に拘らず目標を補足しやすくなっており、強行戦略偵察という本機のコンセプトに適した構造となっている。本機の頭部ユニットの機能性やモノアイの長距離観測能力は、MS-05Lザク I・スナイパータイプにも同様の頭部構造やモノアイが採用されたことからも理解できる。

本機のカメラシステムは、モノアイが強化されただけではない。シールドとスパイク・アーマーが廃された両肩部、大型化した股間部に大口径のカメラが増設されたほか、マニピュレーター用としてカノ

ザク強行偵察型頭部

ザク強行偵察型
ランドセル

ム精機製のCE・16TXカメラ・ガンが用意された。これらのカメラシステムとモノアイを併用することで、ミノフスキー粒子散布環境下での情報収集能力はほかに類を見ないレベルに達していた。

胴体部分は主に機動性向上のための改装が施され、推進器はザクⅡC型やF型は当然のこと、S型すら上回るものが搭載された。それがランドセルに搭載されたスラスターで、ザクⅡS型用をボアアップしたモデルだった。さらに、左右胸部には緊急離脱用バーニアが装備されており、ターゲットへの急速接近や情報収集後の戦域離脱を容易にしている（機動性や加速性能が大幅に向上したため、パイロットは耐G機能を重視したヘビースーツの着用が義務付けられた）。これら大推力スラスター群の搭載は、死角となる部位の装甲軽量化と共に、開発現場の判断によって段階的に採用されていった。

なお、カメラシステムを中心とした追加装備は換装式であり、短期間で準戦闘用とすることができた。換装をしなくてもザクⅡ用兵装は使用可能で、武装したザク強行偵察型が運用されたケースもあったようだ。

性能向上型のザク・フリッパーは、頭部とランドセルに大幅な変更が加えられた。

頭部はほぼ完全にザクⅡの面影がなくなり、メイン・センサーは三連カメラに変更され

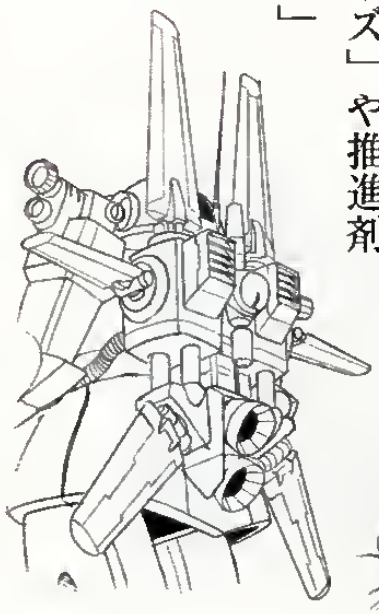
た。ランドセルも新造されて、6基の折り畳み式ブーム・センサーを持つタイプとなった。センサーは強行偵察型で採用された光学式に加え、レーザーや超音波、ミノフスキー物理学を応用したモデルとなり、探査範囲の拡大や探査精度が向上している。

オプション装備として、増速ブースター「バスノーズ」や推進剤用のセパレートタンクが用意された。「バスノーズ」は、後のベース・ジャバーのように、作戦宙域への展開に用いられるケースが多かったようである。

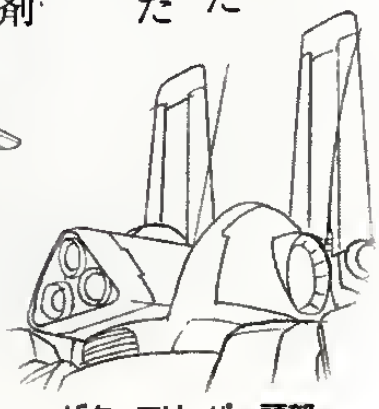
ザク強行偵察型の運用

ザク強行偵察型は高コストであるため配備数は少ない（ザク・フリッパーに至っては16機）が、一年戦争開戦直後には運用が開始されていたようである。地球上での運用例も見られるが偵察エリアは主に宇宙で、目標は地球連邦軍の軍事施設や宇宙艦隊が多かった。宇宙艦艇の偵察は遠距離監視や一撃離脱に近いもので、軍事施設への偵察では施設内に侵入することすらあったといわれる。

非武装であるため迎撃に弱い印象があるが、強力なスラスターによる加速性能と機動



ザク・フリッパー ランドセル



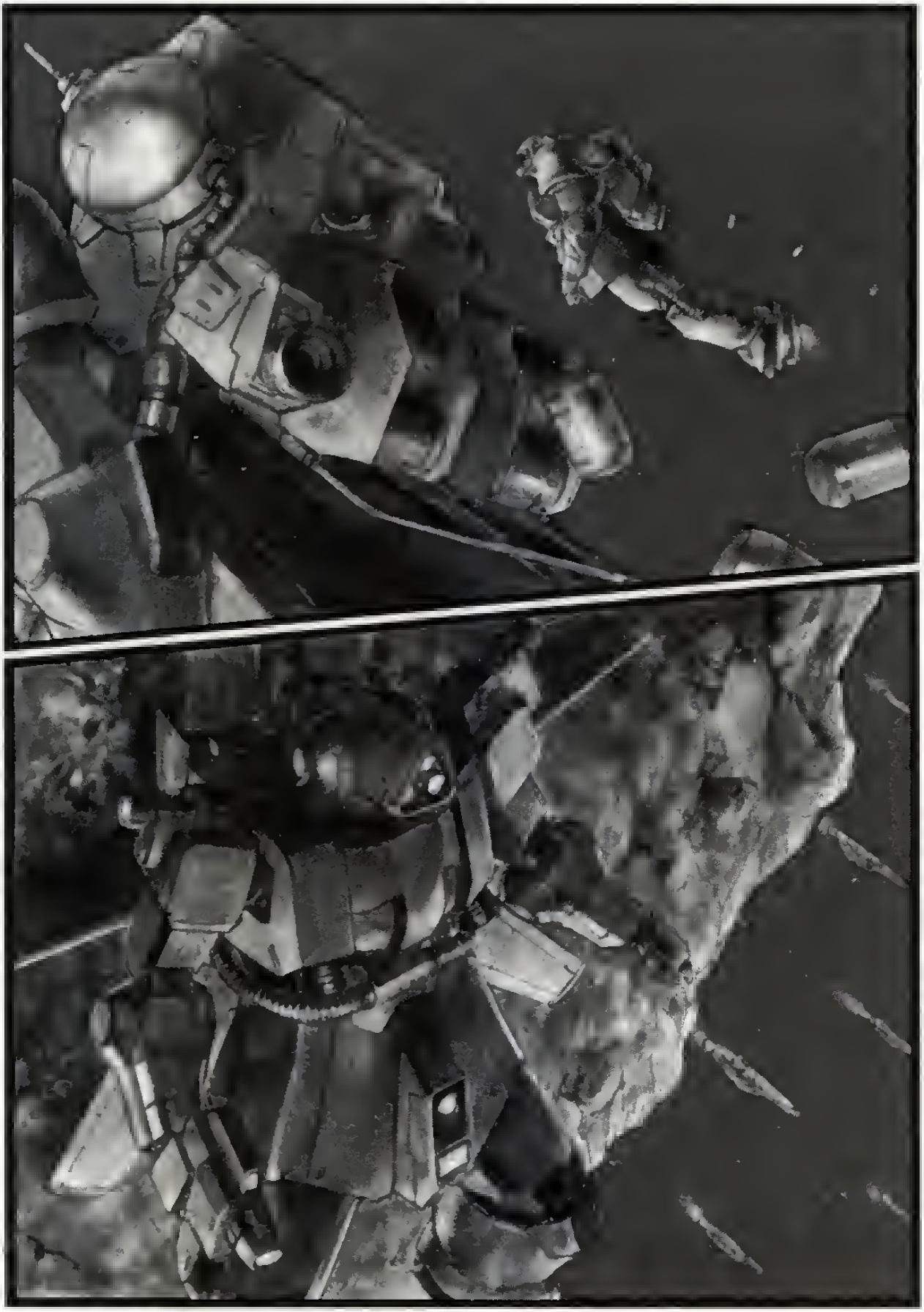
ザク・フリッパー頭部

性、ザクⅡをベースしたことによる、十分な装甲防御力を有していた。そして地球連邦軍に有効な対MS戦術がなかったことなどから、一年戦争中期までは十全な偵察能力を発揮したのだった（それでも、ルナツー宙域で戦闘機セイバーフィッシュの迎撃を受け、地球連邦軍に鹵獲された機体も存在した）。

一年戦争後期になると、より高性能なザク・フリッパーが特殊偵察小隊や外洋艦隊が配備され、ザク強行偵察型や偵察部隊の一般型MSと共にジオン公国軍の偵察活動を担った。ザク・フリッパーが活躍したエピソードとして有名なのが、星一号作戦時、ア・バオア・クーへと向かう地球連邦艦隊（レビル大将指揮）に強行偵察を行ったものである（コンペイトウを発った地球連邦艦隊がア・バオア・クーに向かっていた情報は、通常のザクⅡを装備した偵察部隊によって得られている）。

一年戦争終戦後、残っていたザク強行偵察型は地球連邦軍に鹵獲された。鹵獲機はコクピットをリニア・シートと全天周囲モニターに換装され、パイロットがヘビースーツを着用する必要もなくなった。この機体はグリプス戦役時にも現役で、月面都市アンマンの偵察やティターンズ艦艇への着弾修正指示などを行なったが、当時のエゥーゴの最新機であるMSN-00100百式からは逃げ切れず、撃破されている。

ティターンズに運用されたザク強行偵察型。同機はカメラ・ガンに加え、RMS-106 ハイザックのものと同型のシールドを装備していた。



新主力MSとして期待されたS型以上の宇宙用高性能機、高機動型ザク

高機動型ザクの開発①
高機動型ザクRタイプ、R・1Aタイプの誕生

高機動型ザクは、一年戦争開戦から一ヵ月を経て開発がスタートしたMSVで、ザクⅡS型以上の機動性を持つ宇宙用高性能機として知られている。

ただし一年戦争開戦後に発案された機体ではなく、U.C.0076年12月に開始された局地戦用MSの開発において試案は提示されていた。この時期、ザクⅡは設計段階と考えられ、どの機体を宇宙用高機動MSのベースにするつもりだったのか、完全新設計機として提案されたのかは不明である。

しかし、高機動型ザクは試案の時点で汎用性が低い空間戦用機だったようで、地球侵攻に向けてMSに汎用性や局地戦能力を求めるジオン公国軍の方針とは合致しなかった。また、一週間戦争とルウム戦役においてザクⅡF型とC型の空間戦能力が実証され、結果的ながら開戦の段階では高機動型ザクの必要性が低かったことも判明した。

一般機からの形状の逸脱が大きく、既存のザクⅡの生産ラインを流用しても生産性が低

いことも問題だった。これは、本機が重力下での運用能力を犠牲にして空間戦能力を高める設計だったためで、生産性を重視していた一年戦争開戦前のジオン公国軍の方針に反していたのである（総合性能向上型のザクⅡS型がF型やC型とほとんど同じ形状を持つ背景には、この生産性を重視した方針があった）。

こうして一時は開発が見送られた高機動型ザクだが、一年戦争の長期化によって運命が変わった。U.C.0079年1月31日に締結された南極条約は戦時条約に過ぎず、ジオン公国が想定していた短期決戦構想は崩れてしまった（「ブリティッシュ作戦」を主軸とした短期決戦構想と、戦争の長期化を見据えたような地球侵攻用局地戦用MSの開発は矛盾しているように思える。だが保険は必要で、戦後における地球の実行支配や反抗勢力の排除に局地戦用MSは有用だった）。

これに伴い翌月には地球侵攻作戦が開始されたのだが、戦場は地球だけではなかった。宇宙にはルナツーを中心とした地球連邦軍が残存していたほか、地球連邦軍によるMS投入は時間の問題と考えられていた。加えて、ザクⅡS型以上の高性能機を求める高練度パイロット（いわゆる「エース・パイロット」）の要請により、一年戦争開戦から一ヵ月を経て宇宙用の新主力MSとして、高機動型ザクの開発が開始されたのだった。

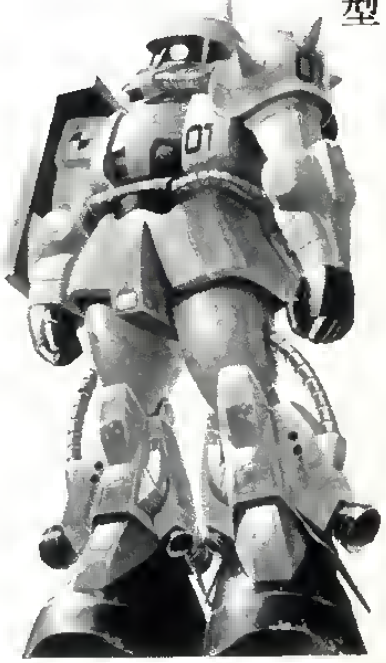
高機動型ザクの開発にあたってZEONIC社の技術陣は、ザクⅡをベースとしながらも従来のザクⅡのフォーマットに拘らなかった。汎用性（この場合は大気圏内外両用性）

を極限まで追及されたザクⅡの基本フォーマットが、かえって絶対性能を低下させていると考えられたためである。これはF型の基本形状を維持したままでは、S型が性能上の限界だったことからも分かる。

こうして宇宙専用とすることで汎用性を放棄すると共に、MSV開発などで基本フォーマットからの逸脱も許容するようになったジオン公国軍の方針転換を受け、高機動型ザクの開発が始まったのだった。

しかし、高機動型ザクには多くの問題が付きまとった。ザクⅡの開発企業であるZEONIC社は、S型の開発、製造を通じて高性能・高機動MSのノウハウを培っていたものの、高機動型ザクでの変更点は大きく、生産現場レベルでの問題点も存在したのである。

まず、試作機としてMS-06RP 高機動型ザク・プロトタイプが開発された。これはF型からの改修機で、2機が製造されている。F型からの主な改修点は、ランドセルの大型化、脚部への大推力スラスター搭載で、ほかにもフレームの変更や廃止されていた脱出装置の復活、280㎜ザク・バズーカ以上の大型火器の搭載などが図られた。この中でも脚部への大推力スラスター搭載は画期的であり、ザクⅡからゲルググへの過渡期的な技術として注目されている。



MS-06RP
高機動型ザク・プロトタイプ

月面基地グラナダでのテスト結果は良好で、ただちに量産機ＭＳ-06Ｒ-1 高機動型ザクＲタイプ（初期生産型とも呼ばれる）の製造が開始された。生産数は22機で、生産拠点はグラナダ工廠とジオン公国本国のＺＥＯＮＩＣ社の工場群である。当初は単にＭＳ-06Ｒとされたが後発機の開発により、型式番号末尾に「-1」が付された。

なお、専用火器として開発された４２０㎜ロケット・バズーカは量産には至らず、当初はザクⅡＦ型用の兵装を流用した。

ここで大幅な設計変更と大推力化、拙速な量産開始が問題を引き起こした。スラスター推力の増大が稼働時間の短縮に直結し、推進剤切れで行動不能となる機体が続出したのである。テスト段階で推進剤の消費量、特に戦闘最大推力時間の問題が指摘されていたが、ジオン公国軍首脳部は重視していなかった。本機の高性能の前では、過大な推進剤消費量も些細な問題と考えられていたのだった。

MS-06R-1
高機動型ザクＲタイプ

だが、高練度パイロットを中心に配備されたにも拘らず、推進剤切れが原因で行動不能に陥る機体は後を絶たず、結果、撃墜されるケースが少なくなかったのは大きな問題だった。ただし、行動不能を引き起こす理由は、推進剤量だけが原因ではない。

量産を急いだ結果、推進器を中心とした新造パーツの歩留まりが悪化、つまり不良率が高くなっていたのだ。この背景には、F型からの大幅な設計変更があったにも拘らず、短期間で量産を推し進めたため、生産ラインが対応できなかったことがある。

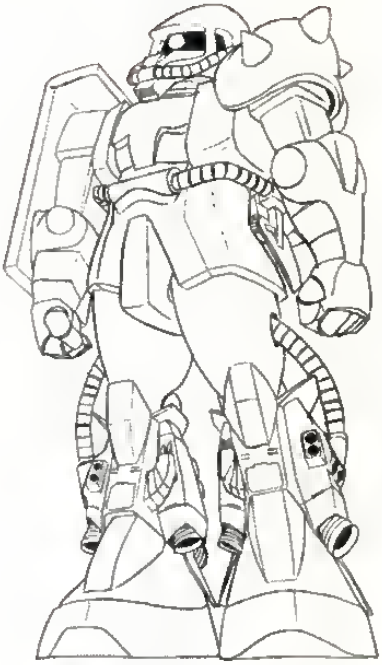
推進器が空間戦における最重要要素である以上、その不良が誤動作や可動不全を誘発し、被撃墜に結び付くのは当然のことだった。

Rタイプへの不評は、パイロットからだけではない。ただでさえ配備数が少ないうえに特殊な機体であり、さらに新造パーツの都合でF型との互換性が低くかったため、整備や補給の現場が混乱したのである。

こうした反省点を踏まえて改良された機体が、MS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプである。一年戦争末期までの生産数は56機、Rタイプからの改修機は10機存在した。

Rタイプからの主な改修点は、推進器をはじめとする初期トラブルの解消と燃料房のカートリッジ化、つまり内装式だったプロペラントタンクの外装化である。これにより、プロペラントタンクの大容積化が容易となったほか、支援機さえ存在すれば前線での推進剤の補給が可能となっており、実質的な稼働時間延長が望めた。

兵装はRタイプと同じく、基本的にザクⅡF型



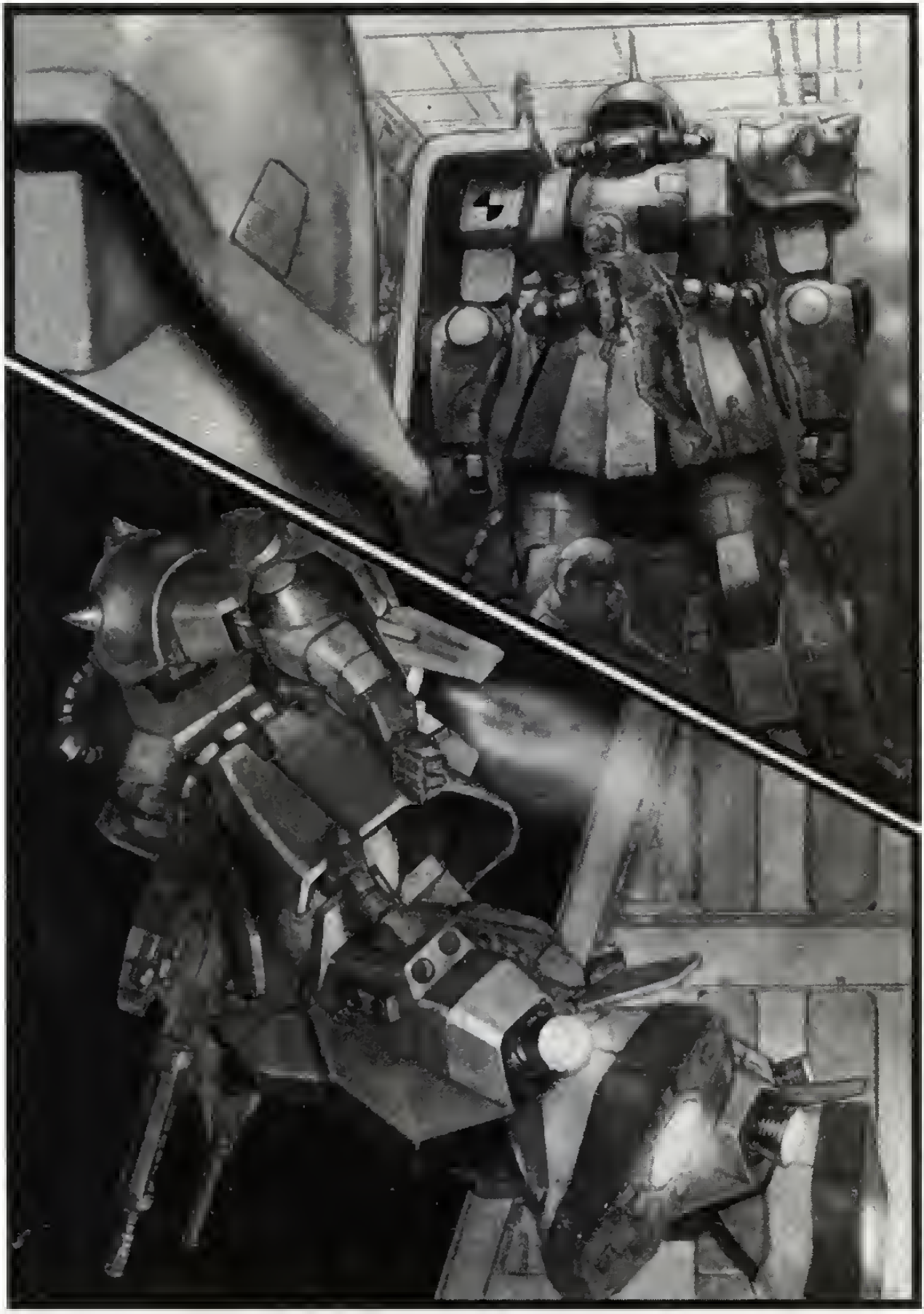
MS-06R-1A
高機動型ザクR-1Aタイプ

と共通である。特殊な例として、ハニーウォール&ライセオン社の試作火器H&L-SB16K／320㎜ 320㎜ザク・バズーカ（ロケット・バズーカ）とその改良型であるH&L-SB19K／320㎜ 320㎜ザク・バズーカを装備したケースが見られた。これらの火器は、ドムの主軸兵装であるジャイアント・バズの試作型に位置付けられている（機体によってはジャイアント・バズを装備可能ともいわれる）。

R-1Aタイプの開発、製造はハードウェアレベルの改良だけでなく、生産現場のクォリティ・コントロール改善にも繋がった。同時期に進められていた統合整備計画の影響があったとも考えられる。

完成度が高まった高機動型ザクは、高練度パイロットを中心に高い評価を得たが、生産数はシリーズ通算で78機に止まり、宇宙用主力MSとはならなかった。歩留まりが改善されたとはいえ、構造が複雑な特殊機体であることには変わりがなったのである。新たな主力MSとしてゲルググの開発が進んでいたこと、地球連邦軍がMSを投入していなかった以上、ザクⅡF型でも充分な空間戦能力を持っていたことなども理由と考えられる。

それでもR-1Aタイプが高性能であることは間違いなく、後発のMS-09Rリック・ドムと比較しても遜色ない戦闘能力を発揮した。新型機と同等の改修機を開発できたのは、ザクⅡの優れた基本設計と冗長性の証明といえる。また本機の開発はMSの生産体制を見直す契機ともなり、その意義は大きかった。



高機動型ザクRタイプ、R・1Aタイプの構造

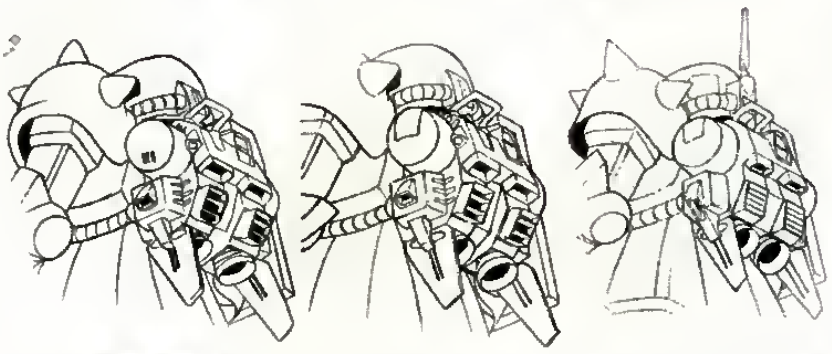
高機動型ザクRタイプおよびR・1Aタイプの外見的特徴は、ランドセルと脚部に集約されるが、改修点はそれだけではない。内部にも大幅な変更が加えられた結果、まったくの別物といっていい機体となっており、これが高性能化と生産性低下の要因とされる。

高機動型ザクを文字通り「高機動型」としているのが、本機の外見上の特徴となっているランドセルと脚部である。

高機動型ザクのランドセルは、ザクⅡF型は当然のこと、S型よりはるかに大型化されている。これは大推力化のための大型熱核ロケット・エンジンの搭載と、推進剤消費量の増加に対応したプロペラントタンクの大容積化が主な理由である。

ランドセル部熱核ロケット・エンジンは発数こそ2基でF型と同じであるが、推力は2倍以上となっている。具体的にはF型が105t×2、新型ユニット搭載のS型で130t×2とされるのに対し、本機では218t×2となっており、これだけでも高機動型ザクの機動性が推し量れる。

ランドセルは単なる大型化だけでなく、構造自体にも変更が加



右から順に高機動型ザク・プロトタイプ、Rタイプ、R-1Aタイプのランドセル。基本的な構造は共通しているが、ノズル横のパネル可動部やプロペラントタンクなど、細部に改修が施されていることがわかる。

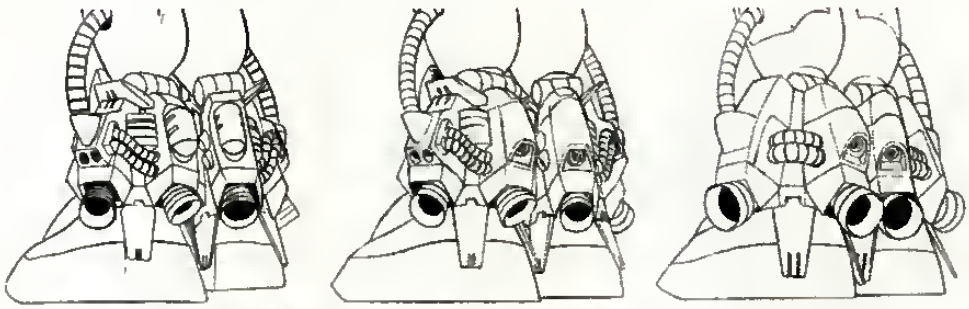
えられた。具体的には、F型用で冷却機構が配置されたユニット上部に、ランドセル本体からはみ出すほど大型のプロペラントタンクを搭載している。スラスターの大推力化によって大量の推進剤が必要になったことが主な要因であるが、より大容量のプロペラントタンクを使用する際の換装も考慮された可能性もある（実際、R-2タイプではランドセル部プロペラントタンクの大型化が図られている）。

ほかにもランドセルの構造変更によって、ジェネレーター出力の向上も図られた。ただし、ザクⅡのジェネレーターは腹部内装といわれるため、高機動型ザクで追加されたサブジェネレーターをランドセルに搭載したか、補機を内蔵した可能性が高い。

ランドセルと共に大規模な改修が行われた脚部は、重力下での歩行能力を制限し、後のリック・ドムやゲルググに見られるような変更推進器兼用となった。

外見上、大きく変わったのは膝下で、両側面と後部に1基ずつ、計3基の推進器が搭載されている。F型の脚部にもノズルが見られるが、これは姿勢制御用や補助用に過ぎない。

脚部に推進器を搭載するメリットは、関節の可動域を利用する



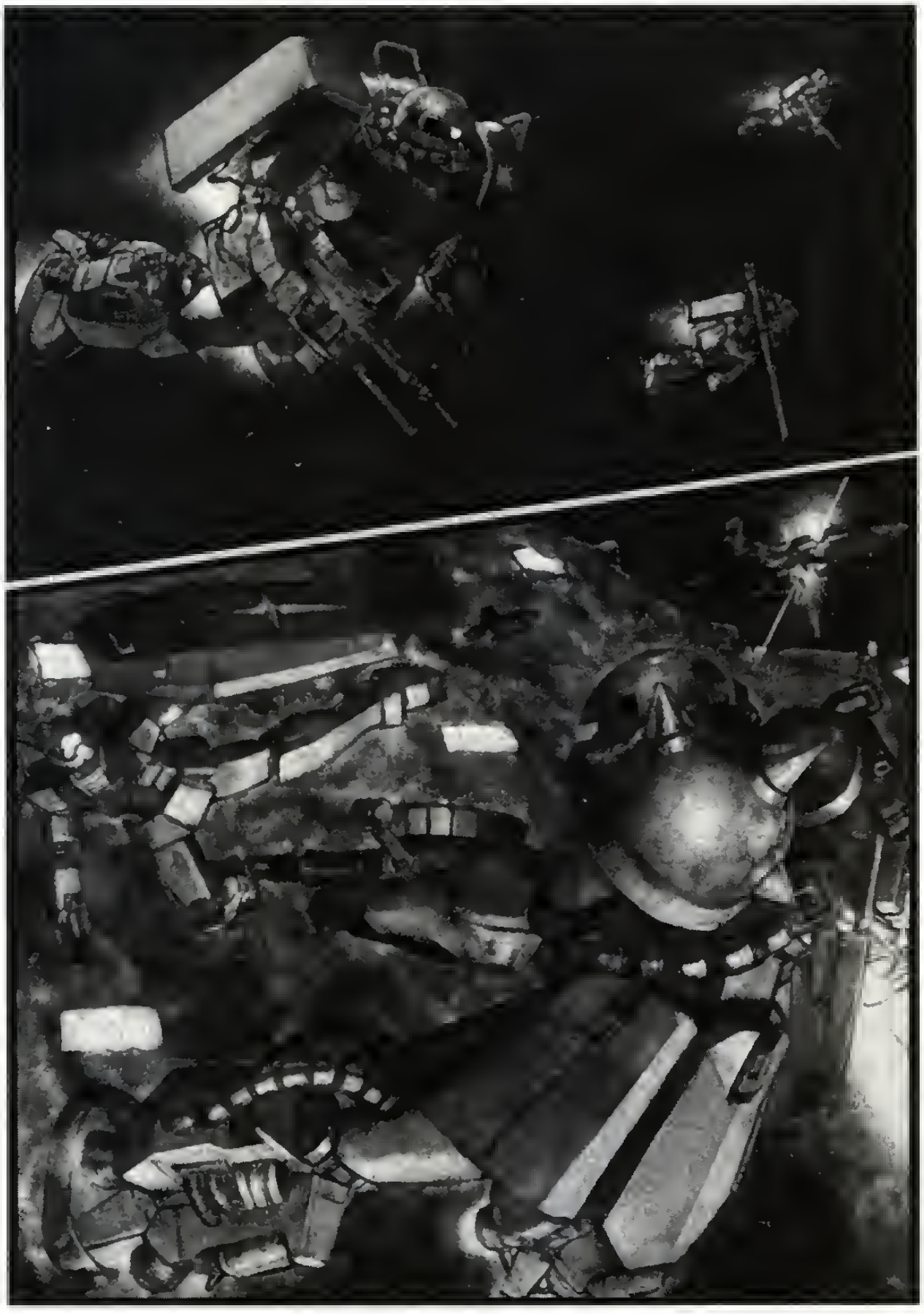
高機動型ザク各タイプの脚部を後方から見た図（右から順にプロトタイプ、Rタイプ、R-1Aタイプ）。推進器の配置や基本構造を継承しつつ問題点の解消が図られ、R-1Aタイプではプロペラントタンクのカートリッジ化が試みられた。

ことで、脚部全体をＡＭＢＡＣシステム兼変更推進器とできることである。こうした機構は、高機動型ザクで初めて本格的に採用されたと考えられ（ザクＩと同時期に開発されたＥＭＳ‐０４ヅダでも脚部にバーニア群が見られるが、高機動型ザクほど本格的かつシステマチックなものではなかったようだ）、ランドセルの熱核ロケット・エンジンと併用することでザクⅡＳ型すら凌駕する機動性や運動性、出力を発揮した。

だが、高出力化に伴い機体への負担が増大したほか、大推力スラスター群に充分な稼働時間を与えるために大量のプロペラントタンクを必要としていた。そのため、部分的な改修では本機の性能を十全に発揮することはできなかった。

このため高機動型ザクの本体も、全面的といっていいほどの大規模な改修が加えられた。基本フレームの強化、装甲材質の変更、アクチュエーターの高トルク化、腰部および大腿部の大型化とプロペラントタンク搭載などが代表的な改修点である（プロペラントタンクのカートリッジ化はＲ‐１Ａタイプで採用された）。

パイロットからの要求、あるいはパイロットへの配慮から行われた改修もあった。パイロットによる微調整が可能な腕部制御機器の搭載、ＭＳ‐03で廃止された脱出コクピットの復活などである。改修とまではいえないが、マルチブレード・アンテナまたは角飾りを装備する場合、Ｆ型やＳ型とは異なるモデル（Ｔｙｐｅ Ｆ‐12ＢＺか）が選択されることが多かった。



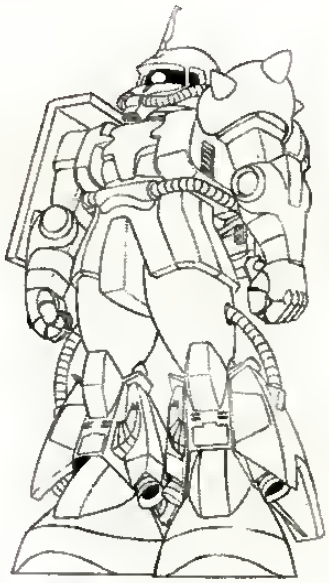
高機動型ザクの開発②
高機動型ザクR・2タイプの誕生

一年戦争後期になると、遂に地球連邦軍がRX・78ガンダムをはじめとするMSを投入した。地球連邦軍のMSは、ジオン公国軍機を上回るカタログ・スペックを有するうえ、MS携行用メガ粒子砲「ビーム・ライフル」を装備する点が特徴である。特にビーム・ライフルの装備はジオン公国が遅れを取っていた分野であり、ハードウェアにおけるジオン公国軍の優位性が揺るぎ始めたのが、この時期だった。

ジオン公国軍もゲルググなどのビーム・ライフルを搭載したMSの開発は進めており、その中でザクⅡへのビーム兵器搭載が模索されている。通常ならF型やJ型といったスタンダードなザクⅡが改造母機に選ばれるが、この際は大幅な改修が加えられたMSV――高機動型ザクR・1Aタイプ――が選ばれた。

R・1Aタイプが開発ベースに選ばれた理由は不明だが、フレーム構造が変更され充分な強度があったこと、機動性向上も要求されたこと、宇宙ならビームが減衰し難いことなどが考えられる。

こうして試作されたのがMS・06R・2P高機動型ザク・ビーム兵器搭載型である。熱核反応炉／ジェネレーターをMS・11、つまり後のゲルググ用の試作ジェネレーター



MS-06R-2P
高機動型ザク・
ビーム兵器搭載型

に換装し、試作ビーム・ライフルを装備（R・2タイプの特徴である脚部防弾カバーも既に採用）したビーム兵器搭載型ではあったが、結果的には失敗作だった。ビーム・ライフルのコンパクト化と破壊力の増大を達成できなかったうえ、MS本体も実用レベルでのビーム兵器の稼働が不可能だったのだ。

ビーム兵器の稼働と機動性向上の両立を目指した結果、ジェネレーター出力が不足したことが原因だった。MSのジェネレーターは、アクチュエーターの駆動やビーム兵器のドライブ、熱核ロケット・エンジンへのパワーサプライなど、機体で消費される電力のほとんどを賄っている。このためジェネレーター出力が充分でないのに特定機器の消費電力が大き過ぎると、ほかの機器が稼動不良に陥ってしまうのである。

当初の目的こそ達成できなかったビーム兵器搭載型だが、ビーム・ライフル非搭載時の性能は優れていた。そこでビーム兵器の標準装備を断念した仕様が開発される。

この機体こそ超高性能機MS・06R・2 高機動型ザクR・2タイプである。生産数はわずかに4機だった（ビーム兵器搭載型からの改修機を含む）。

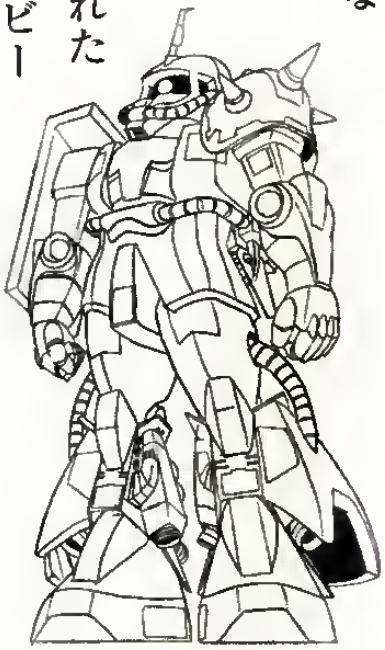
ビーム兵器搭載型からの主な変更点は、ビーム兵器の非装備、ジェネレーターの変更、装甲材質の高品質化、推進剤量の増加、ダイレクトイン式（直接対峙型）コクピットの採

用などである。これらの変更は、U.C.0079年10月のグラナダにおける公開テスト後、順次行われていった（ジェネレーターや機体形状の変更の過程は複雑であるため、機体構造の項で後述する）。兵装はビーム兵器こそ搭載しないが、ザクⅡ用のほかにリック・ドム用のハニーウォール&ライセオン社製H&L-GB05R／360㎜と思われるジャイアント・バズを装備可能であり、火力も増大している。

完成したR-2タイプは空間戦時の機動性と最大戦速時の攻撃力が高く評価され、「ザクの皮を被ったゲルググ」と呼ばれるほどの超高性能機となっていた。その性能はザクⅡシリーズ最高クラスで、U.C.0084年にロールアウトすることになる地球連邦軍の主力MS、RMS-106ハイザックと同等とまでいわれている。

こうしてR-1Aタイプ以上の性能を獲得したR-2タイプだったが、それでも高機動型ザク・シリーズ特有の問題は残っていた。絶対性能こそ極めて高いものの、費用対効果の側面から見ると必ずしも優れてると断言できなかったのだ。

これは第2期主力MS開発計画の遅延により実施された、暫定的な宇宙用主力MSの選定の際、ZIMMAD社のリック・ドムと競合して敗れたことからも分かる（競合試験に用いられたのは、ビー



MS-06R-2
高機動型ザクR-2タイプ

ム兵器搭載型ともいわれる）。機動性や運動性を中心に好評価を得たR・2タイプだったが、リック・ドムと比較するとコストや生産性、整備性や稼働時間などの面で劣っており、軍部がリック・ドムに軍配を上げる要因となったのだった。

もっとも高機動型ザク・シリーズは事実上、高練度パイロット専用機となっていたほか、ZEONIC社もR・2タイプの性能に不満を抱いていており、ゲルググの開発と製造の必要性もあって、すべて合意の上でリック・ドムの制式化が決まったようである。

「極めてレアな超ハイスペック機」となったR・2タイプが戦局に与えた影響は限定的なものだったが、ザクⅡからゲルググに至る過渡期、それもその最終ステージにある機体のひとつとして、MS開発史における位置付けは重要なものとなっている。

高機動型ザクR・2タイプの構造

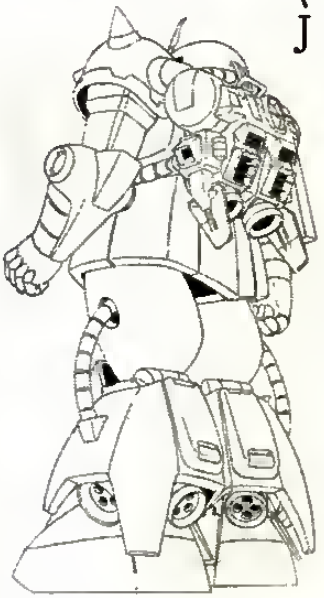
格段のパワーアップを果たしたR・2タイプではあるが、高機動型ザクのフォーマットを逸脱した機体ではない。頭部マルチブレード・アンテナ、または角飾りの標準装備、ランドセル部プロペラントタンクの大型化、脚部防弾カバーの増設などが行われているものの、基本的な形状はR・1Aタイプ以前とほぼ変わらない（ビーム兵器搭載型ではジェネレーターの換装に伴う胸部形状の変更、ランドセル固定ステーの追加が施されたが、R・

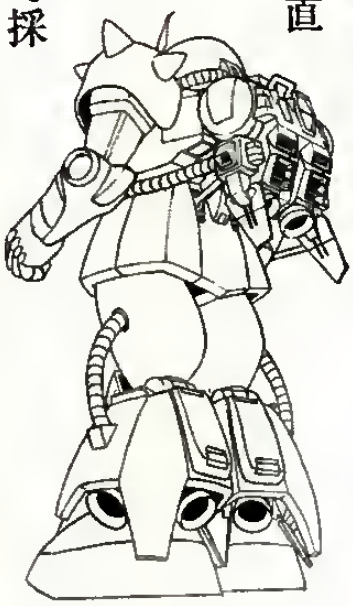
2タイプではR・1Aタイプに近くなった）。

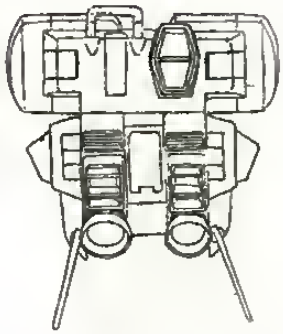
しかし、外見からは判別できないレベルでの改修点は数多い。代表的なところでは、装甲材質の高品質化、内部構造材の変更、R・1Aタイプと比較して18％の燃料搭載量増加、格闘戦用バーニアの一部強化、ダイレクトイン式コクピットの採用などがある。

ダイレクトイン式コクピットは「直接対峙式」とも呼ばれる仕様のコクピットだ。エアロックを介して乗降する標準的なザクⅡ用コクピットと異なり、コクピットハッチから直接コクピット内に入ることができる。与圧と減圧はコクピット内で直接行うことが可能となったので。ザクⅡ以外のほぼすべてのMSのコクピットはダイレクトイン式だったが、ザクⅡ系列機ではR・2タイプで初めて採用された（R・2タイプ以前にも、一部のザクⅡF型やJ型で採り入れられていたといわれる）。

胴体ユニットの改修はダイレクトイン式コクピットだけではない。新型ジェネレーターの搭載や装甲材質の改善などによって、胴体の形状変更が幾度か図られた。







上はR-2タイプのランドセルで、プロペラントタンクが大型化していることがわかる。左はビーム兵器搭載型（右）とR-2タイプ（左）の背面。

最終的にはMS・11（後のゲルググ）用ジェネレーターの簡略型を搭載することになるが、ビーム兵器搭載型を改修したと見られる試作1号機ではR・1Aタイプのジェネレーターを採用していた。しかし、R・1AタイプのジェネレーターではR・2タイプの性能を十全に発揮できなかった。そのため、2週間後には元の仕様に戻され、さらにその後、2号機以降と同じタイプに換装された。

なお、試作1号機は胸部の前後幅が増厚されたほか、スカート形状も特殊だった。胸部の増厚は、初期ジェネレーターの上半分の容積が1．4倍とされたこと、スカート形状変更はプロペラントタンクの容積拡大が理由である。

高機動型ザク・シリーズの運用

一時は宇宙用の主力MSとして期待された高機動型ザクだが、生産性や整備性などの問題から生産数はシリーズ通算で78機に止まった。これはザクⅡS型より少ない数である。

それにも拘らず高機動型ザクの活躍が広く知られるのは、そのほとんどが高練度パイロットに配備されたことが大きい。高練度パイロットたちは、ザクⅡS型を上回るハイスペック機である高機動型ザクを欲したものの前述の通り生産数が少なかったため、「連邦軍の戦艦を沈めるよりR型（高機動型ザク）を手に入れるほうが難しい」とまでいわれていた。

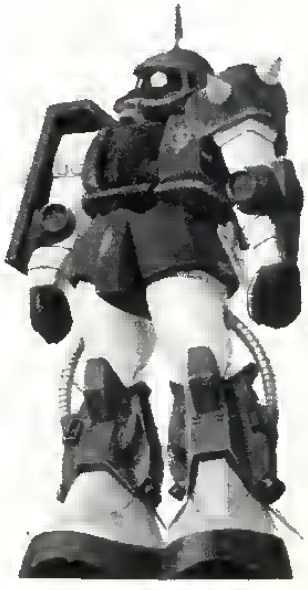
高機動型ザクは、誕生の時点で高練度パイロットと深い繋がりがあった。それがザクⅠやザクⅡS型などの開発に貢献したことで知られるテスト・パイロット、エリオット・レム中佐である。

レム中佐は、高機動型ザクの開発においてプロトタイプ（MS-06RP）のテスト・パイロットを任されていた。そして、軍部から高評価を得たグラナダでの試験でも、テスト・パイロットを務めたのである。

Rタイプ、R-1Aタイプの生産が始まると、各方面の高練度パイロットを中心に配備が進んだ。受領したパイロットの中で有名な人物が、ガイア大尉ら〝黒い三連星〟の3人、〝ソロモンの白狼〟シン・マツナガ大尉、エリック・マンスフィールド中佐、マサヤ・ナカガワ中尉などで、ほかにも後に〝ソロモンの悪夢〟と呼ばれたアナベル・ガトー大尉（当時）やシーマ・ガラハウ中佐、〝修羅の双星〟のロビン・ブラッドジョー中尉らが搭乗したといわれる（マツナガ大尉機は当初Rタイプ

MS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプ
シン・マツナガ専用機

MS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプ
エリック・マンスフィールド専用機



MS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプ
マサヤ・ナカガワ専用機

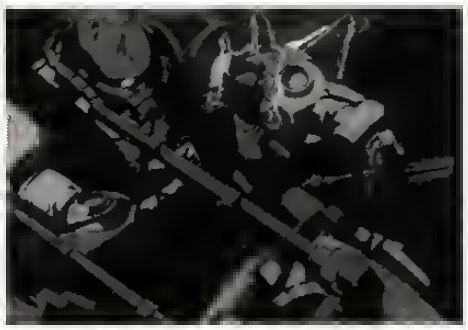
で、後にR・1Aタイプに改修されたという説もある。ほかのパイロットはすべてR・1Aタイプ）。

これらのパイロットが、高機動型ザクで活躍した事例として有名なのが〝黒い三連星〟のケースだった。時期は不明ながらR・1Aタイプを3機装備した〝黒い三連星〟は、グラナダ近傍に進出した地球連邦軍のパトロール艦隊と交戦し、2隻撃沈のスコアを上げている。この際、ほかの部隊も出撃し、合計3隻の敵艦を沈めているが、内2隻が〝黒い三連星〟の戦果だった事実は、彼らとR・1Aタイプの組み合わせの威力を物語っている（〝黒い三連星〟の地球への派遣と戦死によって、彼らのR・1Aタイプはグラナダに置かれた。その後、終戦と共に隠匿され、U.C.0083年にはシャア・アズナブル大佐らによって使用されたという）。

この戦闘で興味深いのは、支援用にザクⅡF型が出撃していたことである。R・1Aタイプの推進剤カートリッジを携行した、補給用の機体であった。Rタイプは運用艦での推進剤補給が前提としたが、R・1Aタイプは推進剤カートリッジ、つまりプロペラントタンクがアタッチメント化されており、カートリッジの交換により長時間の作戦行動を可能としていた。ここで紹介した〝黒い三連星〟

MS-06R-1A
高機動型ザクR-1Aタイプ
"黒い三連星"専用機

"黒い三連星"の乗機と見られる高機動型ザク。地球連邦軍艦隊との交戦でスコアを残したと伝えられている。



宇宙用高機動試験型ザクはテスト中に地球連邦軍部隊と遭遇し、戦闘の末に失われることとなった。

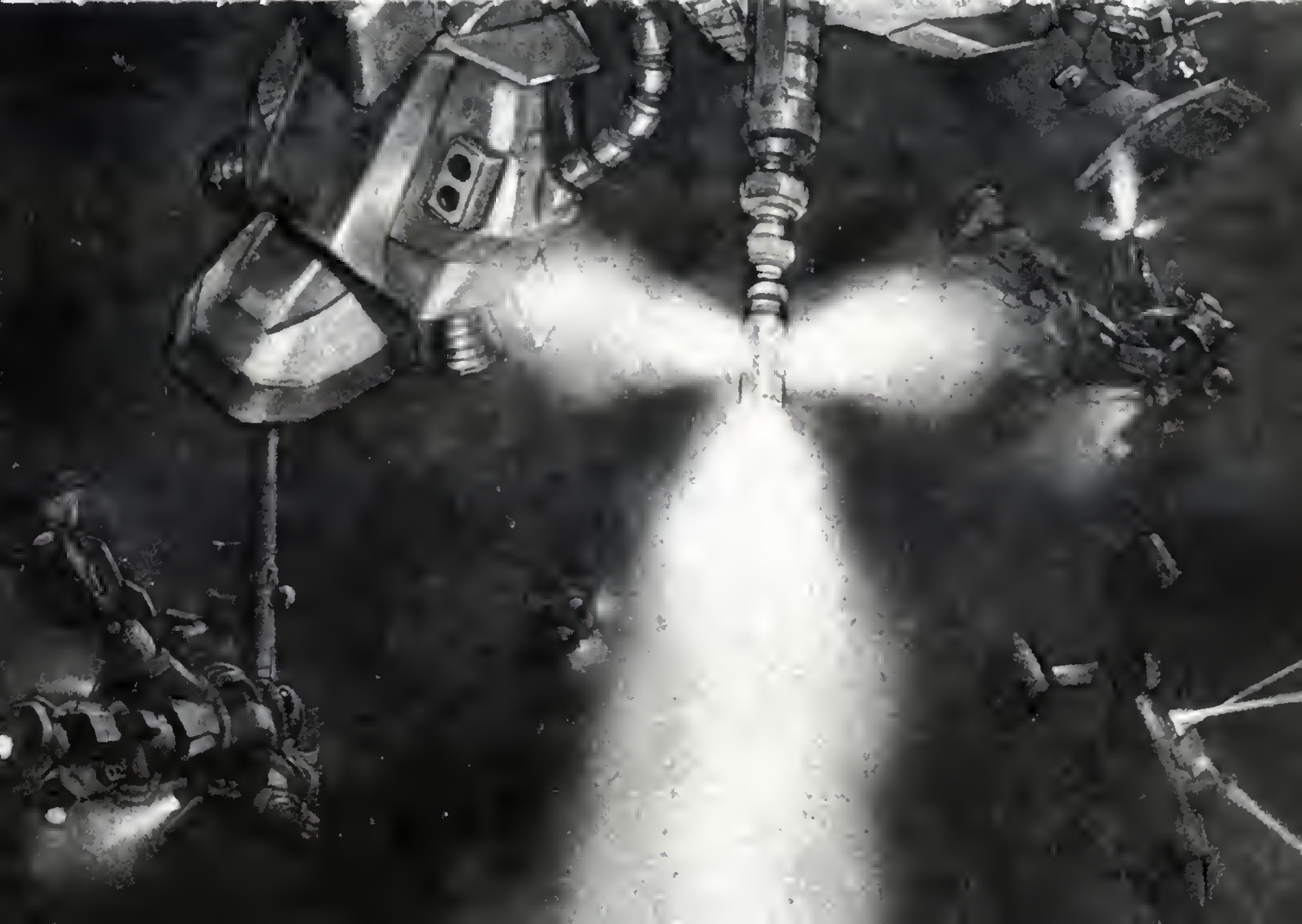
のケースは、そうした運用例のひとつだったと考えられる。

このほかにも、〝黒い三連星〟のパーソナルカラーで塗装された高機動型ザクとして、MS-06RD-4 宇宙用高機動試験型ザクが存在したが、これは〝黒い三連星〟の乗機ではない。高機動型ザク（R-1Aタイプか。ザクⅡF型とも）に宇宙用に改装されたドムの脚部を接続した機体であり、マッチング用の試験機に過ぎなかった。

最終生産型とも呼ばれるR-2タイプは4機しか生産されておらず、内3機が一年戦争後期の戦闘に投入されている。その3機は〝真紅の稲妻〟ジョニー・ライデン少佐、ギャビー・ハザード中佐、ロバート・ギリアム大佐の3人に与えられ、最後の1機は開発元のZEONIC社に残された（後にMS-06R-3 ゲルググ先行試作型に改修されたといわれる）。また正式なパイロットではないが、U.C. 0079年10月の公開テストにおいてエリオット・レム中佐がテスト・パイロットを務めている。

ほかにも〝修羅の双星〟のカート・ラズウェル中尉も受領したという説があるが、真相は不明である。

MS-06R-2 高機動型ザク
R-2タイプ
ギャビー・ハザード専用機



スタンダードな形状のザクⅡ系MSV 02

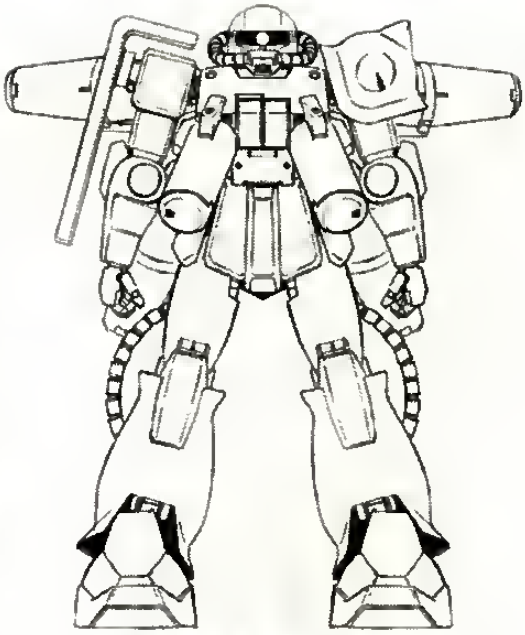
高機動型ザクのような大型ランドセルを装備したザクⅡ系MSVとして、MS-06F ザク・マインレイヤーが存在する。ランドセル以外、ほぼノーマルのザクⅡF型と同じだが、ランドセルの換装という意味ではMS-14B 高機動型ゲルググを彷彿とさせる構造であるため、高機動仕様機にも見える。

しかし実態は機雷散布用（航路封鎖、月面施設への爆撃などが主任務）機体であり、大型ランドセルはそのための機器――機雷投下器、機雷起爆や状態チェック用を兼ねる高性能通信機、大容量プロペラントタンクなど――で構成されているに過ぎない。機動性は原型機とほとんど変わっておらず、用途も高機動型ザクとは大きく違っている。

極端にいえば、ザク・マインレイヤーはランドセル交換機に過ぎず、だからこそ型式番号も変更されていないのである。事実、わずかな改装で通常のF型にも戻すことも可能であった。

ザク・マインレイヤーのほかにも、増槽の大量追加によって活動時間の延長を試みた試作プロペラントユニット搭載型のザクⅡ、スペース・コロニー「マハル」のソーラ・レイ

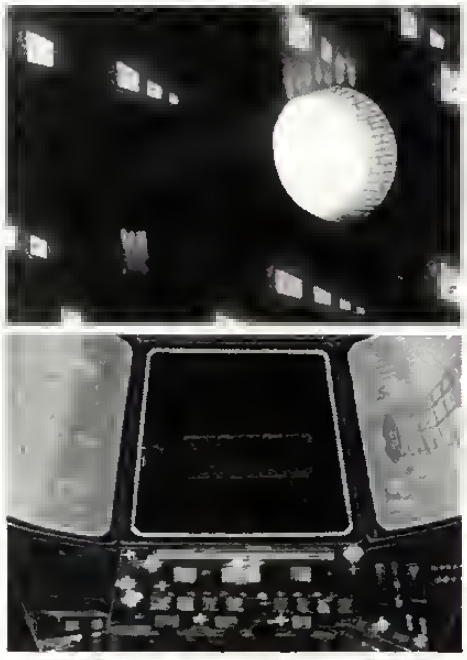
MS-06F
ザク・マインレイヤー



ザクⅡの戦闘継続時間や行動半径の拡大を目指して開発されたシステム。試験中の事故で実用化はされなかった。

改装に使用された作業用ランドセル搭載機ＭＳ・06ＭＰザクⅡマニピュレーションシステム仕様などが、ランドセル交換型のザクⅡとして存在したといわれる。これはザクⅡ本体に大規模改修を加えなくとも、ランドセルの換装によって高度な汎用性を確保できることを証明しており、ザクⅡのバリエーションを増加させた一因となる。

このほかにもランドセル交換型ではないが、ノーマルに近いザクⅡ系バリエーションとして、ＭＳ・06Ｔ教習訓練用ザクがある。これはザクⅡＣ型とザクⅡＦ型を原型とした2機種が存在し、Ｃ型改修機は頭部に縦型モノアイ2基を搭載、Ｆ型改修機はＭＩＰ社が開発に関与した機体で、胸部に横列モノアイとバルカン砲を追加するほか、機体各部に隠匿訓練用の発光バンパーが設けられた。いずれも教官と訓練生が同乗する複座機とされるが、原型機の形状をほぼ保っている。

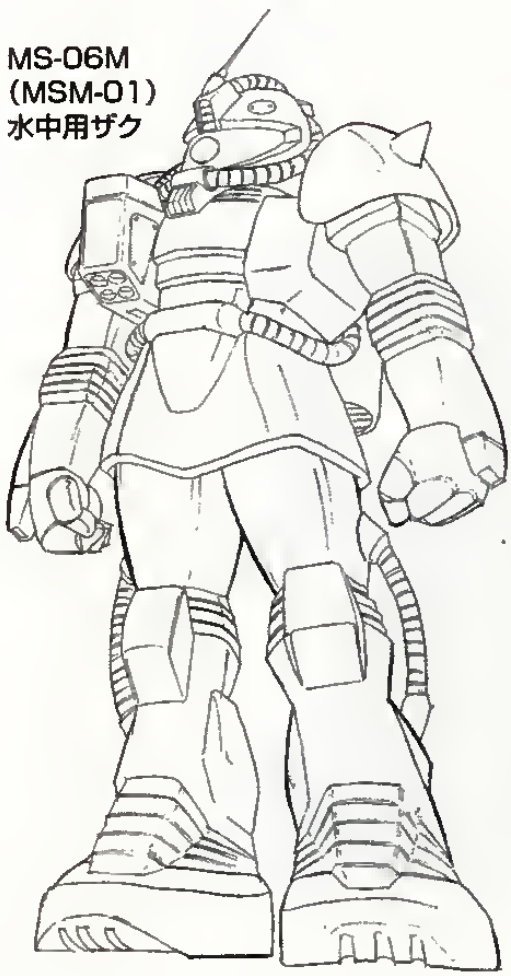


マハルのソーラ・レイへの換装は短期間で行なわれたが、ザクⅡマニピュレーションシステム仕様の優れた作業性能によるところが大きい。

地球上での運用に特化した局地戦用のザクⅡ系MSV

局地戦用ザクⅡの開発①
水中用ザクの誕生

MS-06M（MSM-01）水中用ザクは、その名の通り、海に代表される水圏での運用を前提としたザクⅡ系MSVであり、水陸両用MSの始祖的なMSだった。



MS-06M
（MSM-01）
水中用ザク

ジオン公国軍が水中用ザクを開発した背景には、地球侵攻作戦の存在があったことは間違いない。地球を完全な制圧下に置くには、地表の七割を占める水圏を抑える必要があること、地球上での上陸作戦には水中から地上に展開可能なタイプのMSが有用と考えられたことなどを理由として、U.C.0076年12月に開始された局地戦用MSの開発において水中用MSの研究が進められていった（水陸両用MS開発整備計画とも呼ばれる）。

最終的にはMSM-07ズゴックに代表される完全新設計の水陸両用MSを生み出した

ジオン公国軍だが、当初はザクⅡの改修機に期待していた。宇宙での運用を大前提としたザクⅡは気密性が高く、水中用への転用も容易と考えられたためである。こうした流れの中で開発されたの機体、水中用ザクだった。

ザクⅡF型をベースとするといわれる水中用ザクは、水流エンジンへの換装やバラストタンクの搭載など、水中での運用に対応する機器が搭載されたほか、機体形状にも変更が加えられた（改修母機としてF型が選ばれたのは気密性の問題と考えられる。J型は気密性が低く、水没するとコクピットに浸水することがあった）。

しかし、宇宙用のF型とはいえ気密区画は限定されており、水中用ザクでは関節部を中心に大規模な防水加工が必要だった。また、機体形状が変更されたものの人型のシルエットが残されていたため、水の抵抗が大きく運動性は劣悪であった。限界深度の面でも問題を抱えており、端的にいえば、水中用ザクの性能は実用レベルに達していなかったのだ。

結果、ジオン公国軍は水陸両用MSの新規開発を決定し、ZIMMAD社がMSM-02水中実験機とMSM-03ゴッグの試作を開始。MSM-01の型式番号を与えられた水中用ザクは、データ収集用テスト機として運用されることになったのだった。

なお生産数はプロトタイプが計7機で、当初は5機、後に2機が増産されている。初期に開発された上陸作戦用をMS-06M-1、潜水艦隊での運用が要求仕様に追加された後、再設計されたタイプをMS-06M-2とする説もある。

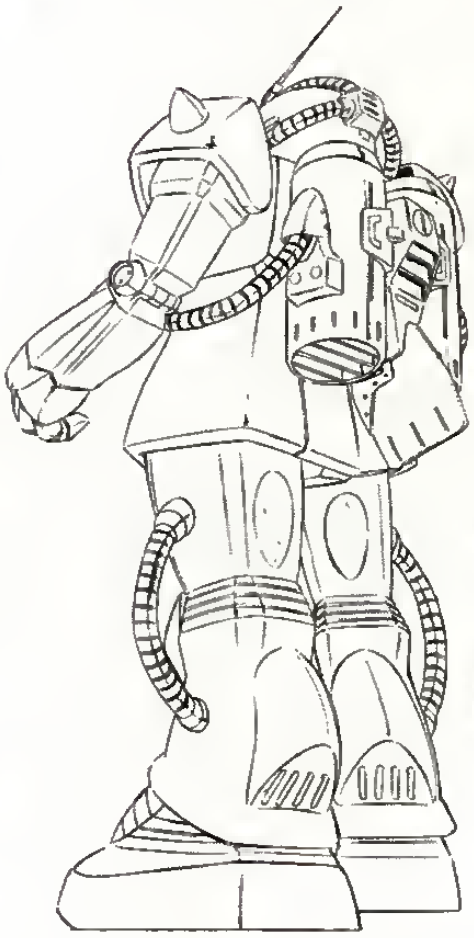
水中用ザクの構造

水中用ザクは、機体各部の動力パイプや特徴的な頭部形状といったザクⅡのシルエットを色濃く残しているが、水中での運用に対応するため全面的な改装が行われている。

水中仕様とする際、最も大きく変更されたのが推進器系で、方向舵付きのランドセルに2基の水流エンジンを搭載したほか、腕部と脚部に補助推進器を設置した。これによって得られるスラスター推力は6万6千kg、水中最大速力は45ktともいわれる。だが、後発の水陸両用MSと比較すると低推力で速力も低く、運動性、機動性共に劣ると判定された。

低運動性の原因は、水中用ザクの機体形状にも求められる。肩部シールドの廃止やスパイク・アーマーの簡略化、胴体のフラット化、関節部を中心とした防水シールドの設置などが図られているが、ほぼ完全な人型の機体形状や機体各部に露出した動力パイプ、防水加工の不徹底が水の抵抗を増大させてしまい、結果、機動性全般の低下を招いたのだ。

このようにザクⅡを原型とした構造的な限界から、満足な性能を得られなかった水中用



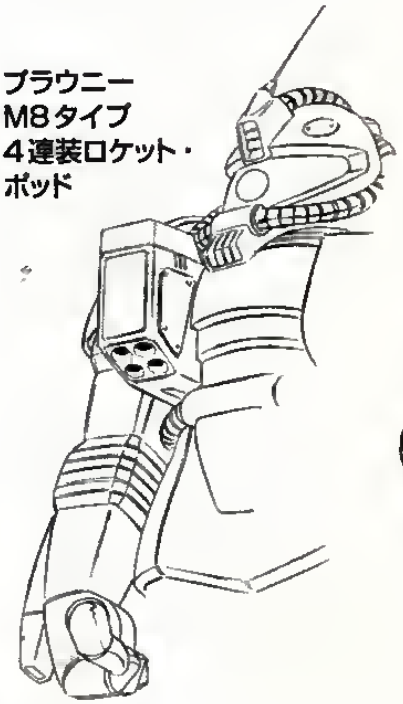
水中用ザク背部

ザクだったが、MSの水中仕様化に先鞭を付けた機体であり、水流エンジンをはじめとして宇宙用MSや陸戦機には見られない機器を搭載していた。

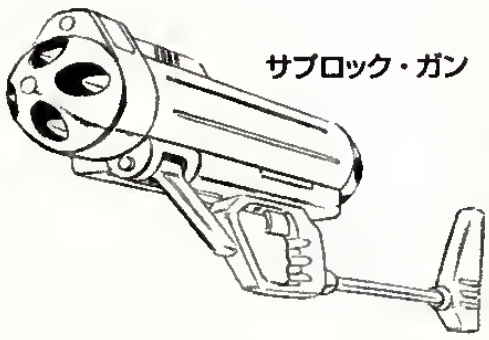
代表的なものでは、後部に集中配置されたバラストタンク、機体の向きや姿勢に拘らず同一方向を維持できるコクピットがある。バラストタンクは水を出し入れして機体の深度を調整する装備で、コクピットの姿勢制御機構は宇宙と異なり上下、つまり水面や水底が存在する水中の環境上、必要なものだった。

兵装も水中での使用を前提としたものとなった。手持ち式火器として開発されたものが、4連装サブマリンロケット・ランチャーのサブロック・ガンで、弾体はM6・G240㎜ロケット弾が使用される。ロケット弾を発射する火器であるため陸上でも使用でき、瞬間最大火力も低くはないが、手持ち式という装備形式上、水の抵抗を増やしてしまうため後発の水陸両用MSでは内装式火器が一般的となった。

ほかにもオプション火器としてブラウニー社のM8タイプが用意されたたている。これは4連装ロケット・ポッドで、左右の胸に1基ずつ、計2基まで装備可能だった。



ブラウニー
M8タイプ
4連装ロケット・
ポッド



サブロック・ガン

水中用ザクの運用

サイド3での開発後、海洋コロニーでテストが行われていたと思われる水中用ザクは、地球侵攻作戦の実施に伴い地球へと移された。実際の海洋での運用試験のためだった。

具体的な時期こそ不明だが、試作機として5機が生産された水中用ザクは潜水艦隊シーサーペント隊に配備後、北米のノーフォーク沖でテストされたという説がある。これが第1回総合性能試験で、3週間に及ぶテストが実施されたが運動性の低さを露呈した結果、戦力化を見送られてしまった。

それでも、水陸両用MS開発のデータ収集用としては有効と判断され、水流エンジンと水中戦用兵装の試験に用いられた。その後2機が増産されたがこれも試験用で、特殊対艦用兵装のテストに投入されている。

テストの具体的な事例としては、U.C.0079年8月、南太平洋で行われた試験が知られる。運用母艦は水上艦のフォルケッシャー号、テスト・パイロットはギュンター・ローズマン曹長だった。これは、試作水中ビーム砲QEX-04M エーギルの評価試験において、エーギルの管制機として使用されたものだったが、敵水中用モビルポッドとの遭

MS-06M 水中用ザク
レッドドルフィン隊所属機

遇戦の末、失われている。

なお、計7機となった水中用ザクは、シーサーペント隊とレッドドルフィン隊に2機ずつ、グリーンサイレン隊、ナーガⅢ隊、マンタレイ隊の各1機が配備された。

地球各地の水圏において実戦を含むテストを繰り返した水中用ザクだったが、ゴッグをはじめとする水陸両用MSの実用化によって、一度は任を解かれた。モスボール（再使用を前提とした保管）に近いコンディションで保管状態に置かれたようである。1機でも多くのMSを必要としていたジオン公国軍が、廃棄こそしなかったものの後方任務からも外したことからも、戦力としてまったく期待されていなかったことが理解できる。

その水中用ザクが再び前線に送られるきかっけとなったのが、オデッサ作戦である。地球連邦軍が実施したこの作戦によって、ジオン公国軍は欧州から駆逐された。この際、欧州から離脱するジオン公国軍将兵を支援する目的で、U.C.0079年11月中旬の「地中海上陸作戦（地中海侵攻作戦）」が行われた。

この作戦では、アフリカ方面へのジオン公国軍将兵の離脱に潜水艦隊が使用され、その支援に7機の水中用ザクが投入された。しかし、目立った戦果はなく、作戦終了後に残っ

シーサーペント隊
エンブレム

グリーンサイレン隊
エンブレム

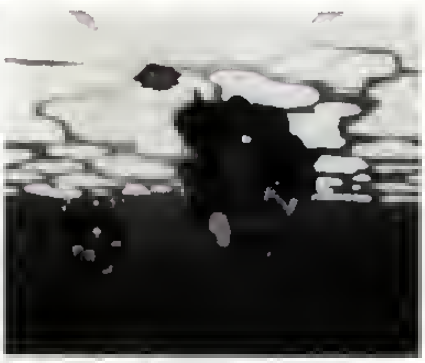
ナーガⅢ隊
エンブレム

ていた水中用ザクはは2機または3機だったされる。

一年戦争が終結すると、ほかのジオン公国軍MS同様、水中用ザクも地球連邦軍に鹵獲された。地球連邦軍がジオン公国軍と異なっていた点は、水中用ザクへの評価が比較的高かったことで、改修機「マリン・ハイザック」として増産、配備を進めていった。

マリン・ハイザックはコクピットをハイザック用に換装した機体（ハイザック試作機に水中用ザクの装備を追加したモデルともいわれる）で、上海特務などが装備した。マリン・ハイザックが実戦に投入されたケースとして知られるのが、U.C.0087年のグリプス戦役で、ホンコン湾において人質の確保や水中警戒を行っている。しかし、エゥーゴのRX-178ガンダムMk-Ⅱと交戦した末、投入した全機が失われており、性能不足とロートル化を印象付けることとなった。

なお、地球連邦軍が水中用ザクに示した興味は並々ならぬものがあり、大幅な性能向上を果たしたRMS-192Mザク・マリナーや、深海作業用のRMS-188MDザクダイバーといった派生機を開発している。この2機種は、ジャブロー基地で開発されたものであった。



上海特務が運用したマリン・ハイザック。本来の土俵であるはずの水中戦で、汎用機に敗れる結果となった。

ザク・マリナーは第1次ネオ・ジオン戦争においてネオ・ジオンに接収され、アフリカ方面で運用された。

局地戦用ザクⅡの開発②
ザク・デザートタイプの誕生

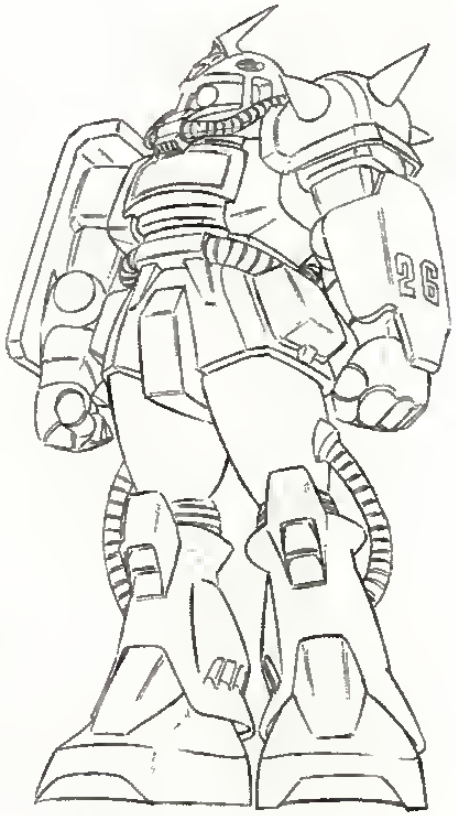
ＭＳ－06Ｄ ザク・デザートタイプは、砂漠戦用のザクⅡ系ＭＳＶである。

地球侵攻作戦に投入されたザクⅡＪ型は優れた陸戦能力を発揮したが、過酷な自然環境では運用性の低下が見られた。その代表が砂漠や熱帯地域だった。

ジオン公国軍もこの状況を想定していなかったわけではなく、砂漠や熱帯地域での運用能力にも秀でた陸戦用機ＭＳ－07 グフの開発を進めていた。しかし、グフの実用化まで砂漠・熱帯地における戦力不足を放置できず、アフリカ戦線向けにザクⅡＪ型を改修した局地戦用ＭＳの開発を決定した。グフ配備までの中継ぎとして、ザクⅡ系ＭＳＶが投入されることになったのである。

こうして誕生したのがザク・デザートタイプだった。開発は、第2次降下作戦で制圧した北米キャリフォルニア・ベースで行われている。

ザクⅡＪ型からの改修点として、機体の軽量化、補助推進ユニットの増設、冷却用装置の追加、防塵処理の強化、潜砂能力の付与、武装の強化などが挙げられる。これらの改修



MS-06D
ザク・デザートタイプ

点からも分かるように、強化は主に砂漠戦向けのものである。当初こそ熱帯地用としての機能も期待されたが、当時の技術や開発期間ではザクⅡに砂漠・熱帯の両方に対応する能力を追加することは難しかったようで、最終的には砂漠戦用としてロールアウトした。

後発のグフとの違いは、白兵戦能力の強化が求められなかったこと、単純に砂漠環境への適応が図られたこと、火力拡充をオプション火器に依存していたことなどである。

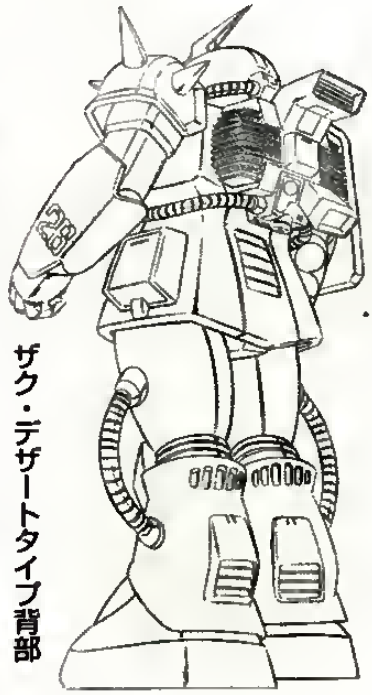
本機は実戦テスト期間が長かったようで、本格的な実戦配備は一年戦争中期以降にずれ込んだ。このため、グフの主力化が見送られたこともあって、結果的にはMS・09ドム配備までの中継ぎとなったのだった。

ザク・デザートタイプの構造

ザク・デザートタイプは、腹部や脚部などの大口径動力パイプ、右肩の懸架式シールド、左肩のスパイク・アーマーなど、原型機たるザクⅡJ型の面影を強く残しながらも特殊な装備が多数追加され、砂漠用として充分な性能を獲得した。

頭部には、ブリッツ社のバルカン砲を2門内装したほか、通信能力の強化のため短距離通信用のマルチブレード・アンテナが標準装備された。マルチブレード・アンテナの標準装備はグフに先駆けたもので、特に同一機種間の連携が容易となったようである。

ザク・デザートタイプ
ダブル・アンテナ頭部



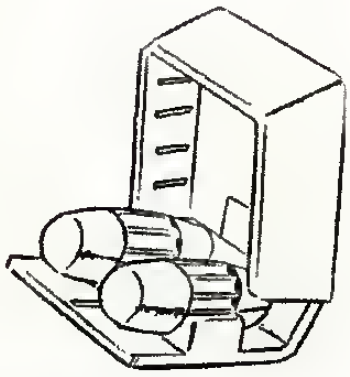
ザク・デザートタイプ背部

本機のマルチブレード・アンテナには、通常のザクⅡ同様、額部に搭載するシングル・アンテナ（Type G8HSDとされるモデル）と、両側面にロッド状のものを計2本装備するダブル・アンテナの2種類が存在した。

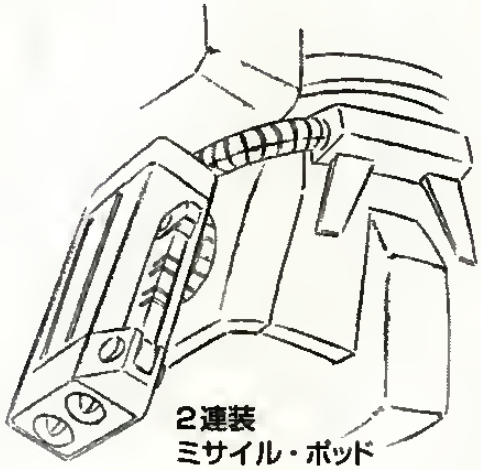
胴体は、正面から見る限り胸部形状が変更された程度だが、背面や腰部は砂漠用の改装が施されている。具体的には、ランドセルが冷却用ラジエーター搭載モデルに換装され、腰部背面には補助推進器を、腰部両脇にはシステム化されたマウント・ラッチを増設した。

腰部マウント・ラッチは基本的に兵装用で、MS用手榴弾や信号弾を2発まで搭載できるSA-712 クラッカー・ポッド、2連装のミサイル・ポッドなどが用意された。これらの兵装は、コクピットからの操作で切り離せるため、デッドウェイト化しにくいという利点を持っている。

腕部は左肩部スパイク・アーマーが直線的なデザインとなったほか、左前腕に増加装甲が配置され、耐弾性が向上している



SA-712
クラッカー・ポッド



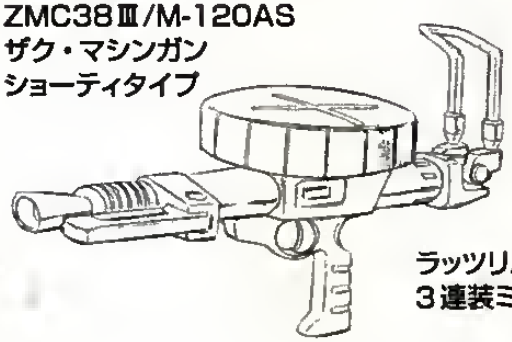
2連装
ミサイル・ポッド

（関節部の防塵処理も強化されていると思われる）。増加装甲は実戦データを反映した装備と思われ、表面にラッツリバー社の3連装ミサイル・ポッドP-3を装備することも可能である。

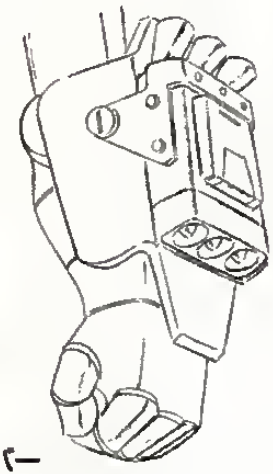
マニピュレーターは、防塵性能を除けばほかのザクⅡシリーズと同規格と考えられ、ザク・マシンガンやヒート・ホークといったザクⅡ用兵装を使用可能だったが、ザク・デザートタイプ用として開発された手持ち火器も存在した。

そのひとつが、標準的なザク・マシンガンZMC38Ⅲ／M-120A1のショーティタイプ、M-120ASである。これは砲身の短縮、フォールディング・ストックへの換装、光学サイトの廃止、設計許容範囲限界までの機関部のクリアランス拡大が図られており、砂漠での長期無補給戦闘を前提としたモデルとなっていた。ほかにも4機のザク・デザートタイプで運用する、組み立て式砲座G92が使用されたともいわれる。

脚部は、機動性と防塵処理の向上を中心とした改修が施された。脛部の補助推進装置や膝関節を保護するための防塵パッキンがそれで、補助推進器には当時開発中だったグフやYMS-08A 高機動試験機の影響が見受けられる。



ZMC38Ⅲ/M-120AS
ザク・マシンガン
ショーティタイプ



ラッツリバー
3連装ミサイル・ポッドP-3

ザク・デザートタイプの運用

本機は当初、シングル・アンテナタイプとダブル・アンテナタイプが48機ずつ生産され（後に一部部隊を除いてシングル・アンテナに統一され、28機が追加生産された）、全機がアフリカ戦線に投入されている。

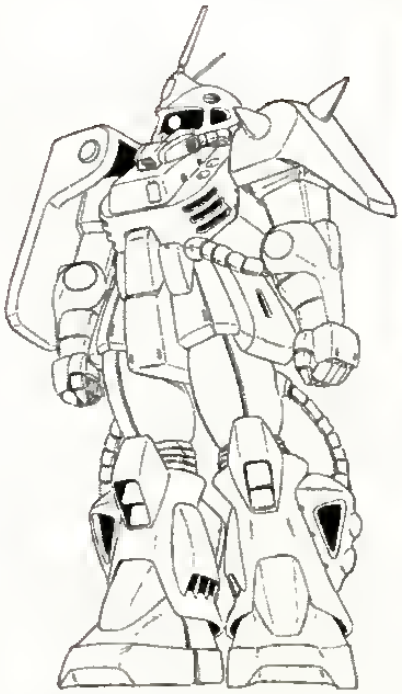
ザク・デザートタイプが配備された部隊として有名なのが、アフリカから中東で戦ったピンクパンサー隊、テストを担当したカラカル隊、中東西部で活躍した遊撃部隊スコルピオである（スコルピオはグフなどとの混成部隊）。

ピンクパンサー隊は、サハラ砂漠からジブラルタル海峡までを制圧、欧州侵攻の橋頭堡を築いた部隊として知られる。短期間での広域制圧を可能とした要因こそ、早くから同部隊に配備されていたザク・デザートタイプであり、砂漠地帯が多い北アフリカで猛威を振るったのだった。

カラカル隊は、リビア砂漠からスエズ運河西岸を作戦地域とした小隊編制の特務部隊で、ザク・

MS-06D ザク・デザートタイプ
カラカル隊所属機

MS-06D ザク・デザートタイプ
ピンクパンサー隊所属機



MS-06D ディザート・ザク

デザートタイプの試験運用を行うと同時に、実戦部隊としても活躍していた。また、ダブル・アンテナタイプを装備した部隊でもあった。

同隊は、ランバ・ラル隊のようなゲリラ的戦闘を得意としたようで、地球連邦軍の反抗を度々阻止している。

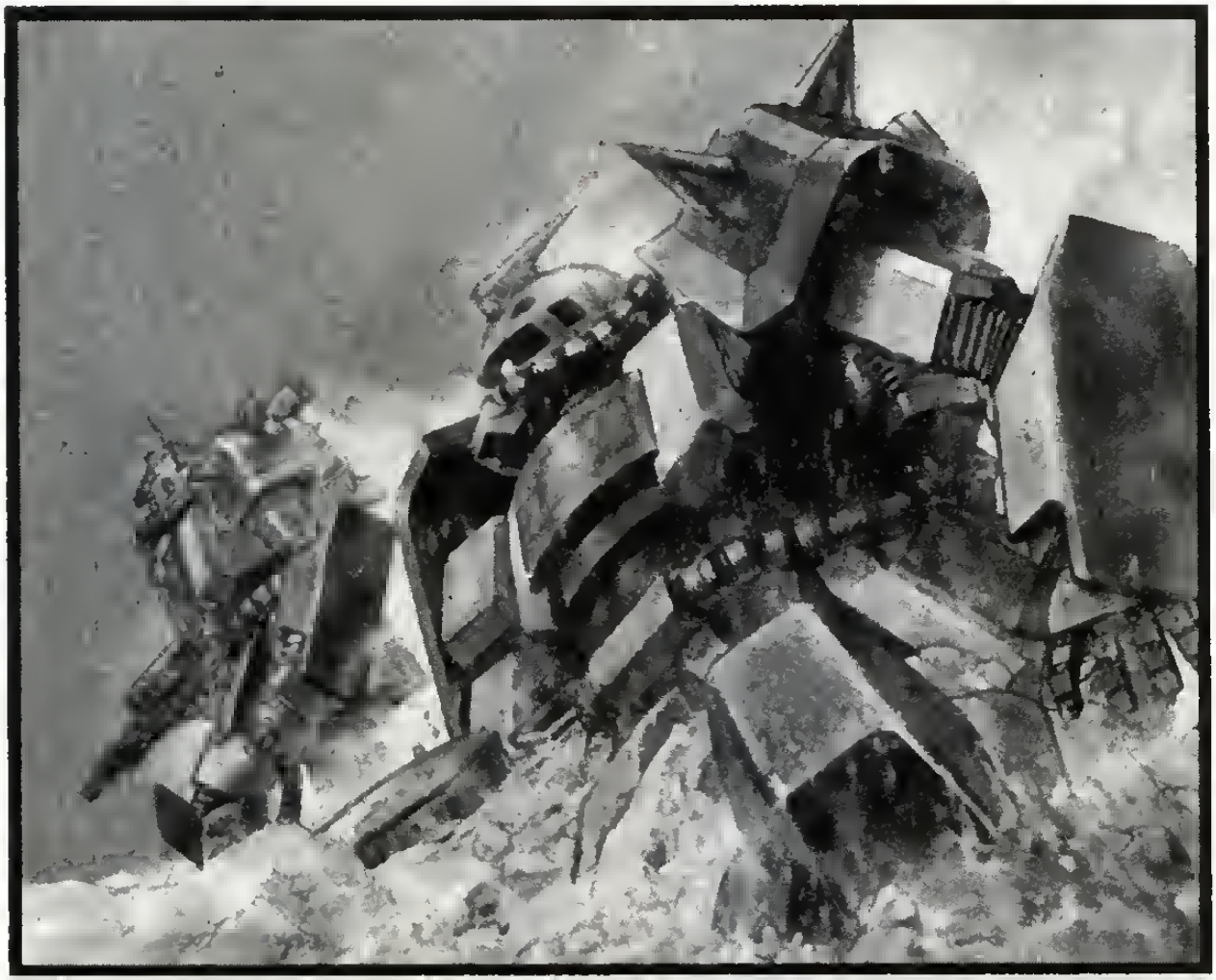
この際、ザク・デザートタイプの特徴である、潜砂能力や砂漠対応能力を利用して奇襲攻撃を行っていたようである。

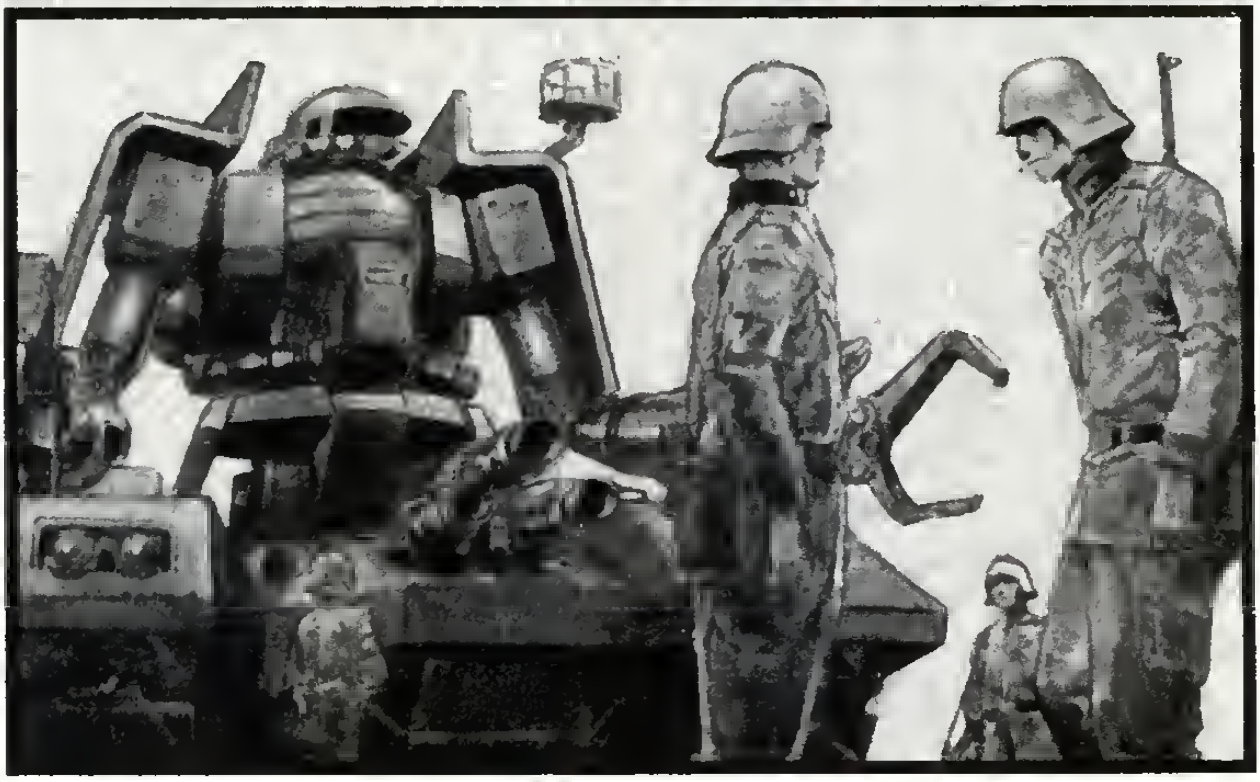
〝砂漠のロンメル〟ことデザート・ロンメル中佐が指揮するロンメル隊も、ザク・デザートタイプを装備した部隊のひとつだったと考えられる。ロンメル中佐は、ザク・デザートタイプを自身の専用機MS-06DRC デザート・ザク・ロンメルカスタムへと改装したほか、戦後には全面改修機MS-06D ディザート・ザクを部隊で運用した。

ディザート・ザクはジオン公国軍残党のみならず、アフリカの民族ゲリラ勢力の手にも渡り、少なくともU.C. 0090年代中期までの使用が確認されている。

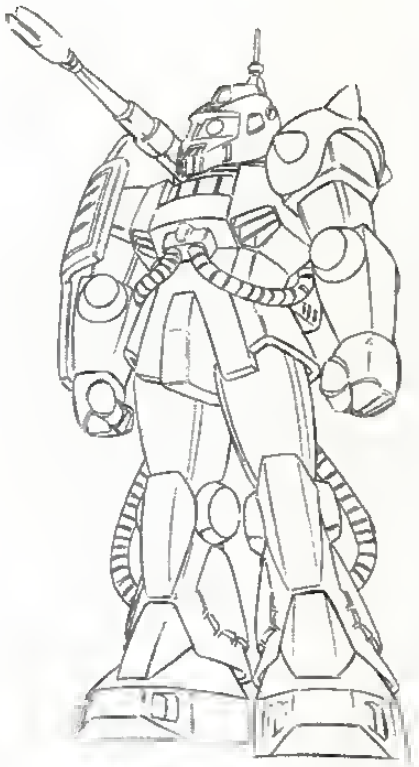
ロンメル隊が運用したディザート・ザクは、ジェット・スキーによる砂漠地帯の高速移動を可能としていた。

〝青の部隊〟を名乗るアフリカ民族ゲリラは、青系のカラーリングを施したディザート・ザクを運用した。





局地戦用ザクⅡの開発③
ザク・キャノンの誕生



MS-06K ザク・キャノン

180㎜キャノン砲を装備した、中距離支援用のザクⅡ系MSVがMS-06K ザク・キャノンである。

宇宙でこそ無敵を誇ったMSだったが、地球上では敵航空機に苦戦することも少なくなかった。一年戦争当時は飛行能力を持つMSがほとんど存在しなかったこと、MS用火器が必ずしも対空攻撃に適していなかったことなどが理由である。

ジオン公国軍も制空戦闘機ドップを配備しており、地球連邦軍航空部隊を排除できた。だが、配備数や航続距離などの問題で常にドップの支援を受けられるわけではない以上、迅速な部隊展開のために、対空迎撃能力を持ったMSが必要と考えられた。

そこで提案されたのが、対空砲をオプション装備するザクⅡJ型のプランだった。開発はザク・デザートタイプと同じくキャリフォルニア・ベースで行われている。しかし、対空砲搭載型ランドセルの重量が過大で、重量バランスなどの問題をクリアできず、開発は

頓挫してしまう。使用目的が二転三転したことも、開発が頓挫した一因だったようだ。

そんな折、地球連邦軍のキャノン・タイプMS（RX-77 ガンキャノンと思われる）の情報がもたらされる。これを受けたキャリフォルニア・ベースの技術陣は、対空攻撃用の仕様を改め、中距離支援用機MS-06J-12へと開発計画をシフトさせた。

この試作機MS-06J-12こそ、後のザク・キャノンである。

ザクⅡJ型をベースとしながらも、長射程大火力の180㎜キャノン砲や増加装備用アタッチメントを備え、監視システムや火器管制システムが更新されたザク・キャノンは、中距離支援だけではなく当初想定された対空攻撃でも優れた性能を獲得していた（ビーム砲搭載型も検討されたが、量産はされていない）。また、キャノン砲装備のランドセルはJ型用に換装可能、つまりザクⅡJ型のような陸戦汎用機としての運用も想定されており、ザクⅡの汎用性や拡張性が活かされた機体となっている。

生産数は9機とされていたが、近年、地球上の各地域での投入が確認されており、実際の総生産数は分かっていない。

ザク・キャノンの構造

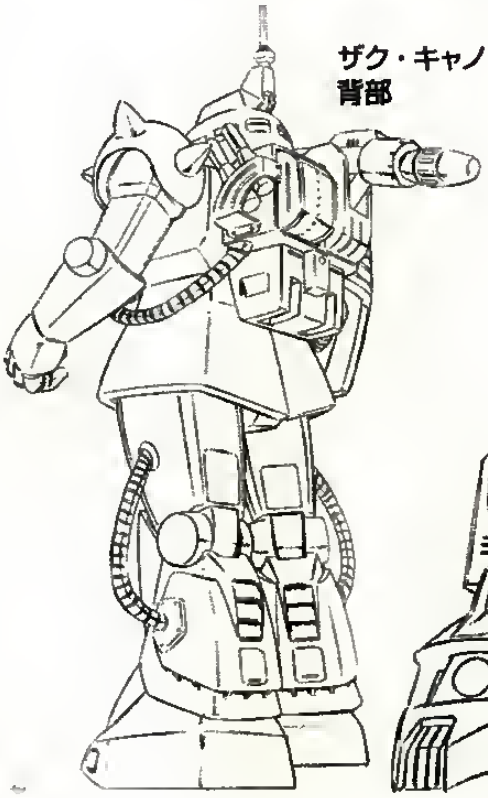
ザク・キャノンは単なる砲戦用ザクⅡではない。中距離支援用への仕様変更や大重量化

に伴い、機体そのものに大きな改修が加えられており、形状の変更も少なからず見られる。これは、本機の開発がドムの配備とほぼ同時期だったことも影響していると考えられ、部分的ながら後発機の技術が投入された部位もあった。

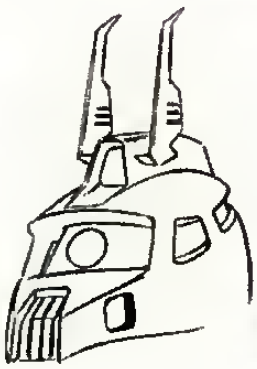
頭部は、モノアイ走査レールを全周囲タイプとしたほか、頭頂部には補助カメラとマルチブレード・アンテナを搭載しており、後発のMS-14C ゲルググ・キャノンに近い構造となっている。マルチブレード・アンテナは、ロッド状の短装式とプレード状の二枚式（Type V12sp と呼ばれるモデルと推測される）が存在する。二枚式の頭部は「ラビット・タイプ」と呼称されるが、単装式との性能差は不明である。

ほかにも、外装式の動力パイプの廃止、開発中の機体の部材を流用した口吻部といった変更がなされている。

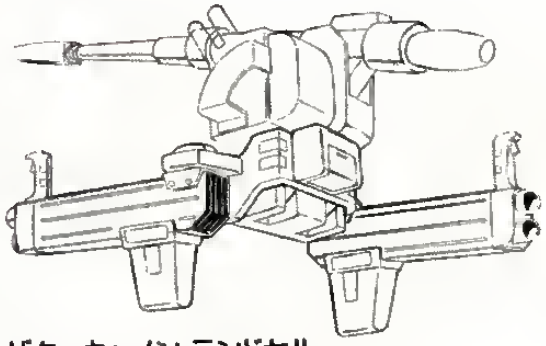
胴体の背面には、ザク・キャノンのシステム中核であるランドセルを搭載した。本機用のランドセルには、180㎜キャノン砲、弾倉、給弾機構、管制システムなどの砲システムの大半がパッケージングされたほか、スモーク・ディスチャージャーやオプション増設用ラッチが設けられた。



ザク・キャノン
背部



ザク・キャノン
ラビット・タイプ頭部



ザク・キャノン ランドセル

ラッチ用増加装備として有名なのが「ビッグガン」である。これは、2連装ミサイル・ポッドを2基連結した兵器で、任意での切り離しが可能となっている。

ただし、ランドセルは胴体と一体化されているわけではなく、ザクⅡJ型用と換装できた。J型用ランドセルを搭載しての試験結果は良好だったが、コスト面で問題があり、J型との互換性を確保する程度に止まった。

ランドセルだけではなく、胴体そのものも大きな改装を受けている。胸部には地球連邦軍系MSのような大型エアインテークが設置されたほか、コクピット前面のパネルと動力パイプの配置が変更されている。動力パイプの配置変更は、照準システムのリンケージのために採られた処置であった。

腕部は形状面での違いこそ見られるが、機能はザクⅡJ型用とあまり変わっておらず、マニピュレーターでザクⅡ用兵装を使用することもできる。ただし、火力はランドセルに依存しているため、手持ち兵装を装備するケースは少なかったとされる。

ザク・キャノンの仕様に合わせて改修された、数少ない腕部パーツが右肩部シールドである。ザク・キャノンは右肩にキャノン砲を配置する都合上、右側の視界が悪く、右側面への反応が遅くなる。これをフォローするため右肩のシールドは必須で、シールドの表面

積が広くなったのもこれが理由と考えられる。

機動性向上のため、グフを参考とした補助推進器が脚部に搭載されたのはザク・デザートタイプと同じである。キャノン砲を搭載したランドセルの採用でトップヘビーとなった本機には、特に有効な機器といえよう。

ザク・キャノンの運用

中距離支援用MSに分類されるザク・キャノンは、通常のMSのような「白兵戦」ではなく、キャノン砲による支援砲撃や対空攻撃を主任務とする。つまり「殴り合い」ではなく、味方機の後方から一方的な射撃を行うことを想定して開発されている（これは理想論であり、実際は敵機の接近を許してしまうことも多い）。

ザク・キャノンが特殊だった点は、地球連邦軍の支援MSと異なり、弾倉交換などを担うMSがサポートに就くことだった。これは弾倉を外部から交換可能なザク・キャノンならではの運用形態であり、砲撃中の周囲警戒の面でも有用であった。

なお、必ずしもサポート機が就くわけではなく、就いたとしてもザクⅠのような二線級のMSが用いられることが多かった。

東南アジア方面で確認されたザク・キャノン。脚部が損壊した機体を固定砲台のように運用した珍しい例である。

キャリフォルニア・ベースでロールアウトした本機は、試作1号機が北米中部、あるいは西アジア方面でテスト運用される予定だったが北米に残され、追加試作された8機も北米戦線で運用されるに止まったといわれる。ただし、東南アジアやオーストラリアなどでもザク・キャノンが確認されたほか、戦後にはニューギニアに潜伏したジオン公国軍残党が装備した可能性が指摘されている。なお、極東方面で極東方面で確認されたザク・キャノンはザク・キャノンは、砲の形状などが異なるほか、トーチカに脚部を格納した状態で運用された。

一年戦争での運用例として有名なのが、ニュータイプと噂されたイアン・グレーデン中尉と同隊に所属したアルフレディーノ・ラム少尉の機体である。ふたり共に最終的にはキャリフォルニア・ベースのザク・キャノン中隊に所属し、フロリダ半島のケープカナベラル基地まで後退した時点で終戦を迎えている。

一年戦争後、地球連邦軍で運用された鹵獲機は、近代化改修を施された空間戦対応タイプで、アレキサンドリア級宇宙巡洋艦《ハリオ》に配備されていた。この機体は、キャノン砲をビーム砲に換装していたという説がある。

ハリオに配備されたザク・キャノンは、地球連邦軍所属のハイザックと同系色で塗装されていた。

MS-06K ザク・キャノン
イアン・グレーデン専用機

ザク・デザートタイプやザク・キャノン以外にも、グフの影響を受けたザクⅡ系のバリエーション機が存在する。

それがＭＳ－06Ｇ 陸戦高機動型ザクである。名称に「高機動型」という単語は含まれているが、ＭＳ－06Ｒ 高機動型ザクとは直接的な関係がなく、陸戦での機動性向上を目指した機体だった。このため、ザクⅡＪ型の改修発展機とも考えられる。

陸戦高機動型ザクの胴体や脚部、スパイク・アーマーなどにグフの影響が見受けられる。これは、両機が同時期に開発されたためで、新型機のフィールドバックを受けた改修機という意味ではザク・キャノンに近い部分があるとされる。

肝心の機動性の向上は、主に脚部増設の推進器によって達成されている。これはグフよりは徹底されているものの（注目されることは少ないが、グフの脚部にもジャンプや格闘戦を意識したスラスターがある）、ドムほど画期的な機構ではなく、陸戦型局地戦用ＭＳ開発の過渡期的機体となっていた。ザクⅡＪ型と比較してマッシブなフォルムも、重ＭＳ化への流れの中にあると考えていいかもしれない。

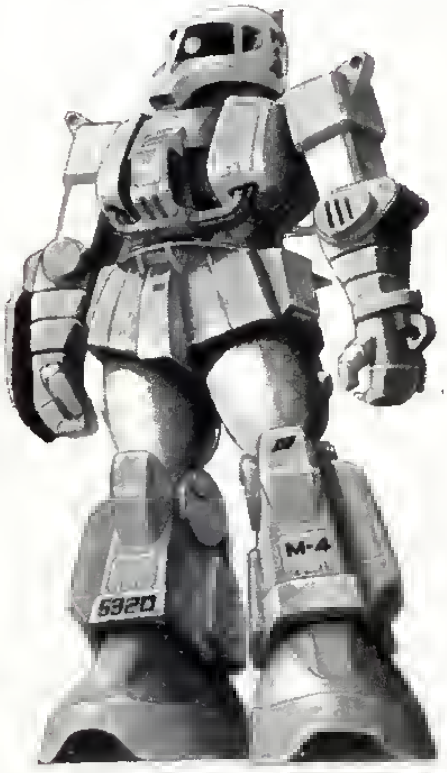
前線で急造された再利用型のザクⅡ系MSV

再利用型ザクの開発①
一般作業用ザクの誕生と構造

MS-06W一般作業用ザクは、使用不能となったMSの部品を流用して現地で組み上げられた機体である。

本機をザクⅡのMSVとするのは、正確ではないかもしれない。型式番号が前線で便宜上付されたこと（そもそも一般作業用ザクはジオン公国軍の制式機ではない）も一因だが、それ以上に本機を構成しているパーツが問題である。

一般作業用ザクのパーツには、ザクⅡのみならずザクⅠ、グフまでもが利用されており、その出自が複雑なのだ（作業用とするため、作業重機のパーツも用いられている模様）。これはMSの冗長性が極めて高かったことを意味するが、当然ながら本機が高性能ということではない。そもそも一般作業用ザクは、使用不能となったMSのパーツの寄せ



MS-06W 一般作業用ザク

集めであり、その名の通り作業用MSとしての機能が期待されたに過ぎなかった。

ザク・マシンガンの分解組み立てや、「ブリティッシュ作戦」におけるスペース・コロニーへの工作作業でも証明されているように、MSは高度な作業性能を持っており、地球侵攻でも大型重機としての機能を期待されていた。しかし、MSの絶対数が不足していたことから、地域によっては二線級のザクIすら実戦投入せざるを得ないというのが実情で、作業用として使用できるMSは限られていた。

そこで、撃破や補給不足で稼働不全に陥ったMSを再生し、作業用とする動きが前線で見られ始めた。こうした流れの中で誕生した機体のひとつが、一般作業用ザクだった。

戦闘行動を前提としない一般作業用ザクは作業性を高めるため、つまりMSの作業重機化のため、右前腕に伸縮式の大型スコップ、右前腕に関節部を利用したウインチを装備し、ランドセルを廃した背部には二段式荷物デッキを配置した。本機は前線で急造された機体であるため統一規格が存在しないが、一般作業用ザクと呼ばれるMSはこれらの機構を兼ね備えていたといわれている。

ほかにも、機体によってはマニピュレーターの簡易化、コクピットの胴体外拡張が図られた。マニピュレーターの簡易化は複雑な五本指マニピュレーターは消耗率が高く、そもそも余剰パーツが少なかったこと、張り出し式コクピットは直接視界の拡大や、パイロットの乗降が容易であることなどが、前述のような措置が取られた理由と考えられる。

本機は西アジアやアフリカ戦線で使用されたといわれ、再武装化の後、戦闘に投入されたケースもあったようだ。

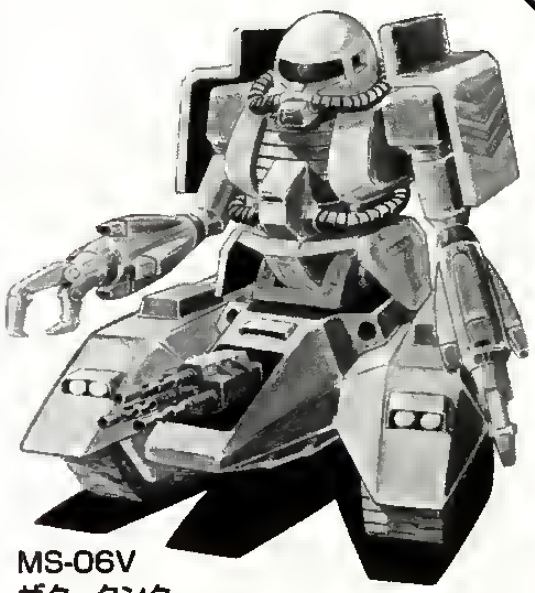
再利用型ザクの開発②
ザク・タンクの誕生と構造

MS-06V ザク・タンクは、ザクⅡの上半身とマゼラ・ベースを結合した作業用MSである。製造されたのは、一般作業用ザクより後のことだった。

重力下において消耗率が高いMSのパーツは関節部で、特に負担が大きい脚部関節は頻繁に整備、換装する必要があった。当然、砂漠や熱帯といった過酷な環境では消耗率がさらに上昇する。これに戦争の長期化に伴う補給不足が追い討ちをかけ、稼働不全に陥るMSは増加の一途にあった。これが損傷したMSの修理を難しく、さらに一般作業に従事できるMSが減少することを意味したことはいうまでもない。

そこでアフリカ戦線の工作作業中隊は、余剰パーツを流用、再生した作業用MSを独自に作り上げた。それがザク・タンクである。

ザク・タンクが特殊だった点は、MSの体裁を維持することすら放棄し、地球連邦軍のRX-75 ガンタンクに近い形状とされたことである。一般作業用ザクの時点で五本指マニ



MS-06V
ザク・タンク

ピュレーターは廃止されていたが、それを推し進め、下半身にマゼラ・ベースを流用した装軌式車両にしてしまったのだ。

ここまで思い切った改造が可能となった背景には、前述のような理由で稼働不全になったザクⅡと、マゼラ・トップを失ったマゼラ・ベースが多数存在したこと、用途を限定することで一般的なMSほどの性能が必要でなかったことが挙げられる。

ザク・タンクの上半身は、純正のザクⅡそのままではなく簡略化と改修が行われた。腕部は五本指マニピュレーターを廃してマジック・ハンド／クレーン式としたほか、ランドセルの燃料タンクへの換装、一般作業用ザクのような張り出し式コクピットの採用、マゼラ・ベースと接続するための腰部構造の一新などがそれである。

ただし、改装は単なる簡略化ではない。マジック・ハンドは重作業だけでなくトーチを使用した作業も可能、ランドセルはカーゴ・デッキやクレーン・ユニットなどに換装可能であり、一般重機よりも遥かに高度な多用途性を有していた。

マゼラ・ベースにも変更が加えられている。マゼラ・トップの接続部位であるタワーを排除した後、ザクⅡの上半身を載せるために車体上部のフラット化とターレット化が行わ

れた。ザクⅡのコクピットへの操縦系の統一に伴い、ドライバー・コクピットは廃止された（一部の機体では残されていたといわれる）。

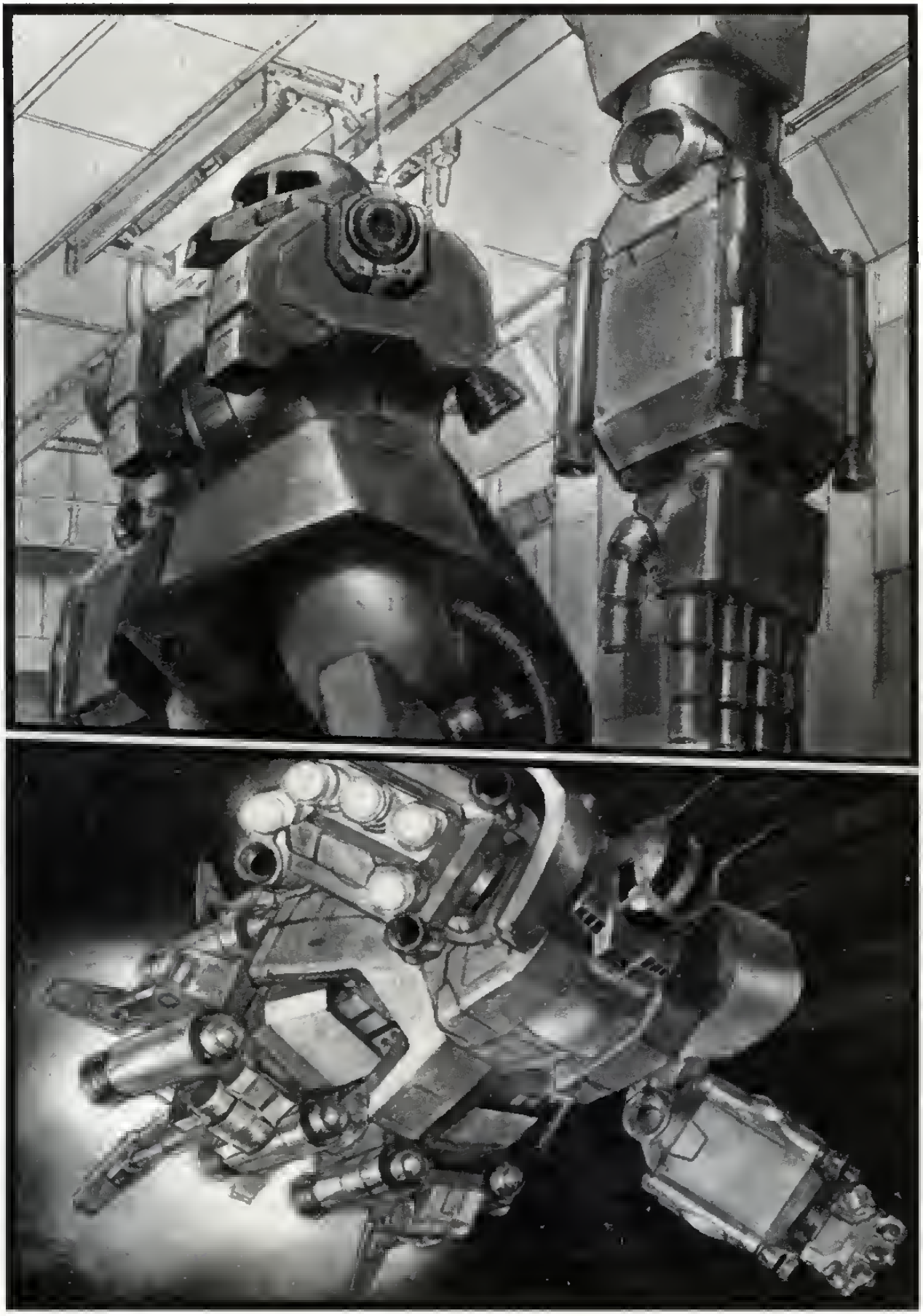
こうして完成したザク・タンクは、MS・06Vとして制式に承認され、地球各地の部隊で製造された。だが、すべてのザク・タンクが同じ形状だったのではない。各地で作られたザク・タンクは、ザク系MSの上半身とマゼラ・ベースを組み合わせたフォーマットこそ守られていたが、廃棄品を再利用する都合上、流用できるパーツに違いがあり、性能や形状に違いが出たのである。

ザク・タンクのバリエーションで有名なのが、ボルネオで運用されたMS・06V・6、通称「グリーンマカク」である。グリーンマカクは密林地帯での運用を前提とした仕様で、大型マニピュレーターを装備していた点が特徴だった。ザクⅠの上半身を流用したタイプも、東南アジアで確認されている。

珍しいところでは、キャノン砲パックのランドセルを搭載した「キャノン砲仕様」、一般作業用ザクやザク・キャノンの上半身を接続した機体も存在したようである。

戦後には地球連邦軍がジャブローに配備したほか、好事家の手に渡った機体も確認されているが、これが一年戦争時のオリジナルかレプリカかは分かっていない。

MS-06V-6 ザク・タンク
グリーンマカク



ジオングへの過渡期的機体となった ニュータイプ用MSV

ニュータイプ用ザクの開発① サイコミュ・システム試験用ザクの誕生

MS-06Z サイコミュ・システム試験用ザクは、ジオング開発用のテスト機として試作されたMSである。開発拠点はグラナダで生産数は3機、完成はブラウ・ブロがロールアウトした10日後のことだった。

国力や人口に劣るジオン公国は、兵器や将兵の質で戦術的優位を得る方針を採った。この中で生まれた兵器がMSで、将兵の究極形として模索された存在が、圧倒的な先読み能力や空間認識能力を持つ「ニュータイプ」だった。

ニュータイプはジオン・ズム・ダイクンが語った概念上の存在に過ぎない。だが、一年戦争緒戦の戦果を研究する中で存在が確実視されるようになり、突撃機動軍管理下のフラナガン機関を中心に研究が行われた。その結果、U.C.0079年10月にニュータイプ用マンマシン・インターフェイス「サイコミュ」が完成し、これを搭載した機動兵器の開

発が急ピッチで進められることとなった。

国力に劣るにも拘らず、消耗戦を強いられていたジオン公国軍にとって、ニュータイプとサイコミュ搭載機の組み合わせは、戦局を左右するものと認識されていた（正確には、突撃機動軍司令キシリア・ザビ少将が重視していた兵器システムで、政敵だったギレン・ザビ総帥との軍事衝突も見越しての開発と思われる）。

こうして立案されたプロジェクトが「MS-16X計画」だった。後のサイコミュ搭載MS、MSN-02ジオングの開発計画である。そして、MS-16Xの開発にあたって試作された機体が、中型の戦闘機、MAN-03ブラウ・プロ、そしてサイコミュ・システム試験用ザクの3機種だった。

サイコミュ・システム試験用ザクは、その名の通りサイコミュを搭載したザクⅡF型の改修機で、大推力スラスターや有線ビーム砲などにより、ザクⅡ系MSVの中では最高度

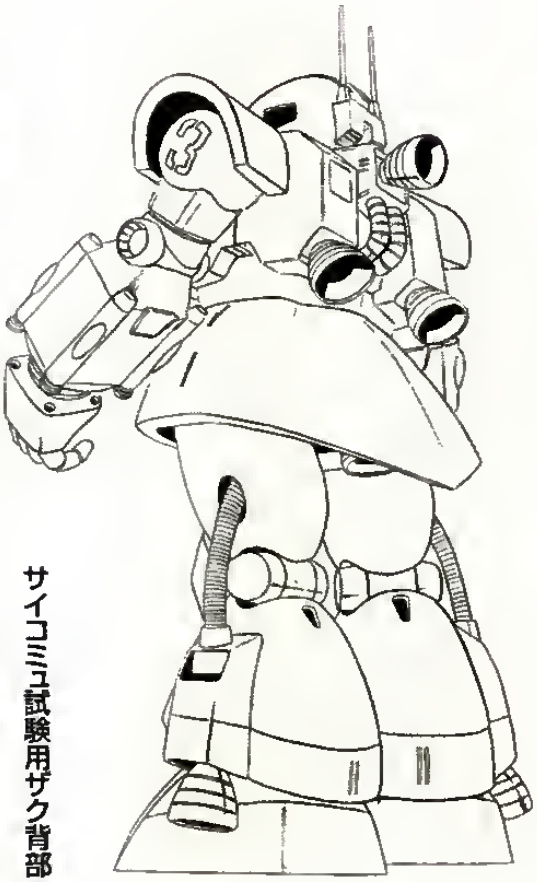
MS-06Z サイコミュ・システム試験用ザク

のカタログ・スペックを持つ（数値上の性能こそ高いが、実際の戦闘能力には疑問が残る）。よりペイロードが大きい機体が存在したにも拘らず、一年戦争末期にザクⅡベースのMSVが開発されたのは、ザクⅡの拡張性が優れていたというより、ロートル化していたMSを再利用する側面が強かったと考えられる。

そして、このサイコミュ・システム試験用ザク・シリーズを最後に、ジオン公国軍ではザクⅡ系MSVは確認されなくなった。

サイコミュ・システム試験用ザクの構造

サイコミュ・システム試験用ザクは、ジオング開発のためのデータ収集機であり、構造や搭載機器もジオングのそれに近い。頭頂部までフォローした全周囲式のモノアイ走査レール、38万8千kgもの推力を発生するスラスター群（1号機の場合）、サイコミュ制御式の腕部有線誘導5連装メガ粒子



サイコミュ試験用ザク背部

砲といった装備が、共通点として挙げられる。サイコミュと腕部有線誘導5連装メガ粒子砲には、ブラウ・ブロのテストデータが反映されたといわれる。

ただし、大型機であるジオングと同等の装備を18m級のザクⅡF型に導入するのは無理があり、頭部脱出機構の不採用、有線メガ粒子砲を搭載した腕部の肥大化、大出力ジェネレーターを内蔵したことによるボディの大型化、10分程度という短い稼働時間、機体バランスの悪化などの問題を抱えることとなった。脚部の機能が限定的だったと推測されている。そのため、ほぼメイン・フレームのみがザクⅡF型から流用されることとなった（本機が「マウンテンゴリラ」と比喩されたのは、肥大化した腕部が原因だった）。

このような機体構造は性能の低下を招き、十全なテスト結果が得られなかった。本機の改修型であるMSN-01 サイコミュ・システム高機動試験機が開発されたのは、こうした理由に因っている。

サイコミュ・システム試験用ザクの運用

サイコミュ・システム試験用ザクを用いた実験は「ビショップ計画」と呼ばれる（本機に「ビショップ」のコードネームが付されるのは計画名に因る）。性能上の限界から、サイコミュ使用時における高機動／ゼロレンジ攻撃のデータ収集が難しかったという話は、

「ビショップ計画」を語る際によく俎上に上る。

実験艦《レムリア》を母艦として実施された「ビショップ計画」のエピソードとして有名なのが、コレヒドール暗礁宙域における運用試験時の遭遇戦である。この際、サイコミュ・システム試験用ザク2号機が損傷したものの、護衛機と共に地球連邦軍の襲撃部隊を駆逐している。

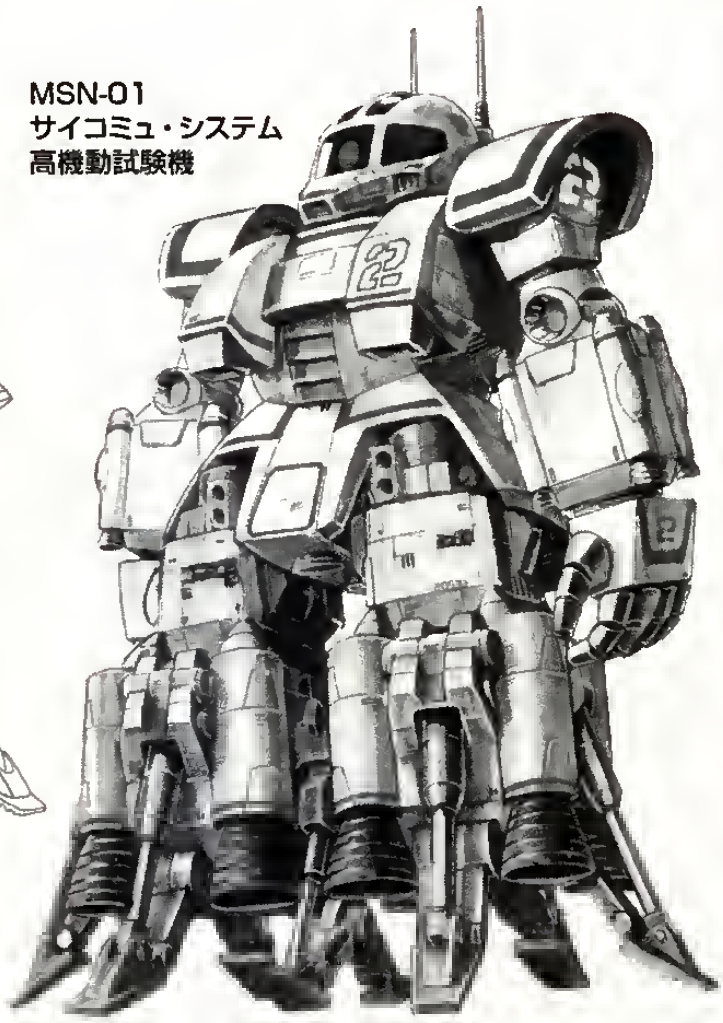
本機のパイロットとしてヤハギ・フランジバックの名が挙げられ、ア・バオア・クー戦にもサイコミュ・システム試験用ザクで参戦したという説がある。

ニュータイプ用ザクの開発②
サイコミュ・システム高機動試験機の誕生と構造

サイコミュ・システム試験用ザクを改修した高機動仕様機が、MSN-01サイコミュ・システム高機動試験機だ。型式番号がザクⅡを示す「MS-06」から「MSN-01」に変更されたのは、ニュータイプ用MSのカテゴリーが新設されたためだった（このため、本機をザクⅡ系MSVに含めない場合もある）。

サイコミュ・システム試験用ザクでは、特定試験におけるデータ収集が難しかったことが問題視される。高機動レベルかつサイコミュ使用環境下において、ゼロレンジでの攻撃

サイコミュ・システム
高機動試験機背部



MSN-01
サイコミュ・システム
高機動試験機

データ収集が困難だったのだ。これは、推進力不足や少ない推進剤量が原因と考えられる。

そこで、脚部を大推力の熱核ロケット・エンジンに換装したサイコミュ・システム高機動試験機が開発された。ベースとなったのは、損傷したサイコミュ・システム試験用ザク2号機で、改修はグラナダ工廠で行われた。

脚相当部の熱核ロケット・エンジン・ユニットは、4基のロケットを束ねたもの（左右合わせて8基の熱核ロケットを持つ）であり、降着用のブレードギアも装備されている。

これにより本機は重力下運用能力を失っ

たが、原型機の脚部はAMBACシステムとしてはほとんど機能していなかったらしく、熱核ロケット・エンジンへの換装は大きな問題にはならなかった。

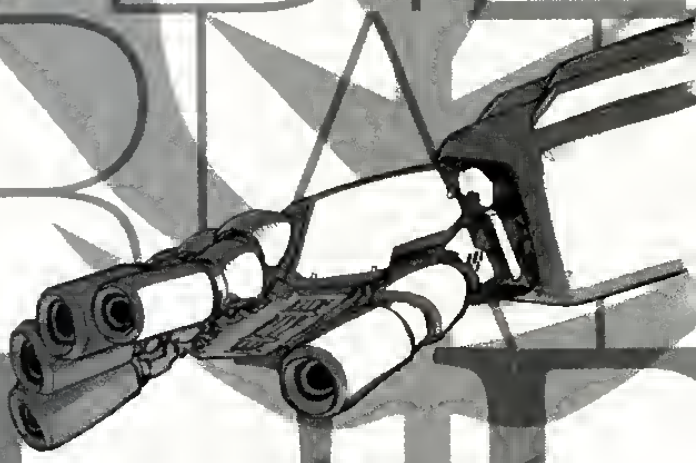
脚部機能が不要だった理由は、ジオングの仕様に求められる。ジオングには脚部付きの第1試案と、脚部を廃して大推力スラスターを配置した第2試案が検討されており、本機は事実上、第2試案のテスト機だったのである。

完成したサイコミュ・システム高機動試験機は機動性こそ向上していたが、稼働時間の不足を解決できていなかった。ザクⅡを原型とした機体開発は、限界を迎えていたのだ。テストの結果を受けたジオン公国軍開発陣が、ジオングを完全新設計機とした背景には、このような理由があった。

なお、本機はテストだけでなく、一年戦争末期の戦場にも投入されている。星一号作戦直前、地球連邦軍の制圧下にあったコンペイトウ（旧ソロモン）へと奇襲をかけたほか、ア・バオア・クー戦で実戦配備になったといわれている。

コンペイトウに奇襲を行った機体。一般的に知られるサイコミュ・システム高機動試験機とは異なり、紫系のカラーリングが施されていた。

MOBILE WAR GUIDE



第二章

活動範囲の拡大と重装化への解決策

グフ系 MSV

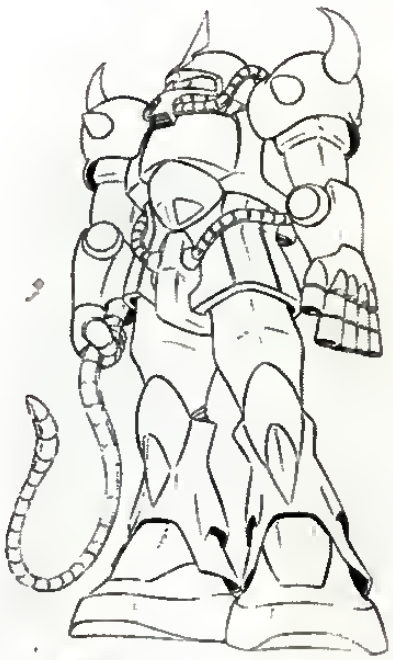
新型MSや画期的新機構の礎となったグフ系の派生機

原型機の長所を捨ててまで局地戦用MSの可能性を模索したグフ系MSV

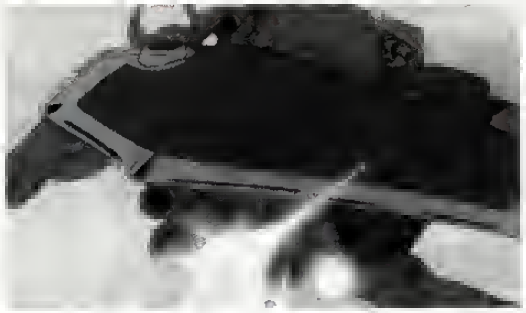
MS-07グフは、ザクⅡJ型に代わる陸戦用MSを目指した第一期陸戦MS開発計画において、ZEONIC社が開発した陸戦用MSである。

ザクⅡJ型以上の陸戦対応能力（熱帯や砂漠への適応能力も高い）と機動／運動性、対MS戦を想定した高度な白兵／格闘戦能力、軽量性などが特徴だった。同じ陸戦用のドムを一撃離脱を重視した重戦闘機とするなら、グフは小回りが利くドッグファイト重視の軽戦闘機に例えることができる。汎用性を犠牲にし、格闘戦に特化した仕様や独特な操縦性から一般パイロットには扱い難く、主力機と呼べるほど生産されなかったが、本機の性能を引き出せる熟練パイロットには好評で、ドムが配備されるまで地球各地で活躍した。

陸戦専用機のグフはその仕様上、地球侵攻作戦



MS-07B グフB型



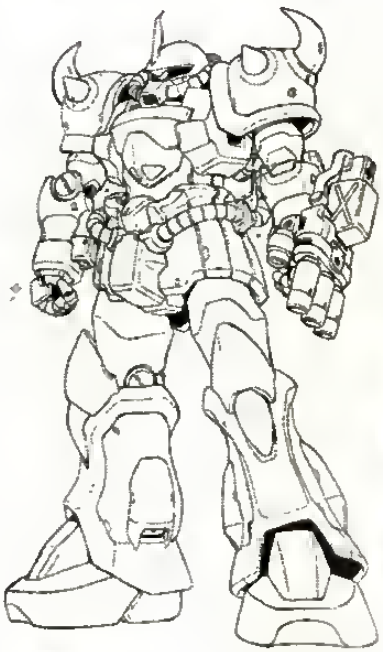
5連装フィンガー・バルカン砲を連射するグフ。優れた運動性と格闘戦能力を有し、ザクⅡJ型とは一線を画す陸戦性能を発揮した。

以降に投入されたこと、極端な改良が求められなかったことなどから、ザクⅡほどのバリエーション数は存在しない。通常のマニピュレーターを搭載した初期生産型のMS-07Aグフ A型、右腕に格闘戦用電磁兵器のヒート・ロッド、左腕に5連装フィンガー・バルカン砲を内装したMS-07B グフB型、固定兵装を外装化したMS-07B-3 グフ・カスタムが知られる程度である。

これらの機体――特にグフB型――は、一般的に「グフ」として認知されているシリーズで形状もさほど変わらず、格闘戦重視という基本ラインを守っている。

しかし、試作機であるYMS-07A プロトタイプ・グフを除けば、グフ系MSVは方向性が異なっていた。すべて陸戦機ではあったが、グフの特徴である優れた格闘戦能力や軽快な運動性を放棄し、まったく異なる特性の改修機としたのだ。この点が、拡張性が高い汎用機ゆえに多種多様な派生機が開発されたザクⅡ、ホバー走行式局地戦用MS／空間戦用重MSの路線

グフ・カスタムは固定兵装の外装化によって、グフの特徴を残しながら汎用性を高めることに成功している。



MS-07B-3 グフ・カスタム

を突き詰めていったドム、設計段階からユニット交換による多様化を獲得していたゲルググとの差だった。つまり、原型機の長所を捨てたグフ系MSVが開発されたのである。

この背景には、ザクⅡをベースとした場合の性能不足、ドム以前に量産された新設計の陸戦MSがグフだけだったこと（MSVの開発時期と性能の兼ね合い）、対MS格闘戦という偏ったコンセプトに疑問が投げかけられたことなどが考えられる。格闘戦を偏重したMSに対する低評価は、YMS-15ギャンをはじめとする格闘戦用MSが、ほぼ試作レベルに止まったことからも推測できる。

ただし、これはグフ系MSVが何の指針もなしに開発されたことを意味しているわけではない。グフ系MSVには、画期的な新機構のテスト機や新型機開発のためのデータ収集機が存在しており、その存在意義はMS開発史において重要なものとなっている。また、Cシリーズと呼ばれるMS-07C系列機は「戦況への個別の対応」というテーマを掲げており、多様化する地球各地の戦線を考慮していたことも確かだった。

オデッサ作戦に投入されたグフ・カスタム（左も同じ）。グフ・カスタムはバリエーションの成功例だが、実戦で確認されたケースは少ない。

地球侵攻の進展とグフ系ＭＳＶの歴史

ジオン公国軍は、「ブリティッシュ作戦」による独立戦争の早期決着を狙っていたが、最終的には地球を占領する意図があった以上、陸戦用を中心とした局地戦用ＭＳは必須であった。新設計の局地戦用機は開戦に間に合わなかったが、地球侵攻作戦が進展し、キャリフォルニア・ベースをジオン公国軍が接収すると、局地戦用ＭＳの開発は一気に進行した。こうした局地戦用ＭＳの中で、最初期にロールアウトしたＭＳがグフである。

具体的な開発開始時期は不明だが、一説には第３次降下作戦に投入されたといわれている。このことから、開発自体は以前から進められており、最終的にはキャリフォルニア・ベースでロールアウトしたと考えていいかもしれない。

初のグフ系ＭＳＶであるＹＭＳ－07Ａ プロトタイプ・グフは、この時期に開発された機体である。ＭＳＶにはスタンダードなＭＳを改修した派生機が多いが、プロトタイプ・グフのように量産機の前身にあたる試作機も少なからず存在する。

第一期陸戦ＭＳ開発計画のコンペティションにおいて、ＹＭＳ－08Ａ 高機動型試験機に勝利したプロトタイプ・グフは、ザクⅡＪ型の後継となる陸戦用主力機として期待され量産が始まった。ただし、グフの量産は前線の要求より遅く、配備までの中継ぎとしてザク・デザートタイプが生産されたほか、腕部固定兵装の生産が間に合わず、暫定的に両腕を通

常のマニピュレーターとしたグフA型が32機ロールアウトするなど、混乱が見られた。

グフA型に関しては両腕以外、後発のB型と同じだったようだが、コクピットハッチの形状がプロトタイプ・グフと同じだったという説や、マルチブレード・アンテナが未装備だったという説も囁かれていることから、複数の仕様があったとも考えられる。A型の配備先と伝えられるのがマ・クベ大佐指揮下の鉱山基地部隊、プロトタイプと同じコクピットハッチのA型を装備したという説が囁かれている部隊が「闇夜のフェンリル隊」だった。

その後、生産が始まったのが、ヒート・ロッドと5連装フィンガー・バルカン砲内装仕様のB型である。一般に「グフ」として認識されているタイプだ。

グフのパイロットとして最も有名な〝青い巨星〟ランバ・ラル大尉が搭乗したのが、このB型と思われているが、実際にはプロトタイプ・グフ3号機をB型と同等の仕様に改装したYMS-07Bグフ先行量産型であった。この機体はRX-78-2ガンダムと互角に渡り合ったことで知られる。これはパイロットの技量差以外にも、ラル大尉に合わせたチューニングが入念に施されていたことが理由とされる。

B型は、北米を皮切りにアジア方面などに配備され

ガンダムと格闘戦を繰り広げるランバ・ラルのグフ。ラル大尉の卓越した操縦技術によって真価を発揮した。

YMS-07B グフ量産先行型

（アフリカはザク・デザートタイプが先行投入されていたため、グフの配備数は比較的少なかったようだ）、各地でザクⅡJ型以上の陸戦能力を発揮、地球制圧の一翼を担った。要撃爆撃機ド・ダイYSとの連携により、長距離高速進出が可能だった点も評価されている。

その後、地球侵攻作戦の進展と戦線膠着を受け、新たなザクⅡ系MSVや新型局地戦用MSが投入される中、グフも新たな姿を見せるようになった。

代表的なものが、固定装備を活かすことで戦場の状況への個別対応を図ったMS-07Cシリーズ、そして単独飛行能力を持つMSを目指したMS-07H グフ飛行試験型である。これらのグフ系MSVは、グフ本来の性能特性から逸脱したタイプばかりではあったが、戦況を打破しようとするジオン公国軍の試みという側面を持っていた。

国力に劣るジオン公国軍は、技術的アドバンテージによって軍事的優位を得る方針を採らざるを得なかった。実際、一年戦争の緒戦と地球侵攻作戦における勝利は、MSという技術上の優位性によってもたらされた部分が大きかった。そうである以上、戦線膠着を打開する手段として、ジオン公国軍が新型MSの研究を進めるのは当然で、新機軸のグフ系MSVの開発もその流れの中にあった。

ヒート・ホークを携行する鉱山基地部隊のグフ。このほか、ザク・マシンガンを運用した機体も確認された。

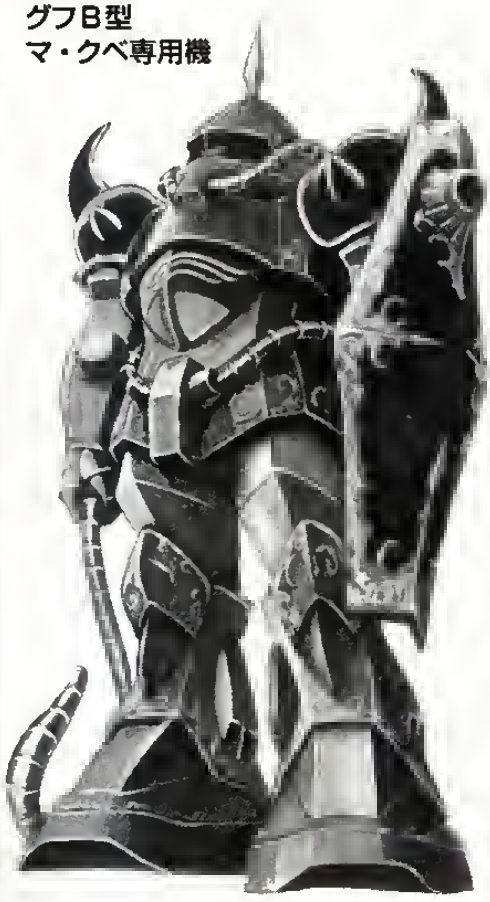
ド・ダイYSとの連携によってMSの弱点であった進出能力の欠如を補い、航空戦力との連携運用も可能とした。

グフB型の個人専用機

ランバ・ラル大尉や、〝グフレディ〟のパーソナルマークで知られるサイラス・ロック中尉、特殊部隊G・27所属時に濃緑と茶で塗装された機体に搭乗したトーマス・クルツ、茶系のカラーリングとチャイナレディのマーキングで統一された部隊に所属したマルロ・ガイム中尉など、グフB型を駆った高練度パイロットは多い（ラル大尉機は正確にはB型ではない）。しかし、個人専用の改修機はほとんど存在せず、カラーリングやマーキング、チューニングが異なる程度であった。

唯一といっていい例外が、グフ系MSVのひとつであるマ・クベ大佐機だった。これは機体各部に文様（エングレーブ）が描かれ、頭頂部には後のYMS-15ギャンのものを思わせるマルチブレード・アンテナを装備していた。性能面では通常機と変わらないとされ、マ・クベ大佐が実戦で使用したという記録も残されていない。ドズル・ザビ中将専用のザクⅡF型同様、権力の象徴的な機体だったと考えられる。

MS-07B
グフB型
マ・クベ専用機



サイラス・ロック
パーソナルマーク

マルロ・ガイム
パーソナルマーク

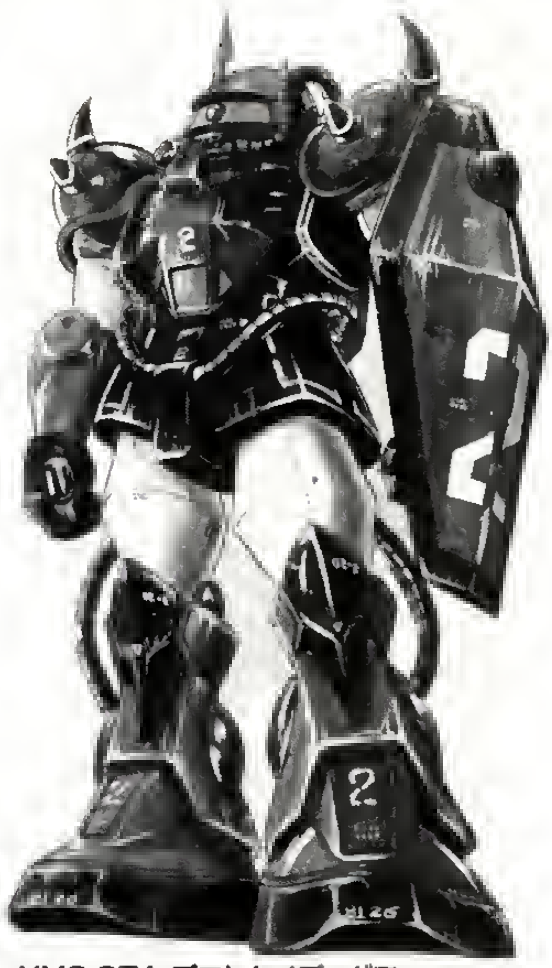
グフの実用化と熟成に貢献したプロトタイプ・グフの開発

プロトタイプ・グフの誕生

YMS-07Aプロトタイプ・グフは、その名の通りグフの試作機である。ザクⅡJ型の後継機たる新陸戦用MSの開発を目的とする「第一期陸戦用MS開発計画」において、ZEONIC社が提示した試作MSで、YMS-08A高機動型試験機と競合した（グフの開発プロジェクトそのものは「MS-07計画」と呼ばれる）。

本機に求められたのは陸戦能力の強化、地球連邦軍のMS投入を見越した対MS白兵／格闘戦能力の付与で、共にザクⅡJ型のレベルを超える必要があった。陸戦能力の強化においては、ザクⅡJ型が苦手とした熱帯や砂漠への対応が求められている。

開発は、第2次降下作戦で制圧されたキャリフォルニア・ベースで行われたとする説が一般的である。ただし、第3次降下作戦にグフ系MSが投入されたとする説を信じるなら、プロトタイプ・グフはサイド3やグラナダなどで開発され（ザクⅡJ型の生産開始と同時期に、開発がスタートしたという説もある）、キャリフォルニア・ベースでは量産仕様機が開発されたと考えるのが妥当だろう。これは、第2次降下作戦におけるキャリフォ



YMS-07A プロトタイプ・グフ

ルニア・ベースの制圧がU.C.0079年3月13日、第3次降下作戦実施が同月18日というタイムスケジュールや、サイド3におけるMS-07H グフ飛行試験型の開発にプロトタイプ・グフが流用されたことに因る推測である。もっとも、第3次降下作戦は同月30日に最終到達地点であるニュージーランドに入っているため、「ごく短期間で開発された」という説を採るなら、キャリフォルニア・ベース開発説が最も現実味がある。

設計は完全新規ではなく、ザクⅡJ型（ザク・デザートタイプとも）をベースとしていた。これはライバル機の高機動型試験機がザクⅡF型の基本設計を流用していたのと同じで、完全新設計の局地戦用MSを開発するだけの技術的な蓄積がなかったこと、開発期間の短縮などが理由と考えられる。実際、開発は非常に短期間で終了したとされる。

こうして見ると、プロトタイプ・グフは単なるザクⅡJ型の改修機にも思えるが、実態は違っていた。ザクⅡJ型は汎用機ザクⅡF型のパーツ交換機に過ぎず、陸戦MSとして見た場合、無駄も多く見られた。この点が宇宙での運用を想定しないグフと相反する要素

である。ザクⅡの汎用性が、基本設計レベルで担保されたものである以上、汎用性を必要としないグフは多くのパーツを新造しなくてはならなかった。そのため、グフに占める新設計パーツの割合は60％以上にも及んだといわれる。

この結果、プロトタイプ・グフは空冷ラジエーターの強化、高出力ジェネレーターの搭載、軽量化、耐弾性の増強、機動性の向上、マルチブレード・アンテナの標準装備などが図られ、ザクⅡJ型以上の陸戦能力を獲得するに至った。

軽量性と耐弾性の両立は、空間用装備の徹底排除、設計段階から盛り込まれた複合装甲、シールドの外装化に依る部分が大きい。複合装甲はザクⅡF型、シールドはザクⅡC型で右肩部固定式が採用されているが、グフでは軽量かつ高耐弾性の複合装甲を設計段階から採り入れ、シールドはオプション化に伴う左前腕部への外装化が図られた。コクピット周辺への複合装甲の集中配置は、パイロットの要請から行われたもので、本機の開発にあたって実戦データのフィードバックがあったことをうかがわせる。

標準装備となったマルチブレード・アンテナは、僚機との通信だけでなく、サブ・フライト・システムの始祖である要撃爆撃機ド・ダイYSとの連携を想定したものとされる。これは、地球上におけるMSの戦略機動性／長距離高速進出能力の向上が模索されたためで、MS単体への飛行能力付与、ホバー走行式MSの開発と並行して研究されていた。

本機にはグフB型のような固定兵装は施されていないが、これは基本ポテンシャルの向

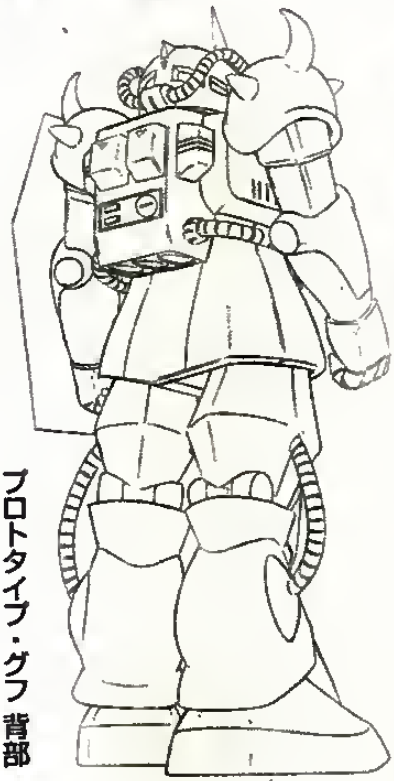
上が重視されていたこと、ザクⅡ用兵装を流用する方針だったことが理由とされる。グフB型と同等の仕様のプロトタイプ・グフも開発されており、こちらはYMS-07Bグフ先行量産型と呼ばれている。

当初の生産数は少なくとも3機で、内1機がグフ先行量産型とされた。後に増産されたと思われる4機（内1機はグフ量産先行型）は、MS-07Hグフ飛行試験型の改修ベースとなった。

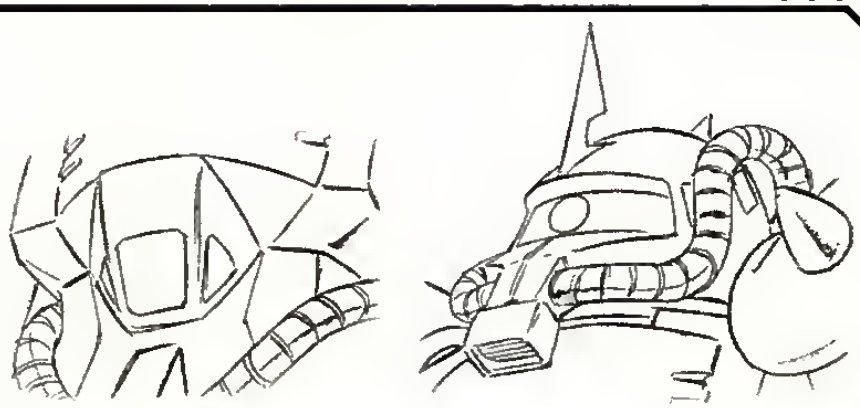
プロトタイプ・グフの構造と運用

プロトタイプ・グフは、サンドイエローをベースとしたカラーリングが施されており、量産機の青系とは異なっている。しかし、ザクⅡの影響が色濃く残ったシルエット、マルチブレード・アンテナを装備した頭部、両肩のスパイク・アーマー、左腕の外装式シールドなど、ほぼ量産機と同じシルエットを持っていた。

量産されたグフとの明確な違いとしては、腕部固定兵装の非搭載、三枚構成のコクピットハッチ部センサーパネル（量産機では二枚構



プロトタイプ・グフ 背部

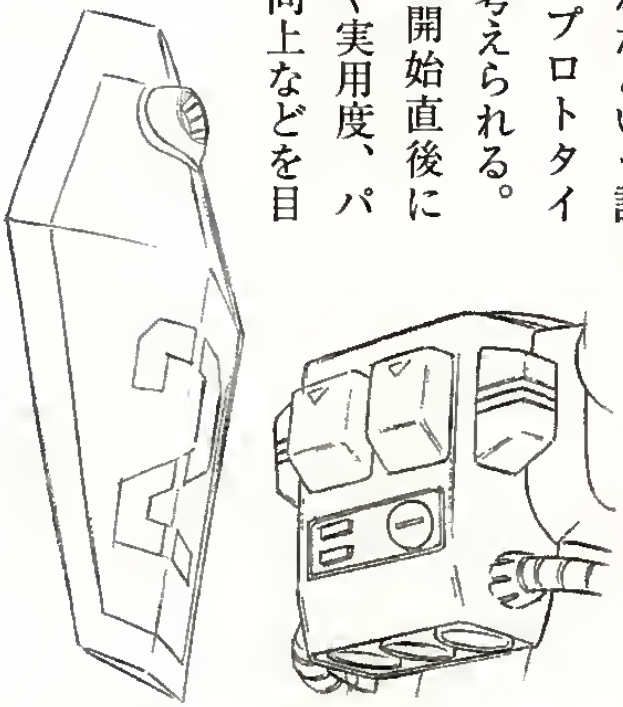


プロトタイプ・グフの頭部（右）とコクピットハッチ部（左）。頭部形状にはモノアイ走査レールや口吻部などにザクⅡの設計の名残が見られる。また、ハッチ部センサーパネルは、量産機では曲面構成の二枚に改修された。

成）、脚部動力パイプの非内装、大腿部装甲の未強化、三基搭載されたランドセル部スラスターなどが挙げられる。

プロトタイプ・グフ独自のこれらの機構は、高機動型試験機との開発計画統合の中で改善され、今日よく知られる量産仕様のグフが完成した（ランドセルや脚部補助バーニアに、高機動型試験機の影響が強く見受けられる）。

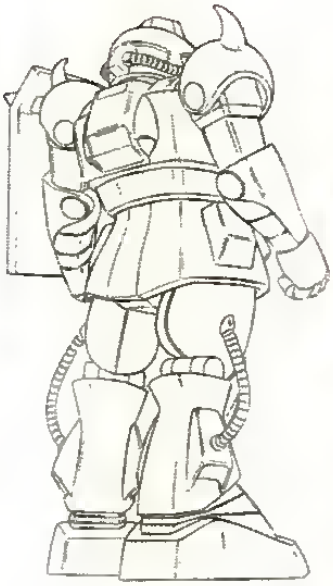
U.C.0079年3月18日に展開された第3次降下作戦に「グフ」が投入されたという説があるが、これがプロトタイプ・グフだったと考えられる。量産ラインの稼働開始直後にも、グフの熟成度や実用度、パイロットの生還率向上などを目的として、2機がサンドゴーレム隊で実戦を含む運用試験が行われたといわれている。この際、地球連邦軍と交戦し、1機が失われたようである。



プロトタイプ・グフのランドセル（右）はユニットの一部が外部に突き出し、量産機とは形状が大きく異なる。一方、シールド（左）はこの時点で形状がほぼ決定されている。

「第一期陸戦用ＭＳ開発計画」では、プロトタイプ・グフ以外の試作陸戦ＭＳも提示されていた。それがＹＭＳ・08Ａ高機動型試験機である。

ザクⅡを原型とした設計（本機はＦ型ベース）、熱核反応炉冷却機構の強化、機動性を中心とした陸戦能力の強化、軽量性と耐弾性の両立、格闘能力の充実など、基本コンセプトや仕様はプロトタイプ・グフに近い。左腕へのシールド外装、ザク・マシンガンやヒート・ホークなどの兵装をザクⅡから流用していたことも、類似点として挙げられる。



YMS-08A 高機動型試験機

本機が特殊だった点は、ゲリラ戦を想定していたこと、ジャンプ能力を重視していたことである。ほかにも、地球連邦系ＭＳを思わせる頭頂部カメラと腰部形状といった構造上の特殊性を持ち、一説にはＲＸ・78ガンダムのデータが参考にされたともいわれるが、開発時期から考えて信憑性は低い。

ゲリラ戦の想定はＭＳとしては珍しい仕様だったが、これは地球侵攻において予想された戦争形態が関係している。ジオン公国軍は当初「ブリティッシュ作戦」で対

地球連邦戦争を短期間で終結させた後、地球に進駐するつもりだった。その際、ジャブローを失った地球連邦軍は組織的抵抗力を低下させ、抵抗活動にはコマンド戦を選択する可能が高くなる。民間でのレジスタンス活動もゲリラ的なものにならざるを得ない。

これに対抗するには、対ゲリラ／テロ戦に精通した部隊、そしてフットワークの軽さと高度な攻防力を併せ持つ兵器が有効である（比較的軽装のゲリラやテロリスト相手に重火力は不要なように思えるが、火力で敵を圧倒するのは戦術の基本であるほか、立て篭もった敵を建物ごと吹き飛ばす際などにも大火力が必要である）。

実際の一年戦争は短期決戦とはならなかったが、コロニー落としや地球へのマス・ドライバー攻撃、地球侵攻作戦序盤の大攻勢により、組織的抵抗力を失った地球連邦地上軍がコマンド戦を展開するケースが増加した以上、高機動型試験機の仕様は相応の合理性を持つと考えられた。

スラスターと脚部を併用した重力下ジャンプ能力は、プロトタイプ・グフやそれ以前のMSも持っているが、高機動型試験機では特に重視されていた。ただし、本機で求められたのは長距離ジャンプ能力ではなく、短距離ジャンプ能力、それも以前のMSでは達成不可能だった「飛行」と呼べるレベルのジャンプ特性が求められていたようである。

短距離のジャンプ飛行を実現するため、ランドセルの主推進器と脚部補助推進器の強化が図られたが所定の性能は得られず、陸戦機としてはコストパフォーマンスも悪かった

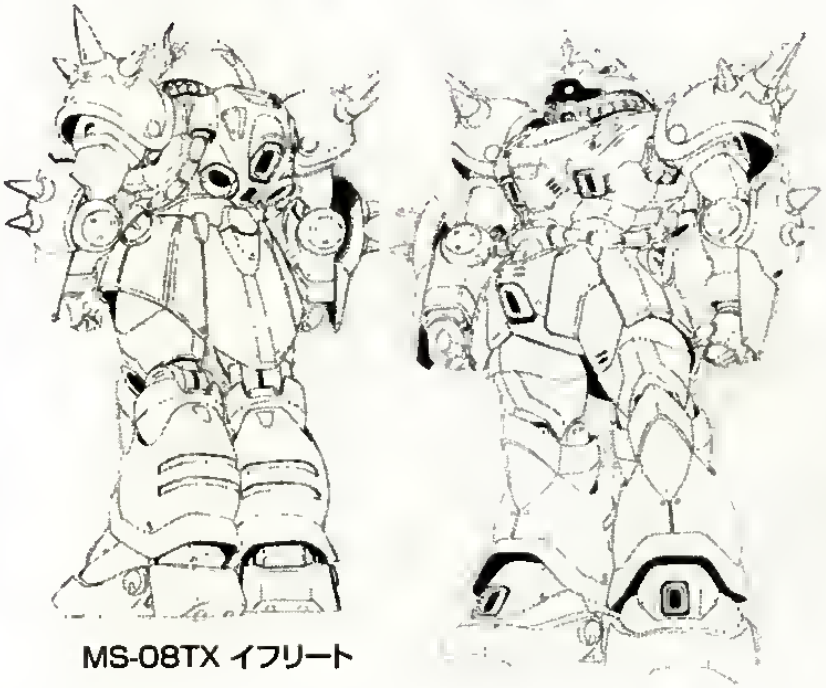
（プロトタイプ・グフとの比較と考えられる）。この結果、高機動型試験機はザクⅡの改修機に過ぎないと判断され、5機が完成した時点で、開発はグフに統合されたのだった。

本機のグフへの影響は、ランドセルを中心とした推進系に見ることができる。失敗作の烙印を押される要因となった推進器が、改めて評価されたのである。つまり量産仕様のグフは、プロトタイプ・グフと高機動型試験機のハイブリッドマシンという側面を持っており、高機動型試験機の血脈は目立たない形ながらも受け継がれていったのである。

こうして「MS-08」の型式番号を持つMSは戦力化されないまま消滅するかに思われたが、少数ながら実戦に投入された機体も誕生したようである。

それがMS-08TX イフリートで、地球資源採掘師団々長マ・クベ少佐（後に大佐）の管理下で開発されたといわれる。総生産数は8機だった。

イフリートの開発に関しては不明確な部分が多い。「MS-08」のナンバーを与えられた開発計画は複数存在し、そのひとつが高機動型試験機とは別



MS-08TX イフリート

系統のイフリートだったという説、高機動型試験機とMS-07C-5 グフ試作実験機などの流れを汲む機体とする説があり、情報は錯綜している。

後者の説を採るなら、グフ系と高機動型試験機のハイブリッドマシンの中で、プロトタイプ・グフの色合いが濃いのが量産仕様のグフ、高機動型試験機の影響が強いMSがイフリートとなり、MSの融合と分化がなされた事例として興味深い。

イフリートの仕様はグフや高機動型試験機同様、対MS格闘戦と機動性に重点を置いた陸戦MSである。固定兵装やシールドは持たず、ダブルオーバック42㎜散弾を用いる専用ショットガンと、直刀で幅広の専用ヒート・サーベルを装備する。これにゲルググを上回るスラスター推力が加わり、一年戦争の陸戦MSでは最強クラスの格闘能力を有していた。ショットガンで牽制後、大推力スラスターで一気に接近、ヒート・サーベルやショットガンでの肉薄攻撃を加える、というのが基本的な戦法である。

本機は「ウルフ・ガー隊」隊長ヘンリー・ブーン大尉の乗機として知られ、シルクロード反攻作戦「デザート・ドラゴン」に投入された地球連邦軍MS部隊「アルバトロス隊」と激闘を演じたと伝えられている。

バリエーション機として、擬似ニュータイプ・システム「EXAMシステム」を搭載したMS-08TX[EXAM]イフリート改、強力なジャミング機能と急速接近用の強化スラスターを持つMS-08TX/Nイフリート・ナハトの2機種が存在したようだ。

戦場の状況への個別対応を図ったMS-07Cシリーズ

グフ重装型の誕生

グフは汎用性を放棄した代わりに、充実した固定装備を持つMSとして完成した。その固定装備を活用、強化することで戦場の状況への個別対応を図ったのがMS-07Cシリーズ、つまりグフC型の系列機である。

グフC型には、両腕をマシンガン（フィンガー・バルカン砲）としたMS-07C-1、詳細不明のMS-07C-2、重装型のMS-07C-3、脚部の補助推進器を大幅に改修したMS-07C-4、ZIMMAD社が独自に改装したMS-07C-5の5機種が存在した。その中でも有名なタイプが、MS-07C-3グフ重装型だった。

MS-07C-3
グフ重装型

一連の降下作戦を皮切りに、一年戦争の主戦場は地球上へと移行。山岳や荒野、森林や海などの多様な環境に囲まれた地球は、MSのさらなるバリエーション展開を促した。そ

してグフも多様な地球環境の洗礼を受けることとなった。

ザクⅡJ型以上の局地対応能力を持つグフは、白兵／格闘戦に特化した仕様、多数の固定装備を持つが故の多用途性の低さが問題視された。しかし、ザクⅡJ型をベースとした基本設計と軽量堅牢な機体構造がもたらした冗長性は低くなく、固定装備の強化や換装により、さらなる局地戦能力の獲得が可能であった。

これを受けて、戦場の状況への個別対応を図ったグフ系MSV、グフC型系列機が開発されていった。グフC型系列機は、前述のようにC-1型からC-5型までの5機種が存在し、それぞれ異なる能力が求められた。

C-3型のグフ重装型は、両腕をフィンガー・バルカン砲とした点こそC-1型と同じだが、本体の装甲を増厚するなど、火力と装甲の双方を強化した仕様だった。特にフィンガー・バルカン砲は重点的に強化されており、大口径化や弾倉の大容量化などが施された。軽量な格闘戦用のグフB型とは、まったく異なる方向性である。

ただし、フィンガー・バルカン砲の射程が短いため、大火力・重装甲という機体特性を同じくする地球連邦軍のRX-77ガンキャノンのような、中距離支援機としては使えない。重装化に伴い機動性も低下しており、ドムに見られる一撃離脱戦法も難しいとされた。

グフ重装型については残された資料が少なく、想定された運用状況もよく分かっていない。しかし、短射程の重MSという仕様から、会敵距離が短い市街地や森林地帯での戦

闘、近距離支援攻撃、対ゲリラ戦などを考慮した機体であったと考えてよさそうである。

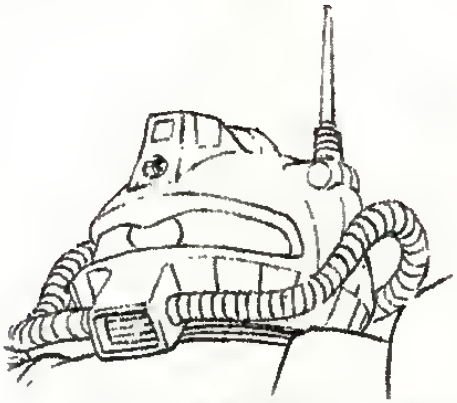
これらの状況は、地球侵攻作戦が進行する中で発生機会が増加したもので、グフC型系列機の開発経緯との合致を物語っている。

グフ重装型の構造と運用

グフ重装型は、マッシブなグフといったスタイルを持つ。胴体と脚部はグフB型のものをそのまま重装甲化したフォルムとなっているが、頭部と腕部には改修が加えられ、原型機の印象の残しながらも特異な機構が搭載されている。

頭部はマルチブレード・アンテナを廃止し、頭頂部に鶏冠状のユニットを搭載した。これは射撃用センサーと30㎜マシンガンを内蔵した複合ユニットとされる。マルチブレード・アンテナの廃止により、通信機能やド・ダイYSとの連携能力が低下したように思えるが、左側面にロッド状のアンテナが増設されているため問題はなかったようである（グフ重装型がド・ダイYSに搭乗したケースもあったという）。

本機において、最も大規模な改修が加えられた箇所が腕部



バルカン砲を配した頭頂部複合ユニットや側部アンテナによって、頭部は前身機とは大きく印象の異なる形状となっている。

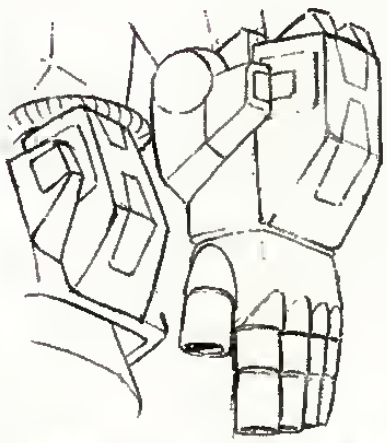
である。グフB型では左腕のみに搭載されたフィンガー・バルカン砲を、右腕にも装備した。これに伴い右腕のヒート・ロッドは廃止され、すべての指部が砲身となったため多用途性は大きく低下している。

同時に、フィンガー・バルカン砲もモデルチェンジされた。他機種では75㎜だった口径を85㎜にしたほか、装弾数増加と戦闘中の砲弾補給を容易とするため、弾倉は交換可能な前腕部外装式とされた。予備弾倉は左右の腰に各ひとつずつ、計ふたつを装備した。

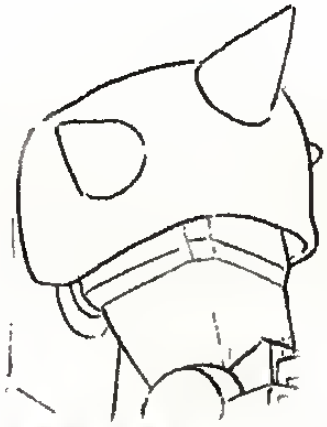
グフB型のフィンガー・バルカン砲は唯一の火器だったが、戦闘中の弾倉交換を想定していなかったため弾切れに対応できず、パイロットには不評だった。5門の機関砲が連装されているため砲弾の消費が激しいこと、弾倉を前腕部に内装したため整備施設でなければ再装填ができなかったことなどが問題となっていたのである。

本機のモデルでは、これらの欠点が全面的に改善された。しかも、計10門の85㎜機関砲がもたらす火力は圧倒的で、大型シールドを持つ地球連邦軍のMSであっても、この一斉射撃には耐えられなかった可能性が高い。

しかし、前述のようにすべての指が機関砲の砲身となったため、手部を通常のマニピュレーターとして使用することは困難で、MS用の手持ち装備はほとんど使用できなかっ



腕部フィンガー・バルカン砲と腰部に装備された予備弾倉。弾倉交換を可能とすることで、継戦能力の向上が図られている。



グフ重装型の肩部スパイク・アーマー。形状はザクⅡのものとほとんど同じで、機体特性の変化を顕著に表した部位といえる。

た。もともとフィンガー・バルカン砲を搭載したグフの手部は大型で、マニピュレーターとしては使い難かったが、グフ重装型では機関砲の大口径化に伴って手部もさらに大型化したようで、状況は悪化した。本機がシールドを装備しないのは、本体の重装甲化によるものだが、腕部構造の変化も一因と考えられる。

もうひとつの腕部の変更点が、スパイク・アーマーの簡易化だった。

一般的なグフで装備されたスパイク・アーマーは湾曲した大型スパイクを持つモデルである。これは威嚇効果以外にも、グフの優れた機動／運動性を活かして敵機の懐に飛び込み、下から突き上げるような攻撃を行うためのものだった。

しかし、グフ重装型は機動性と運動性の低下、マニピュレーターの仕様変更により格闘攻撃を行う機会が減ったためか、スパイク・アーマーをザクⅡと同系のものとした。スパイク・アーマー自体が廃止されなかったのは、大重量化によってタックルの威力増大が期待できること、緊急時の格闘手段が必要だったことが理由とされる。

本機の生産数は少なかったようで、ヨーロッパ方面での運用例が知られる程度である。フランス南部に投入された「ブリッツ中隊」こと第29機甲中隊が、グフ重装型を装備した部隊として有名で、都市部での戦闘例が報告されている。

グフ試作実験機の誕生

MS-07C-5 グフ試作実験機は、YMS-09 プロトタイプ・ドム開発用のデータ収集機として試作された。開発はZIMMAD社で、1機のみが存在する。

地球侵攻作戦が開始されると、コンピューター・シミュレーションや月面における試験では分からなかったMSの問題点が浮上した。そのひとつが、地球上におけるMSの低機動性、特に長距離移動能力の低さだった。

地上戦においても、戦闘／戦術レベルでのMSの機動性は高かった。MSの二足歩行システムは装軌車両（キャタピラ車）以上の不整地走破性を発揮した。さらに、脚部と推進器を併用したジャンプは装甲戦闘車両（AFV）には不可能な高速移動を可能としていた。

だが地球侵攻作戦が進展すると、戦略機動性、つまり長距離移動能力の不足が指摘されるようになった。この事態は、一年戦争開戦以前からある程度は予想されており、大気圏内におけるMS運用艦といえる巨大航空機ガウ級攻撃空母や、ホバー走行式の小型地上艦

MS-07C-5
グフ試作実験機

ギャロップ級陸戦艇、MS運搬トレーラーのサムソンなど、MSの長距離進出を可能とする大型ヴィークルが開発されていた。それでも、ガウ級やギャロップ級は絶対数が少なく、サムソンは装輪車両であるため不整地走行能力に問題があり、移動速度も歩行時のMSと大差がないという問題を抱えていたのである。

そこでジオン公国軍はMSの機動性向上を模索し、ZEONIC社はグフ系MSにおいて要撃爆撃機ド・ダイYSへの搭載や、MS単体への飛行能力付与を研究している。つまり、MSという兵器カテゴリーを生み出したZEONIC社は、航空機的な発想でMSの機動性向上を狙ったが、ライバルのZIMMAD社はまったく異なるアプローチで問題の解決を図った。それがホバー走行式MS、MS-09ドムの開発だった。

ドムの開発に着手したZIMMAD社は慎重に計画を進めた。ドムの試作機、つまりプロトタイプ・ドムを開発する前に、採用予定だった機構や機器をグフに搭載し、データ収集機を製作したのである。エンジン出力に比して機体強度が不足した結果、制式化を見送られたEMS-04ヅダの反省があったのかもしれない。

こうして試作されたのが、グフ試作実験機である。なお型式番号は、ジオン公国軍内部で便宜上付けられたものだといわれている。

グフはZEONIC社が開発したMSであるが、ZIMMAD社でもライセンス生産されていたため、開発陣は当時最新の陸戦MSだったグフをベースにしたようである。型式

番号順では前身に当たるMS-07C-4が、脚部推進器を大規模改修した仕様だったことも、ホバー走行用の脚部推進器を必要とした本機の開発において有利に働いたことは想像に難くない。

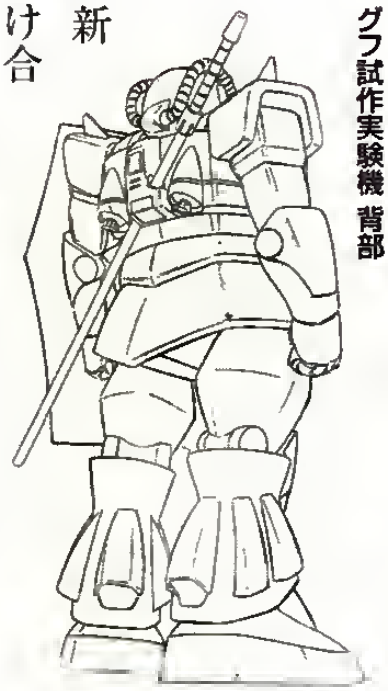
こうして完成したグフ試作実験機は、実戦試験こそ行われなかったが、プロトタイプ・ドムへの過渡期的な存在であるだけでなく、ZEONIC社とZIMMAD社の技術が直接的に融合、というより「混在」した機体であり、ジオン公国軍のMS開発が段階的に進んでいたことを示す資料となっている。

グフ試作実験機の構造と運用

グフ試作実験機は、グフをベースとしてドム用の新機構や機器を導入した機体であり、グフとドムを掛け合わせたような外見を持つ。特にモノアイ走査レール、腕部、背部構造はドムに近かった。

胴体後面はプロトタイプ・ドムよりも量産仕様のドムに近く、2基の主推進器ノズルが背面から直接飛び出し、中央にはヒート・サーベル用のラッチが設けられていた。

背部推進器は、ドムで構想された陸戦用MSの高速移動を可能とした強化タイプ（ヅダやドムと同じ「土星エンジン」が搭載されたかは不明）。ヒート・サーベルはドム用とほ



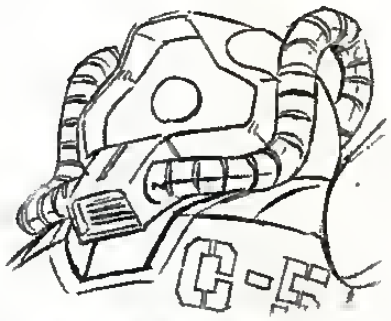
グフ試作実験機 背部

ほ同じ直刀タイプで、背部に袈裟懸けに装備される点も量産仕様のドムと同じである。

同時に胴体部動力パイプは収納式となり、腹部にはウエストジョイントアーマー（動力パイプを内装するベルト状の構造物）が配置された。本機のウエストジョイントアーマーはプロトタイプ・ドムのものに近い形状で、量産仕様のドムの特徴が多く見られる本機では珍しい部位となっている。

動力パイプが残された頭部もプロトタイプ・ドムへの繋がりを感じさせるが、口吻部が残されたうえマルチブレード・アンテナは撤去されているため、グフとドム量産仕様機の折衷型といった方が実態に近いだろう。

脚部には、グフやザク・キャノンなどと同系の補助推進器を搭載している。ホバー走行を考慮してか、脛部の側面と後部を取り巻くように補助推進器が連装化されており、機動性の向上をうかがわせる。なお、熱核ホバー・エンジンが搭載されたかは不明である。



グフ試作実験機の頭部。凸型に近い構造のモノアイ走査レールや動力パイプには、のちのプロトタイプ・ドムへの技術継承を見ることができる。

こうしてドムのシステムを採り入れたグフ試作実験機は1機が製造され、プロトタイプ・ドム開発のデータ収集を目的とした実戦試験に投入される予定だった。しかし、改造作業が遅延したうえ、ドム開発計画のスケジュールの都合もあり実戦投入は見送られている。

MSの単独飛行を目指したグフ飛行試験型シリーズの開発

グフ飛行試験型の誕生

MS-07Hグフ飛行試験型は、MS単体での飛行能力の獲得を目指したMSVである。グフとド・ダイYSの組み合わせは、MSの長距離高速移動能力／戦略機動性を向上させたが、MS以外にも航空機を必要とするシステムには問題もあった。ド・ダイが撃墜された場合、MSの機動性が低下すること、ド・ダイが有人機であるため結果的に複数のパイロットが必要となること、総合コストが高くなることなどが問題点として挙げられる。

こうした利点と欠点が並存するド・ダイYSのシステムが開発される一方で、MSの機動性向上を目的とするプランはほかにも進められていた。それが単独飛行型MSであり、そのベースとして選ばれた機体が、軽量性に優れるグフだった。

グフに単独飛行能力を付与するプラン、つまりグフ飛行試験型の開発計画は承認され、サイド3・29バンチで計画が開始された。開発を担当したのはアイザック・ウーミヤック大佐を中心としたチームである。

この時期はグフA型の配備開始と同時期だったため、量産仕様のグフの絶対数が不足し

MS-07H グフ飛行試験型

ており、改修のベース機として計画に提供されたのはの試作機が――YMS-07Aプロトタイプ・グフが3機、YMS-07Bグフ量産先行型が1機――に止まった。

改修点は、推進器の強化と左右の対称化に集約される。具体的には推進器の強化、熱核ロケット・エンジンの脚部への集中装備、腰部への補助ブースター増設、両腕のフィンガー・バルカン砲への換装などが施された。また、熱核ジェット・エンジンは増設されなかったほか、空力的な配慮はほとんどなされないなど、制空戦闘機ドップに近い発想の下に開発された点は興味深い。

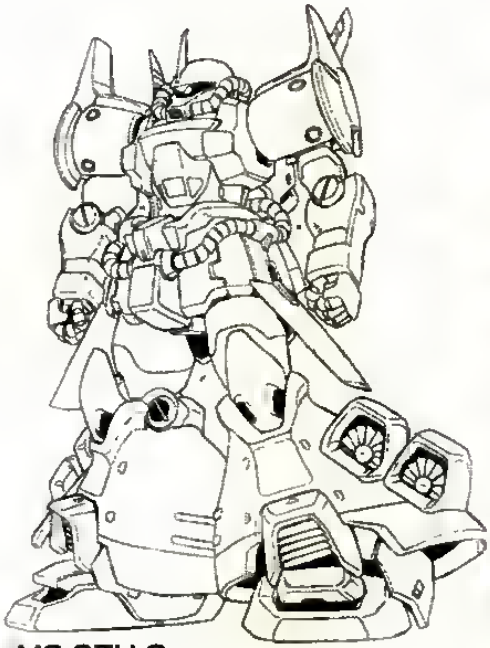
完成した4機は、突撃機動軍の補給路を使用してキャリフォルニア・ベースに輸送。テストセンターを経てアリゾナ、フラットネイル空軍基地に運ばれた。しかし、ここで問題が発生する。テスト・パイロットとして、サイド3の航空機部門からビリー・ウォン・ダイク大尉ら6名が派遣されたのだが、到着が遅れてしまったのだ。

テスト・パイロットチームが到着したのは、グフ飛行試験型が移送された2週間後で、試験スケジュールは短縮と改編を余儀なくされた。8週間に限定された試験は、調整に2週間、テスト飛行に4週間、テスト結果を受けた再調整に2週間という内訳となった。

こうしたトラブルの末に開始されたグフ飛行試験型のテストは、当時の技術レベルの限界と短いテスト期間により、散々な結果に終わった。4機合わせて38回のテスト飛行が行われたものの、高々度試験を行うまでに十数回のトラブルに見舞われたうえ、その後の試験でも巡航速度の維持にも失敗し、十全な運動性を発揮した際の燃費も悪かったのである。

これを受けたテストチームは、プロトタイプ・グフを原型とする3号機（プロトタイプ・グフを原型とするのが1～3号機、グフ量産先行型を原型とするのが4号機）を改修し、背部にドロップ・タンクを装備するMS-07H-2とした。しかし、充分な性能は得られず、計画の縮小が決定。1号機と2号機は撤収となり、試験は残された2機により続けられることとなったのだった。

ここで4号機の改修が行われる。この機体がMS-07H-4（H-4型）で、脚部エンジンの換装以外に、肩部や腰部には空力を考慮した機構が採り入れられた。H-4型は前身機よりも高度な飛行特性



MS-07H-8
グフ・フライトタイプ

MS-07H-4 グフ飛行試験型（H-4型）

を獲得し、特に滞空時間や降下突撃時の運動性に優れていた。

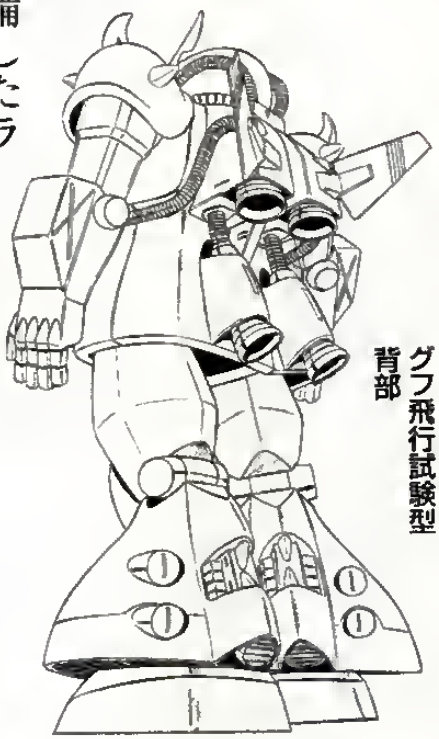
だが、換装されたエンジンに問題があった。複雑な構造のためにトラブルが続発し、テスト開始から10日後、空中爆発事故を起こしてしまったのだ。この事故により、H・4型は失われ、テスト・パイロットのフランク・ベルナール少尉も死亡した（ド・ダイYSは、グフ飛行試験型の失敗を受けて開発されたともいわれている）。

この結果、グフ飛行試験型の開発は中止されたといわれる。しかし、実際には一時的に凍結されただけのようで、H・4型を発展させたMS・07H・8 グフ・フライトタイプが完成している。この機体は運動性こそ高くはなかったが、ヘリコプターのような飛行特性を持っており、MSによる単独飛行を可能とした。

グフ飛行試験型の構造と運用

グフ飛行試験型は、飛行能力の獲得を目的として胴体背面と脚部、腕部などに改修が加えられている。

胴体背面には、大推力スラスターと安定翼を装備したランドセルが装備されたほか、リアスカートに補助ブースターを増設した。H・4型ではこれ



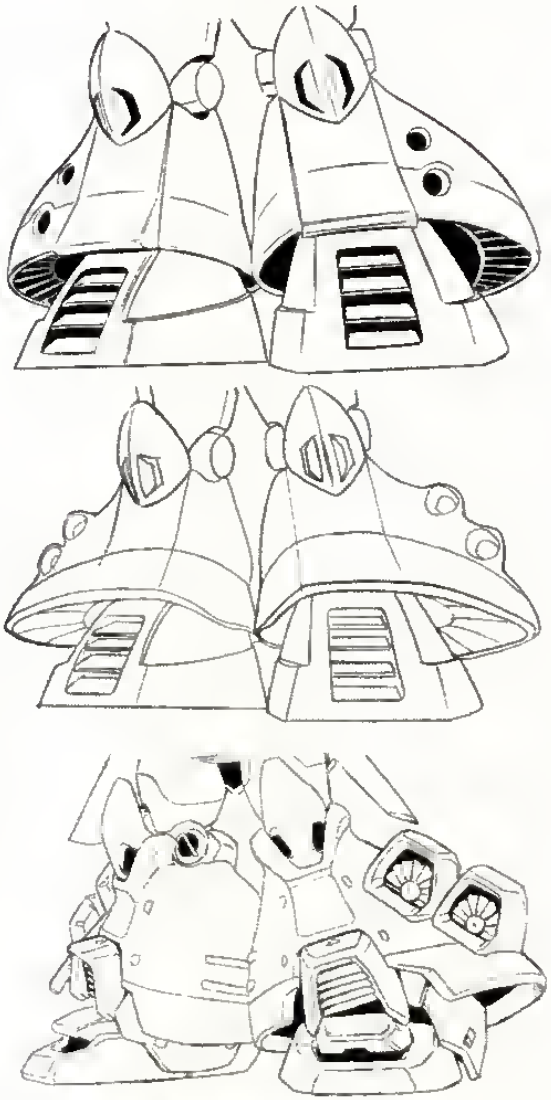
グフ飛行試験型
背部

に加えて、75度の可動域を持つベントラルフィンがサイドスカートに装備されている。

飛行能力を得るため、推進器を強化するのは当然だが、ランドセルとサイドスカートに装備されたフィンは小型で、揚力による飛行は期待できない。これは、開発陣が翼を安定装置程度に考えていた証明であり、動力誘場による飛行を目指したことをうかがわせる。

脚部は、ドム以上に末端肥大した形状が特徴で、熱核ロケット・エンジンとロケット砲2門（左右あわせて4門）を搭載した。大出力エンジンの脚部への搭載は、ドムでも見られた装備形態である。しかし、ドムが熱核ホバーを搭載していたのに対し、グフ飛行試験型では熱核ロケットである点が異なっている。これは想定された用途そのものが違うということの証明でもある。

大気圏内での使用に適した熱核ジェットではなく、熱核ロケットを搭載した理由は不明だが、技術的な信頼性と推進力は熱核ロケットの方が優れていたのだろう。ただしH・4



上から順にグフ飛行試験型、H-4型、グフ・フライトタイプの脚部。開発が進むにつれて推進器が大型化していった開発経緯が見て取れる。

型における脚部熱核ロケットの失敗は後に影響を与えたようで、グフ・フライトタイプでは熱核ジェット・エンジン4基に換装している。

腕部は、左右共にフィンガー・バルカン砲に統一された。弾倉はグフ重装型のように外装化されたようだが、口径はグフB型と同じ75㎜で予備弾倉も装備しなかった。

左右対称の腕部は、飛行時の安定性を重視したものと考えられる。手持ち兵装を装備した場合、左右対称とならなくなる以上、固定兵装に統一せざるを得なかったのだろう（グフ・フライトタイプは左右非対称の装備でも飛行可能だった）。

H・4型では肩部のスパイク・アーマーを廃止し、整流フィン付きのショルダー・アーマーとした。これは腰部ベントラルフィンと共に、本部からの指示で行われたものだった。試験が進むにつれ、空力の重要性が認識されていったという証拠である。

グフ・フライトタイプ
背部

これ以降、左右の対称性はジャンプ／飛行能力を重視したMSで度々見られるようになり、緊急脱出機構「リトル・ドップ」を搭載したMS-07Wグフ複合試験型でも、左右腕部にフィンガー・バルカン砲とシールドが装備された。二枚のシールドはジャンプ中に擬似的な翼として機能し、空

中での姿勢制御に役立ったようである。なお、グフ複合試験型における左右対称は徹底しており、手持ち火器として装備したジャイアント・バズも2丁だった。

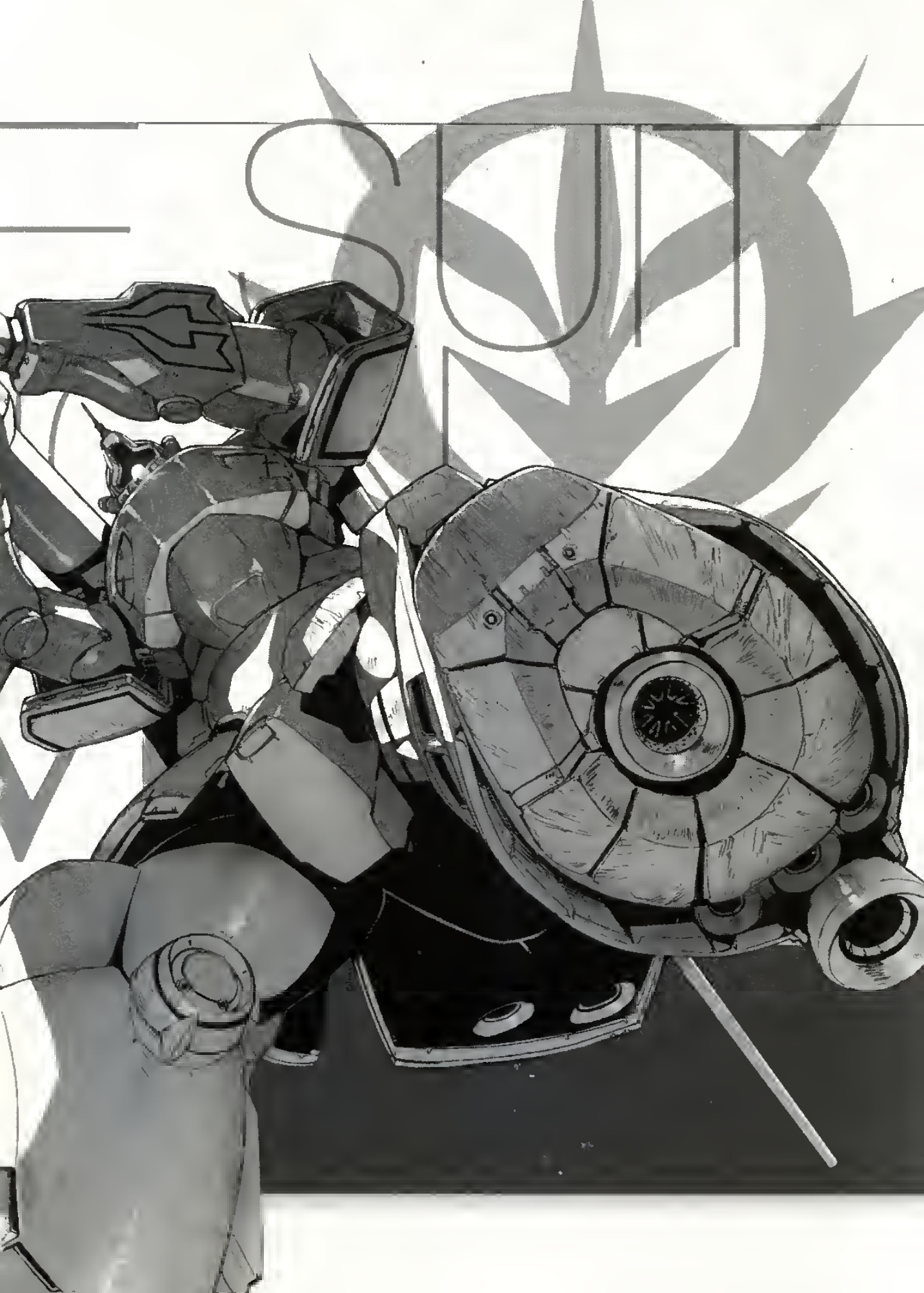
シリーズの到達点であるグフ・フライトタイプは、ラサ基地攻防戦に2機が投入された事実が確認されているが、試験終了後のグフ飛行試験型については不明である。一説には、オデッサ撤退戦でMS-07HXが使用されたといわれる。

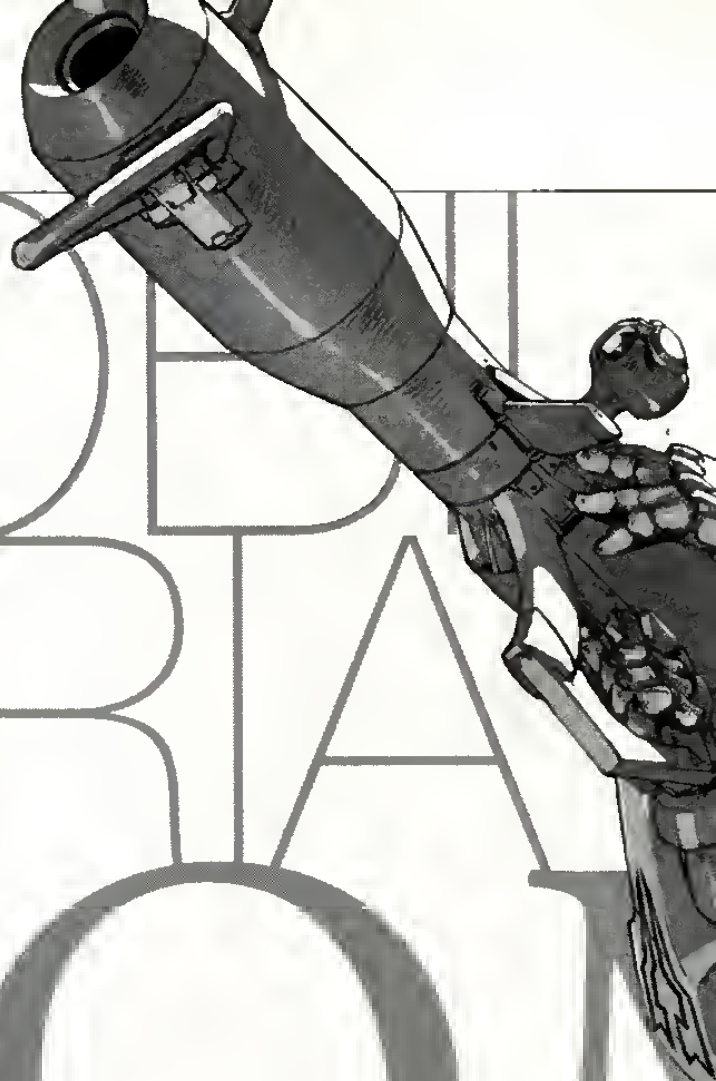
一年戦争終戦後、グフ飛行試験型を接収した地球連邦軍は、近代化改修を加えたモデルをジャブロー基地に配備したほか、増産もしていたようである。この機体は脚部推進器を活かしたホバー走行式MSとして使用され、兵装としてジャイアント・バズを装備していた（一年戦争時にジャイアント・バズを装備したかは不明）。

この機体は、グリプス戦役時のジャブロー戦で使用され、機動性を活かした奇襲攻撃でエゥーゴの主力機MSA-003ネモやRGM-79Rジム2を撃破する活躍を見せたが、交戦の末、全機が失われたようである。

ラサ基地攻防戦で確認されたグフ・フライトタイプ。アプサラスIIIの護衛を担ったが、撤退時にザンジバル級《ケルゲレン》とともに撃墜されている。

一年戦争後に地球連邦軍が運用したグフ飛行試験型。ホバー走行能力を活かし、周辺に河川や湿地帯が入り組むジャブロー基地の防衛戦力として運用された。





MOBILE VARIA DOM

第三章

基本仕様を踏襲した局地戦専用機への特化

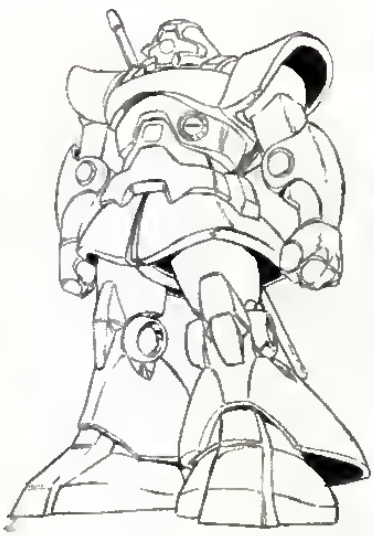
ドム系 MSV

原型機の基本仕様をそのままに性能向上を目指したドムの派生機

ホバー走行式MSドムの活躍と試作機シリーズに限定されるドム系MSV

MS-09ドムは、地上での機動性向上を目指したホバー走行式重MSである。開発を担当したZIMMAD社は、局地戦用MSやエンジン開発を得意とするMS開発製造企業として知られる。

ホバー走行による高速移動能力、360㎜ジャイアント・バズと長大なヒート・サーベルによる優れた攻撃力、重装甲がもたらす防御力など、走攻守の三拍子が揃った名機で、一撃離脱戦法を得意とした。操縦に熟練を要するグフとは異なり、一般パイロットでも扱いやすく、さらにザクⅡJ型よりも強力かつ局地対応能力に優れており、ジオン公国軍の陸戦MSとしては最高峰のシリーズといえる。本格的な配備がオデッサ戦と同時期だったため（地勢的な問題から優先度が高いアフリカや西アジアなどには、比較的早くから配備されたともいわれ

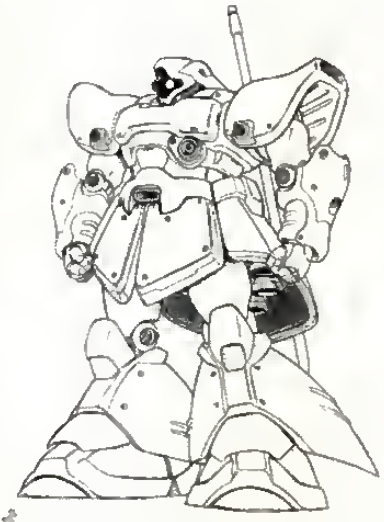


MS-09 ドム

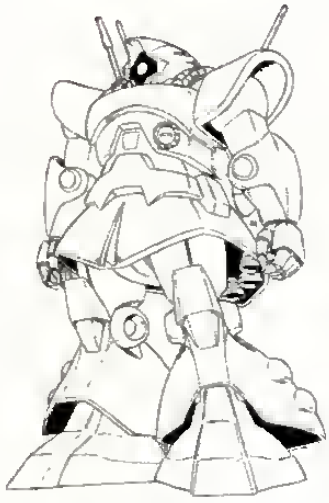
る）、一年戦争において活躍した期間は短いが、オデッサ戦後に生産が縮小されたグフに代わり、劣勢に陥ったジオン公国軍地上部隊を支えたのだった。

陸戦ＭＳとしては配備期間が短いドムではあるが、砂漠や熱帯への対応、稼働時間の延長などを図ったＭＳ－09Ｆ／ＴＲＯＰドム・トローペンやＭＳ－09Ｇドワッジ、空間戦用のＭＳ－09Ｒリック・ドムや、その統合整備計画に準拠したＭＳ－09Ｒ－２リック・ドムⅡ（ツヴァイ）などへと発展するなど、いくつかの派生機が開発されている。

ほかにも未確認機として、冠雪地域運用を想定したＭＳ－09ドム（寒冷地仕様）、ドム・トローペンのベースとなったＭＳ－09Ｆドム・フュンフ、最終生産型とされるＭＳ－09Ｓドワス、リック・ドムの総合性向上型のＭＳ－09ＲＳリック・ドムＳ型、戦後アクシズで開発されたサイコミュ搭載機のＭＳ－09ＲＮシュネー・ヴァイスおよびその発展型であるＭＳ－09ＲＮ－２トゥッシェ・シュヴァルツ、ジオン公国軍残党が独自に改装したＭＳ－09Ｈドワッ



MS-09R-2 リック・ドムⅡ



MS-09G ドワッジ

MS-09F/TROP
ドム・トローペン

ジ改やMS-09Rリック・ドム［シュトゥッツアー］などが挙げられる。

これらドム・シリーズの直接的な始祖となった機体が、YMS-09プロトタイプ・ドムである。プロトタイプ・ドムは、その名が示すようにドムの試作型で、すべてのドムの原点だが、それ以外の意味も持っている。MSVに分類されるドム系MSは、プロトタイプ・ドムとその改修機なのだ。

ほかの機体のMSVには試作機だけではなく、一般機の改修型や局地戦仕様、換装バリエーションなどの多様なタイプが存在する。このことから考えると、ドムは特異なケースといえる。そして、プロトタイプ・ドム以外の唯一のドム系MSVであるドム・トロピカル・テストタイプが局地対応能力を高めた仕様だったという事実は、ドム系MSの発展傾向と合致していた。

陸戦機として見たドムは、誕生の時点でほぼ「完成」したMSであり、宇宙用を除き発展の余地が少なかった。つまりドムの改修は、砂漠や熱帯、寒冷地などの局地への対応能力の向上、出力強化や稼働時間の延長といった単純なパワーアップを行う余地しかなかったのだ。これは、ドムの陸戦系派生機がドム・トローペンやドワッジなどの強化型ばかりだったことからも理解できる。

ドム系MSVも直接的な発展がなされた系統であり、ドム・シリーズの縮図となっている点は興味深い。

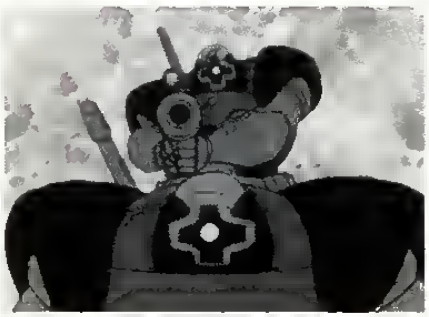
局地対応能力の向上を支えたドム系MSVの発展

地球侵攻作戦の進展により、予想外のMSの低機動性が指摘されると、ジオン公国軍は陸戦MSの機動性向上を模索。これを受けたZIMMAD社はホバー走行式MSを提示し、開発を加速させた。この結果、データ収集機のグフ試作実験機を経て、試作機のプロトタイプ・ドムがロールアウトしている。このプロトタイプ・ドムを洗練する形で実用化されたMSがドムで、〝黒い三連星〟こと突撃機動軍第7師団第1MS大隊司令部付特務小隊に配備された3機を皮切りに、量産機の配備が進んでいった。

既に述べたように、ドムの特徴は機動性だけではない。攻撃力、防御力、機動性のすべてに優れる陸戦用重MSであり、配備直後から地球各地で猛威を振るった。しかし、これほどの性能を持つドムにも問題がなかったわけではなかった。

最大速度が時速381kmに達するドムの機動性は、ほかのMSや他兵科との連携を難しくした。ドムの進軍速度が速すぎるため、ザクⅡや戦車マゼラ・アタック、機械化歩兵などが追随でき

ホバー走行によるドムの機動力は、二足歩行を行う従来のMSのそれを大きく上回ったが、戦術上の弊害も招いた。

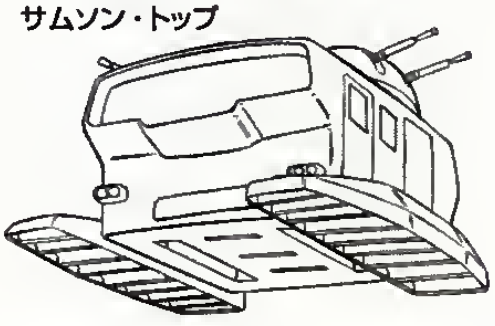


〝黒い三連星〟が運用したドム。その機動性を活かした連携攻撃でガンダムを苦しめ、本機の有効性を実証した。

ないのだ。意図的に速度を落とすことで他兵器との共同運用は容易となるが、それではドムの機動性は戦闘レベルでしか発揮できない。ド・ダイYSに搭乗したグフでも同じことがいえるが、ド・ダイの場合、航空機的運用という選択肢が残るため、失われる利点はドムと比較して最小限に留められていたのである。

アフリカ戦線などで、ホバー走行が可能なサムソン・トップ（通常はMS運搬トレーラー、サムソンの装輪牽引車として用いられる）が輸送車として用いられたのは、砂漠地帯への対応だけでなく、ドム・シリーズとの共同運用上、必要な措置だったためと考えられる。ほかにもホバー走行が可能なヴィークルとして機動浮遊機ワッパがあるが、最大でも2名しか乗れない小型機であり、とても兵員輸送に使用できるものではなかった。ガウ級やギャロップ級の絶対数が少なく支援も望めないのは、前章でも述べた通りである。

サムソン・トップ



これは、MSのみでの戦闘を行う「オールMSドクトリン」とでもいうべき戦術を、ジオン公国軍が採り始めていたことを意味している。元々ジオン公国軍は、MS偏重の戦術を採用していたが、ドムによる長距離進出時の攻勢では特にこれが顕著で、支援なしでの戦闘を強いられた（また、対空防御がないため航空機からの対地支援もしにくい）。

こうした事態がドムの開発時に想定されていかは不明で、MS偏重傾向の深化は結果的

なものだったとも考えられる。もっともドムの配備が進んだ頃には、ジオン公国軍は守勢に立たされており、撤退戦を含む防御的な作戦が多くなっていた。このため、ドムは機動性を活かして、味方が劣勢なエリアに急行、これを支援する「火消し」的な役割や、遊撃機として運用されるケース増えたようで、ドムと他兵器の速度差は大きな問題にはならなかった。

オデッサ戦に投入されたドムは、即応性を旨とする遊撃機として運用された例のひとつである。144高地の戦闘において、防衛線を突破して後方のダブデ級陸戦艇に迫った陸戦強襲型ガンタンクを迎撃した。

このように他兵器との機動性の差は、投入状況や運用によってクリアできるケースもあるが、当然のことながら性能より過大な要求には応えられない。その代表的な事例が局地対応能力の問題だった。

ドムは局地戦用機として設計されてはいたが、量産機の配備が進むと熱帯を中心とした対応能力の不足が指摘されるようになった。高温環境において故障が頻発したのだ。

この要求に応えるために開発された機体が、プロトタイプ・ドムの改修機YMS-09Dドム・トロピカル・テストタイプである。ドム・トロピカル・テストタイプのデータは、後に開発された局地対応能力向上型のドム・トローペンやドワッジに反映され、陸戦系ドム・シリーズの完成度の向上に大きく寄与したのだった。

陸戦MSにさらなる進化を促したプロトタイプ・ドムとその改修機

プロトタイプ・ドムの誕生

ホバー走行式の重MSドムの試作機が、YMS-09プロトタイプ・ドムである。

地球上におけるMSの低機動性――この場合は主に長距離高速移動能力の不足――が指摘されると、ジオン公国において重工業の双璧を成すZEONIC社とZIMMAD社は、それぞれ異なるアプローチでMSの機動性向上を図った。この際、ZEONIC社がMSへの飛行能力付与という突飛な開発方法を選択、これに対してZIMMAD社が選んだのは比較的穏当なものだった。それがMSのホバー・クラフト化である。

空気圧により、ごく低高度に機体を浮上させるホバー・クラフト式のMSは、関節部への負担が少なく、高推力スラスターとの併用により高速移動も可能となる。機動性を向上させるだけでなく、重力下におけるMSの問題のひとつだった関節の消耗を和らげるホバー・クラフトは、一石二鳥のシステムだったのである。極めて大推力なエンジンと高度な空力／姿勢制御が必要な飛行式MSと比べて、技術的ハードルが低い点も有利であった。

そもそも、機動兵器とホバー・クラフトは古くから関係があった。MSという兵器分類

が誕生した次期主力汎用戦術兵器の開発において、ＭＩＰ社の提示したＭＩＰ－Ｘ１は、スペース・コロニー内移動用としてホバー・クラフトを搭載していたといわれている。

しかしその後、ＭＳ開発がザクⅠなどの空間戦用機を優先し、スペース・コロニー内での移動も二足歩行やジャンプで充分だったため、ホバー走行式のＭＳはしばらく開発されなかった。後に名機ドムを生み出すことになるＺＩＭＡＭＤ社も、重元素を推進剤とする「木星エンジン」やその発展型である「土星エンジン」の研究、第一期主力ＭＳ開発計画でザクⅠと競合した「木星エンジン」搭載機ＥＭＳ－04ヅダの開発に注力していた。

しかし、Ｕ．Ｃ．００７６年12月に地球侵攻を前提とする局地戦用ＭＳの開発が開始されると、ＭＳとホバー・クラフトの融合が模索され始めたようで、Ｕ．Ｃ．００７８年にはホバー走行式ＭＳの開発がスタートしたといわれている。

地球侵攻作戦が進展し、地上戦におけるＭＳの低機動性が指摘されると、ＺＩＭＭＡＤ社はホバー

YMS-09
プロトタイプ・ドム

走行式MSの開発を加速した。当時のZIMMAD社にはMSM-03ゴッグ以外に制式採用されたMSはなく、YMS-08A高機動型試験機で得られた陸戦MSの技術蓄積もさしたるものではなかったようである。

それでも、ZIMMAD社はザクⅡやグフのライセンス生産を行いながら、少なからぬノウハウを獲得していた。また、不採用になったとはいえ、最初期の実戦対応MSであるヅダはザクIを上回る性能を示したほか、ゴッグの開発でZEONIC社が苦戦した水陸両用MSの実用化に目途を付けていたのである。このように、ZIMMAD社の技術力は決してZEONIC社に劣るものではなかった。ほかにも「マゼラ・トップ砲」として知られる多目的万能砲ZIM/M・T・K175Cを開発しており、MS本体やエンジン、兵装に至る技術を網羅したZIMMAD社は、第一期主力MS開発計画の雪辱を晴らすだけの技術的根拠と自信を抱き、ドムの開発にあたったのである。

ZIMMAD社の自信は、ドムの設計段階ですでに形になっていた（ドムの基本設計が終了したのは高機動型試験機よりも早かったとも、U.C.0079年6月ともいわれ、定見を見ない）。ホバー走行式MSの開発にあたり、当局はホバー・ユニットの外装化を提案したようだが、ZIMMAD社はこの案を受け入れなかった。これは、ホバー走行システムを単なる移動手段とはみなすことなく、戦術/戦闘レベルでも有効な高機動デバイスとZIMMAD社が考えていたことの証明といえる。

外装化を選択しないということは、当然、ホバー・エンジンをMSに内装することになるが、これには数十t級の機体をホバリングさせる出力、長時間にわたって安定的に稼働できる信頼性、MSに収納可能なサイズなどの要素を満たす必要がある。そして、ホバー・エンジンは熱核ジェット・エンジンの技術を流用したタイプでなければならない。空気を推進剤にできるため稼働時間が長いうえ、高出力であるからだ。

ZIMMAD社がドム用として開発したのが、これらの全要素を満たした熱核ジェット・エンジン、そしてヅダ用の「木星エンジン」から発展した「土星エンジン」だったとされる（共に実際には、熱核ジェット・エンジンと熱核ロケット・エンジンを兼ねる熱核ハイブリッド・エンジンだった模様）。ドムの下半身に搭載されたものは熱核ジェット／ホバー・エンジン、背部に搭載されたのが「土星エンジン」と考えていいかもしれない。

これらの新型エンジンの開発を受けて、ZIMMAD社はドムの試案を提示したようである。後に完成する量産仕様のドムを、そのまま細身にしたような機体だったという。

しかし、ZIMMAD社は試案のまま試作機を製作することはせず、ライセンス生産していたグフに、ドムで採用する予定の機器やシステムを搭載した機体を製造。これがドム試作のためのデータ収集機、MS-07C-5グフ試作実験機である。

ドムの試案とグフをかけ合わせた姿を持つグフ試作実験機は、頭部や背部などにドムの特徴が如実に表れており、ドム独自のシステムのデータ収集が可能となっていたと思われ

る。特にドムの基本コンセプトである機動性の向上には配慮が図られ、背部および脚部推進器の強化が重点的に行われた。ただし、十字型のモノアイ走査レールはヅダから見られたもので、ゴッグやギャンなどにも変形型が採用されたことから考えて、ＺＩＭＭＡＤ社製ＭＳ共通の機構といえる。

こうして慎重にドムの開発を進め、グフ試作実験機を製作したＺＩＭＭＡＤ社だったが、グフとドム用機器のマッチングが上手くいかなかったらしく、改造に時間を要している。その結果、想定されていた実戦テストを行うスケジュール上の余裕がなくなり、データ収集は不完全なものとならざるを得なかった。

それでも、グフ試作実験機の開発が無駄だったわけではない。グフ試作実験機を基に、プロトタイプ・ドムが完成したのだ。開発拠点はサイド3、生産数は2機である。

プロトタイプ・ドムは量産仕様機ほど洗練された機体ではなかったが、ホバー走行式の重ＭＳとしての機能をすべて有しており、構造、性能共に画期的なＭＳだった。ドム系ＭＳの標準兵装であるジャイアント・バズもほぼ同時期に実用化され、ヒート・サーベルはグフ試作実験機のものをブラッシュアップして搭載したと考えられる。

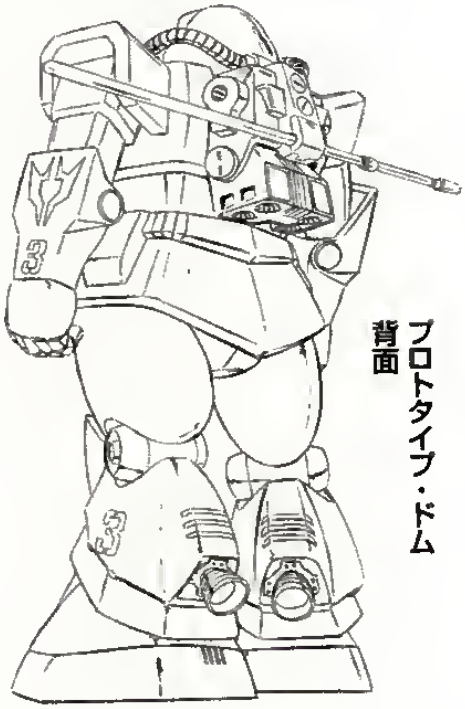
2機のプロトタイプ・ドムはキャリフォルニア・ベースに送られた後、各種試験に供され、短期間で量産仕様のドムが開発されることになった。

プロトタイプ・ドムの構造

単純性能や機能面では量産機と同等で、重MSとしてのシルエットを持つプロトタイプ・ドムだが、ホバー走行時の空気抵抗への配慮が中途半端で、スラスター関連のコンパクト化が十分でないなど、全体的に洗練されていない。グフ試作実験機から量産仕様のドムへの過渡期的機体だったということである。

頭部は、グフ試作実験機からドムへの発展過程にあるもので、口吻部を省略しつつ、グフ・シリーズに似た動力パイプを大きく露出させている点が特徴となっている。動力パイプは、パワーサプライヤーよりも冷却システムとしての機能が重視されたようで、熱帯や砂漠といった高温環境への投入を想定していたことが見て取れる。

量産機では、高速走行時の空気抵抗を考慮したためか動力パイプは露出していない。ただし、これは内装化により外見上判別できなくなっただけで、ドム・トローペンやリック・ドムⅡはわずかながら露出しているほか、ドワッジでは頭部両脇に動力パイプを外装している（後発のゲルググやギャンでも動力パイプは内装化された）。つまりプロトタイプ・ドムの頭部は、動力パイプのコンパクト化の過程にあったモデルだったのだ。



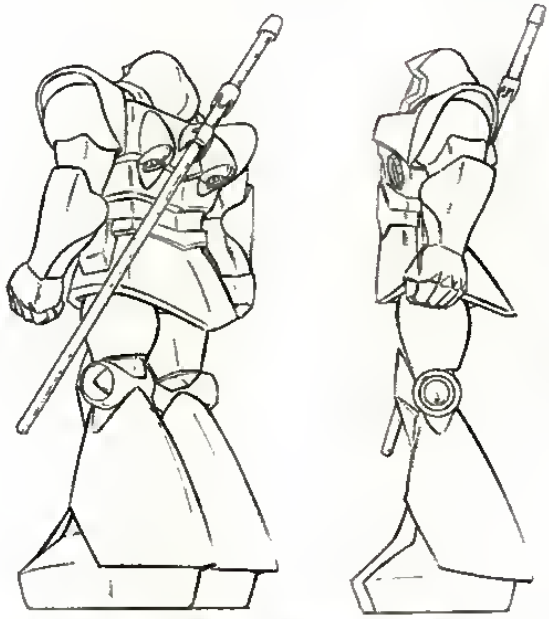
プロトタイプ・ドム
背面

胴体は、シールドを不要とした重装甲化こそ量産機と同じだが、装甲形状や背部構造などに大きな違いが見られる。具体的には角張った形状の装甲、本体と分離されたランドセル、左胸部拡散ビーム砲の未搭載が、量産機との相違点となっていた。

プロトタイプ・ドムの装甲形状が角張ったものとなったのは、ホバー走行時の空力データの不足や試作を急いだことなどが理由と考えられる。これは腕部の装甲形状でも同じことがいえる。ドムの試案の時点で、量産機に近い滑らかな装甲形状が提示されているため、本機の装甲形状は試作段階で暫定的に採用されたものに過ぎなかったようである。

胴体においてプロトタイプ・ドムと量産機の最大の違いが、分離式のランドセルだった。高速でのホバー走行を実現するため、多数の大推力スラスターを搭載したドムは、空気抵抗を嫌ってか、徹底したスラスターの内装化を図った。これは背部に搭載されるメイン・スラスターも同じであり、量産機では従来のランドセルに搭載する形式ではなく、背部から直接スラスター・ノズルが露出したタイプとしている。

しかし「土星エンジン」の内装には困難をともなったようで、プロトタイプ・ドムでは胴体とメ

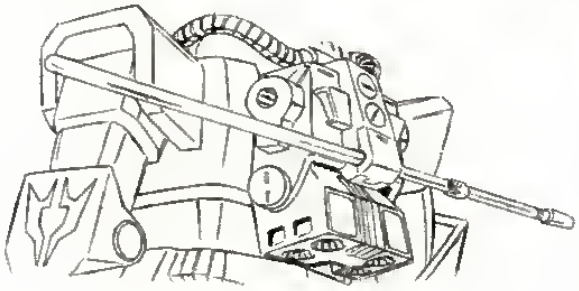


試案段階のドムの側面図と背面図。量産機に比べてやや細身だが、この時点ですでに空力特性が考慮されたフォルムが採用されていたことがわかる。

イン・スラスターの分離が選択され、一般的なMS同様にランドセルを搭載した。この際、背部中央のヒート・サーベル用ラッチも使用不能となったため、ランドセル中央にラッチが搭載された（架装懸けに装備する量産機とは異なり、真横に配置する形となった）。ほかにも、ランドセルの左右にジャイアント・バズなどを懸架するノッチを増設可能で、本機の兵装はすべてランドセルに懸架できるよう配慮されていた。

その後、量産機の開発に際してランドセルは廃止され、メイン・スラスターは当初想定された背部一体式に差し戻された。また、主軸兵装は手持ちで移動する形式となり、補助兵装や予備弾は腰部への懸架が前提となったため、兵装ホルダーとしてのランドセルも不要となったのだった。

プロトタイプ・ドムのランドセル。側面の穴が兵装懸架用のノッチを接続するためのもので、下部ユニットのメイン・スラスターのノズルは4基となっている。



だが、量産化によってドムとランドセルの関係が消滅したわけではない。ドム・トローペンやドワッジなどの後発型では背部構造が大型化したため、結果的にランドセルを搭載したのと変わらないサイズとなった。これに加えて改修、再設計されたプロトタイプ・ドム用ランドセルを搭載した後発機もあり、ドム（寒冷地仕様）はカモフラージュ用の人工雪噴霧装置を増設したランドセルを装備するといわれている（本体は量産仕様のドムの改修型で、エアインテークの増設、拡散ビーム砲の封鎖

なども行われた）。

脚部も未成熟な部位であった。プロトタイプ・ドムでも熱核ホバーこそ足底部に収納されたが、脹脛部への推進器の内装は達成できていなかった。

量産機では、裾部の裏側に3連スラスターを装備するが、本機では脹脛部に1基のスラスター・ノズルが露出している（プロトタイプでは大型スラスター1基だったものが、量産機では小型スラスター3基に変更されたとも考えられる）。ランドセルを装備した胴体同様、推進器の小型化技術が発展途上にあったための措置といえる。

プロトタイプ・ドムの運用

プロトタイプ・ドムが実戦に投入された形跡はなく、基本的には各種試験やプロパガンダに使用されている（改修機は除く）。グフ試作実験機の開発時にスケジュールが遅延したため、実戦試験は避けられたのだろう。

サイド3で完成した2機のプロトタイプ・ドムは、北米のキャリフォルニア・ベースに移送された。これは、最終テストを行うためである。

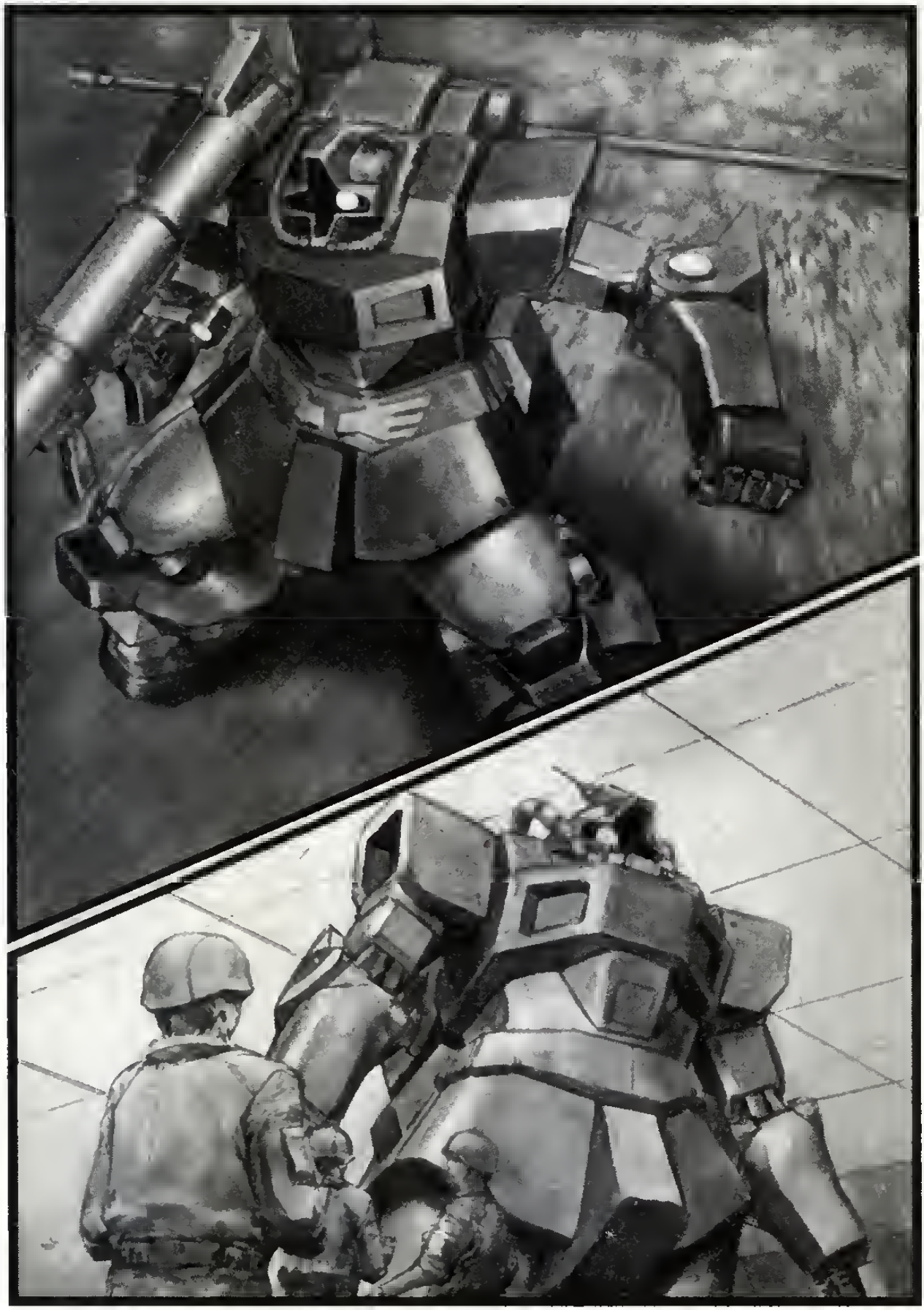
本機の試験風景として有名なものとして、キャリフォルニア・ベース北側第5試験場において行われた、ジャイアント・バズの試射がある（完成記念式典だったともいわれてい

る）。試作1号機のテスト・パイロットはフレデリック・クランベリー大佐、試験を支援したのは第26メンテナンス・スコードロン隊だった。試射されたジャイアント・バズは量産機用のH&L・GB03K／360㎜と同じ、あるいは同等のモデルだったようだ。

なぜこの試験が有名なのかといえば、各方面軍の高級将校や報道関係者を招いた一種のレセプションだったためで、実際、プロトタイプ・ドムと試験支援機には式典を意識したマーキングが施されていた（本機の部隊章的なマーキングは、公開試験に際してザビ家の命令によって施されたものという説がある）。最新鋭機として、多大な期待が寄せられていたという証拠である。ジオン公国本国の広報部写真班によって撮影された試射風景は、プロパガンダの一環として広く流布されたといわれる。

様々な試験の結果、「土星エンジン」と熱核ジェット・エンジンの搭載により、「航空機に匹敵する性能（機動性についての言及だろう）」を示したプロトタイプ・ドムは、装甲やエンジン類を再整理した後、量産機ドムとして制式化された。先行量産は、プロトタイプ・ドムのロールアウトから数週間後にサイド3本国で、地球での量産は、その一ヵ月後にキャリフォルニア・ベースで開始されている。ほかにもグラナダでの生産が行われており、ドムの生産ラインは後にリック・ドムの量産に流用されることとなった。

上はプロトタイプ・ドムで使用されたジャイアント・バズ。機動性を活かした一撃離脱戦法に破壊力を求めた兵装コンセプトは、この段階で固まっていたと見られる。



ドム・トロピカル・テストタイプの誕生と構造

プロトタイプ・ドムをベースに高温環境への適応能力を高めた機体が、ドム系MSVのひとつ、YMS-09Dドム・トロピカル・テストタイプである。

〝黒い三連星〟の量産1～3号機以降、配備が開始されたドムは、各地でグフやザクⅡJ型以上の火力、耐弾性、機動性を発揮し、地球連邦軍将兵を震え上がらせた。しかし、ジオン公国軍最高度の陸戦能力を持つ重MSドムにも欠点がなかったわけではない。

高温環境で機器のトラブルが頻発したのである。配備間もない兵器にマイナートラブルは付き物だが、ドムの必要性が高かった地域はアフリカなどの高温環境が多かったため、問題への対処は緊急を要した。

報告を受けたキャリフォルニア・ベースの対応は早かった。プロトタイプタイプ・ドムの2号機を母体として、高温環境対応型ドムの研究と開発を開始したのである。この結果、試作されたのがドム・トロピカル・テストタイプだった。

高温環境で重大なトラブルに見舞われた機器は3つ。頭部放熱パイプ（動力パイプ）、近距離用通信機、背部メイン・スラスターがそれである。

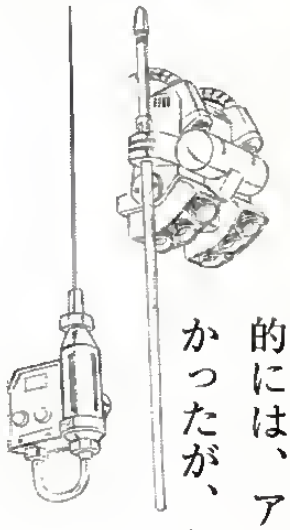
YMS-09D
ドム・トロピカル・テストタイプ

これに対してキャリフォルニア・ベースの技術陣が採った解決策は、何とプロトタイプ・ドムへの先祖返りだった。具体的には、動力パイプの大幅な露出とランドセルの外装化である。ただし、単純にプロトタイプ・ドムの仕様に戻したのではない。

頭部の放熱／動力パイプは頭頂部にも増設されたほか、ランドセルは新規モデルとなった。プロトタイプ・ドム用ランドセルからの変更点は、補助タンクの増設と冷却システムの大容量化、左側部への垂直式ヒート・サーベル用ホルダーの設置、メイン・スラスターの6発化などである。垂直式のサーベル用ホルダーは、ドム・トローペンやドワッジなどの後発機だけでなく、宇宙用のリック・ドムⅡにも採用されており、以降のドム・シリーズの標準的装備形態となっている。

また、これらの新装備では近距離通信機の問題が解決できないため、頭部にロッド状のアンテナを増設している。頭部へのロッド状アンテナの装備は、ザク強行偵察型やザク・デザートタイプのダブル・アンテナ仕様、ザク・キャノンやグフ重装型などでも見られるもので、大型のマルチブレード・アンテナに頼らずに近距離通信能力を強化できた。結果的には、アンテナの増設によっても十全な通信機能は得られなかったが、これはミノフスキー粒子散布環境下の宿命といえる。

ほかにも、砂漠や乾燥地帯での迷彩効果を狙い、カラーリングがサンドイエローに変更されている。



ランドセル（右）とオプションの短距離用通信機（左）。後者は頭部に装着される。

武装に関してはドム量産機と同じで、ジャイアント・バズとヒート・サーベルを装備するが、プロトタイプ・ドムがベースのため拡散ビーム砲は搭載していない。

これらの変更点以外は、プロトタイプ・ドムと同じ仕様だったが、熱帯や砂漠への適応能力は大きく向上し、ドム・トロピカル・テストタイプの実用性は証明された。しかし、ここから先が試作機から量産機へと発展したプロトタイプ・ドムとは異なっていた。

ドム・トロピカル・テストタイプを量産化するのではなく、先行量産型や量産仕様のドムを改修し、本機で採用された新型機に換装したのである。改修された機体は30機で、十数機がアフリカ戦線に送られたといわれる（キャリフォルニア・ベース陥落までに改修が終了していた機体は20機）。

これらのドム改修機も、ドム・トロピカル・テストタイプと総称されるケースが多い。改修機をMS-09Dとすることもあるが、ジオン公国軍の正式なものではなかった。それどころか、こうした改修もキャリフォルニア・ベースが独自の判断で行っていたのだ。

ドム・トロピカル・テストタイプで得られたデータは、統合整備計画後、ZIMMAD社が独自に開発したドム・フュンフの改修機ドム・トローペンに反映され、さらなる局地戦闘能力の向上に一役買った。ドム・トロピカル・テストタイプは、ドム・トローペンへの過渡期的な機体だったということもできる。

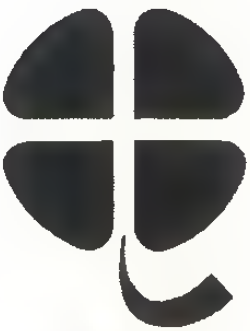
ドム・トローペン以上に、ドム・トロピカル・テストタイプの影響が強い機体として

は、MS-09K ドム・キャノンが挙げられる。実機が製造されたかは不明だが、一年戦争末期に追加生産されたドム・トロピカル・テストタイプに、ザク・キャノン用ランドセルを参考とした砲戦用ランドセルを搭載した機体だった。ヒート・サーベルなどの格闘兵装は持たず、手持ち火器として120㎜ザク・マシンガンを装備することが多く、左前腕にはザク・デザートタイプと同系の3連装ミサイル・ポッドを外装した。

ドムの高速移動に支援部隊が追随できなかったこと、ジャイアント・バズ装備のドムが連携時の支援砲撃機としては扱い難かったことなどが開発理由だった。なおドム・キャノンには、ロング・キャノンを1門装備するMS-09K-1 ドム・キャノン単砲仕様と、ツイン・ミドル・キャノン搭載のMS-09K-2 ドム・キャノン複砲仕様の2機種が存在している。単砲仕様は対空支援や長距離支援での活躍も見込んだタイプで、複砲仕様は2門の中距離砲で瞬間最大火力や速射能力を高めたタイプだったとされる。複砲仕様は、ガンキャノンのように頭部の両サイドに砲を配置するのではなく、頭部右側に2門の砲を並列で配置していた。

ドム・トロピカル・テストタイプの運用

キャリフォルニア・ベースで完成したドム・トロピカル・テスト



カラカル隊 エンブレム

タイプは、アリゾナの実用試験フィールドにおいて、テストに供された。テストを担当したのはスカラベ隊で、試験にはザク・デザートタイプも参加している（アフリカ戦線から戻された機体か、アフリカに送られる予定の機体だったかは不明）。

本機の試験がスカラベ隊に任されたのは、ドムのテスト支援や完成時の性能チェックなどを担った部隊であり、ドムに慣熟していたためと思われる。アリゾナの実用試験フィールドがテスト地に選ばれたのは、ドム・トロピカル・テストタイプが投入されると想定した環境に近かったことが理由と考えられる。

一連のテストでは、ホバリング中のジャイアント・バズ試射などの機体への負荷が大きい試験も行われたが、オーバーヒートを起こすことはなかった。良好なテスト結果を受け、実戦テスト段階へと移行したドム・トロピカル・テストタイプは、先行量産型からの改修機2機を含む4機がアフリカ戦線のカラカル隊へと送られている。この内、量産仕様のドムから改修された1機は、ロイ・グリンウッド少佐の「サンダーキャット」として活躍することになった（グリンウッド少佐は、ドム・トロピカル・テストタイプの配備に際し、ザク・デザートタイプから機種転換したと見られる）。

カラカル隊での実戦テスト後、本機の実戦配備が進んだが、アフリカ戦線に配備されたのは十数機に過ぎない。これは、より高性能なドム・トローペンやドワッジが開発され、アフリカに送られたことが一因と考えられる。

ジャブロー攻略用に開発された特殊仕様の水陸両用MS群

合理的攻略作戦から生まれたキテレツな水陸両用MSV

一週間戦争で地球連邦軍本部が置かれたジャブロー基地の破壊に失敗したうえ、南極条約締結によって短期決戦構想を打ち砕かれ、さらに戦線膠着と消耗戦に陥ったジオン公国は、改めてジャブローを攻略する必要に迫られた。地球連邦軍の中枢を電撃的に制圧すれば、一挙に地球連邦を降伏に追い込めるというシナリオである。

だが、ジャブローの攻略は簡単ではなかった。問題のひとつが、ジャブローの防御システムである。南米アマゾンの熱帯雨林地帯の地下に建設されたジャブローは、核攻撃でも破壊不能といわれた難攻不落の要塞だった。しかも入り口が判明していなかったうえに、濃密な対空防御網に守られているため、陸路、空路の両面での接近が難しかったのだ。

そこでジオン公国軍は湿地帯や水路からジャブローに接近、攻撃するプランを立案する。海から河川を遡上して、ジャブローを目指そうというのだ。マッド・アングラー隊によるジャブロー侵入口の発見があったため実行されなかったが、このプランが特異だった点

は、作戦専用に特殊用途の水陸両用MS「アッグ・シリーズ」を開発していたことだった。

このジャブロー攻略作戦では、仕様の異なるアッグ・シリーズ3機種と、別系統の水陸両用MS1機種を連携運用するとされていた。背景こそ異なるが、地球連邦軍が「V作戦」において白兵戦用のガンダム、中距離支援用のガンキャノン、長距離支援用のガンタンクを個別に容易し、連携を模索したことと似ている。

ここまでを見る限り、水路でのジャブロー攻略作戦は合理的な判断の下に立案されたように思えるが、問題は肝心のMSにあった。作戦の実行役であるアッグ・シリーズのいずれもが、実用性に疑問符が付くMSだったのだ。MSVに分類されるMSには、特殊な位置付けの機体が少なくないが、アッグ・シリーズはその中でも群を抜いて特殊――言葉を選ばなければ「キテレツ」なMSなのである。

ここでは、その「キテレツ」なアッグ・シリーズと同作戦に投入予定だったMSを個別に解説する。これらの機体によるジャブロー攻略作戦が実施されても、成功はおぼつかなかったことは想像に難くない。

なお、ここで解説するMSは前書『機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録』で部分的に紹介しているが、MSVに属する水陸両用MSであるため、本書では情報や図版を追加し、改めて解説している。

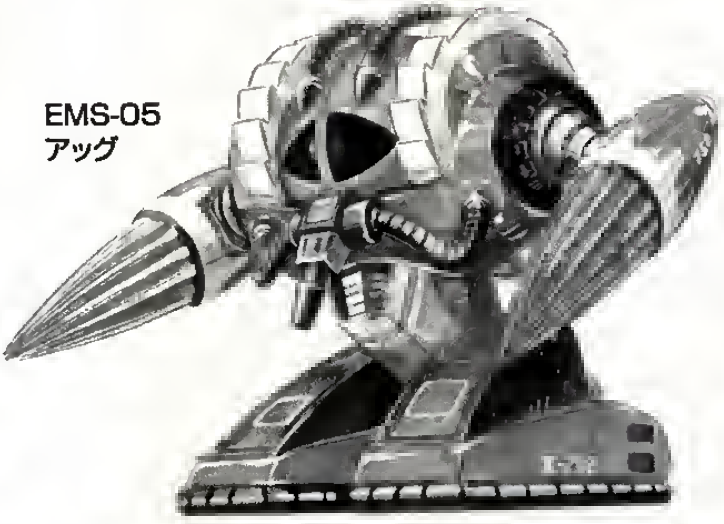
トンネル掘削用ＭＳ、アッグ

ＥＭＳ・05 アッグは、ジャブローへの侵入経路確保を目的としたＭＳである。

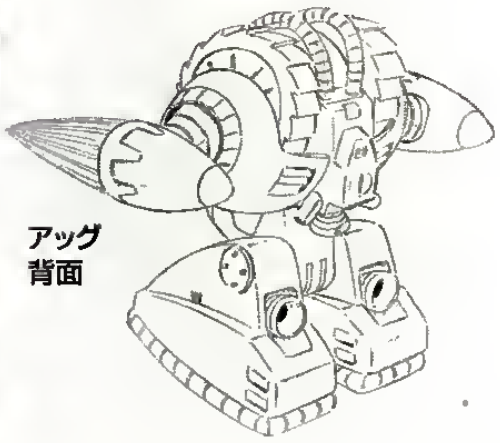
ジャブローは地下要塞であるうえ、侵入口すら発見されておらず、侵入経路の確保は簡単ではなかった。それにも拘らず、アッグが困難な任務を達成可能と想定されたのは、独自の侵入経路を確保する手段を備えていたことによる。

その手段こそ、両腕の巨大ドリルによるトンネル掘削だった。侵入口が見つからないのであれば、自前で作ってしまおうというのだ。

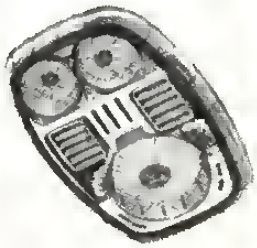
ドリル以外にも胴体部の回転ノコギリと口吻部レーザー・トーチを固定装備しており、アッグのトンネル・ボーリング用機器は充実していた。機体もトンネル掘削に最適化されており、頭部と胴体が一体化したアーモンド型ボディ、全高を抑えた足部のみの脚部などを採用している。構造上、歩行が困難なため、移動にはホバー・クラフ



EMS-05
アッグ



アッグ
背面



脚部は底面がホバー・クラフトになっており、後部のスラスターを併用してホバー走行を行う。

トが用いられ、水路でも水中ではなく水上をホバリングするようになっていた。

一見、合理的に思えるアッグだが、このようなコンセプトの機体が実用的かといえば、大きな疑問が残る。侵入用トンネルを掘削する以上、アッグは最前線で土木工事をしなければならず、作業中は僚機の援護がなければただの的になってしまう。そもそもジャブローの構造がよく分かっていないため、本当にトンネルを開通できるかも分からないのだ。

仮にトンネルを完成させたとしても、トンネルの出口が狭いため、待ち構えていた地球連邦軍の集中攻撃を受けることは間違いない。実際のジャブロー降下作戦でも、宇宙艦艇が出入りできるサイズのスペース・ポートから侵入を試みた部隊が、地球連邦軍MS部隊の迎撃を受け、すべてが撃退されている。別の出入り口からの侵入したマッド・アングラー隊水陸両用MS部隊も同じ運命を辿ったことから、掘削に特化したアッグがトンネル開通後に生き残る可能性は万にひとつもなかっただろう。

アッグは両腕を4連装ミサイル・ポッドに換装可能なほか、胴体上部にも腕部用と別形状の4連ミサイル・ポッドを増設でき、この重

アッグ武装型

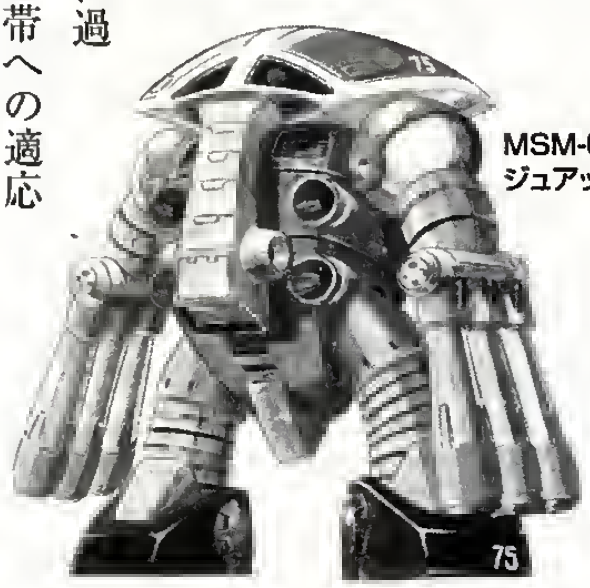
武装形態なら生存率は向上すると思われる。だが、重武装化はアッグ本来のトンネル掘削能力を激減させてしまう以上、本末転倒な換装であり、どう転んでもアッグの実用性が低いことに変わりはなかった。

実機が製造されたかは不明だが、ジャブロー降下作戦でトンネル掘削中にオーバーヒートしたとも、地球連邦軍の北米反攻作戦で実戦投入されたともいわれている。

中距離支援用の水陸両用ＭＳ、ジュアッグ

ＭＳＭ-04Ｇジュアッグは、中距離支援機としての運用が想定されていたアッグ・シリーズのひとつである。掘削を行うアッグ、白兵戦を担うアッグガイ、格闘戦用のゾゴックを砲撃支援するのが任務で、地球連邦軍のＲＸシリーズではガンキャノンに相当する。ほかのアッグ・シリーズ同様、水中適性は高くはなく水中最高速度は55ktに過ぎないが、ジャブロー周辺での運用に対応するため、湿地帯への適応能力が高められた。

型式番号から分かるように本機はＭＳＭ-04アッガイの系列機で、アッガイの試作段



MSM-04G
ジュアッグ

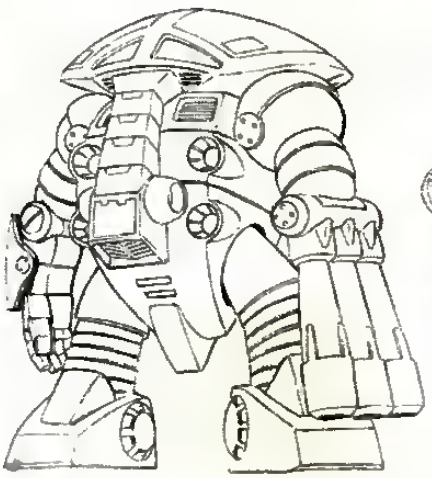
ジャブロー攻略用に開発された特殊仕様の水陸両用MS群

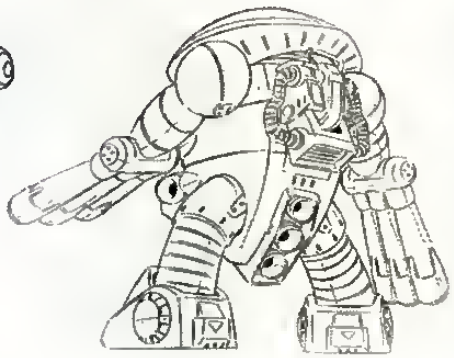
階の設計を転用した水陸両用MSだった。ただし、軽武装偵察仕様のアッガイとは設計思想が大きく異なり、重武装・重装甲の重装仕様となっている。これは、支援機とするための仕様変更である。

本機の火力と耐弾性を支えているものが、各腕に3門、計6門搭載する320㎜ロケット・ランチャーとゴッグと同等の装甲で、攻防力は水陸両用MSの中でも高い部類に入る。必要に応じて、腕部をゾゴックのマニピュレーターに換装可能で、格闘戦能力を付与できた。しかし、重装化に伴い重量も増加しており（ジオン公国軍の水陸両用MSでは、ゾックに次ぐ大重量機）、機動性や運用性は低下せざるを得なかった。

重装化に伴う機動性低下は支援用MS全般にいえる特徴だが、ジャブロー攻略に特化したジュアッグは他地域での運用性が低く、ザク・キャノンやドム・キャノンに代表されるジオン公国軍系支援用MSと比べて、使い辛い点は否めない。

実機が製造されたかは不明だが、一年戦争末期に行われた地球連邦軍の北米反攻作戦において、アッグ・シリーズと共に迎撃にあたったという説もある。





ジュアッグの背面構造（右）と腕部ロケット・ランチャー（上）。左は腕部をマニピュレーターに換装したバリエーションである。

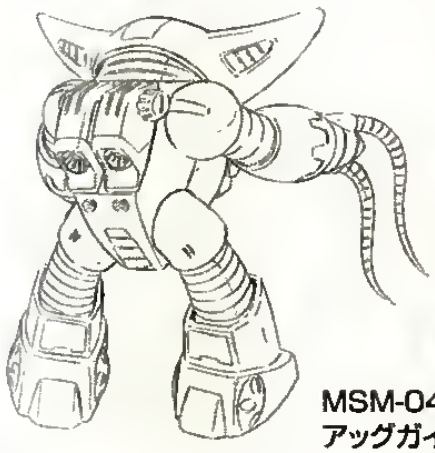
白兵戦用の水陸両用ＭＳ、アッグガイ

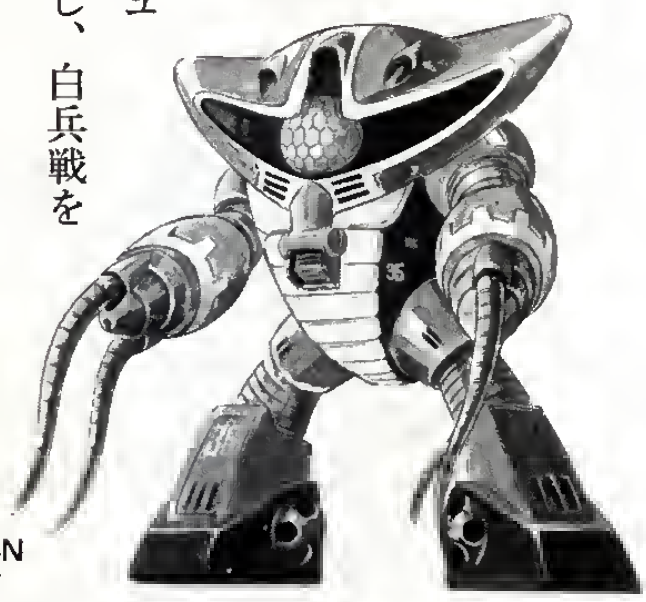
ＭＳＭ-04Ｎ アッグガイは、ジュアッグ同様、アッガイを再設計したアッグ・シリーズのひとつで、白兵戦に特化した仕様であった。はやり、湿地帯への適性が高い代わりに、水陸両用ＭＳとしては水中運用能力が低く、水中最高速度は50ktといわれる。

ジャブロー攻略作戦では、アッグのトンネル掘削、ジュアッグによる砲制圧の後、ジャブローの地下空間に突入し、白兵戦を行うことを想定していた。

機体構造はアッガイに近いが、モノアイは大型の複眼タイプとなり、腕部兵装は各腕にヒート・ロッドを2基、左右で計4基を備えた。このヒート・ロッドはズゴックと同じバイス・クローに換装可能だが、この際もメガ粒子砲は装備しない。射撃兵装は頭部バルカン砲が2門のみで、火力は連携運用されるジュアッグに一任していたようである。

格闘兵装が充実しているため、水陸両用ＭＳ屈指の白兵戦能力を持つが、砲火力は脆弱



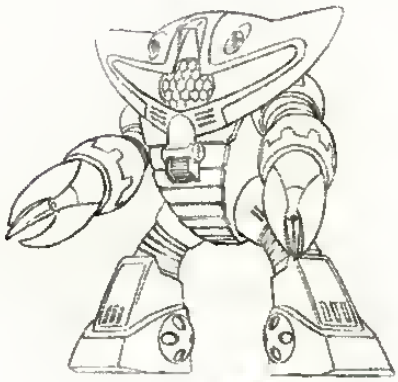


MSM-04N
アッグガイ

スタンパ・ハロイが所有していたアッグガイ。邸宅の敷地内に飾られており、稼動できる状態だった。

で、支援機が撃破されると戦闘能力が大きく低下するという問題を抱えていた。この欠点はオプション換装による解決策も用意されており、ほかのアッグ・シリーズ同様、扱い難い機体であることは間違いなかった。

機体自体は製造されたようで、一年戦争後、サイド3・24バンチの「タイガーバウム・コロニー」の好事家スタンパ・ハロイが本機を所有していた（レプリカの可能性も指摘される）。一年戦争時の実戦投入に関しては、北米反攻作戦を展開した地球連邦軍に対し、迎撃に出た例があったとされているが、この際に撃破されたといわれる。



バイス・クロー装備アッグガイ

格闘戦用のズゴック姉妹機、ゾゴック

ＭＳＭ-08 ゾゴックは、ズゴックの姉妹機として開発された機体で、ジャブロー攻略用の水陸両用ＭＳでは唯一アッグ・シリーズに属さない。ただし、水中適性に秀でない点（水中最大速度は47 ktと低速）、格闘戦を重視した仕様はアッグ・シリーズとの共通しており、ジャブロー攻略戦で

MSM-08
ゾゴック

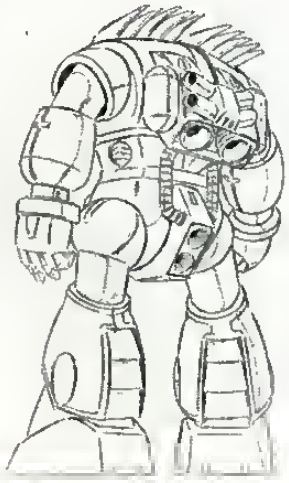
はアッグガイとほぼ同じ近接格闘戦を担うとされた。開発企業はＭＩＰ社、開発拠点はキャリフォルニア・ベースだった。

兵装は近接格闘戦を意識したアーム・パンチと、「ブーメラン・ミサイル」ことワイドカッターである。アーム・パンチは、スクエア・カットされた五本指マニピュレーターを伸縮機構で打ち出すもので、装甲貫徹能力を持つ。ワイドカッターは巨大ブーメランを射出する射撃兵装で、ゾゴック以外に装備例は知られていない。

白兵戦に偏り過ぎたアッグガイに比べ、ゾゴックはより広い攻撃範囲を持つ。しかし、アーム・パンチはバイス・クローより、ワイドカッターはメガ粒子砲や連装ミサイル／ロケット砲より強力とは考えられないうえ、使いやすくもなく、非常にクセの強い機体となっていた。トリッキーな攻撃が可能なことは間違いないが、それは通常の攻撃手段があってこそのもので、同様のコンセプトの後発機が見られないことからも、失敗作とみなされていたことは確かだろう。

本機は試作機のみ製造されたといわれ、一年戦争末期、北米反攻作戦を発動した地球連邦軍の迎撃を行ったようである。戦後は、スタンパ・ハロイ・コレクションのひとつとしてサイド３・24バンチに置かれたが、オリジナルかレプリカかは不明である。

スタンパ・ハロイ・コレクションのゾゴック。手前はアッグガイで、彼が希少なMSを好んだことがうかがえる。



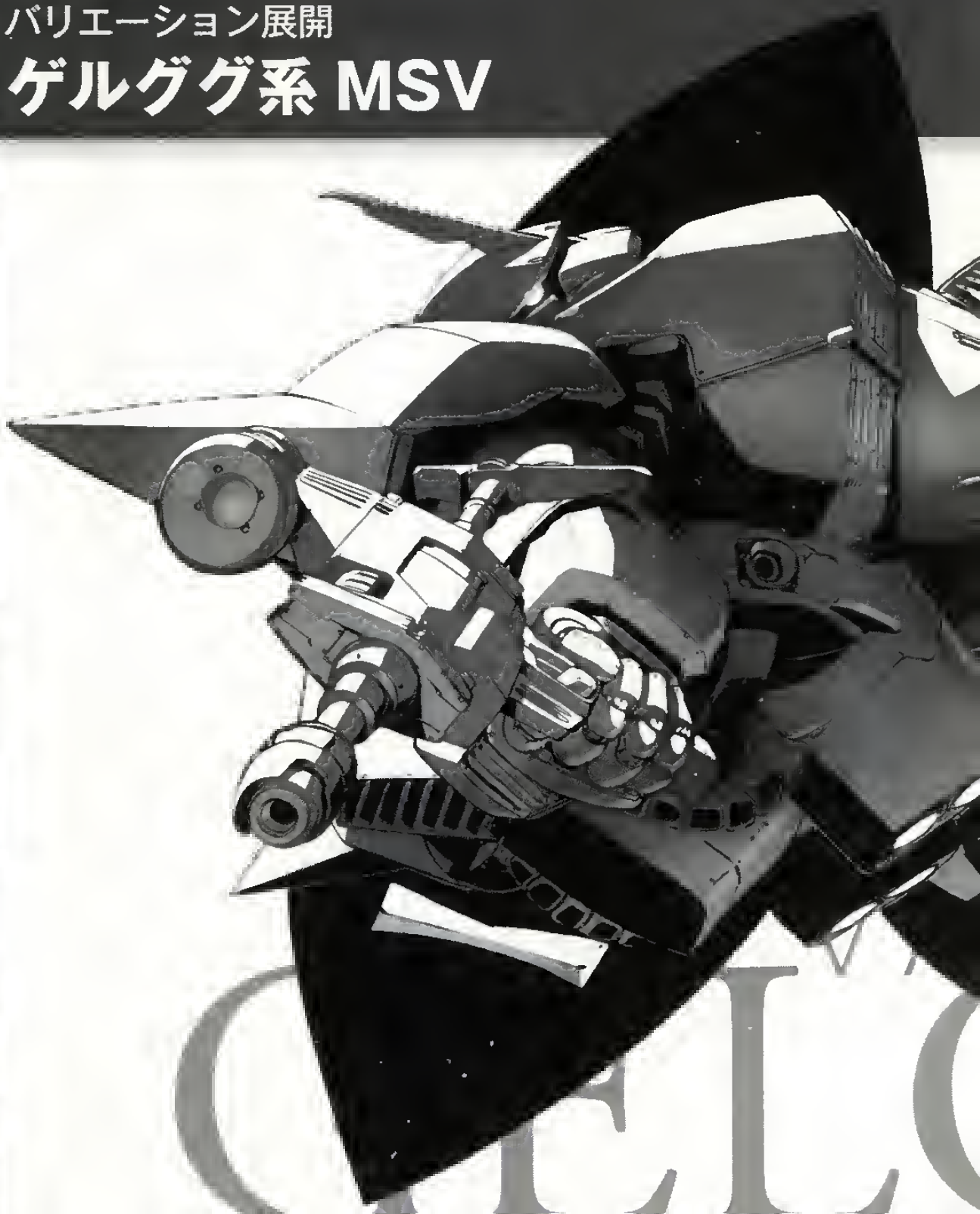
ゾゴック 背面

SUIT
ATION
LOOG

第四章

拡張装備のオプション化による バリエーション展開

ゲルググ系 MSV



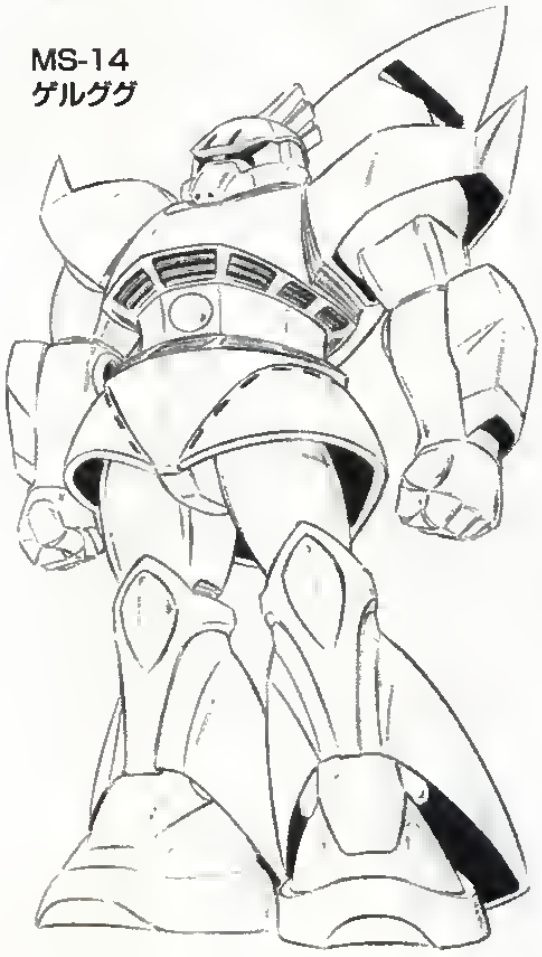
オプション換装によって性能の幅を広げたゲルググ・バリエーション

システマチックな換装で成り立つゲルググ系MSV

MS-14 ゲルググは、第二期主力MS開発計画において、ZIMAMD社のギャンを下し、ジオン公国軍最後の主力MSとなった機体である。ジオン公国軍の汎用主力MSとして初めてビーム・ライフルを標準装備したことで知られる。

開発は軍が主導し、主要区画をZOENIC社、エンジン系はZIMMAD社、ビーム兵器にはMIP社が参画するなど、ジオン公国重工業の集大成的な機体であった。なお、カタログ・スペック上は地球連邦軍のガンダムすら上回る高性能機だった。

ゲルググのロールアウトは、先行量



MS-14
ゲルググ

ゲルググJ（上右）とゲルググM指揮官機（上左）、リゲルグ（下）の各種ゲルググ派生機。これらの機体は運用実績こそ少ないのの、それぞれが優れた戦果を残し、ベースとなったゲルググの高い性能を証明した。

産型のYMS-14がU.C.0079年10月で、量産仕様機が本格的に配備されたのは一年戦争末のア・バオア・クー戦時であった。つまり、ジオン公国軍におけるゲルググの配備期間は極めて短かったのだ。

こうした状況にも拘らず、ゲルググの派生機は多い。前述のYMS-14（MS-14Sとも考えられる）ゲルググ先行量産型、一般的な仕様のMS-14Aゲルググ（ゲルググA型）、統合整備計画に準拠した後期生産型に分類される狙撃仕様機MS-14JGゲルググJ（イェーガー）、同じく後期生産型で海兵隊仕様機MS-14Fゲルググ（マリーネ）、ゲルググMの指揮官用であるMS-14Fsゲルググ指揮官機、一年戦争後に小惑星基地アクシズで開発されたウインダー装備機MS-14Jリゲルグの存在が確認されている。

このほかにも、砂漠用のMS-14D デザート・ゲルググ、陸戦型のMS-14G ゲルググ陸戦仕様、戦後に小惑星基地アクシズにおいて改装されたMS-14U ゲルググ（外宇宙仕様）、ジオン公国軍残党が独自に改修したMS-14A ゲルググ［シュトゥッツァー］などが存在したとされる。

一年戦争末期、戦局の悪化や兵器開発プロジェクトの乱立により現場が混乱していたにも拘らず、短期間の内に多数の派生機を開発できたことにはふたつの理由がある。ひとつは統合整備計画による部品・ユニットレベルでの規格の統一、そしてもうひとつがオプション換装による多様化を想定したゲルググ独自の構造だった。

ザクⅡも拡張性に優れたMSであり、投入地域に適応したパーツや新規開発ユニットへの換装を前提とした設計によって、高度な汎用性を確保していた。しかし、前線レベルにおける短期間での換装が可能なのは、ザク・マインレイヤーとザク・キャノンのランドセル程度で、ミッションに応じて能動的に使い分けられるものではなかった。ザクⅡの換装機能は、戦略的なバリエーション展開を前提としていたのだ。

これに対して、ゲルググの換装機構はランドセルや前腕部用オプション機器、頭部を交換するもので、艦艇クラスの整備施設でも短時間での換装を可能としていた。これに統合整備計画によるパーツおよびユニットの互換性が加わり、ごく短期間でのバリエーション展開を成し遂げたのである。

前述のゲルググ・バリエーションの発端となったのが、MS-14Bゲルググ高機動型とMS-14Cゲルググ・キャノンだった。MSVに分類されるこの2機種は、型式番号末尾のアルファベットが示すように、一般的な量産仕様機のMS-14A同様、最初期に考案されたバリエーションと考えられる。

2機種共にゲルググ先行量産型、または一般量産機ゲルググA型のランドセル換装機で（ゲルググ・キャノンの場合、頭部の換装を含む）、艦艇のMS用ハンガーデッキでも充分に仕様変更が可能であった。ザクⅡ系MSVの高機動型ザクやザク・キャノンのような大幅な改修機ではなく、簡単な換装のみで仕様を変更できたのである。

ゲルググの換装機構は、設計段階から盛り込まれたもので、高機動仕様のゲルググ高機動型と中距離支援用のゲルググ・キャノンは、そのシステムを如実に体現していた。

地球連邦軍MS部隊の運用形態とジオン公国軍の戦術を組み合わせたゲルググ系MSVの戦い

当初、ZEONIC社においてMS-11の型式番号で開発されていたゲルググは、高機動型ザクR-2タイプを改装したゲルググ先行試作型や、開発体制を拡充したMS-14としての開発を経て、一年戦争末期にようやく実用に至った。

ビーム・ライフルの標準装備からも分かるように、ゲルググは対艦攻撃能力を重視する傾向にあったが、MS単体としては汎用／白兵戦用機としての側面が強い。基本的な運用形態は、ザクⅡのそれに近かったのである。

ただし、これはゲルググ先行量産型やゲルググA型、同一機種での運用例が多いゲルググMに限ってのことで、戦術システムとして見た場合のゲルググでは話が違ってくる。それは、複数の仕様のゲルググによる運用というものだった。

ジオン公国軍がゲルググで特殊な運用形態を模索した背景には、地球連邦軍独特のMS観と、その下で行われたMS開発および運用方法があった

総合的な軍事技術で地球連邦を凌駕したジオン公国だったが、ビーム・ライフルを成立させたエネルギーCAP、一般的な冷却システムを使用しながらも分散配置によって高出力化を達成したジェネレーター、ルナ・チタニウム合金の加工、MSの動作を最適化し続ける教育型コンピュータなどの技術では地球連邦の後塵を拝していた。

ジオン公国軍が地球連邦軍に遅れをとっていた分野には、MSの運用に関するものもある。ジオン公国軍のMS運用は基本的に同一機種によるもので、部隊内あるいは部隊単位の兵装の違いによって役割を分けていた。ザクⅡなら、ザク・マシンガン装備機を前衛のアタッカー、ザク・バズーカ装備機を後衛の支援機とするケースもあった。

これに対して地球連邦軍は、クロスレンジからショートレンジを担当する白兵戦用M

ガンダム試作2号機強奪事件において、旧ジオン公国軍残党が運用したザメル。ジオン公国軍支援用MSの最たる例といえる機体だが、その設計は一般的なMSとは大きくかけ離れたものとなっている。

S、ミドルレンジ以遠からの砲撃を行う支援用MSを別個の機種としていた。RXシリーズでいえば白兵戦用のガンダムと中距離支援用のガンキャノンの分化、一般的な量産機では白兵戦用のRGM-79ジムと支援用戦闘ポッドRB-79ボールの関係である。

一般的なMS用火器よりも長射程の兵装を持つ支援用MSは、味方機の後方から砲撃を実施し、敵機への先制攻撃を行う。撃破できないとしても、敵機の行動を制限でき、敵が部隊規模なら連携を阻害できるため、味方機は戦いやすくなる。

こうした運用面の差は、汎用MS万能論的な発想に立ち、有視界戦闘というMSの戦闘形式に拘泥したジオン公国軍と、MSを従来の兵器の延長線上に考えていた地球連邦軍の差で、両者のMSへのアプローチの違いであった。問題はどちらが有効かということだが、一年戦争時の技術レベルや戦術環境では地球連邦軍の発想に分があったと考えられる。

地球連邦軍の中距離支援機キャノン・タイプMSの存在を知ったジオン公国軍も、その有効性に着目し、ザク・キャノンなどの中距離支援MSを開発、長距離砲撃用の自走砲的

なMSとしてYMS・16Mザメルを試作した。

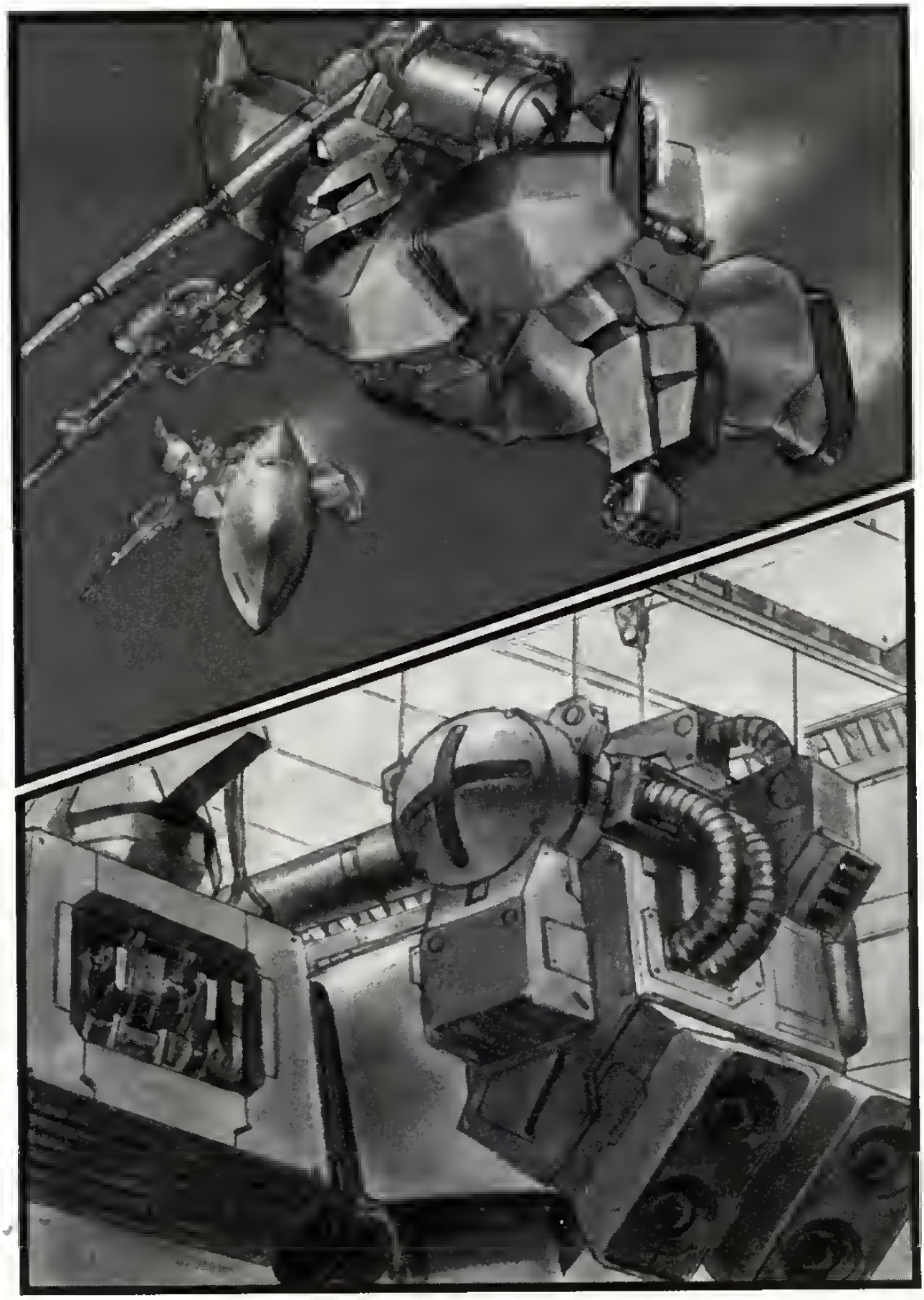
同様の発想が持ち込まれたことが一因で実用化されたゲルググ系MSVが、ゲルググ・キャノン、正確にいえばゲルググ用のビーム・キャノン搭載ランドセルとセンサー強化型の頭部ユニットである。これによりゲルググ・シリーズは、ゲルググ・キャノンによる支援砲撃という選択肢を得て、より高度な運用性を発揮できるようになった。

ここまでは地球連邦軍のコピーといえるが、MSの開発や運用に関して一日の長があるジオン公国軍は独自性も見せた。それが前衛を担うMSに、ゲルググ高機動型を用意したことである。

軽量化ではなく、推力強化を中心とする機動性の向上を果たした高機動型MSは、ジオン公国軍色が強いMSカテゴリーである。一般的なMSより操縦が難しい傾向にあるが、機動性に優れ、一撃離脱戦法の有効性が高いことで知られる。

高機動型MSに支援MSが追随できないため、通常、異機種間での連携は嫌われる。だが、ゲルググ・キャノンは推進器を増設しており、ゲルググ高機動型とのコンビネーションは難しくない。ゲルググA型との連携なら、さらに容易であった。

このような運用を実施し得たのは突撃機動軍のキマイラ隊だけだったようだが、地球連邦軍の運用法を採り入れると同時に、オプション換装により性能と機能性を向上させたゲルググ・シリーズの運用性は、一年戦争最高レベルに達していた。



オプション装備の研究による ゲルググ系MSVの開発

ゲルググ高機動型の誕生と構造

機動性向上仕様のゲルググ系MSVがMS-14B ゲルググ高機動型である。正確を期すなら、増速用ブースター・パック／ランドセルを搭載したゲルググで、ランドセル以外はゲルググ先行量産型、あるいはゲルググA型と変わりがない。最初から高機動型として生産されたゲルググも存在するが、これも通常仕様のゲルググやゲルググ・キャノンなどとの互換性がある機体で、実態は変わらない。

最初期はゲルググ先行量産型を改修、増速用ブースター・パックを増設する形で高機動化を実現しており、この際、MS-14Bの型式番号が付けられた。これ以降、装備の換装によるゲルググの仕様変更に際し、型式番号末尾のアルファベットと共に機体名も変えるようになった。ザクⅡF型とその機雷散布ランドセル搭載仕様のザク・マインレイヤー、ザク・キャノンとそのザクⅡJ型用ランドセル搭載機が同じ型式番号なのとは、傾向を異にしている。

なお、ゲルググ先行量産型に増速用ブースター・パックを追装した場合でも型式番号

は、YMS-14Bとする資料も一部あるが、現在ではMS-14Bでまとめられている。

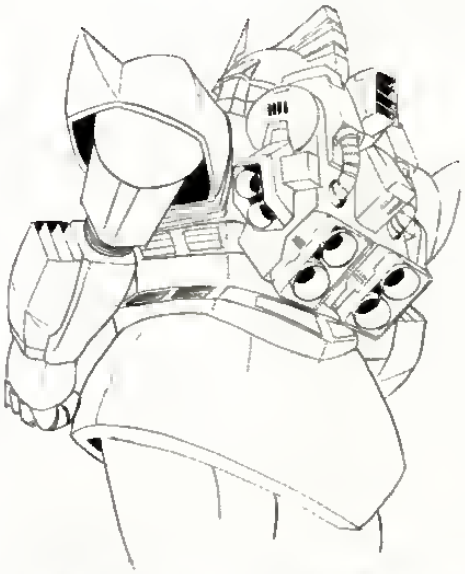
ゲルググ先行量産型のほとんどを装備したキマイラ隊には12機が配備され、同隊での試験運用データが量産機に反映された頃には生産数が67機に上ったといわれるが、この数字は増速用ブースター・パックの数とほぼ同数であると推測される。

ザクⅡは当然のことリック・ドムを上回るスラスター推力を得たゲルググは、全備重量時の重量対推力比でもこの2機種を凌駕していた。ランドセルは未搭載だったが、腰部と脚部の推進器だけで、従来機以上の推力を獲得していたのだ。これに機体各部の補助バーニアが加わり、高度な機動性と運動性を獲得したゲルググだったが、格闘戦を重視していたのか機動特性は運動性に傾いていたようである。

こうした背景もあってか、戦術の幅を広げるために開発された装備が、ゲルググ高機動型へと仕様変更するための拡張ランドセル、増速用ブースター・パックだった。加速性能を高め、一撃離脱を容易にしようというのだ。実際、通常仕様のゲルググと高機動型の機

右のゲルググ高機動型は、キマイラ隊で運用されたジョニー・ライデン少佐の乗機（後述）で、真紅と黒の彼のパーソナルカラーで塗装されている。胴体脇からわずかに増速用ブースター・パックが見える。

MS-14B ゲルググ高機動型
ジョニー・ライデン専用機



上が増速用ブースター・パックを装備したゲルググ高機動型の背面。メイン・スラスターやプロペラント・タンクの配置などに、高機動型ザクからの設計の発展が窺える。

動性には大きな差があり、スラスター推力だけを見ても、ゲルググ先行量産型およびゲルググA型は6万1500kg、これに対してゲルググ高機動型では7万9900kgに達していた。

なお増加ランドセルは、胴体背面のバックパネルを外すだけで装着可能なほか、不要になった場合にはコクピットからの操作で切り離せるなど、運用柔軟性にも優れていた。ランドセルを装着した際、未使用時の格闘兵装ビーム・ナギナタを固定するデタッチャブルホルダーを外さねばならないが、ゲルググ・キャノン同様、ビーム・ナギナタを腰部に搭載した機体が目撃されており、問題が発生したという事例もなかったようだ。

ゲルググ高機動型の増速用ブースター・パックは、高機動型ザク用ランドセルの発展型と思われる。構造上の共通点が見られるものの、より高度な機動性や機能性を実現するため、独自の設計も盛り込まれている。

高機動型ザク用との共通点としては、ランドセル上部に横倒しに設置された円柱型プロペラント・タンクや下部に集中配置されたメイン・スラスターが挙げられる。同様の構造のランドセルは、ゲルググMやリゲルグ、ゲルググ陸戦仕様などにも見られ、発展と技術

継承の証拠ともなっている。

ゲルググ高機動型用ランドセル独自の構造として、ゲルググに優れた初期加速力を与える計9基の複合スラスター群――メイン・スラスターとしてランドセル下部に2セット配置された2連装ベクタードスラスター（偏向推進器）、両側面に設置された2連装サイドスラスター、上部のスリット式フィックスドスラスター――が目を引く。

ランドセル／バックパックに搭載されるスラスターは通常2～4基、多くて6基程度であり、本機の9基という数が極めて多い。つまり、通常サイズまたは小型スラスターを連装化することで機動性向上を図っているのである。大型スラスターを少数搭載する形式を採らなかったのは、高機動型ザク用に近いランドセルにスラスターを増設していく形で設計されたためとも考えられる。設計期間やコスト面で有利だったのかもしれない。

推進システム以外の特徴としては、側面への武装懸架機能がある。プロトタイプ・ドムと同じくノッチを介して懸架するタイプと思われ、未使用時のビーム・ライフルなどをマウントしておくことができた（ランドセルに搭載したままでの射撃が可能かは不明）。

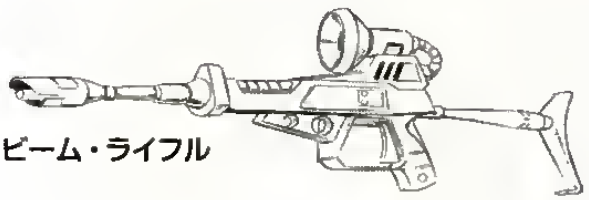
そして本機、というよりゲルググ系MSVのランドセル最大の特徴が、前述したMS本体との連結／切り離し機能であろう。

フルアーマー・タイプのMSのように、機体の一部や増加装備を任意に切り離せるMSはほかにも存在するが、パージした場合、戦闘能力が低下する場合が多い。しかしゲルグ

グ高機動型の場合、ランドセルを切り離しても充分な性能を持つゲルググ先行量産型やゲルググA型に戻るだけであるため、継続戦闘能力が高かった。増速用ブースター・パックを自発的に切り離すケースは考え難いように思えるが、被弾や故障によるランドセルの稼動不良や、ランドセル部のプロペラントの消費、スペース・コロニーへの侵入や格闘主体の戦闘といった軽装が有利な状況への対応など、状況やミッションによってはランドセルを切り離さざるを得ないことがある。システムから来るゲルググの運用柔軟性は、このような場合にも発揮されるのだ。

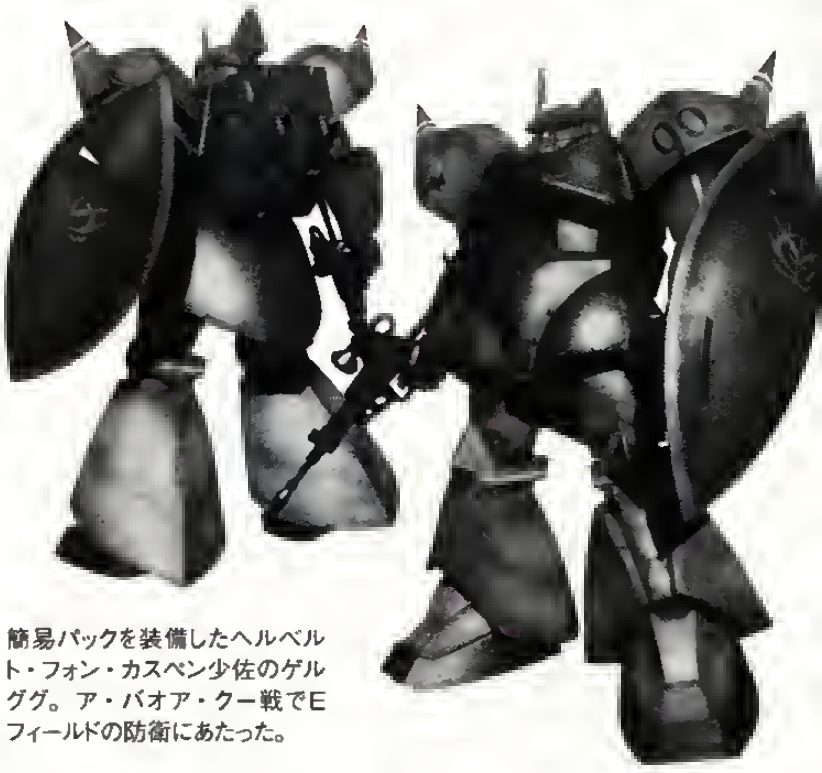
ゲルググ高機動型は、高機動型ザクのように加速性能を中心とした機動性向上仕様に過ぎず、基本兵装はゲルググA型と同じくビーム・ライフルとビーム・ナギナタである。ただし、重量増加を嫌ってかシールド未装備のケースが見られたほか、初期の歩留まりの悪さからビーム・ライフルの安定性に疑問が抱かれていたようで、ジャイアント・バズを小型化したようなロケット・ランチャーを装備することもあった。

増速用ブースター・パックに相当する装備として、サイドスラスターやスリット式のフィックスドスラスターを排除した簡易型と思われるモデルも存在した。ア・バオア・クー戦ではヘルベル



ビーム・ライフル

ビーム・ナギナタ



簡易パックを装備したヘルベルト・フォン・カスペン少佐のゲルググ。ア・バオア・クー戦でEフィールドの防衛にあたった。

ト・フォン・カスペン大佐を始め、NフィールドやEフィールドで多数の簡易パック装備機が確認されている。これらの機体はランドセルの簡略化や、ゲルググ高機動型と異なりシールドを標準装備していたことから、ゲルググA型と高機動型の中間的位置付けにあったとも考えられる。

ゲルググ高機動型の派生型としては、MS-14BRが存在したという。この機体はパイロットの要求により、さらなる高機動化を達成したモデルであった。

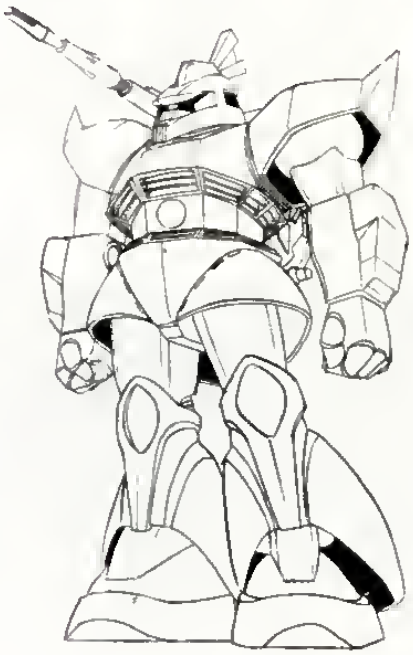
脛部カウルを外して脚部推進器を露出、大型化した機体で、ZIMMAD社で2機が、キマイラ隊で1機が改装された後、ア・バオア・クー戦に投入されたといわれる（予備部品と共に納入されたのは、ZIMMAD社での改装後）。脚部推進器の露出により、高機動型ザクと似た姿になったため、ゲルググRと俗称されることもあった。

ア・バオア・クー戦では、簡易パックを装備したゲルググの一般機も多数確認された。同攻防戦に投入されたA型と同じく、学徒兵がパイロットに充てられていた。

ゲルググ・キャノンの誕生と構造

MS-14C ゲルググ・キャノンは、ビーム砲を搭載したランドセルのビーム・キャノン・パックと砲戦対応の頭部ユニットを装備した、ゲルググ系MSVの1機種である。やはりゲルググA型の改修機ではなく、換装バリエーションのひとつだった。

最初期にゲルググを装備したキマイラ隊に12機が配備され、ゲルググ先行量産型のデータを反映することで、量産機の仕様変更が行われた時期には15機が生産されていたといわれている。ゲルググ高機動型同様、ゲルググ・キャノンへの換装用装備――ビーム・キャノン・パックと砲戦用頭部ユニットのセット――の生産数が占める割合が多かったとも考えられる。終戦時、ゲルググ・キャノン用の換装用装備は122機分が生産されていたとされている。



MS-14C ゲルググ・キャノン

地球連邦軍のキャノン・タイプMSやボール同様、中距離支援MSとして多用されたゲルググ・キャノンだが、誕生の経緯は必ずしも砲支援を想定したものではない。ゲルググ・キャノン開発の背景にあったのは、ゲルググ用ビーム・ライフルの問題だった。

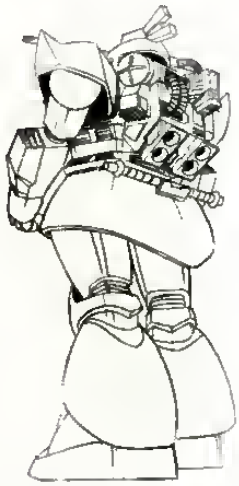
第二期主力MS開発計画において、ゲルググがギャンを下した理由としてビーム・ライ

フルの装備が挙げられる。MS本体の駆動性能と格闘戦能力を見れば、ギャンに劣ったゲルググだが、ジオン公国軍はMSに対艦攻撃力を中心とした火力を求めており、ビーム・ライフルを装備したゲルググはこの点をクリアしていた。そもそもゲルググの駆動性能や格闘戦能力、機動性はそれ以前の主力MSを上回っており、単純性能も高かったのである。

主力MSとして採用されたゲルググは、一年戦争末期、急ピッチでの生産が進められたが、ここで問題が発生した。歩留まりが安定しなかったビーム・ライフルの生産が間に合わず、初期のゲルググはビーム・ライフルを未装備のままロールアウトしたのだ。ビーム・ライフルの生産問題はなかなか解決を見ず、生産が軌道に乗ったのはU.C.0079年11月下旬、前線への安定供給は終戦の2週間前だったといわれる。

そこで開発された装備が、MAのビーム用デバイスを転用した換装用ランドセル、ビーム・キャノン・パックだった。ランドセルの換装を前提としたゲルググの機構が、思わぬところで役立ったのである。

窮余の策として開発されたビーム・キャノン・パックだが、その性能は高かった。ビーム・キャノンは、ゲルググ用として開発されたビーム・ライフル以上の火力を持ち、中距離以遠での命中精度も優れていた。これはMA用を転用したことによるメリットだろう。



ゲルググ・キャノンの背部。ビーム・キャノン・パックの装着を換装の主眼とする。

実体弾兵器と比べれば、発射時の反動がないに等しい点も優れていた。

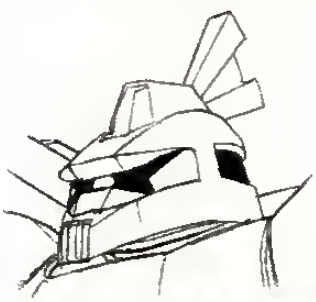
ビーム・キャノン・パックの基本構造はゲルググ高機動型用に近く、ランドセル上部に円柱型プロペラント・タンクを、下部に2連装ベクターードスラスターを2セット搭載する。ベクターードスラスターはゲルググ高機動型と同一モデルのようである。

砲撃／中距離支援の要となるビーム・キャノンは、ザク・キャノン同様、ランドセルの右上に1門のみ搭載する。機体正面から見た場合、右の肩口から砲がのぞくスタイルも同じである。ビーム・ライフルと異なりエネルギーCAPは搭載しないようで、MA用を流用したことから考えて、駆動方式はジェネレーター直結式に近いと推測される。ランドセルの左側面にラジエーションユニットが設置されているため、オーバーヒートの可能性を低下させつつ、ビーム・キャノンを連射できる点も優れていた。

なお、ランドセルの搭載により背部に搭載できなくなったビーム・ナギナタは、腰部に移されているため、中距離支援MSとしては格闘戦能力も高かった。

ゲルググ・キャノンでは頭部も換装された。

一般的なゲルググ用頭部との外見上の違いは、角張った形状の外装、地球連邦軍系MSやザク・キャノンなどに見られる頭頂部カメラとなっている。外装まで変更されているのは、任務中の識別や誤換装防止が目的だろう。内部構造の変更点は、補助カメラ



ゲルググ・キャノン頭部。頭頂部補助カメラの追加と外装の変更で印象が大きく異なっている。

の追加、砲撃戦を前提とした別規格のハイブリッド・センサーへの換装である。

ランドセルと同時に頭部も換装されるのには理由があった。ゲルググの火器管制システムは、手持ち兵装や前腕部用オプション火器に対応したもので、中距離以遠では命中精度が高くなかったと考えられる。つまり、大射程のランドセル固定火器であるビーム・キャノンの管制には適していなかったのだ。これは、ショートレンジでの白兵戦闘、いわゆる「有視界戦闘」を重視した汎用MSの宿命といえる。

新型頭部ユニットには、ビーム・キャノン専用の照準装置が組み込まれ、ゲルググの火器管制問題を解消した。これに加えて、ビーム・キャノンのセミ・オートマチック・ドライブを可能としており、パイロットの負担は大きく低減している。ビーム・キャノンを火器管制システムに任せ、パイロットはゲルググ本体の操作に専念することも可能なのだ。ミノフスキー粒子が散布されることを考えれば、火器管制システムに一任した射撃は命中精度に劣るが、必ずしも命中弾を必要としない支援砲撃では有効である。

このように複合砲システムを搭載したゲルググ・キャノンだが、地球連邦軍のキャノン・タイプMSのように、砲支援偏重のMSではない。換装ユニット以外は通常のゲルググと同等で、兵装はゲルググ用を含むMS用装備をそのまま使用できた。

通常、手持ち火器としてビーム・ライフルかジャイアント・バズを装備し、最大兵装時には360㎜ロケット砲（ジャイアント・バズとも）を計2基、両腕に装備可能である。

手持ち火器を装備しない場合は、片方の前腕部に3連装ミサイル・ランチャーを、もう一方の前腕部にカウンターウェイトを兼ねる小型シールド（バックラーシールド）を装備するケースが見られた。なお、3連装ミサイル・ランチャーと小型シールドはゲルググ用の汎用装備であるため、すべてのタイプのゲルググで装備可能だった。

ほかにもゲルググ・シリーズ共用の兵装が存在する。代表的なものではキマイラ隊が運用した火器として、ストックを排除して冷却ジャケットとトリガーガード部グレネードランチャーを増設したビーム・ライフル、パイロットの要請で急造した4発の大型ミサイルを装備したミサイル・ランチャー、前腕部用兵装としてザク・デザートタイプから流用されたラッツリバー社製の3連式ミサイルがあった。

ゲルググ・キャノンを改修したバリエーションとしては、稼働時間の延長と機動性の向上を図ったMS-14C-1Aが配備された。やはりキマイラ隊が装備し、ア・バオア・クー戦に投入されたと伝えられている。

稼働時間の延長は、脛部に増設されたコンフォーマルタンクによって解決を目指した。コンフォーマルタンクは、パイプを介して大腿部に増設されたユニットと連結されており、脛部だけでなく脚部全体に亘った改装が行われたと思われる。

機動性の向上は、新造された高機動型ランドセルで達成された。このランドセルは、サイドスラスターを設けるなどゲルググ高機動型用に近いモデルで、高機動仕様に特化する

ためかビーム・キャノンを廃止している。ゲルググ・キャノンの高火力／中距離支援機としての側面が消えてしまうかに思えるが、ランドセル上部左右にジャイアント・バズなどを装備するラッチがあり（装着したままで発射可能かは不明）、必要に応じて火力を増強することが可能であった。

ゲルググ高機動型、ゲルググ・キャノンの運用

ゲルググ高機動型とゲルググ・キャノンが活躍したのは一年戦争末期、早くてもゲルググ先行量産型がロールアウトしたU.C.００７９年10月に試験運用が始められたとされる。このため、実戦で運用された期間は極めて短い。

両機を運用した部隊として有名なのがザンジバル級機動巡洋艦ＣＣＭ-91《キマイラ》とムサイ級軽巡洋艦3隻を含む計5隻の艦艇で編制されたキマイラ艦隊である。艦隊名が示すように、旗艦は《キマイラ》が務めた。キマイラ隊と通称される突撃機動軍所属の同隊は、ＭＳパイロットにエースばかり31名を集めた超高練度の部隊として知られる。

シャア・アズナブル大佐指揮の独立第３００戦隊同様、ニュータイプ部隊として期待されていたキマイラ隊は、装備、人員の双方で優遇されており、技術・整備関係者だけで

キマイラ隊のエンブレム。隊設立時にア・バオア・クー防空戦隊の部隊章が引き継がれた。

も、ジオン公国軍の技術士官と整備兵、各社の技術陣、合わせて3百数十人を擁した。配備されたMSは、ロールアウトしたばかりのゲルググ先行量産型25機の内の24機だった。

キマイラ隊編制のために召集がかけられたのは、U.C.0079年10月下旬といわれ（10月26日という説もある）、ゲルググ先行量産型の完成を意識したものだったことは間違いない。なお、旗艦《キマイラ》の改装作業は、同年9月末からサイド3の第3ドックで3週間をかけて行われた。

キマイラ隊が、コレヒドール暗礁宙域における練成、慣熟訓練または運用試験に用いたゲルググ先行量産型は、各パイロットに合わせたチューニングが施されると共に、ゲルググ高機動型またはゲルググ・キャノンに換装されている。この結果、キマイラ隊は12機のゲルググ高機動型と15機のゲルググ・キャノンを装備することになったが、これではゲルググ先行量産型の配備数24機との計算が合わない。

この理由として、状況に応じてゲルググ高機動型とゲルググ・キャノンを換装していた機体の存在が考えられる。第1中隊長を務めた〝真紅の稲妻〟ジョニー・ライデン少佐はゲルググ高機動型とゲルググ・キャノンを与えられたといわれているが、実際に任されたのは1機のみで、ミッションごとに換装していたとも考えられ

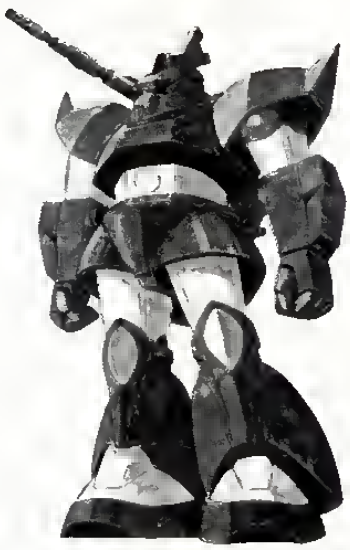
ゲルググ・キャノンのジョニー・ライデン少佐機。マーキングも高機動型とは異なる。

る（ライデン少佐のゲルググ高機動型とゲルググ・キャノンは、それぞれ塗装パターンが異なるため、2機を与えられていた可能性も残っている）。

ライデン少佐のほかに2機種を使い分けていたパイロットの名は知られておらず、ジェラルド・サカイ大尉とトーマス・クルツ中尉は専らゲルググ・キャノンを使用したようだ。

ゲルググ高機動型を前衛、ゲルググ・キャノンを中距離支援というように地球連邦軍的な運用がなされたキマイラ隊のゲルググは、地球連邦軍の小惑星基地襲撃、ア・バオア・クーに向かう地球連邦軍宇宙艦隊への奇襲、ア・バオア・クー戦などに投入され戦果を挙げているが、多くは未帰還となっている。なお《キマイラ》は拿捕されたといわれる。

キマイラ隊以外にゲルググ系MSVを使用したパイロットとしては、ア・バオア・クーからの撤退戦時、自身のゲルググ先行量産型に増速用ブースター・パックとゲルググM用110㎜速射砲を装備したというシャア・アズナブル大佐、戦後「水天の涙作戦」時にデラーズ・フリートからゲルググ高機動型を受領したとされる「インビジブル・ナイツ」隊長エリク・ブランケ、ゲルググ・キャノンに搭乗したといわれる〝ワンショットキラー〟ブレニフ・オグス中佐、同じくゲルググ・キャノンを駆ったと伝えられる「鉄のサソリ」のクランベリー少佐らの名前が知られている。



一般用塗装とされるゲルググ・キャノンは、グレーを基調としたカラーリングだった。

「パーフェクト」の名を冠されたジオング系MSV

「脚」を装備した第1試案仕様のジオング

一年戦争終戦までに開発されたMSシリーズには、MSVへと派生したものが多く見られる。その中には、「ジオン（公国）最後のMS」とも呼ばれるニュータイプ専用MS、MSN-02ジオングの姿もあった。

ジオングは一年戦争最後の戦い、ア・バオア・クー攻防戦時に完成度80%でようやく出撃できたMSで、派生機が開発される時間的余裕はないように思える。それでもジオングのMSVが生まれたのは、開発経緯にその理由が求められる。実はジオングのMSVは、設計・製造段階ですでに生まれていたのである。

ア・バオア・クー戦時のジオングの完成度が「80%」といわれる理由は、一般に脚部が装備されていなかったこととされるが、これは正確ではない。シャア大佐が搭乗した機体はほぼ100%の完成度に達していたが——上腕部の装甲などは未装備で、これが完成度80%の理由となっている——、ある側面から見ると「（本来装備されるはずの）脚がな

い」ため完成度は80%程度になったという複雑な事情があった。

そもそもシャア・アズナブル大佐のジオングは、第2試案と呼ばれる仕様に基づいた機体で、最初から脚部を持たないタイプである。脚部はオプション的な位置付けなのである。

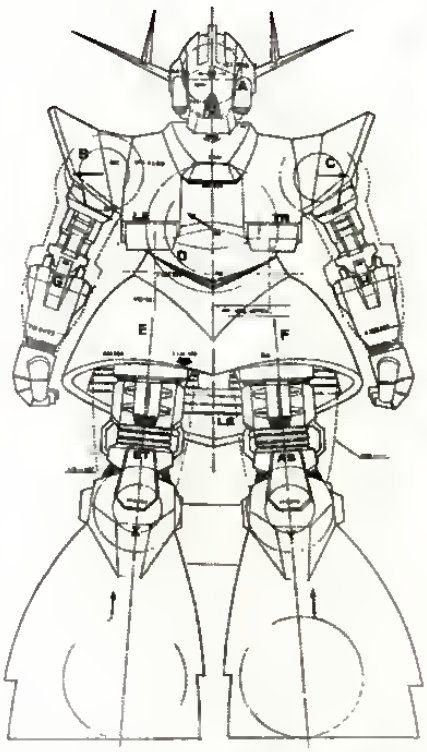
第2試案があるからには第1試案も存在している。この第1試案こそが、ジオングのMSVたるMSN-02パーフェクト・ジオングだった。パーフェクト・ジオングは「脚」を持つ仕様のジオングで、これと比較するとシャア大佐機の完成度は80%になるのだろう。

脚部ユニットそのものはア・バオア・クーで製造されていた。ジオングは第2試案での試作が進んでいたが、開発拠点がア・バオア・クーに移されると、設計陣は再び第1試案に着目し、陸戦用歩行ユニットと呼ばれる脚部ユニットの開発も進めていった。ジオング用脚部の開発は、MSの基本運用形態とされた「歩兵戦展開」にジオン公国軍が拘泥した結果という説も唱えられている。

脚部を装備したパーフェクト・ジオングは全高35m以上の大型機であるため、MSとしての運用は難しく、第2試案仕様と比較した場合、運用性に難があると思われる。MAを運用していたジオン公国軍だが、巨大MSを運用するノウハウが不足していたことは明らかであった。

MSN-02 パーフェクト・ジオング

「パーフェクト」の名を冠されたジオング系MSV



MSN-03の仕様書に記されていたとされるパーフェクト・ジオングの構造図。機体各部が分離するプランが挙げられている。

本機がMA的なMSと呼ばれるのはこれが一因だが、AMBACシステムや陸戦能力を持つことには相応の意味があり、想定された戦闘能力は高度なものだった。

ア・バオア・クー陥落時、要塞内に残された2機のジオングと脚部ユニットは焼失したといわれてきたが、未完成の部品はジオン公国軍が搬出していたようである。搬出されたジオングの部品は、廃棄コロニーを利用した宇宙基地アムブロシアに持ち込まれ、ジオン公国軍残党の手で3号機が組み立てられた。

3号機はパーフェクト・ジオングとして完成し、デラーズ紛争直前のU.C.0083年、地球圏に一時帰還したシャア大佐によって使用されたといわれている。この際のパーフェクト・ジオングの戦闘能力は、ア・バオア・クー戦時の第2試案仕様を上回っていたとされ、地球連邦軍の新型ジム系MSを圧倒したのだった。

なおジオングのロールアウト直後、MSN-03の型式番号を持つ機体の仕様書が提示されたという。これは開発陣が当初想定していた仕様のジオングで、頭部、胸部、腰部、左右腕部、左右脚部の7ユニットに分離し、オールレンジ攻撃を行うものだったが、一年戦争の終結により実機が開発されることはなかった。

MSVとは異なる派生MS群――MSXの存在

「ペズン計画」とジオン公国軍のMSX

「MSX」とは、MSVに次いで存在が明らかになった派生MS群の総称であるMSV同様、ジオン公国軍、地球連邦軍の区別なく「MSX」と呼ばれるが、本稿では地球連邦軍のMSXであるFA-78-2 ヘビー・ガンダムは紹介せず、ジオン公国軍のMSXだけを紹介していく（ヘビー・ガンダムや自走メガ粒子砲バストライナーなどに関しては、次章の地球連邦軍系MSVの項で解説する）。

ジオン公国軍のMSXは、小惑星基地ペズンで進められていた、MSおよび関連機器開発プロジェクト「ペズン計画」で開発されたものがすべてである（研究開発はサイド3やア・バオア・クー、グラナダ等で行われたとする説もある）。

U.C.0079年11月20日に発動されたという「ペズン計画」は、従来のMSの発展型や新設計機などが混在する開発計画だったうえ、生み出された機体は高性能汎用MSや局地戦用MSなど様々で、統一した傾向は見られない。中には実用性に疑問符が付く機体もあるが、当時の技術レベルで見ると極めて高性能なMSが多い点も事実である。

これに加えて、MS-10やMS-12など、存在が不明だった型式番号の機体が多く見られるほか、ビグロのメガ粒子砲を転用したMS搭乗式浮き砲台「スキウレ」や宇宙用サブ・フライト・システムの始祖的な存在である「スクート」が開発されるなど、MS開発史を語る上で重要な意味を持っていることは間違いない。

ドムの系譜に属する局地戦用機、ペズン・ドワッジ

MS-10 ペズン・ドワッジは、ドムをベースに開発された高性能局地戦用／汎用MSである。本機はMS-18E ケンプファーや、一年戦争後にアナハイム・エレクトロニクス社が開発したAGX-04 ガーベラ・テトラに近い突撃型MSという思想の下、開発されている、しかし、機動性ではなく重装甲と重火力によって突撃能力を担保していた。

外見は開発母機となったドムに近く、格闘兵装としてロッド状のヒート・サーベルを、メイン・ウェポンとして改造型の専用ジャイアント・バズを装備する武装形態もドムのそれを踏襲している。ただし、シルエットはよりマッシブになった印象が強く、耐弾性の向

スキウレ

上をうかがわせるほか、兵装としては従来のMS用火器より明らかに強力な8連装420㎜ロケット砲や2機1組で運用するビーム・キャノンが用意されており、重装甲、重火力による突撃型というコンセプトが伊達ではないことが見て取れる。

量産は見送られたようだが、少なくとも1機が試作され、終戦直後にグラナダ近傍で活動したという説がある。

なお、本機の名称の「ペズン」という冠は、ドムの直系発展機MS-09Gドワッジと区別するためのものだった。

ザクII改造の高性能機、アクト・ザク

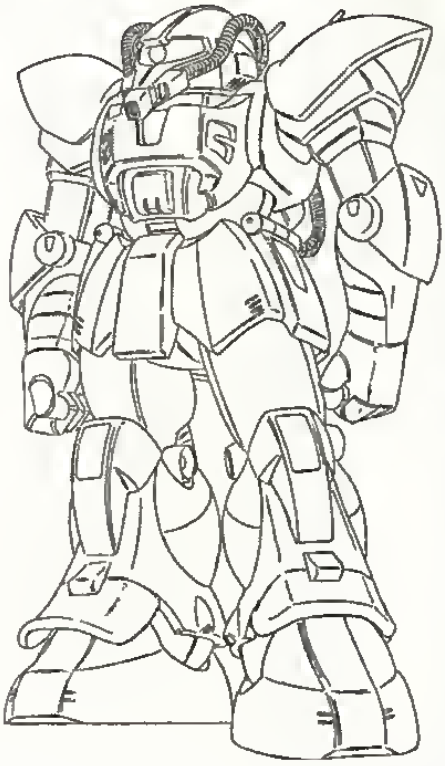
MS-11アクト・ザクは、型式番号こそMS-06ではないが、ザクIIを大幅に改造した高性能MSである（型式番号は当初のゲルググのを仮ナンバーとしている）。ザクIIの特徴のひとつである生産性を維持しながらも、攻撃力と機動性が著しく向上しており、ジオン公国軍MSの中でも最高の性能を獲得していた。

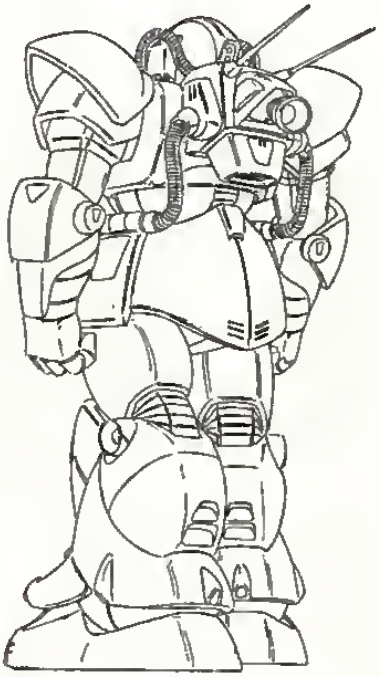
本機の攻撃力を支えている装備が、高出力ジェネレーターの搭載によって使用可能となったビーム・ライフルおよびビーム・サーベルである。一説には、U.C.0080年代中期に実用化された地球連邦軍主力MS、RMS-106ハイザックのビーム・ライ

フルの原型となったALBERT社製モデルを装備したといわれる。ほかにも実体弾兵装の専用ブルパップ・ガンや専用ヒート・ホークが用意されており、エネルギー消費の低減や稼働安定性を求める場合は、こちらを装備したと考えられる。

機動性向上のために投入された技術が、地球連邦軍のRX-78-3 G-3ガンダムなどで採用されたマグネット・コーティングだった。マグネット・コーティングの効果は絶大で、一説にはリミッターが必要なレベルにまで機動性が向上していたという。

本機の駆動システムがジオン公国軍標準の流体内パルス・システムではなく、地球連邦軍と同じのフィールド・モーターだという説の根拠は、このマグネット・コーティングである。マグネット・コーティングはフィールド・モーター用の技術であるため、流体内パルス・システムとの相性が悪いのである。アクト・ザクの駆動システムが流体内パルス・システムなら、機動性の向上は限定的になったことは間違いなく、本機の優れた機動性の





MS-11 アクト・ザク

サブ・フライト・システムを用いて出撃するアクト・ザク。これらはグリプス戦役期に地球連邦軍が運用した機体で、実戦にも投入された。

要因を他に求めなければならなくなる。

火力、機動性の大幅な強化に対して、耐弾性はほとんど向上していない。このためゲルググ用シールドを装備した例もあったといわれる。地球連邦軍のRGM-79L ジム・ライトアーマーやRX-81LA ジーライン・ライトアーマーに近い発想の機体だったとも思われるが、いずれにしてもザクⅡの高性能化の限界を示している機体ともいえる。

一年戦争末期から終戦直後にかけて、グラナダ特戦隊のマレット・サンギーヌ大尉がアクト・ザクを使用したといわれる。そのサンギーヌ大尉機は頭部にマルチブレード・アンテナ、または角飾りを装備していたとされている（ゲルググ用シールドを装備したものサンギーヌ大尉機）。

本機の性能は一年戦争後、地球連邦軍に高く評価され、オーガスタ研究所などに複数の量産機が配備された。なお、この際の武装はハイザックのものだった。

自走砲的MS、ギガン

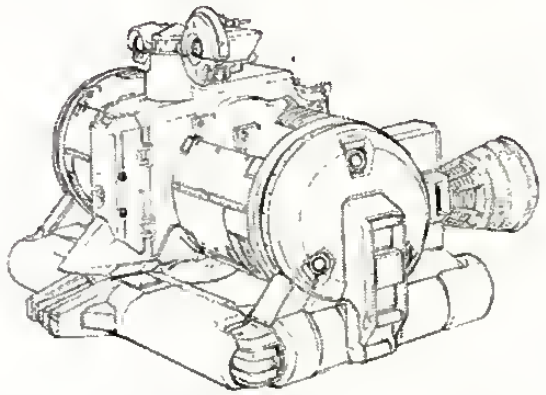
MS-12 ギガンは、要塞や基地の防戦などを想定した拠点防衛用簡易MSである。

下半身は二足歩行ユニットではなく3輪車両となっているほか、兵装は頭頂部の砲塔に装備された180㎜無反動砲と右腕固定の4連装120㎜砲で、ガンタンクに近い機体となっている（装輪式であるため、装軌式のガンタンクより不整地走破能力は劣るだろう）。下半身の車両ユニットは、宇宙用の高機動バーニアに換装することもできた。

ほかにも頭部と胴体の一体構造、簡易マニピュレーターの左腕などの特徴を持ち、徹底した簡易化が図られていたことが分かる。これは生産性を向上させるための処置で、ギガンの生産工程はザクⅡの半分で済むという説もある。

ギガンが開発された背景には、一年戦争末期のジオン公国の国情があるだろう。消耗戦の末、疲弊したジオン公国軍は、地球連邦軍の攻勢に耐えるため、1機でも多くの機動兵器を必要とした。この際、高性能なMSと共に、安価で特定任務に特化した機動兵器が求められた結果、駆逐モビルポッドのMP-02Aオッゴなどが開発されている。一種のハイローミックスで、ギガンにはオッゴと同じく「ロー」の役割が期待された。

実機は量産されたようで、一年戦争末期、サイド3本国のコロニー内防衛用として配備が進められたようである。



オッゴはハイローミックス構想においてギガンとコンセプトが共通する。オッゴの場合は、余剰のMS用パーツを転用することでコストを抑える試みがなされた。

水陸両用MSに酷似した形状の宇宙用汎用機、ガッシャ

MS-13 ガッシャは、水陸両用MSズゴックに似た形状を持つが、宇宙用として開発されたMSで、リック・ドムとの連携による強襲作戦を想定していた（ズゴックの基礎設計をベースとしたともいわれる）。

ただし本機は強襲用MSではなく、近接支援や戦闘を任務とした機体だったようである。そもそも全備重量が116.5tに及ぶうえ、スラスター推力がザクII以下であるため、通常の強襲任務には使い難かったと考えられる。

胴体上部に装備された2基の4連装ミサイル・ポッドや、腕部のアイアン・ネイル（コバット・ネイル）から固定兵装に依存した局地戦用機に見えるが、実際には少なからぬ汎用性を持っており、手持ち兵装も用意されていた。

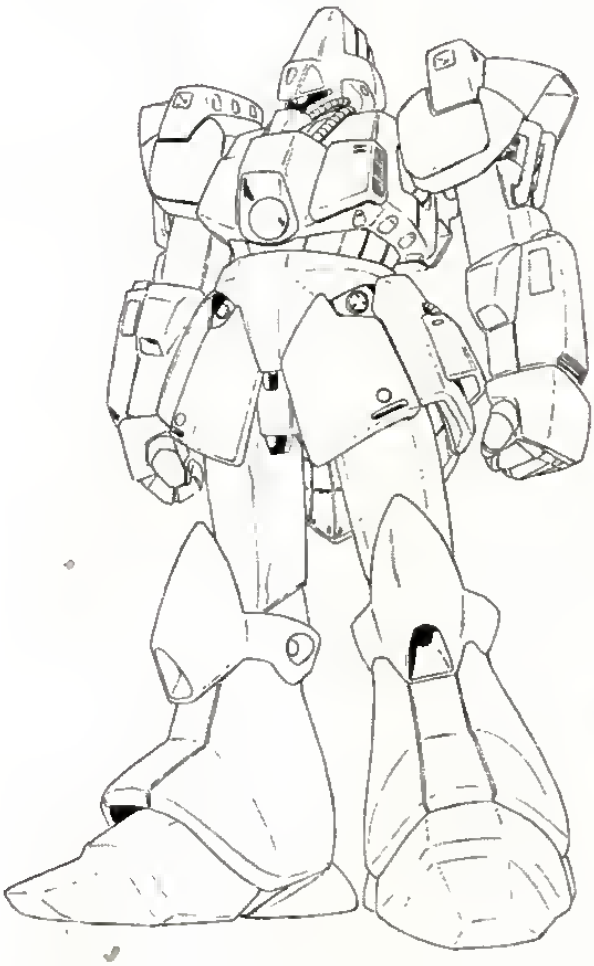
ガッシャ用の手持ち兵装が、「山越えハンマー」と俗称される特殊ハンマー・ガンで、ガンダム用のガンダム・ハンマーと銃が一体化したようなシルエットが特徴となっている。月面での使用を意識した兵装で、重力下では発射されたハンマー（スパイク付きの鉄球）は放物線を描きながら落下するため、障害物や丘陵に隠れた目標を攻撃可能だった。

ゲルググとギャンの複合高性能MS、ガルバルディ

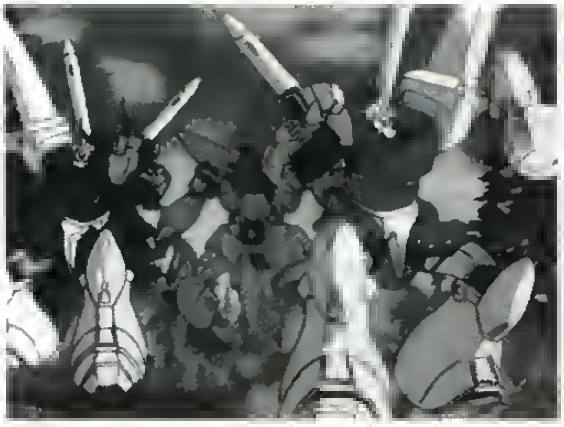
ゲルググの後継機として計画されたMSが、MS-17ガルバルディである。陸戦用のMS-17A（A型）と宇宙用のMS-17B（B型）が研究されていた。

本機の開発においては、ゲルググにギャンの格闘性能を付与する方針が採られた（ギャンを発展させた機体ともいわれる）ほか、ゲルググの生産ラインでの製造を可能とする都合上、パーツの互換性が図られた。ガルバルディが、ゲルググとギャン双方の特徴を併せ持つのはこれが理由である。

ビーム・ライフル搭載能力はゲルググの、格闘戦能力はギャンのそれを継承発展させた高性能機になるはずだったが、大気圏内での飛行を目指したA型は、軽量化やスラスター強化の甲斐もなく失敗し、開発中止に追い込まれた。それでも完成した1機がギレン・ザビの親衛隊に配備され、サイド3で反乱を起こした首都防衛大隊との戦闘に投入された



RMS-117 ガルバルディβ



ネオ・ジオンが運用したガズアル（左）とガズエル（右）。B型に親衛隊向けの改造を施した機体で、ヒート・ランスなどの兵装が追加されていた。

B型を改修したガルバルディβはある程度の数が生産されてグリプス戦役において運用実績を残し、ベース機の優秀さを実証することとなった。

といわれる。

B型は運動性と行動半径に優れたが、パイロットへの負担が大きく、真の性能を引き出せないという問題のため、実用化の目途が立たなかったようである。

戦後、地球連邦軍は接収したB型に改修を加え、RMS-117ガルバルディβとしてルナツーで開発されている（A型がガルバルディαと呼ばれるのは、ガルバルディβの実用化に因っている）。主な改修点は、リニアシートと全天周囲モニターの搭載、熱核反応炉／ジェネレーター、スラスター、装甲の強化などであった。

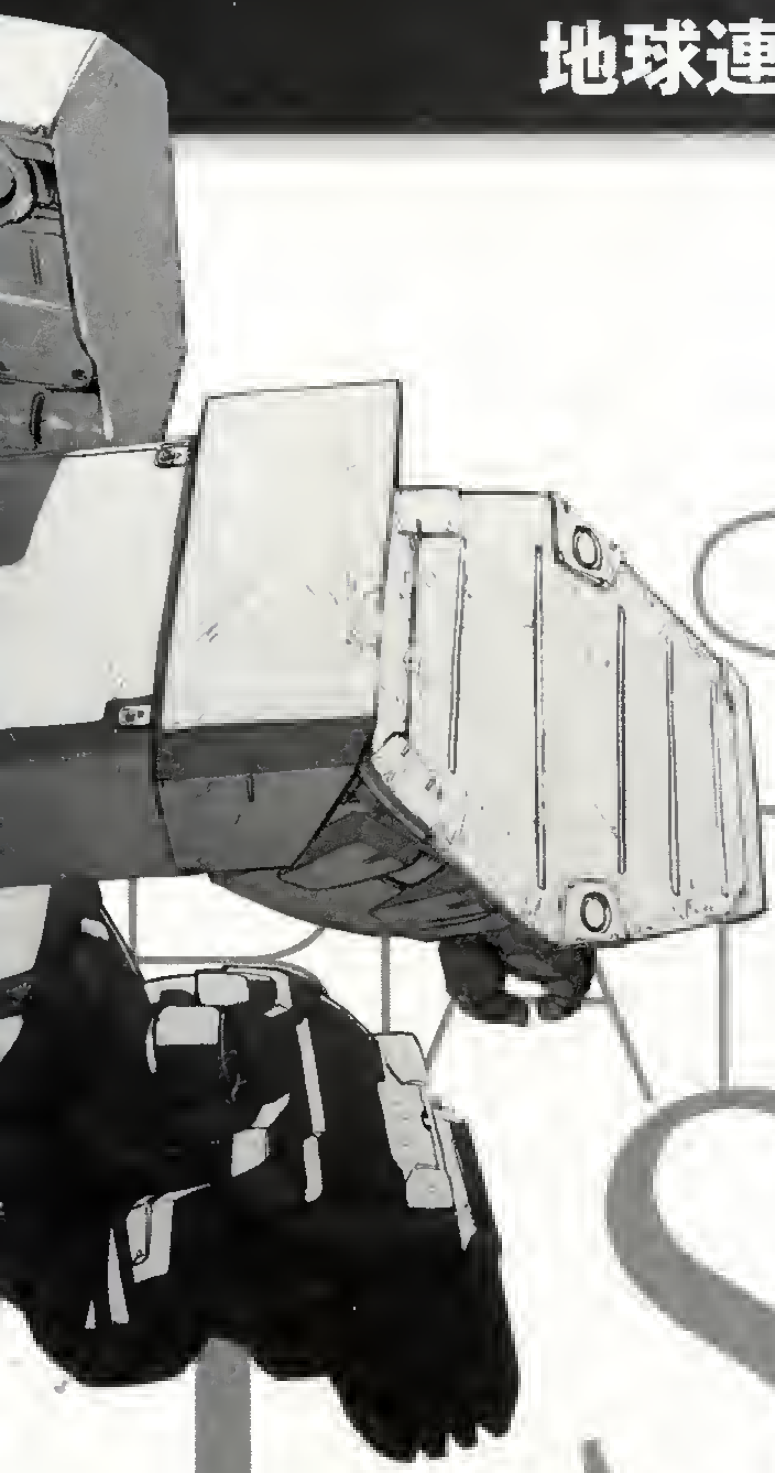
操縦系や耐G機能の改善にもかかわらず、ガルバルディβは操縦が難しい機体だったが、グリプス戦役初期の第2世代MSに匹敵する性能を示し、ガルバルディが時代を超えた名機であることを証明したのだった。

B型の改修はアクシズでも行われたようで、ロイヤル・ガード用のAMX-117R／Lガズアル／ガズエルが、第一次ネオ・ジオン戦争に投入されている。

第五章

試作機と量産機を問わずに開発されたバリエーション機

地球連邦軍系 MSV



E

試作、量産を問わず多数が開発された
地球連邦軍MSの派生機群

一年戦争後期、加速度的に開発が行われた
地球連邦軍のMSV

一年戦争以前からMSを戦力化していたジオン公国軍とは異なり、地球連邦軍は開戦から半年以上が過ぎたU.C.0079年7月に、ようやくガンダムの1号機をロールアウトした。しかも、一年戦争においてMSを前線に配備できた期間は3ヶ月強、主力機のジムを本格的に配備できたのは終戦のおよそ1ヶ月前、MSを大量投入した戦闘に至っては終戦直前のソロモン攻略戦とア・バオア・クー攻略戦だけであった。

つまり、地球連邦軍のMS運用期間はジオン公国軍最後の主力MSゲルググのそれと大差がないのである。このため、MS開発に関する各種ノウハウが少ないため、標準的なモデルの生産、運用だけで手一杯で、バリエーション展開は不可能なように思える。

しかし、地球連邦軍の対応は早かった。一年戦争末期、各MSのバリエーションを次々と計画し、多くを完成させたのだ。

この背景には、全自動設計製造機構「CAD＝CAMシステム」がもたらした開発速度

の高速化、ノウハウ不足から同一機種で複数の仕様の試作機を検討せざるを得なかった地球連邦軍の事情、量産MS配備までの期間短縮やデータ収集を並行して行うための試作機および先行量産期の実戦投入があったことは間違いない。当然、それ以外のファクターにも理由は求められる。

ひとつが、完成した（あるいは研究中の）試作MSのデータを多数の機関や部署に配布し、同時並行的に開発が行われたことである。例えば、「ニュータイプ用ガンダム」として知られるRX-78NT-1アレックスの開発は、ガンダム1号機がロールアウトした1ヵ月後のU.C.0079年8月、オーガスタ基地において開始されている。これはガンダムが初陣を飾ったサイド7遭遇戦の1ヶ月前にあたり、試験運用すらなされていなかった機体の派生機が開発されていたことになる。

これは、主力MSとして開発されたジムが、バリエーション展開を想定した設計だったことも大きな理由とされる。高性能万能機であるガンダムをベースとしながらも、量産に不向きな要素を徹底的にオミットしたジムだったが、設計には余裕があり、局地戦用機や高性能機などへの改装が容易だったのだ。ジムの原型となったガンダムも、コア・ブロック・システムやGファイターとの合体機構、分散配置型ジェネレーターなどから推測できるように、優れた拡張性や冗長性を持っており、前述のアレックス以外にも、多数の派生機の開発計画が進められていった。

ジオン公国軍もこうした配慮はしていた。だが、ふたつのMSによる競争試作、新MSが失敗した際の保険として別のMSの開発、MSとは別カテゴリーの機動兵器であるMAの開発など、機動兵器開発を巡る環境が複雑化した結果、現場の混乱を招くこととなった。優先順位を付けることができなかったともいえる。

対する地球連邦軍は、MSの機種を限定することでリソースを投入できた。この背景には、MS後発組織ゆえに開発できる機種が少なかったと言うよりも、MSの機種そのものを限定する地球連邦軍の基本方針があるといえる。実際、一年戦争後の地球連邦軍もMSの基本機種を少なくする傾向が強く、ジオン公国軍のように多くの機種を開発することはなかった。

次世代機の技術立証／実験機、あるいは超高性能機の試作MS（ガンダム系）、汎用主力機または局地戦用機としての広域配備を目的とした主力MS（ジム系）の区分を重視するのも、地球連邦軍の傾向であった。実際、MS開発ではこれが強く意識されており、試作MSで培われた技術や運用方式が、主力MSに反映されるケースが多かった（ジオン公国軍とは異なり、試作MSをマイナーチェンジした後、量産MSとすることは少なく、地球連邦軍の試作MSは上位機種や技術立証機としての側面が強い）。

地球連邦軍はこうした工夫により、ジオン公国軍が陥ったMS開発の混乱を避け、短期間でのMSのバリエーション展開に成功したのだった。

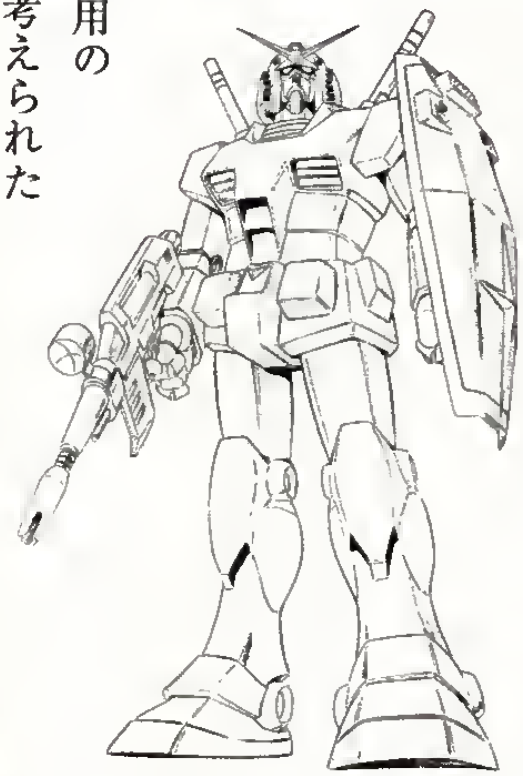
最強のMSシリーズとなった ガンダムのバリエーション

新技術が惜しみなく投入された ガンダム系MSV

地球連邦軍のMS研究開発プロジェクト「RX計画」、そして運用システムの構築や量産機のロールアウトを含む総合的MS関連計画「V作戦」を経て開発された白兵戦用の試作MSがRX-78ガンダムである。当時考えられたあらゆる新技術が採用されており、ノンオプションで宇宙、地球を問わないあらゆる環境に適合し、単独での大気圏再突入すら可能とした高性能万能MSだった。

ジオン公国軍に「連邦の〝白いヤツ〟」として恐れられたRX-78-2が特に有名で、単純に「ガンダム」と呼ぶ場合、アムロ・レイの乗機となったRX-78-2を指すことが多い。ここでアムロ・レイ機の型式番号末尾の「2」という数字に疑問を持つ人もいるだろう。

これはガンダムの仕様を示す数字で、末尾番号が「1」や「3」の機体も存在した（末



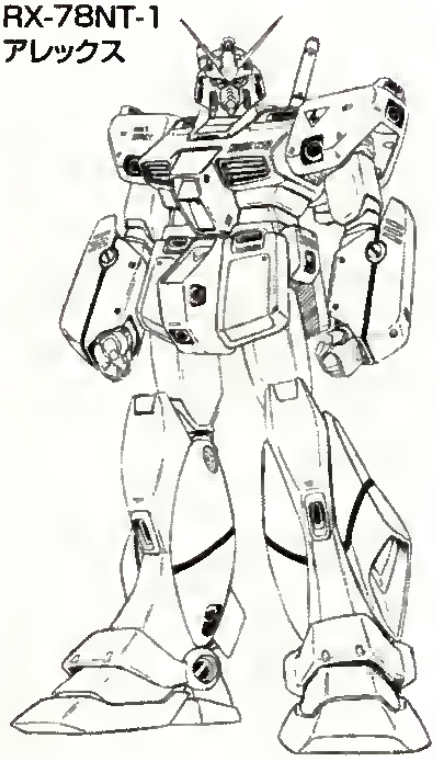
RX-78-2 ガンダム

尾番号は「8」まで存在するという説がある。さらには、アルファベットが付された機体も存在したという。RX-78-5ガンダム5号機、RX-78XXピクシー、RX-78NT-1アレックスなどがそれに該当する）。このRX-78-1とRX-78-3が、MSVに分類されるガンダム系MSの一部である。

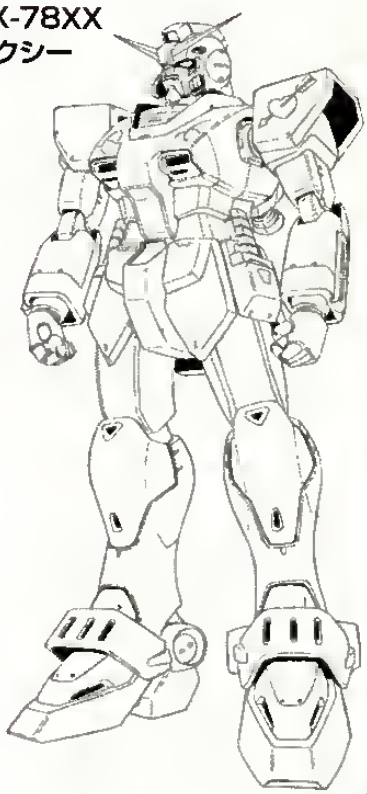
他にもガンダム系MSVには、型式番号冒頭のアルファベットが特殊な機体もあった。これはガンダム本体の仕様分類を示す型式番号末尾の数字とは異なるもので、ガンダム系MSVでは増加装備仕様のFA-78-1フルアーマー・ガンダムが該当する。

これらのガンダム系MSVは、ジオン公国軍のMSV同様、試作型や改修発展型、特殊仕様機などであるが、やはり「ガンダム」ならではの特性を有していた。RX-78-2同様、一般機には搭載されない新技術が投入された高性能MSであり、技術／コンセプト実証機としての側面を強くしていたのである。中には実機が製作されなかったプランも存在

RX-78NT-1
アレックス



RX-78XX
ピクシー



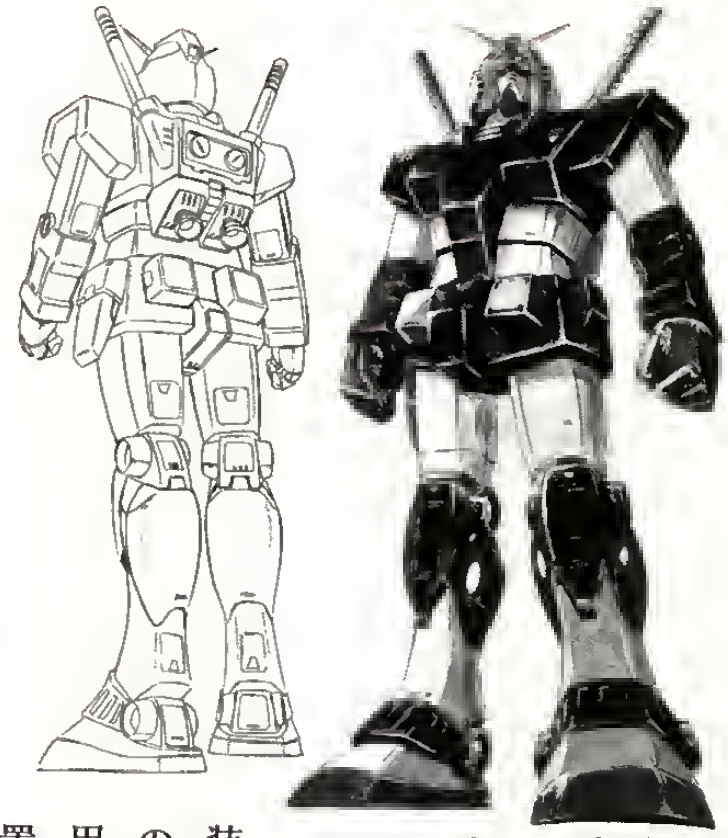
したようだが、ジムや当時のジオン公国軍主力ＭＳを凌駕するスペックを持っており、その性能は間違いなく「ガンダム」のそれであった。

ガンダム・シリーズ自体の絶対数が少なく、ガンダム系ＭＳＶが同一機種の部隊規模で運用されたという報告は知られていない（複数のＲＸ－79［Ｇ］陸戦型ガンダムを装備したコジマ大隊のような例はあるが、ガンダム系ＭＳＶでは確認されていない）。実戦力として活躍したアムロ・レイ機と異なり、ガンダム系ＭＳＶは技術史上、大きな意義を持つ派生機群だともいえるだろう。

ガンダムの第「1」仕様 プロトタイプ・ガンダム

ガンダムの最初のバージョン、つまり第1仕様のモデルがＲＸ－78－1 プロトタイプ・ガンダムである（プロトタイプ・ガンダム以前にＸ－78や縮小実験機といった機体が試作されたという説があるが、真偽は不明）。

ガンダム・シリーズ自体が試作ＭＳであるにもかかわらず「プロトタイプ」の名が冠されているのは、一般的にガンダムとして認知されているＲＸ－78－2の前身に本機が相当すること、ガンダムとして誕生した最初の仕様であることなどが関係している。つまり、



RX-78-1 プロトタイプ・ガンダム

技術的な意味でのプロトタイプではなく、「第1の」あるいは「最初の」ガンダムという意味と捉えていい。

プロトタイプ・ガンダムは、RX-78-2とほぼ同じ外見を持つが、より軽量・高機動の仕様であり、細部にも違いが見られた。具体的には、専用ビーム・ライフルの装備に対応したと思われる、中央が凹んだ形状の前腕部、腰部に装備されたビーム・ライフル用のスライド展開式ホルスター、スリットが配置された足首部装甲が挙げられる。ランドセルおよび腰後部も、カウルや一部装甲を外したようなシルエットを持っていた。

武装も基本的には同じだが、ビーム・ライフルは特殊なモデルだった。プロトタイプ・ガンダム用のビーム・ライフル、つまり世界でも最初期型にあたるビーム・ライフルは、ストラップ付きのハンド・ショットガン・スタイルを採用していた。

腕部との一体化を想定していたが、これはグフのフィンガー・バルカン砲のような腕部内装型ではなく、腕部への装備時にビーム・ライフル後部が前腕部の凹みに固定される搭

載方式を指していると思われる。実際、プロトタイプ・ガンダムの腕部は通常のMSと同じ五本指マニピュレーターで、内装火器は見られない。

そして、ハンド・ショットガン・スタイルのビーム・ライフルの性能だが、後のガンダムに採用されなかったことからも分かるように、決して高いものではなかった。軍部の評価も低く、不採用となった。この結果、RX-78-2では手持ち式のビーム・ライフルが装備されることになったのである。

ここで、プロトタイプ・ガンダムについて誤解されやすいことについて解説する。サイド7遭遇戦の際、サイド7には3機のガンダムが搬入されていた。それらは、すべてがジャブロー基地でロールアウトした最初期モデル、ファーストロットである。3機はそれぞれロールアウト順に1号機、2号機、3号機と呼ばれる。

この1号機がRX-78-1、つまりプロトタイプ・ガンダムで、2号機がアムロ・レイのRX-78-2ガンダム、3号機がRX-78-3G-3ガンダムだと一般的には思われている。サイド7では仕様の異なる3機種のガンダムが、テストに供されたというわけである。しかしこの中で、1号機と3号機に関する考察は間違っているとされる。

実は、1号機と2号機はプロトタイプ・ガンダムの仕様でロールアウトしている。そして3号機はRX-78-2の仕様でロールアウトした。その後、ハンド・ショットガン・スタイルのビーム・ライフルへの評価が芳しくなかったことや、コンピュータ・シミュ

レーションの結果などから、1号機と2号機はRX-78-2へと仕様変更されていた。なお、1号機と2号機の仕様変更は、1機のみ移動が遅れていた3号機がサイド7に搬入された時点で行われている（さらに2号機はソロモン戦後、G-3ガンダム相当の仕様に改装されており、RX-78-1、RX-78-2、RX-78-3の3バージョンを経た、珍しい機体となった）。

つまり、サイド7遭遇戦の時点で3機のガンダムは、すべてアムロ・レイ機と同じ仕様であり、「プロトタイプ・ガンダム」という機体は既に存在しなかったのだ（3機がそれぞれ異なる仕様だったという説が、完全になくなったわけではない）。

従来型のMSを新たな仕様に改装することは珍しくはなく、ジオン公国軍でも高機動型ザクRタイプをR-1Aタイプに改装した例があった。

誤解が広まった背景には、アムロ・レイの乗機となった2号機がRX-78-2であること、3号機が後にG-3ガンダムに改修されたこと、そして1号機の「1」という数字がプロトタイプ・ガンダムの型式番号末尾の「1」と混同されたことなどが挙げられる。

実戦を経験することなく消滅したプロトタイプ・ガンダムだが（テスト・パイロットのファレル・イーハ中尉によって運用されたとする説があるが、信憑性は低い）、「史上初のガンダム」という事実には変わりがなく、陰ながら地球連邦軍を勝利に導いた存在だったのだ。

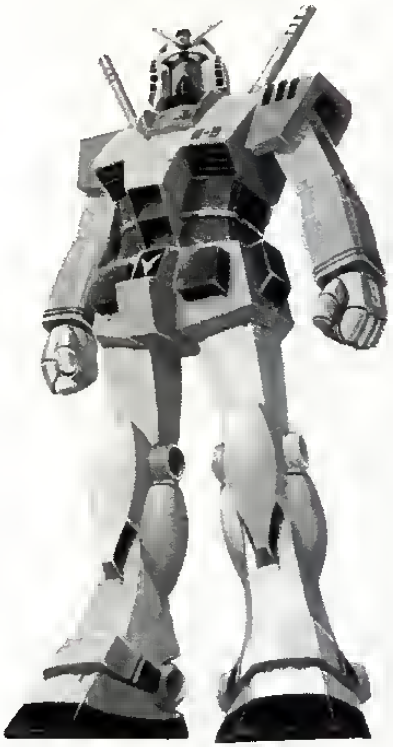
マグネット・コーティングが施された第3の仕様、G・3ガンダム

RX・78・3 G・3ガンダムは、RX・78・2をベースに新技術が導入された仕様である。

外見こそRX・78・2と変わらないが、機動性や出力が大幅に向上したほか、動作を司るコンピュータも更新されており、その性能はジオン公国軍最後の主力MSゲルググは当然のこと、U.C.0080年代前半に出現したMSの大半を上回っていた。外装をほとんど変更しないままでの高性能化は、ザクⅡS型と同様の発想である。

これに加えて、兵装やGアーマー、コア・ブロック・システムなどはRX・78・2と共用でき、旧来機との互換性が高いことも利点だった。兵装の互換性は当然だが、コア・ブロック・システムを廃止したアレックスや4号機以降のガンダムと異なり、前身機のために用意されたシステムや機器を多数流用できる点は、運用面での大きなメリットと考えられる。

G・3ガンダムの開発経緯については不明確な部分が多いが、導入された技術から考えて、



RX-78-3 G-3ガンダム

新テクノロジーをテストする技術立証機としての側面が強い。また、圧倒的な反応速度を付与するマグネット・コーティング処理からアレックスの前身とも考えられ、地球連邦軍のニュータイプ用MSの雛形として認知されている。

改修母機となったのはサイド7遭遇戦後、《ホワイトベース》に回収されたガンダム3号機だった。《ホワイトベース》において、アムロ・レイ機のパーツ交換用として扱われていた3号機だったが、オデッサで第136連隊所属のマチルダ隊に回収された。その後、U.C.0079年8月から開発が始まっていたアレックスとのデータ互換と補完が行われ、ルナツーに移された。再びサイド7宙域に移送されたわけである。

ガンダム3号機は、核反応炉のレーザー加速器が新モデルに換装されたほか、教育型コンピュータもICN（推論型ナビゲーション・コントロール）システムから改良タイプのNICN（新推論型ナビゲーション・コントロール）システムとなるなど、大幅な改装が加えられている。そして、本機の本質を示す画期的新技術こそが、ルナツーで施されたマグネット・コーティングであった。

マグネット・コーティングは、関節部に施すことでMSの反応速度や運動性を向上させる磁性塗膜である。地球連邦系の駆動システムであるフィールド・モーターにしか効果がない、ま

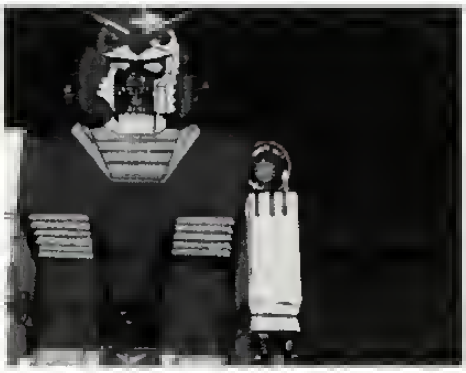
モスク・ハン博士

たは効果が限られるが、関節部に塗布するだけで物理的な干渉を打ち消し、理論上、無限大の加速を可能とする。〝電磁工学の新鋭〟と呼ばれたモスク・ハン博士が、電磁工学とミノフスキー物理学を融合させた末に完成させた技術で、ミノフスキー物理学の応用によりモノポール（磁気単極子）を安定させることで成立している。

こうした処置を経て、3号機はRX-78-3 G-3ガンダムとして生まれ変わった。

反応炉やコンピュータの更新と相まったマグネット・コーティングの効果は絶大で、RX-78-2と比較した場合、本機の運動性は2倍にも達した。マグネット・コーティングのテストヘッドとしての役割を、G-3ガンダムは見事に果たしたのである。

そして、アムロ・レイ機へのマグネット・コーティング処理（RX-78-3への仕様変更）や、設計段階からマグネット・コーティングを採り入れたアレックスの開発、可変機構にマグネット・コーティングを導入した戦後の可変MA開発などに大きく貢献した。本機こそが、一年戦争末期からU.C.0080年代中頃にかけてのMSの基礎技術を培った機



マグネット・コーティング処理を施されるアムロ機。この改修によって、ガンダムは飛躍的な性能向上を実現した。

リボー・コロニーで極秘裏に進められたアレックスの組み立て作業。並行した調整では、過敏なほどの反応性能を示した。

体だといっても過言ではない。

U.C.0079年11月から12月上旬に改修されたと思われるG-3ガンダムは、一年戦争末期、実戦への投入を検討されていた説が有力である。この説によると、ア・バオア・クー戦時、ホワイトベース／ペガサス級強襲揚陸艦SCV-73《ブランリヴァル》の艦載MSとなっていたG-3ガンダムが、ハンガーデッキ内の事故で損傷したとされる。この事故で受けたダメージは大きかったようで、終戦直後、一時的にGアーマーやGブルとしての運用が報告されている。事故の際、MS単体での運用に支障が出たと考えられる。

修理を受けたG-3ガンダムは前線任務に充てられたようで、U.C.0083年にはホワイトベース／ペガサス級強襲揚陸艦《ホワイトベースII》に配備されていたといわれる。同艦にはアレックスの技術を導入された高性能機RGM-79Nジム・カスタムも配備されたが、それ以上の性能を持つMSとして認知されていたようである。開発から3年を経ても、本機の性能はトップクラスだったことがうかがえる。

この他にも、実機の製造に関しては不明だが、FA-78-1B フルアーマー・ガンダム（タイプB）のベースとなったという説が囁かれており、G-3ガンダムの情報は今後も増えるとことが予想される。

SCV-73
ブランリヴァル

火力と防御力を飛躍的に向上させた増加装備仕様
フルアーマー・ガンダム

ノーマル仕様のガンダムに、増設火器、増加装甲、補助推進器が一体化した着脱式重増加システムを装備した機体がFA-78-1 フルアーマー・ガンダムである。全身を覆う鎧を身にまとい、多数の火器を持ったガンダムだと考えていい。

型式番号の末尾に「1」とあるが、これはフルアーマー・ガンダム系列の第1試案という意味で、プロトタイプ・ガンダムがベースとなったわけではない。増加システムが搭載されるガンダムは、RX-78-2が想定されたと思われる。

補助推進器が搭載されたとはいえ、万能機としてのガンダムの特性を損ないかねない重増加システム搭載型が計画された背景には、アムロ・レイの駆るガンダムの活躍があった。

サイド7遭遇戦以降のアムロ・レイ機の活躍は目覚しいものだった。先日まで民間の少年に過ぎなかったアムロが搭乗しているにもかかわらず、ガンダムの性能は圧倒的で、地球連邦軍がほとんど太刀打ちできなかったザクⅡすら、部隊単位で撃破したのである。

こうしたアムロ機の戦果が注目された結果、地球連邦軍は「FSWS計画（Full-armor

FA-78-1 フルアーマー・ガンダム

System and Weapon Systemの略称といわれる）」を推進した。FSWS計画では、少数精鋭部隊での運用を想定した、強化仕様のガンダム・タイプMSが想定されていた。地球連邦軍の戦術は、物量で押し切る印象が強いが、状況によっては少数精鋭部隊が重要であることも理解していたのである。

この際、ガンダム・タイプMS単体に求められた性能が戦艦に匹敵する火力であり、これを受けた技術陣が提示したプランこそ、ガンダムの重増加システム外装仕様だった。ガンダムそのものを改装するのではなく、複合的な増加装備をオプション装備とすることで高性能化を達成しようというものであった（オプションの接続や管制のため、ガンダム本体も改装されるが、ごく小規模なものに過ぎない）。

増加オプション装備型ガンダムとして考案されたプランは3つ存在した。その内、2連装ビーム・ライフル・ユニットと腕部一体型ビーム・サーベル、脚部増加ブースターを持つ火力・機動性向上タイプ、4門のビーム砲と下半身用ブースターを増設したMA的タイプは却下されている。実現性が薄かったのが原因だった。

残されたプランは前述のふたつと異なり、高機動仕様ではない。全身に鎧のような増加装甲と増設火器群から構成された「フルアーマー・オペレーション」を施したタイプで、推進器は補助レベルのものが追加されたに過ぎず、大火力・重装甲仕様となっていた。ジオン公国のMSVにも、大火力・重装甲のグフ重装型があるが、本プランは全装備を着脱

式とした点が画期的で、地球連邦軍独自の発想に立ったMSといえる。

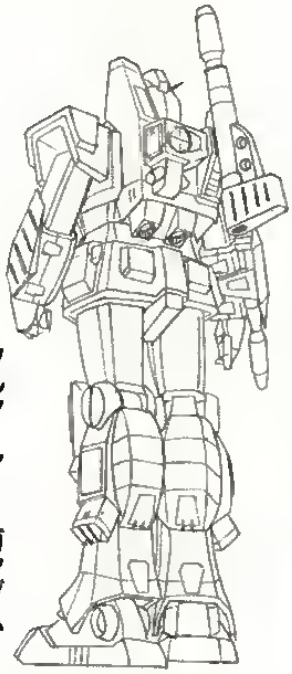
この仕様で計画された機体こそが、フルアーマー・ガンダムである。

フルアーマー・ガンダムでは装甲使用度、つまり被弾率や損耗率が高い部位の胸、背中、腹、腰、肩、前腕、脛および脹脛、足部に増加装甲が追加されている。コア・ブロック・システムを採用したガンダムは、腹部に構造的な弱点があるため、胴体の増加装甲は特に有効と考えられた。比較的脆弱な関節を保護する上でも有効だったと考えられる

装甲の構造については不明であるが、ガンダム・シールドのようにルナ・チタニウム合金や超硬スチール合金、アラミド繊維などを用いた多層構造と推測され、アレックス用として実用化された複合装甲・爆発反応装甲併用式とは異なるようだ。

本機にハイレベルな耐弾性を与えた増加装甲は、単なるオプション装甲ではない。軍部が求めた「MS単独での戦艦級火力」を実現する増設火器群、増設火器用の照準／管制システムやジェネレーター、大質量化に伴う機動性の低下を補う補助推進器などが一体化され、複合的強化システムを構築していたのである。

増設火器は、右前腕の2連装ビーム・ライフル（2連装ビーム・ガンとも呼ばれる）、胴体背部右側には実体弾式のキャノン砲、同右側には長距離観測システム、胴体装甲と脚部装甲にはミサイル・ベイを計4基



フルアーマー・ガンダム背面

（胴体装甲のミサイル・ベイには機雷も搭載可能な模様）を装備する。ガンダムのランドセルが、スラスターを除いて増加システム（追加ジェネレーター内装）に覆われるため、ビーム・サーベルの装備位置は腰部後に変更されたという説もある。

これらの兵装は、通常装備のガンダムに比べて、多彩かつ強力なうえ、フォローできる距離帯も広い点が特徴で、少数精鋭のＭＳ部隊用として適していた。

ランドセル部と脚部に装備された補助推進器は、大重量化による機動性低下を緩和するための装備で、高機動化を目指したものではなかった。ノーマルのガンダムと比べると、機動性、運動性共に低下したようだが、補助推進機によって極端な低機動機にはならなかった（少なくともガンキャノンと同等の機動性は持っていたとされる）。

一年戦争期のＭＳとしては、突出したカタログスペックを誇るフルアーマー・ガンダムだったが、実機が製作されたかは分かっていない。フルアーマー・ガンダムの試験風景とされるフォトが公開されてはいるが、コンピュータ・シミュレーションに過ぎないとの説も有力で、結論は出ていないのが実情である。ガンダム・タイプＭＳと同数のフルアーマー・オペレーションが用意され、ニュータイプ部隊に集中配備する計画もあったようだが、立ち消えになったとされる。

それでも、ハインツ・ベア中尉が本機を駆ってＭＳ32機、艦船2隻のスコアを上げたとも、〝切り札〟タカシ・キタモト大尉に与えられたともいわれ、戦力化された可能性も残

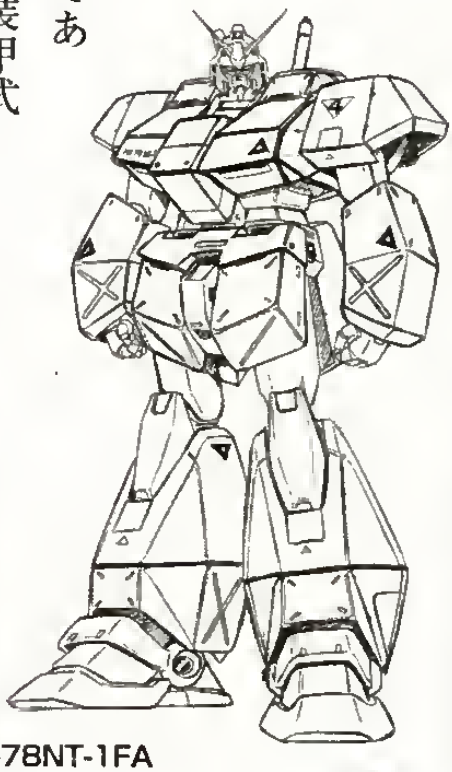
されている。このようにフルアーマー・ガンダムを巡る情報は錯綜している。

本機の系列機やデータ流用機も、少なからず計画、製造されている。

最も有名な機体が、RX-78NT-1FAアレックス（チョバム・アーマー装備型）である。これはアレックスに爆発反応装甲／複合装甲式の増加システムを装備した仕様だが、火器は組み込まれておらず、増加装甲兼補助推進器としてのみ機能する。この増加装甲はRGC-83ジム・キャノンⅡにも転用されている。

アレックスには、フルアーマー・ガンダムに似た増加システム仕様が計画されたとする説もある。これがFA-78NT-1フルアーマー・アレックスで、U.C.0080年代前半に建造されたという説もある。

フルアーマー・ガンダムそのものの派生機としては、FA-78-1Bフルアーマー・ガンダム（タイプB）がある。これは中距離爆撃用として計画された機体で、素体となるMSをG-3ガンダムに変更したうえ、前身機以上の超重武装が施された。想定された戦



RX-78NT-1FA
アレックス（チョバム・アーマー装備型）

アレックスのチョバム・アーマーを転用したジム・キャノンⅡ。重装甲の支援用MSとして高性能を発揮した。

闘能力は絶大で、単独でMSをはじめとする防御網を突破した後、敵艦隊の中核艦を撃沈するというコンセプトの下で開発されていた。なお、実機の存在は不明である。

直接重装甲型のFA-78-2 ヘビー・ガンダムもフルアーマー・ガンダムの系譜に属する機体で、前身機同様、FSWS計画において開発が進められていた。シルエットはフルアーマー・ガンダムに近いが、増加システムに相当するデバイスはMSと一体化しており、機体の大部分は再設計されている。通常仕様のガンダムとフルアーマー・ガンダムの中間的な位置付けのMSだったと考えられる。

それでも機動性は高くなかったため、ヘビー・ガンダム用の運搬／支援機として中型戦闘爆撃機ガンキャリーが計画された。これは機能を限定したGファイターと言える機体だった。はやり、ヘビー・ガンダム、ガンキャリー共に実機が製造されたかは不明である。

ヘビー・ガンダムに次ぐFA-78-3の型式番号を持つ機体としては、フルアーマー・ガンダム7号機（フルアーマー3号機ともされる）があった。型式番号末尾の数字が「3」であるにもかかわらず「7号機」なのは、RX-78-7 ガンダム7号機が素体となっていたためである。

ガンダム7号機は、フルアーマー・オペレーションの装備を前提に開発されたMSであり、増加システムはフルアーマー・ガンダム用をベースとしつつ、よりシステマチックかつ強力なものとなった。また、フルアーマー・ガンダム7号機にセカンド・アーマーと呼

ばれる大規模デバイスを追加することで、HFA-78-3 重装フルアーマー・ガンダム7号機（単に重装フルアーマー・ガンダムとも呼ばれる）へと発展可能であった。

ガンダム7号機シリーズは基本フレームが製作された段階で終戦を迎え、完成しなかったようだが、一年戦争終戦後、増加システムを含めて完成したという説があり、ジオン公国軍残党との戦闘に投入されたと伝えられている。

FSWS計画は、量産機の開発にも影響を与えた。それがRX-81 ジーライン（単にRX-81とも呼ばれる）である。ジーラインは、ガンダムの性能を維持したままでの量産を目指した試作機とも、アレックスを雛形としつつ、ニュータイプ・パイロットが搭乗した際のガンダムの性能を目標とした機体ともいわれる。

ジーラインは換装による仕様変更を前提としたMSで、RX-81ST ジーライン・スタンダードアーマー、RX-81LA ジーライン・ライトアーマー、RX-81AS ジーライン・アサルトアーマーの3機種を任務によって使い分けることができた。各仕様は追加装備によってフル装備形態となり、さらなる高性能化が可能だった。この仕様変更機構はFSWS計画のデータが反映されたもので、特にアサルトアーマーのフル装備形態は、背部構造を中心にフルアーマー・ガンダムと似たスタイルを持つ。

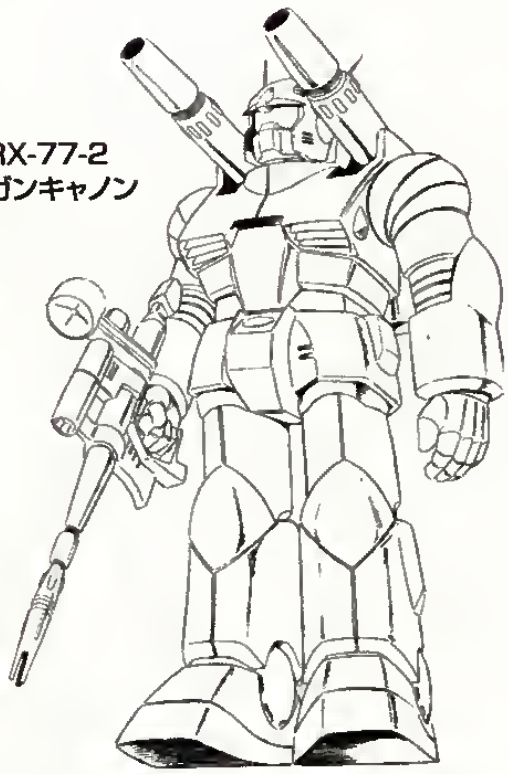
ジーラインは計画のみに終わったというのが定説だったが、実機が製造され、戦後に実戦投入されたとする説も有力視されている。

中距離支援能力を発展させたガンキャノンのバリエーション

支援MSの本道を見失わなかったガンキャノン系MSV

「V作戦」が進展する中、ガンダムと同時期に開発された中距離支援MSがRX-77ガンキャノンである。型式番号順でいえば、初めて二足歩行式の下半身や五本指マニピュレーターを採用した地球連邦軍のMSで、AFV的な機動兵器だったRX-75ガンタンクよりも格段の進歩を遂げていた（ビーム・ライフルに関しては、ガンダムのロールアウト後に追加されたとする説が一般的）。

固定火器として2門の240㎜キャノン砲を装備したこと、格闘戦用兵装を持たなかったことなどから、地球連邦軍が有視界戦闘用兵器たるMSの本質を理解していなかったと批判されるケースもある。確かに、MSとAFVの中間的シルエットを持つガンキャノンは、ガンダムと比べて洗練されているとは言い難い。



RX-77-2
ガンキャノン

しかしガンキャノンは、元々中距離支援用として開発されたMSだといわれており、ザク・バズーカ級の火砲の固定装備も、要求された仕様を満たすための機器に過ぎなかった。地球連邦軍は最初から、MSを白兵戦用と支援用に二分する意図があったのだ。ジオン公国軍はMSの先進組織ゆえに、白兵戦用兵器としての「本質」から抜け出せなかったこと、国力的な問題からMSに汎用／多用途性を求めたことなどから、地球連邦軍のキャノン・タイプMSの存在を察知するまで、支援MSの有用性に気付かなかったと考えられる。

ガンキャノンの機能上の特性は、両肩（正確には胴体部の頭部両脇）に大型火砲を固定装備すること、機動性よりも耐弾性を重視した重装甲などである。これは初期試作型にあたるRX-77-1の時点で達成されており、機動性の低下を抑えつつ重装甲化を目指したRX-77-1A ガンキャノンA、一般に「ガンキャノン」として認知されている先行型仕様のRX-77-2（ホワイトベース隊などに配備されたタイプ）に共通する傾向だった。ガンキャノンの仕様は徹頭徹尾、守られていたのだ。

これに加えて、ガンタンクではドライバーとガナー（砲手）に分離されていた操縦系と火器管制をコア・ブロックのコクピットに集約したうえ、役割が増加したパイロットの負担を軽減するため、肩部火砲の追尾やロックオンの自動化が図られていた。火器管制の一部オート化は、頭部に設けられたコ・プロセッサーとセンサー群によるもので、ビーム・キャノンのセミ・オートマチック・ドライブを可能とした、ゲルググ・キャノン用頭部ユ

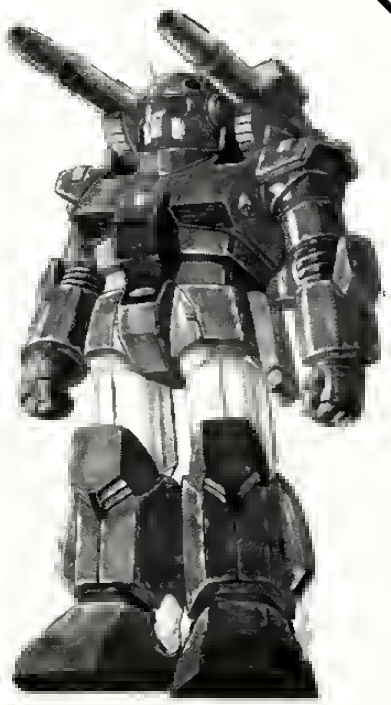
ニットに先駆けた画期的な機構だった。他にも、肩部火器の換装機構によって対応距離帯や支援形態の多用途性が確保されるなど、最初期型の中距離支援ＭＳとは思えないほど、充実した機能を有していたのである。

この傾向が、量産検討機ＲＸ－77Ｄガンキャノン量産型やＲＧＣ－80ジム・キャノンに継承されたのは当然のこと、ガンキャノン系ＭＳＶのＲＸ－77－3ガンキャノン重装型とＲＸ－77－4ガンキャノンⅡでも守られている。他のＭＳが多種多様なバリエーション展開を見せたことに対して、ガンキャノンは中距離支援ＭＳとしてのみ進化したのである。この理由として、地球連邦軍が中距離支援用ＭＳの本質を見誤らなかったこと、ガンキャノンの基本設計が支援用に最適化されていたことなどが考えられる。

重装化のみならず総合性能の向上も目指したガンキャノン重装型

ＲＸ－77－2ガンキャノンをベースとして、攻撃能力やペイロード、推進力などを向上させた仕様がＲＸ－77－3ガンキャノン重装型である。本機が開発された背景には、重装型ＭＳとしての研究と開発の続行と、ＲＸ－77－2で発覚した問題点があった。

ホワイトベース隊での実戦運用において、支援砲撃のみならず近距離戦闘でも優れた性



RX-77-3
ガンキャノン重装型

能を見せたガンキャノンだが、問題がないわけではなかった。

ガンキャノンの240㎜砲は、2門の並列装備、強制水冷式ジャケットなどにより、ザク・マシンガンと同等の連射性能を獲得した。装弾数は左右合わせて40発である。手持ち火器との併用を考えれば、高度な瞬間最大火力と継続戦闘能力を持っていると考えられたが、実戦では必ずしも充分ではなかったようである。

そこでジム・キャノンの量産開始と共に、重装型MSとしてのガンキャノンの研究開発が続行された。実験機およびハイエンド機のガンダムと主力機のジムを明確に区別したように、支援MSも「ハイ」および技術実証機のガンキャノンと、「ロー」のジム・キャノンに分化させようとしていたとも考えられる。単独または同一機種での作戦行動を可能とする点も、ガンキャノン重装型の大きな目的だった。

こうして開発が開始されたガンキャノン重装型では、まずキャノン砲の連射能力と給弾能力が2倍に高められた。キャノン砲の口径は、240㎜のままだったようである。

原型機の肩部火器換装機構も受け継がれており、キャノン砲は、

ビーム・キャノンに換装したガンキャノン重装型。右側に砲を、左に照準装置を装備する。

ガンキャノンⅡと同系のビーム・キャノンと照準装置に換装可能だった。本機のキャノン砲がビーム・キャノンと記述されるケースがあるのは、このためだろう。

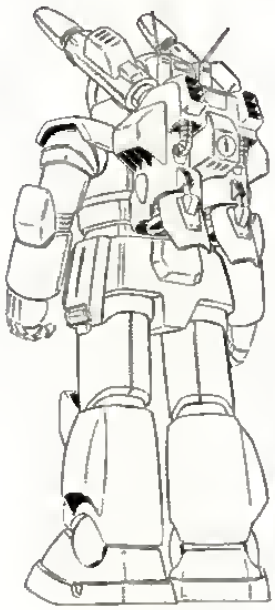
他にも、ビーム・ライフルと頭部バルカン砲2門を原型機から継承、グレネイド・ランチャー（ガンキャノンⅡの腰部に装備されたマガジン装填型ファイア・ナッツと同系列のものと思われる）が追加されており、瞬間最大火力は大きく向上した。

キャノン砲の性能向上は砲システムの大型化を招いたと思われるが、ペイロードの拡大が図られており、機体内に収納可能となっていた。ペイロードの拡大はコア・ブロック・システムの廃止などによって達成しているようだ。

装甲は再整理と強化が行われた。具体的にはコクピット装甲の強化、肩部装甲の追加、肘・膝・脛部装甲の形状変更などが施されている。装甲形状が一部角張ったものになったのは、砲撃時の姿勢安定や生産性を考慮してのものと推測される。

これらの改修により、本機の攻防力は強化されたが、本体重量で8t近く、全備重量では9t以上の重量増加を招いてしまった。地上最高速度も、原型機の時速78km（100kmともいわれる）から69kmに低下したとされ、機動性の低下は明らかであった。

そこで、ランドセルが推進力を強化した大型モデルとなった（砲システムの一部も組み込まれている）ほか、



ガンキャノン重装型 背面

機体各部にバーニアを増設し、機動性の向上を図った。原型機で手榴弾／ハンド・グレネードが装填された脚部ラックは廃止され、バーニアとされたようである。脚部ラックの廃止による補助火力の低下は、グレネイド・ランチャーによって補われていると考えられる。

推進器の改装やバーニア増設によるカタログスペックの向上は大きく、RX-77-2で5万1800kgだったスラスター推力は6万2200kgまでアップした。1万kg以上の推力向上であり、単純推力と推力重量比ではドムすら凌駕していた。

しかし、改装によるバランス悪化の煽りを受けて、機動性は期待されたレベルには達しておらず、カタログスペックと実性能に大きな隔たりができてしまった。結果論ではあるが、本機は火力と装甲を強化した、RX-77-2の順当な性能向上型に止まったのだった。

ガンキャノン重装型は、一般に試作機／技術立証機に位置付けられるが、複数機が生産されており、一説にはガンキャノン量産型の技術ベースとなったと言われる。

一年戦争時の実戦投入に関しては不明だが、戦後、リニア・シートおよび全天周囲モニターへの換装、RGM-79R／RMS-179ジムⅡ用ビーム・ライフルのBOWA社製BR-S-85-C2の装備などがなされ、ジャブローに配備された。グリプス戦役時のジャブロー降下作戦では、エゥーゴ侵攻部隊との交戦が確認されている。

本機の直接発展型としては、RX-77-3Dガンキャノン重装型タイプDがある。コクピットおよび膝装甲の形状の差し戻し、顔部ロールバーの追加、肩装甲の大型化、肘装

ジャブロー降下作戦で確認されたガンキャノン重装型。キャノン砲による砲撃支援ではなく、格闘戦で敵機を撃破していた。

甲の廃止など、装甲が一新されているが、それ以上に変更されていたのが推進器だった。

ランドセルはメイン・スラスターとサイドスラスターのノズル周りが改修されたほか、脚部には大型バーニアが4基設置されており、機動性は著しく向上した。軍部からの評価も高く、ガンキャノンⅡの完成までに少数が生産されたといわれる。

武装はガンキャノン重装型のものに加えて、手持ち火器として専用ビーム・ライフルと、ジム用オプション火器であるバルザック式380㎜ロケット・バズーカが用意された。なお、大型火器携行時にはジャンプ中のバランス維持を目的として、逆の腕に陸戦型ガンダム用シールドを装備するよう義務付けられていたと言われている。

ビーム・キャノン装備仕様のガンキャノンⅡ

RX-77-4 ガンキャノンⅡは、支援火器としてビーム・キャノンを標準装備するガンキャノン系MSVである。

ガンキャノン重装型までの試作ガンキャノン・シリーズでは、支援火器として実体弾式

のキャノン砲を装備しており、この傾向は量産検討機のガンキャノン量産型とジム・キャノンにも受け継がれた（ジム・キャノンはロケット砲）。そもそも、ガンキャノン開発時に実体弾式のキャノン砲が搭載されたのは、技術や運用ノウハウが蓄積されており信頼性が高かったこと、ビームと異なり大気圏内で威力が減衰しないこと（徹甲弾は距離によって貫徹力が低下する）などが理由だった。重力下では砲弾が放物線を描いて飛ぶため、直線的な軌道で発射されるビームと異なり、障害物がある状況でも使用できることも利点だった。

RX-77-4
ガンキャノンII

これに対してビーム兵器は、MS用としては発展途上にあり信頼性が低かったこと、同様の理由とガンキャノンの出力問題でMSへの搭載が難しかったこと、大気圏内では威力が減衰してしまうため、同サイズの実体弾式火器と比べて射程が短かったことなどがネックとなり、ガンキャノンの支援火器としては採用されなかった。

総合すれば、ガンキャノンの開発段階では、実体弾式キャノン砲の方が搭載支援火器として優れていたのである。MS携行用メガ粒子砲ビーム・ライフルは、ガンダムの開発と

共に実用化されつつあったが、ガンキャノンの設計には盛り込まれておらず、水陸両用MSのような水冷式大出力ジェネレーターも搭載できない以上、当時の技術ではメガ粒子砲を固定装備することもできなかった。

しかし、実体弾式火砲も万能ではない。

まず、装弾数の増加が機体のペイロードの圧迫に直結してしまうことが挙げられる。手持ち火器であれば、マガジンの大容量化や予備マガジンの携行で解決可能だが、MSに固定する火器では、構造上、手持ち式火器と同じ解決策を採ることは難しかった。

それ以上に発射時の反動が問題視された。ガンタンク用と同様に、ガンキャノンのキャノン砲は低反動化がなされているが、それでも2門同時発射や連射時の反動は大きく、特に宇宙での姿勢制御では少なからぬ問題となった。地上戦におけるガンキャノンが伏せながら砲撃を行ったのは、全面投影面積の縮小による被弾率低下だけでなく、反動対策の意味も大きかったようである。ガンキャノン量産型に至っては、反動対策として接地式のスタビライズ・ギアを搭載していたが、これも宇宙では効果がなかった。

キャノン砲の無反動化は理論上可能だが、その場合、砲システムや砲弾の大型化という問題を抱えることになる。

これらの問題を解決できる火器は、やはりビーム兵器しかなかった。

一年戦争末期になると、ビーム兵器を取り巻く環境は大幅に改善されており、比較的小

出力なMSでもビーム兵器を安定して稼動できるようになっていた。そこで地球連邦軍は、支援MSの固定火器にビーム兵器を採用し、発射反動問題の解決を目指した。

この結果、ガンキャノン重装型をベースにガンキャノンⅡが開発された。

完成したのは、奪還後のキャリフォルニア・ベースにおいてだが、試作はジャブローで行われたようである。具体的な生産数は不明で、少数生産に終わったと考えられる。

ガンキャノンⅡ最大の特徴は、やはり発射反動の問題をほぼクリアしたビーム・キャノンである。これはガンキャノン重装型で肩部オプション火器として用意されたものと同系列、あるいは同じモデルで、前身機でのテスト後、搭載されたとも考えられる（ガンキャノンⅡでの成果を受け、ガンキャノン重装型のオプションとされた可能性もある）。

それ以前のガンキャノン・シリーズが搭載したキャノン砲と異なり、ビーム・キャノンは右肩に1門のみ、左肩には多目的精密照準システムが搭載された。

ビーム・キャノンは小口径長砲身のモデルで、ビームの集束率と射程に優れることがうかがえる。支援においては「弾をばら撒く」のではなく、精密に照準された長距離ビームを高精度で撃ち込む方針を採ったと推測され、対MS狙撃や対艦攻撃を重視したようだ。

ビーム・キャノン以外の火器は、ガンキャノン重装型と同じでビーム・ライフルも装備する。グレネード・ランチャーは、手榴弾方式のマガジン装填型ファイア・ナッツとなった。ビーム・キャノンとビーム・ライフルは、距離帯や彼我の位置関係、自機の姿勢に

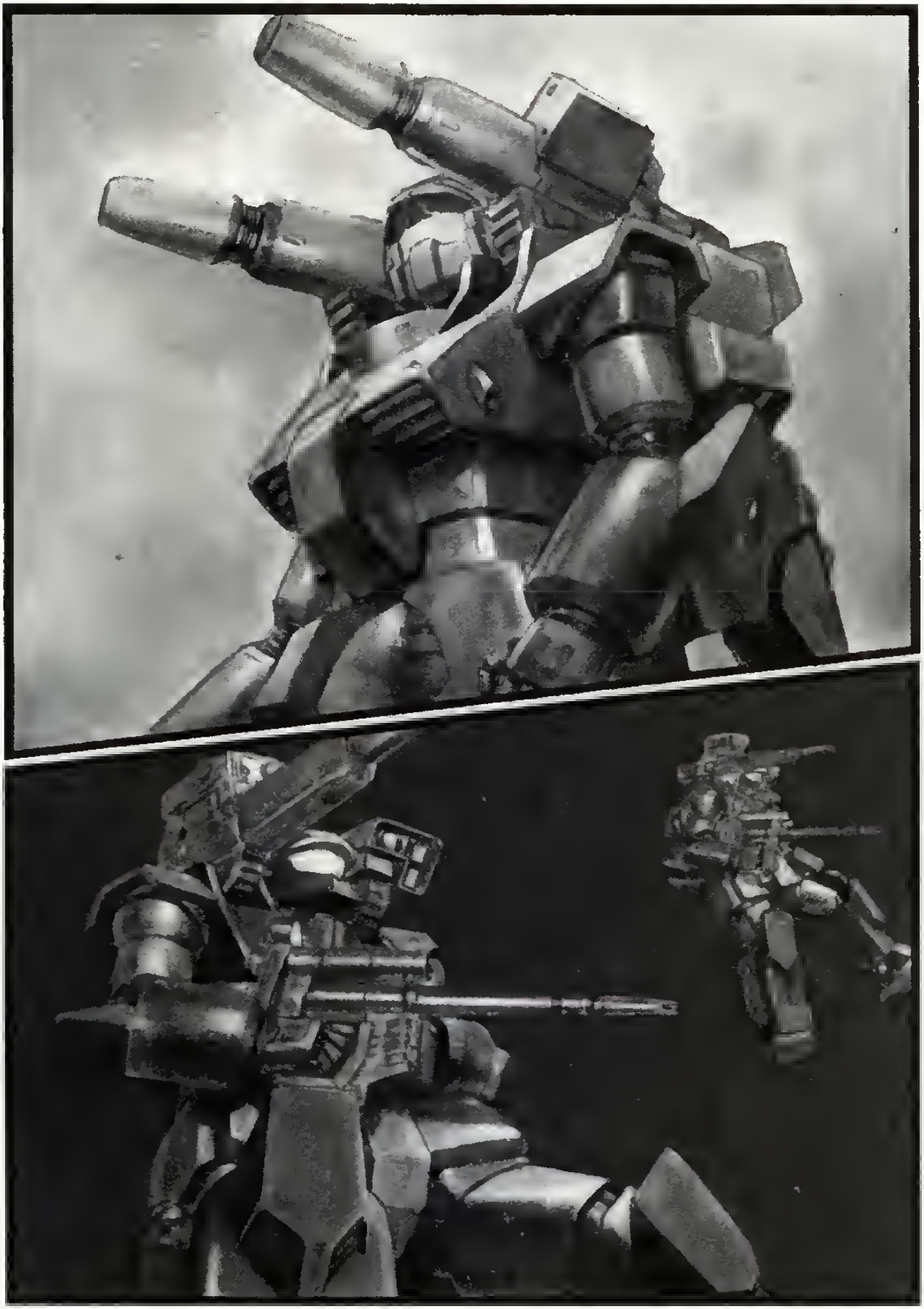
よって使い分けた。ハードターゲットへの集中攻撃時には、併用されたとも考えられる。

支援火器のビーム砲化に伴い、排煙器が不要となったため、ランドセルは推進器強化モデルとされた（ビーム・キャノン用の強制冷却システムも搭載されたと思われる。これらの改装は、実体弾式キャノンへの換装が不可能であることも意味する）。ランドセルの形状はガンキャノン重装型のモデルに酷似しているが、内部は大幅に変更されたようで、本機は短距離ジャンプ飛行を可能とした。その機動性はガンキャノン・シリーズ最高クラスで、ガンキャノン重装型タイプDと双璧を成していたと考えられる。

支援火器システムとランドセル以外の変更点として、装甲形状のリファインが挙げられる。ガンキャノン重装型をベースとしつつも全体的にマッシブなイメージとなり、頭部、腰部、脚部の形状が変更された。

頭部と腰部はシンプル化と外装の一体化が図られており、耐弾性と生産性を両立した仕様と思われる。脚部は膝装甲の大型化、足首部装甲の増設による耐弾性の向上が図られたほか、側部バーニアが増強されたようで、防御力・機動性双方の強化が見て取れる。

実戦投入に関しては行われなかったとする説が一般的だが、一年戦争のジャブロー降下作戦時、試作機が出撃したものの反応炉の出力低下で後退したとも、北米大陸でテストを兼ねて投入されたとも、V作戦評価試験部隊「スレイプニール」に配備されたともいわれており、実態は分かっていない。



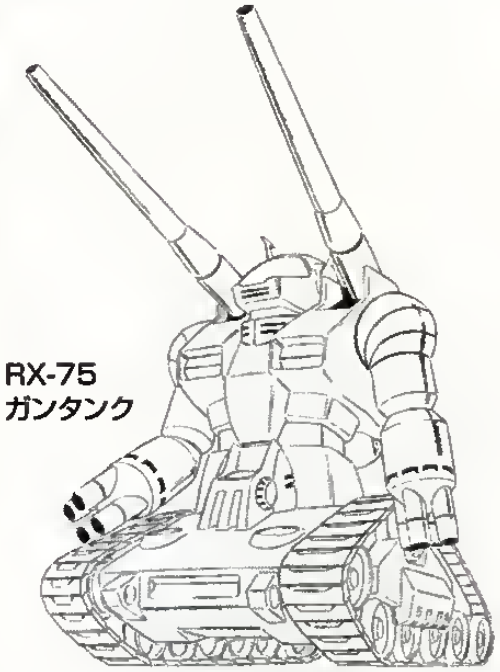
地球連邦軍の非MS系支援用機動兵器とそのバリエーション機

原型機以上の先祖返りを果たした長距離支援機、ガンタンクⅡ

一年戦争開戦から数ヵ月経て、ようやくMSの実力に気付いた地球連邦軍だったが、その一方でMS以外の機動兵器も開発、配備していった。これは、MS実用化までの暫定配備や、MSの定数不足をフォローする穴埋めとしての緊急措置的な側面が強かった。

こうして地上、宇宙を問わず地球連邦軍が送り出した支援用機動兵器は、分類上こそMSに属する機体が多いものの、実態は大型AFVや空間ポッドに過ぎない。陸戦を中心に運用されたガンタンクは、その代表といえる存在である。

「RX計画」で開発されたRX-75ガンタンクは、MSに対する無理解が生んだ兵器と評されるが、長距離支援や対空攻撃では低くない性能を発揮した。これに加えて装軌車両タイプの下半身は、状況こそ選ぶが、二足歩行システム以上のショック・アクションを



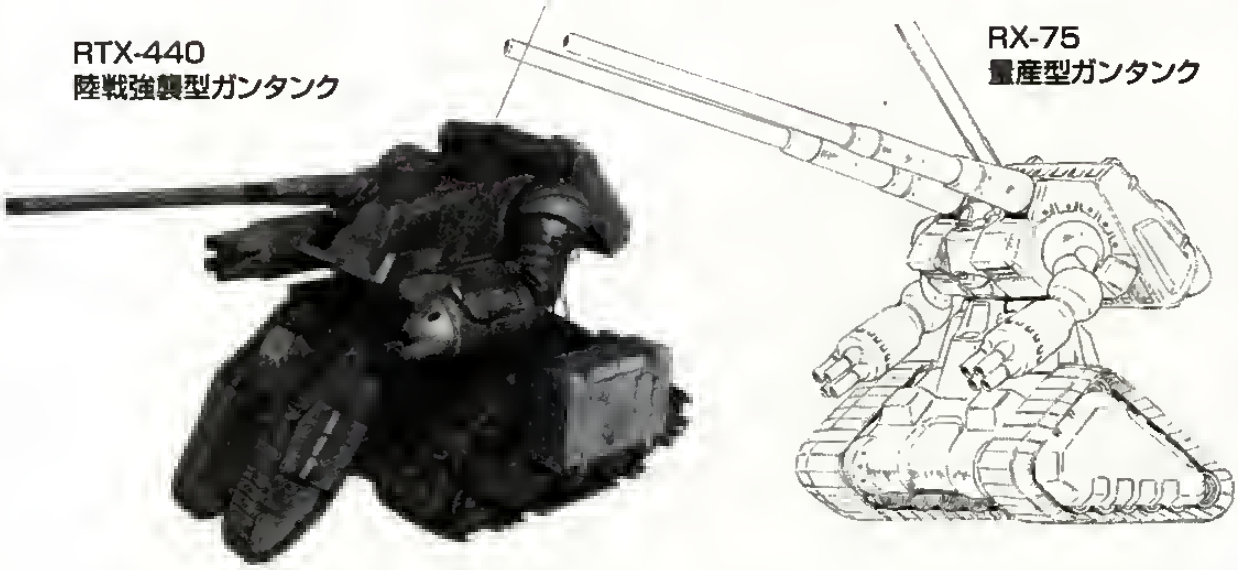
RX-75
ガンタンク

発揮しており、ホワイトベース隊を中心に陸戦での活躍例が知られている。

この結果、量産仕様のRX-75量産型ガンタンク（重機に転用された、いわゆる「ベルゲガンタンク」は量産型ガンタンクの改修機）や、ガンタンク系の始祖と位置付けられるRTX-44を大幅改良したRTX-440陸戦強襲型ガンタンクが開発され、一年戦争後期から末期にかけての地上戦に投入されている。

ガンタンク系のMSVに属する、RMV-1ガンタンクⅡもこうした流れの中で開発された機体であるが、原型機以上にMSへの分類が難しい機体だった。外観こそガンタンクに似ているが、改修機や発展機とは言えない突撃支援用戦闘車両なのである。ガンタンクからAFVとしての機能だけを抽出した、特化車輌といってもいい。

胴体に相当する部位こそ存在し、胸部には地球連邦軍系MSの特徴であるインテークが見られるが、頭部相当部は連装砲塔、腕部相当部は関節が廃止された純粋なラ



RMV-1 ガンタンクⅡ

ンチャーになっており、実態は巨大AFVに過ぎない。運用に車長、砲手、ドライバーの3名が必要といわれる点も、本機のAFV的傾向を証明している。

ただし、頭部相当部両脇の長距離キャノン砲2門、左腕相当部の3連装ミサイル・ランチャー、右腕相当部の4連装ロケット・ランチャー、車輌部機関砲がもたらす火力は一般的なMSを凌駕していたうえ、地上最高速度は時速75kmに達するという説もあり、投入環境さえ選べば強力な兵器だったといえる。

こうした性能が評価されて、一年戦争末期には量産が開始されている。もっとも、大型車ゆえに投入環境は限られており、局地紛争におけるMS支援用突撃砲や拠点防衛用として利用された。

配備は戦後とする説が唱えられる一方で、一年戦争末期、RGM-79Lジム・ライトアーマーやガンキャノンⅡと共に「スレイプニール」隊に配備され、北米で活躍したとも伝えられる。確実視されている配備先がジャブローで、グリプス戦役時にエゥーゴが行ったジャブロー降下作戦では、その姿が確認されている。

エゥーゴのジャブロー降下作戦に際して脱出を図る地球連邦軍部隊の中に、複数のガンタンクⅡが確認されている（写真右下）

空間用支援ポッドの礎となったボール系のMSV

陸戦用支援機としてガンタンク・シリーズが運用されたように、宇宙では中距離支援用の簡易MS、RB-79ボールが配備された。

簡易MSとはいっても、実態はジオン公国軍の簡易機動兵器モビルポッドと同等のもので、球形のボディに一対の簡易マニピュレーターと火器が施された空間戦ポッドに過ぎない。とてもMSと呼べる代物ではなかったのだ。

しかし、ジオン公国軍のMSとミノフスキー粒子の広域散布技術によって、宇宙艦艇と宇宙戦闘機の弱体化を余儀なくされた地球連邦軍は、MS配備までの繋ぎとしてボールを量産、配備するしかなかった。当初は、無理を承知で対MS用戦闘兵器として用いられたボールだが、ジム・シリーズの配備が進むと、ガンタンク用キャノン砲を改修転用した火器や、ジムの4分の1とも言われる低コストが改めて注目され、集

RX-76とされるボール。細部に量産仕様とのわずかな違いが見られるものの、基本構造はこの時点で確立されている。

RB-79G
ボールG型

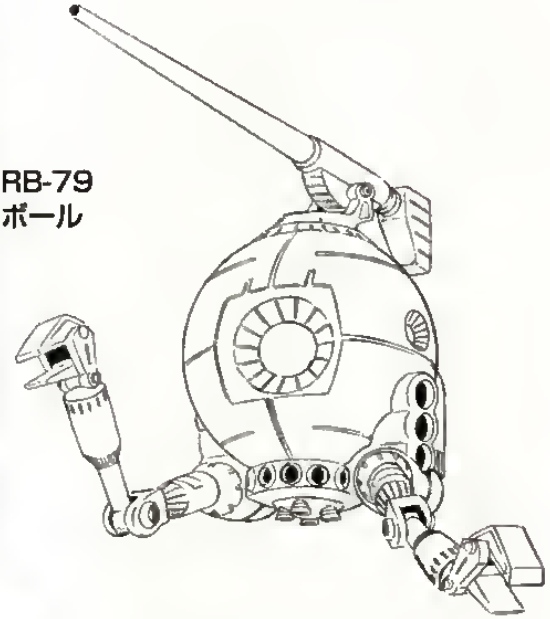
スペース・ポッド
SP-W-03

団戦法を前提とする中距離支援機として多用されることになった。

ボールは180㎜キャノン砲搭載のスタンダードなモデルを筆頭に、180㎜キャノン砲2門を装備したRB-79K ボールK型（先行量産型。ジオン公国軍が近接戦闘型に分類した仕様）、U.C.0080年代前半まで使用された後期生産型のRB-79C ボール改修型が確認されているほか、火器の代わりクレーアンアームを装備したRB-79G ボールG型、水中用のRB-79N フィッシュアイなどが配備されたと言われる。これらボール・シリーズの原型機と試作機が、ボール系のMSVにカテゴライズされている。

ボールの原型となったのは、宇宙用作業機のスペース・ポッドSP-W-03で、非武装ながら球形のボディと一対の簡易マニピュレーターを持つ点は、ボールと同じである。ただしボディは装甲化されておらず、コクピット正面はキャノピー構造となっていた。

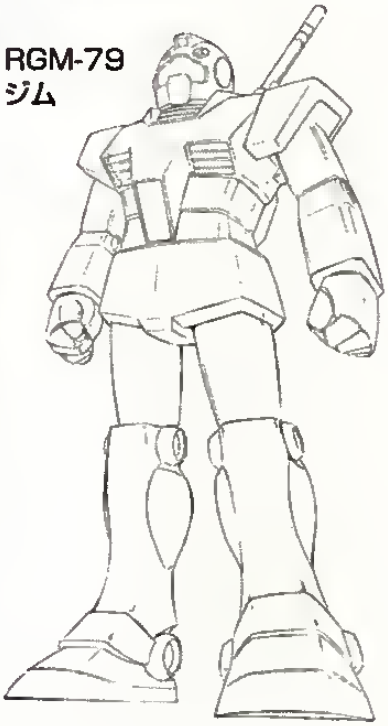
SP-W-03を原型機に、火器の搭載や装甲化などが図られた試作機がRX-76である。量産仕様のボールは、RX-76をほぼそのまま量産化した機体であった。


RB-79
ボール

地球連邦軍的発想に立った主力MSジムの派生機群

先行量産型のジムをベースとしたジム系のMSV

RGM-79ジムは、ガンダムをベースに簡略化を図った白兵戦用の主力MSである。簡略化は徹底しており、頭部ユニットの整理、腰部補助モジュールの排除、大気圏再突入機能の廃止、長距離レーダーの撤去、簡易ビーム・ライフルであるビーム・スプレーガンの採用、ビーム・サーベルの単装化、コア・ブロック・システムの排除などが行われている。


RGM-79
ジム

ここまでの簡素化が進められた背景には、莫大なガンダムの開発コストがあった。ガンダムは、開発当時に考えられるあらゆる機能、技術を盛り込まれた機体で、そのままの仕様での量産を想定したわけではなかった。主力MSに必要な機能を抽出するための、試作機に過ぎなかったのである。

結果、ジムはガンダムの簡易量産機となり、性能の低下を余儀なくされた。しかし、白

兵戦用主力MSとして必要な機能は残されており、生産性も高かった。また、カタログスペックはジオン公国軍のザクⅡやリック・ドムを超え、ガンダムに迫るものだった（ガンダムの性能を維持した量産仕様機として、RX-81ジーラインが試作されたが、未採用に終わっている）。

ジムは、主力MSとして必要充分なスペックを与えられていただけではない。ザクⅡには劣るものの、冗長性に優れた設計がなされており、局地戦用機を含む多様な派生機へと発展可能だったのだ。

ジムのバリエーションは、一年戦争時に確認された機体だけでも、RX-79［G］陸戦型ガンダムと同等に仕様として先行試作量産されたRGM-79［G］陸戦型ジム、ロングレンジ・ビーム・ライフル装備の陸戦型ジム改修機であるRGM-79［G］ジム・スナイパー、冠雪地帯などの低温環境に対応したRGM-79Dジム寒冷地仕様、スペース・コロニー内での運用に適した拠点防衛用のRGM-79Gジム・コマンド（コロニー戦仕様）、ジム・コマンド系列機でスペース・コロニー周辺での空間戦を得意とするRGM-79GSジム・コマンド

オデッサ戦直後の掃討作戦に投入された陸戦型ジム。ジムのバリエーション機の中でも最初期に実戦運用された機体である。

リボー・コロニーに配備されていたジム・コマンド。コロニーを過剰に傷つけないよう、実弾系兵装を採用していた。

ザメルと格闘戦を行うジム改（右）。一年戦争後の地球連邦軍主力MSとして、地上と宇宙の双方で幅広く運用された。

ジム・カスタムはエースパイロット向けの高性能機で運用は限られていた。その一例がデラーズ紛争におけるアルビオン隊である。

宇宙戦仕様（ジム・コマンドスペースとも）、高練度パイロット用として開発されたRGM-79SPジム・スナイパーⅡがあった。

一年戦争後もジムの改修は続けられ、新たに主力MSとなったRGM-79Cジム改、アレックスのデータを反映したハイエンド機RGM-79Nジム・カスタム、ジム・カスタムをベースとしたティターンズ用高性能機RGM-79Qジム・クゥエル、アナハイム・エレクトロニクス社が改装した実験機RGM-79パワード・ジム、グリプス戦役開戦時に主力MSだったRGM-79R（RMS-179）ジムⅡなどが開発されている。

存在が証明されていない一年戦争時の派生機としては、地上戦用のRGM-79陸戦用ジム、乾燥地仕様のRGM-79デザート・ジム、ホバー走行仕様とされるRGM-79F装甲強化型ジム、格闘戦能力を高めた陸戦機のRGM-79FPジム・ストライカー、水中用のRAG-79アクア・ジム、アクア・ジムの強化型であるRAG-79-G1水中用ガンダムなどがあったといわれる。

戦後の未確認機としては、T3部隊（ティターンズ・テスト・チーム）で試験運用され

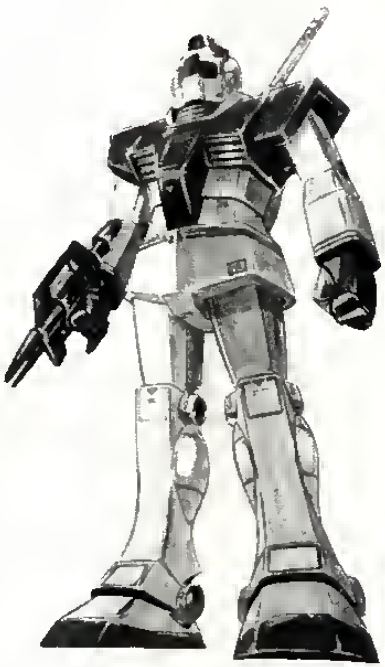
たRGM-79CRジム改高機動型、RGM-79EW早期警戒用ジム、RGM-79SRジム・スナイパーⅢなどの名前が挙げられる。

これらのジム派生機の内、先行試作量産された陸戦型ジムとジム・スナイパー以外のほとんどには、共通点が見られる。その共通点とは、後期生産型に分類されるジムをベースとしていることである。

後期生産型は、本来の設計通りに製造されたジムで、優れた性能を発揮した。ここで連想されるのが、後期生産型が存在するからには「前期生産型」に相当するジムがあるのではないか?ということである。

それが「先行量産型」、あるいは「前期量産型」に分類されるジムである（先行量産型は、さらに前期型と後期型に細分できるが、ここでは割愛する）。先行量産型のジムは、一言で表現するなら「粗悪品」だった。生産を最優先したため、1機あたりのコストは低かったが、スペック通りの性能を発揮できなかったのだ。

当初生産されたジムは先行量産型で、一年戦争末期には後期生産型も生産されるようになったが、サイド3攻略戦用に後期生産型を温存する方針が採られていたため、ソロモン



上は先行量産型に分類されるジム（後期型）。一年戦争で実戦投入されたジムの大半がこの急造機であり、悪評を招く結果となった。

攻略戦やア・バオア・クー戦に投入されたジムは、ほぼすべてが「粗悪品」の先行量産型になってしまった。ジムには性能面の悪評が多いが、すべての原因は粗製濫造された先行量産型にあるといっても過言ではない。

先行量産型とジム系MSVは深い繋がりがあった。ジム系MSVにはRGM-79Lジム・ライトアーマー、RGM-79SCジム・スナイパーカスタム、TGM-79ジム・トレーナーがあるが（これにビーム・サーベルを2基装備したチューン型ジムが加えられることもある）、全機種が先行量産型をベースとしていたのだ。

先行量産型をベースとする改装は、性能上のリスクになるが、ジム・シリーズでもハイエンドの部類に属するジム・スナイパーカスタムとジム・ライトアーマーは、部分的ながらガンダムに匹敵する性能を示した。先行量産型であっても、調整次第ではハイスペックを発揮できることを証明したのだった。

装甲を犠牲にした高機動機
ジム・ライトアーマー

RGM-79Lジム・ライトアーマーは、徹底した軽量化により、高度な機動性を獲

RGM-79L
ジム・ライトアーマー

得したジム系ＭＳＶである。一年戦争末期、ジム・スナイパーカスタムと同時に改修と開発が行われた。

本機は機動性の向上を最重要課題としていたが、単純に機動性に優れることはあまり意味がない。どのようなシチュエーションでの機動性を想定しているのか？　優れた機動性でどのような戦闘方法を採るのか？　そもそも何故、高度な機動性が必要なのか？　などの戦術的な裏付けが必要なのである。

本機が開発された理由は、大きくふたつがある。ひとつはビーム兵器に関する戦術理論、もうひとつは高練度パイロットからの要請だった。

一年戦争末期、ビーム兵器を用いた戦闘において、ある戦術理論が提示されていた。それが、命中率と破壊力によって勝敗が決するというものだった。

ビーム・ライフルの開発に先んじていた地球連邦軍にとって、破壊力の増大はさほど難しい課題ではない。問題は命中率である。

ここで地球連邦軍やそのパイロットたちは、いかに高性能な照準装置を用いようとも、ミノフスキー粒子が散布された環境が有視界戦闘を強要する以上、敵機を確実に補足できる高度な機動性が必要、とする結論に辿り着いたと考えられる。そして、命中弾を得やすい高機動戦闘として一撃離脱が適当であると判断されたようだった。一撃離脱は交戦時間が短いため、被弾率＝敵機の命中率が低下する点もメリットであった。

こうして一撃離脱を前提とした、高火力ビーム兵器装備型の高機動仕様機が模索された。この結果、ジム・ライトアーマーが開発されるのだが、機動性向上の手法が特殊だった。

ジオン公国軍の高機動MSである高機動型ザクは、機動性だけでなくパワーや耐弾性なども向上させており、宇宙用総合性能向上機としての側面が強かった。ゲルググ高機動型に至っては、ランドセル換装機構を利用したオプション装備機である。

つまり、ジオン公国軍の高機動MSは「足し算」で作られているが、地球連邦軍はジム・ライトアーマーで「引き算」による機動性向上を目指した。それは装甲を減格することで軽量化し、それを機動性向上に直結させるという手法だった。同様の手法はジーライン・ライトアーマーでも採用されており、軽装化による機動性の向上は地球連邦軍色の強いものと言える。

また、手法の違いはジオン公国軍の「高機動型＝ハイマニューバータイプ」と地球連邦軍の「軽装＝ライトアーマー」という名称の違い如実に反映されている。

地球連邦軍が軽装化による機動性向上を模索した背景には、改修期間の問題がある。ジム・ライトアーマーが開発された時期は、ジム・スナイパーカスタムとの整合性を考えるとソロモン攻略戦後、早くてもU.C.0079年12月上旬と考えられる。星一号作戦に間に合わせるためには、軽装化を選択せざるを得なかったのだろう。

苦肉の策により高機動化、つまり「命中率」問題をクリアしたジム・ライトアーマーに

は、「破壊力」を獲得するためガンダム用ビーム・ライフルXBR・M・79・07Gが装備された。こうして本機は、ビーム兵器の戦術理論上、最適なMSとして完成したのだった。

もうひとつの開発理由として挙げた、高練度パイロットからの要求は、地球連邦軍MSパイロットの前歴と関係がある。地球連邦軍のMSパイロットには、宇宙戦闘機や大気圏内用戦闘機から転科した者が多く、高機動戦闘は彼らの得意とするところだった。

しかし、ジムは白兵戦を前提としたMSであり、元戦闘機パイロットたちの操縦感覚には必ずしもそぐわなかったと考えられる。そこで、高練度パイロットを中心に一撃離脱の高機動戦闘を可能とするMSが求められ、前述のビーム兵器の戦術理論と合致する中で、ジム・ライトアーマーが開発されていったと推測される。

本機の構造上の特徴は、何と言っても軽量化された機体である。頭部バルカン砲と足首部装甲の廃止、肩部装甲のコンパクト化、胴体部装甲のリファインが行われており、本体重量で1割ほどの軽量化に成功している。

これに伴い耐弾性は著しく低下したが、高練度パイロットに与えられたため、少なくとも搭乗者はあまり問題にしなかったようである。

武装は、前述のガンダム用ビーム・ライフル（ジェネレーター出力などの問題から発射回数は限られる）のほか、ビーム・スプレーガンと特殊ホールド加工が施されたビーム・サーベルである。他にもエネルギーCAP式のビーム・ガンが用意されたといわれる。

ジム・ライトアーマーは一年戦争末期の戦闘に投入され、パイロットとしてはギャリー・ロジャース大尉が知られた。地球でも配備が進んだようで「スレイプニール」隊では前衛の白兵戦用MSとして活躍したと言われている。

同様の手法で改装されたジムとして、ジム・コマンドを原型とするRGM-79GLが存在したとの説が流布しているが、実在したかは不明である。

ガンダムに匹敵する総合性能向上機
ジム・スナイパーカスタム

RGM-79SC ジム・スナイパーカスタムは、火力、耐弾性、機動性などを強化した総合性能向上機である。名称にこそ「スナイパー」の名が含まれるが、遠距離狙撃能力だけでなく、あらゆる性能が向上していた。生産（改修）数は、約50機である。

ジオン公国軍にもザクⅡS型に代表される総合性能向上型MSは存在する。が、狙撃用ビーム・ライフルや遠距離狙撃に対応した火器管制システムまでを装備し、狙撃任務に特化しながらも全体的な性能を向上させた点は、地球連邦軍独自の傾向といえる。

「スナイパー」の名を冠した一年戦争期のジムは3機種存在する。先行試作量産機を小改

RGM-79SC
ジム・スナイパーカスタム

装したジム・スナイパー、先行量産型をベースとしたジム・スナイパーカスタム、後期生産型が母体のジム・スナイパーⅡがそれである。この中でジム・スナイパーのみが俗称で、改修もロングレンジ・ビーム・ライフルへの適性向上が図られたに過ぎない。ジム・スナイパーカスタムとジム・スナイパーⅡが、同様の総合性能向上仕様だった。

ジム・スナイパーカスタムの開発理由は、ソロモン攻略戦の戦訓にあった。白兵戦用MSとして開発されたジムだが、パイロットや先行量産型の質の問題により、充分な白兵戦闘能力を発揮できなかった。この問題を補うため、ジム・キャノンやボールの支援下での集団戦闘を行ったにもかかわらず、である。

しかし、高性能な後期生産型のジムが温存されていたこともあり、この問題は一朝一夕に解決できるものではなかった。そこで地球連邦軍は、先行量産型の問題などに不満を抱く高練度パイロットの意見を取り入れる形で、彼らのジムの高性能化を図ったのだった。

こうして開発された機体が、ジム・ライトアーマーとジム・スナイパーカスタムである。全体の問題を解決できない以上、せめて高練度パイロットには高性能機を与えようとしたのだろう。

ジム・スナイパーカスタムの改修、開発はルナツーとコンペイトウ（旧ソロモン）で行われた。ジム・ライトアーマーとは異なり、本機の改装は全面的な「足し算」で構成されていた。パイロットの要求に従い、格闘および射撃能力の改善、装甲の強化、機動性の向

上が図られたのだ。総合的な性能向上処置だったのである。

格闘および射撃能力の改善は、固定装備の更新から始められた。

まず、左足側面に「ハンド・ビーム・ショット」と呼ばれる小型ビーム・ガンが装備された。これはビーム・サーベルのように、非使用時には機体に装着される火器で、必要に応じてマニピュレーターで使用する。

他にも、実体弾式の収納展開型ハンド・ガンを装備するとの説もある。

ビーム・サーベルは、右前腕部への固定式となった。ボックス・ビーム・サーベル・ユニットと呼ばれるもので、使用時には前腕部ユニットから直接ビーム刃が発生する。ビーム刃発生デバイスをマニピュレーターで掴んでから抜刀する通常のビーム・サーベルよりも、即応性に優れていた。射撃兵装との併用や、両手が塞がる狙撃中に、格闘攻撃を受けた場合を想定した装備である。

ただし、このタイプのビーム・サーベルは、本機とグリプス戦役時の可変MSの一部やU.C.0090年代中期の試作機RX-0ユニコーンガンダム程度にしか装備例がない。手首を使えないため、格闘攻撃の自由度が低下する点が敬遠されたと思われる。

手持ち火器としてはビーム・スプレーガン以外に、専用の狙撃ビーム・ライフルが用意された。「R-4タイプ・ビーム・ライフル」と呼ばれるもので、強化された照準器との併用により、長大な射程と高度な火力を発揮した。

他にも実体弾式狙撃ライフルが用意されたとする説や、ビーム・スプレーガンとの互換性を持つシステムウェポンのBR・M79L・3長距離狙撃用ビーム・ライフル（BOWA社製）が専用火器として開発されたとの説も唱えられている。

R・4タイプ・ビーム・ライフルと同系列の火器とも考えられるBR・M79L・3は、ライフル本体の照準機器を簡素化しつつ、ジム・スナイパーカスタム本体の高性能測距システムに依存した管制機構を構築していた。これに強化型環境センサーと長銃身内蔵のIフィールド・チョークが加わることで、極めて高い命中精度を誇ったといわれる。

これらのビーム兵器の装備に合わせて、MS本体には予備の熱核反応炉が搭載されたほか、腰部に追加冷却ユニットが増設されていた。

ジム・スナイパーカスタムは、火器増設用機構も充実している。腰後部には380㎜バズーカ（バルザック式380㎜ロケット・バズーカのことか）を懸架できるラッチが設置されたほか、ランドセルの上部左右には火器を増設可能なポートが設けられている。ランドセルへの火器増設例として、陸戦型ガンダム用のミサイル・ランチャー2基を装備したシモダ小隊機があったようだ。ただし、これは現場レベルで急造されたもので、火器管制システムとのリンクが不充分だったため、近接攻撃用として使用されたと考えられる。

装甲の強化は、胴体を中心に増厚された前面装甲、格闘戦時に頭部センサーを保護する可動式バイザーによって達成されている。バイザーは長距離射撃時の照準補助にも用いら

れたようである。

機動性の向上は、大型ランドセルと脹脛部補助スラスターが担った。大推力スラスター搭載のランドセルは、ガンキャノンに匹敵する推進力を発揮するモデルで（ランドセル単体で、ガンキャノンの総推力に伍する推力を発生するということだろう）、これに偏向推進器としての機能も持つ脚部補助スラスターが加わることで、高度な機動性を獲得した。

一連の改装を経て完成したジム・スナイパーカスタムは、ガンダムに匹敵する性能を獲得した。ただし、パイロットごとにカスタマイズが異なるうえ、先行量産型のジムの不安定な品質もあって、完全に同じ仕様は1機もなかった。

一年戦争での本機の運用は、開発時期の関係で終戦間際に限られており、ア・バオア・クー戦を中心に使用されている。パイロットとしては、R・4タイプ・ビーム・ライフル装備の「スナイパーモデル」に搭乗したフランシス・バックマイヤー中尉が有名で、他にテネス・A・ユング少佐やロン・コウ少尉の名前も挙げられている。運用部隊としては、ミサイル・ランチャー装備機を運用したシモダ小隊が知られる。

一説には北米に配備され、地球連邦軍同士の内紛でジム・スナイパーⅡと交戦したと伝えられている。

ジャブロー降下作戦において、ジム・キャノンとともに防衛にあたったジム・スナイパーカスタム（左）。下はジムⅡ用ビーム・ライフルのロングサイズモデル。

グリプス戦役期には、ジャプロー基地配備機が確認された。近代化改修を受けた機体で、手持ち火器としてジムⅡ用ビーム・ライフルのロングサイズモデルが用意されていた。

ジム・スナイパーカスタムは、前述の機体を含めて約50機が存在したといわれるが、その内の何機かはチューンナップが施され、別仕様機となっていた。その代表が、RGM-79KCジム・インターセプトカスタムとRGM-79HCジム・ガードカスタムである。

ジム・インターセプトカスタムは、多機能推進ユニット「フェロウブースター」との併用を前提とした迎撃機だった。下半身をRGC-80Sジム・キャノン（空間突撃仕様）のものとしたほか、ランドセルはノーマルのジムのものとされている。なおフェロウブースターは、通常のジムやジム・ライトアーマーでも運用されたといわれる。

ジム・ガードカスタムは、友軍機や艦艇、軍事施設などの防衛用である。敵機の迎撃ではなく、超大型シールド「ガーディアン・シールド」を使用した直接防御が主任務であった。

MSパイロットの育成を担ったジム・トレーナー

TGM-79ジム・トレーナーは、操縦訓練用のMSである。

当初、素人の集まりに過ぎなかったホワイトベース隊の面々が、シミュレーターでMS

の訓練を行ったように、正規のMSパイロット候補生もシミュレーターでの訓練が行われる。しかし、シミュレーターは所詮シミュレーターに過ぎない。

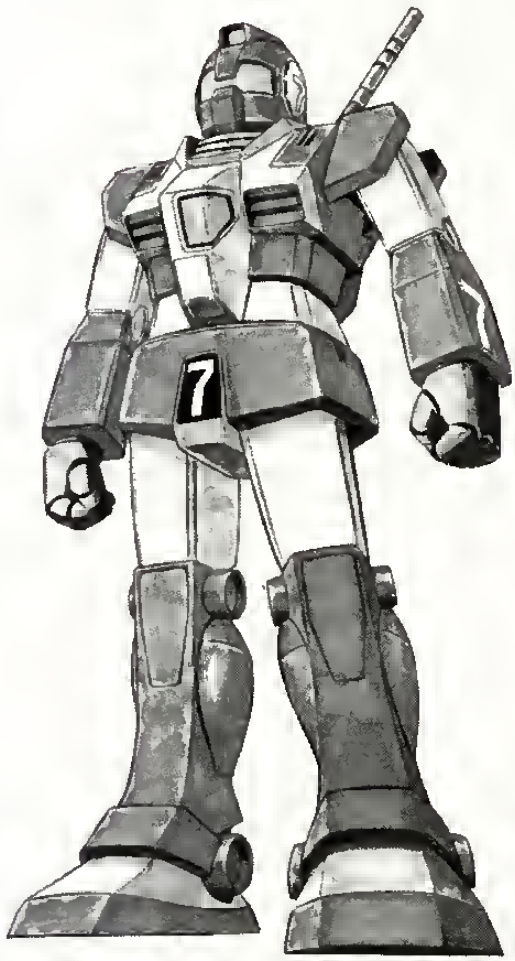
MSが基本的に単座機である以上、パイロット育成の最終課程では、実機での単独訓練が実施される。だが、シミュレーターからすぐに実戦用MSに搭乗するのは無理がある。

そこで、教官と同乗する複座仕様の訓練用MSが開発された。ジオン公国軍は教習訓練用ザクをこの任に充てたが、地球連邦軍ではジム・トレーナーが使用されている。

ジム・トレーナーはノーマルのジムをベースとしつつ、教習訓練に対応するためにいくつかの改装が加えられた。

もっとも重要な改装ポイントが、前述の複座化である。教官が訓練生を直接指導するのは当然こと、訓練生が致命的な操作ミスを起こしそうになった場合、教官が操縦を回復させるためにも複座化は必須だった。

複座化は一般戦闘機のような前後シートではなく、上下シートとされた。ジムの胴体の



TGM-79
ジム・トレーナー

構造上、前後左右にシートを増設するのは難しかったからだろう。

着座位置は教官が上、訓練生が下となる。訓練生のコクピットは、実機と同じ腹部に置かれている。実戦用のジムに搭乗した際、違和感を与えないためと推測される。胸部に位置する教官席は、正面装甲の一部がガラス窓で、直接外部視界を得ることができた。

外見上の特徴としては、装甲の簡略化が挙げられる。ジム・ライトアーマーほど徹底的なものではないが、肩装甲などが簡素化されたほか、全体的に耐弾性も低下していた。

これは軽量化による運動性向上が目的ではなく、低コスト化を前提とした改装だった。ただし、重量バランスは実戦用と変わらないため、操縦時の違和感は少なく、運動性も落ちていない。

兵装も実戦用に近く、頭部バルカン砲こそ搭載していないが、ビーム・サーベルを標準装備するうえ、手持ち火器も装備可能だった。模擬戦用装備の使用や、演習が想定されていたためである。ただし、装甲の劣化もあって戦闘能力は低く、実戦への対応は難しかった。

それでも、MSとしての基本性能は持っていたうえ、複雑な作業を可能とする五本指マニピュレーターも搭載していたことから、後方部隊に配備後、作業用として運用された例も多かった。

「ジム」の名を持ちながらもジム・シリーズには属さないMSV

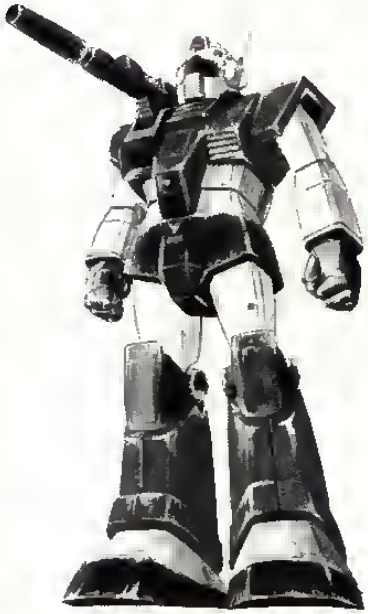
中距離支援用の量産MS
ジム・キャノン

RGC-80 ジム・キャノンは、中距離支援機として量産されたMSで、MSVに分類される機体のひとつである。

機体名や頭部などの形状、ジムとの部品共有率が60%に達することから、ジム・シリーズのひとつとされるケースもあるが、実際にはガンキャノンの簡易量産機である。

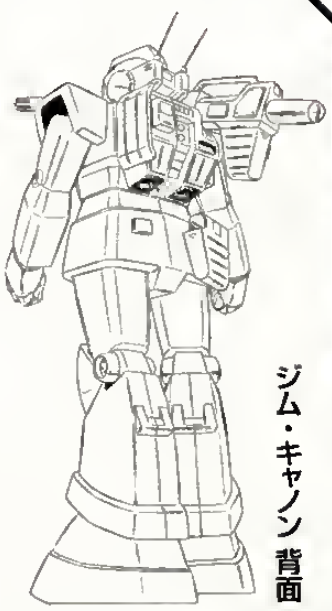
試作機に相当するガンキャノンがそうであるように、ジム・キャノンも中距離支援MSとして開発された。白兵戦用のジムを砲支援するためのMSである。

ガンキャノンの支援砲撃能力を高く評価した地球連邦軍は、ガンキャノンの量産化を意図したが、ガンダム同様、高コストなため大量配備は難しかった。そこで、ガンキャノン系パーツの占有率を下げつつ、可能な限りジムの部品を流用した、低コスト



RGC-80 ジム・キャノン

「ジム」の名を持ちながらもジム・シリーズには属さないMSV



ジム・キャノン 背面

ジム・キャノン
キャノンパーツ

の支援MSの開発が行われた。

こうして試作されたのが、試作1号機のRGC-80-1ジム・キャノン・テストタイプである。この機体はボディこそジムをベースとしたが、360㎜ロケット砲を2門装備し、頭部はガンキャノンのものを流用していた。これに加えて、カラーリングが赤だったため、外観はガンキャノンに似ていたとされる。

だが、2門の360㎜ロケット砲がトップヘビーを招き、安定性を欠いた。結果、試作1号機は破棄され、ロケット砲を右1門とした試作2号機が製作されている。

試作2号機も地上での安定性にわずかな難があったが、膝下にロケット砲使用時のカウンターウエイトを兼ねる分割式増加装甲を装備することで、問題は解決された（脚部の分割式増加装甲は、実戦での交換性を考慮し、左右分割方式とされた）。ロケット弾の装填方式が、デタッチャブル・マガジンとなったのも試作2号機からである。

こうして、試作2号機はほぼそのまま量産化され、今日知られるジム・キャノンが誕生した。

ジム・キャノンの構造はジムのそれに近く、右肩の360㎜ロケット砲と脚部の分割式

増加装甲を除けば、ノーマル使用のジムとほとんど変わらない。頭部のスーズ79・A式アンテナと腰部装甲の形状、腰部後のロケット砲用弾倉ラックが異なる程度である。

ジム・キャノンは、一年戦争終戦までに48機しか生産されなかった（58機とも）。ハイパー・バズーカ装備のジムが支援を担ったこと、宇宙用支援機としてボールが大量生産されたことなどが理由と考えられる。

48機の内、14機が星一号作戦のため宇宙へ、19機がアフリカへ、6機が北米へ（後にアフリカへ転送）、9機がジャブローに配備された。

戦後もジム・キャノンは使用され、グリプス戦役時にもジャブローに配備されていた。この機体は他の旧式MS同様、近代化改修されており、手持ち兵装としてジムⅡ用ビーム・ライフルとシールドを装備した。

グリプス戦役期にジャブロー基地に配備されていたジム・キャノン。この2機はシールドを装備していない。

本機の派生機としては、RGC・80S ジム・キャノン（空間突撃仕様）が存在したといわれる。この機体は脚部の分割式増加装甲を廃止したうえ、脹脛部にジム・スナイパー・カスタム用と同型のスラスターを設置しており、空間戦時の姿勢制御能力が向上した。

星一号作戦のため、宇宙に送られたジム・キャノンの内、5～6機が空間突撃仕様だったといわれるが、通常仕様のジム・キャノンと共に、大半または全機が失われたとされる。

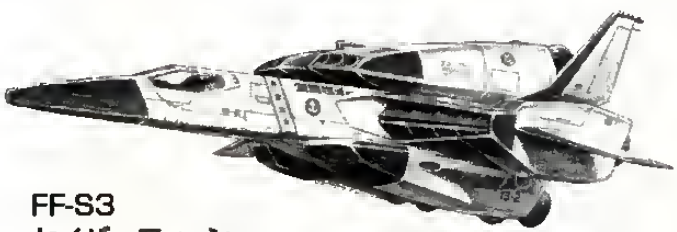
航空／航宙機を中心とした非機動兵器型のMS支援機

MSの性能を底上げする支援システム

旧来、大規模な地上部隊は航空支援の下で作戦行動を行うのが常であり、航空優勢を得られない軍隊は、苦戦を強いられた。

宇宙世紀でも当初こそこの傾向は同じだったが、ミノフスキー粒子の散布が常態化すると航空機の優位性は低下。宇宙戦闘機兼高高度戦闘機のFF-S3セイバーフィッシュ、高高度迎撃戦闘機のFF-6TINコッド、リフティングボディ式の高高度戦闘機フライダーツ、強攻偵察機フラットマウス、対地攻撃機マングースといった地球連邦軍のコア・ファイター・バリエーションも状況は同じで、一年戦争時には過去のものとされてしまった。FF-4トリアーエズなどの空間戦闘機も、宇宙空間ではMSの敵ではなかった。

軍事における航空／航宙機の時代は、終焉に向かっていたのである。

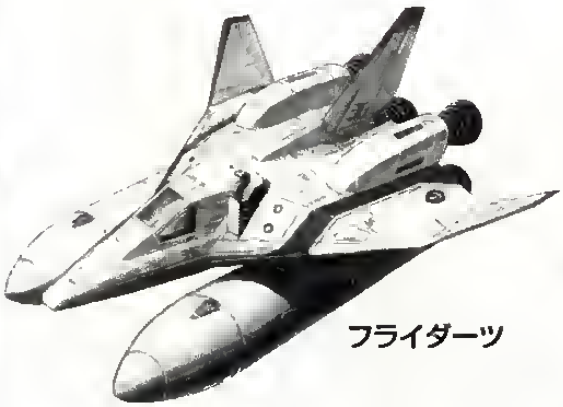


FF-S3
セイバーフィッシュ

代わって航空／航宙機には、MSの支援機としての役割が求められた。これは支援攻撃だけでなく、ジオン公国軍のド・ダイYSのように、MSと一体的に運用できるシステムになることを意味している。

こうした状況を受け、地球連邦軍では、ガンダムとの合体分離機能を持つサブ・フライト・システム（SFS）的航空／航宙機Gファイターが開発された。だが、Gファイターの合体分離機能や火器換装機構はMSとの合体だけでなく、巨大なペイロードを多目的に使えるシステムとなっていた。MSとの連携運用能力が新たな可能性をもたらしたのだ。

この機能を利用したGファイターのバリエーションとして、ミサイル・ランチャーとメガ粒子砲を増設し、MS収納スペースを燃料タンクと兵装格納庫としたGファイター宇宙用、ミサ



フライダーツ

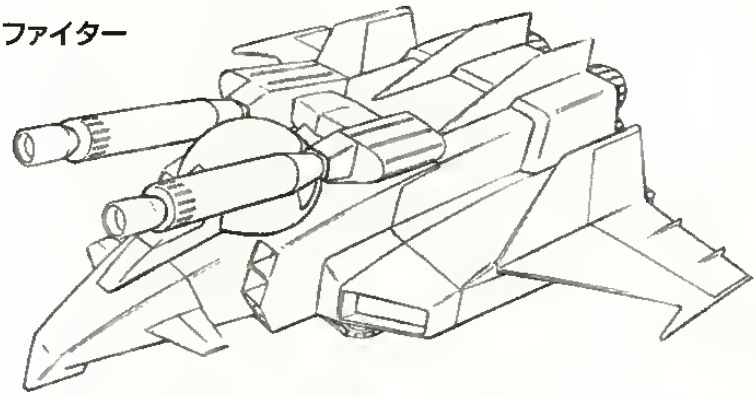
FF-6
TINコッド

マングース

フラットマウス

イル・ランチャーとマウント式バルカン・ポッドを装備したGファイター爆撃型、機体中央に兵員輸送用コンテナを挟み込んだGファイター強襲揚陸型（開発は一年戦争後）などが、模索された。

Gファイター

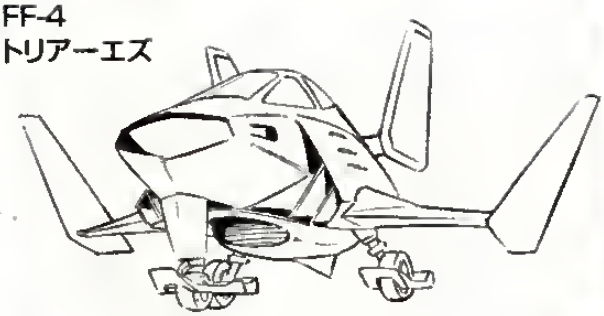


他にも地球連邦軍は、Gファイターほどシステマチックではないが、ド・ダイYSのようにMSを積載運搬できる航空機にも興味を示した。それがライトライナーとコルベットブースターで、機体下面にMSを懸架、あるいは超大型ランドセルのように背負い式に装備する形態を採った。この方式はジム・インターセプトカスタムのフェロウブースターでも採用されている。

懸架／背負い形式のSFSは、露天状態で機体上にMSを乗せるド・ダイYSほど洗練されておらず、航空／航宙機単体としての使い勝手も悪かったため、主流とは

Gアーマー

FF-4
トリアーエズ

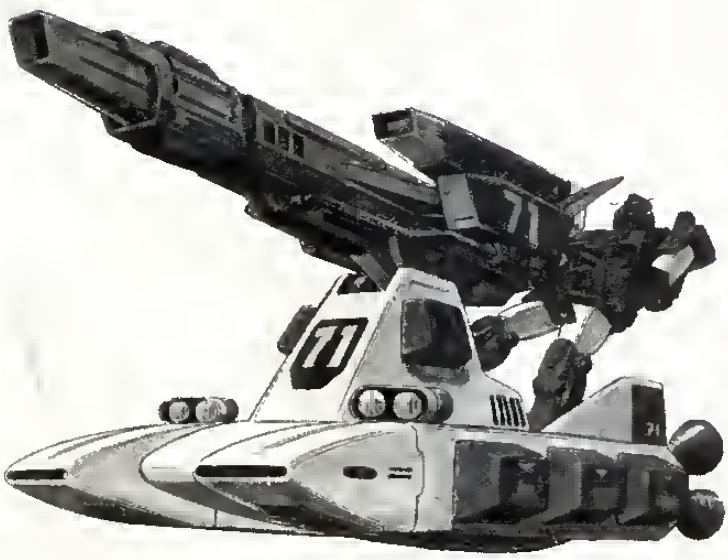


一年戦争後もセイバーフィッシュやTINコッドの運用は続けられたが、MSの性能向上にまったくついていけず、ジャブロー降下作戦では陳腐化を露呈した。

はならなかった。しかし、Gファイター同様、MSと航空／航宙機の一体化を目指した、地球連邦軍の方向性を示していることは間違いない。

　このように地球連邦軍は、合体式や懸架／背負い式のMS用支援航空／航宙機に固執していたように見える。しかし、FSWS計画では、U.C.0080年代後半に誕生したMS搭載式自走メガ粒子砲FXA-08R メガ・ライダーを思わせる画期的機体を提案していた。

　それが宇宙用SFSと大型メガ粒子砲のハイブリット機バストライナーで、10年先を行く発想のメカニックとなっていたのだ。



バストライナー

一年戦争の進展が生み出し続けたMSVと戦後も開発されたMSV的機動兵器たち

一年戦争の経過に符合した各軍のMSV開発

ここまでは、MSV各機の開発背景や技術上の特徴を解説してきた。しかし、これは機体レベル、またはMSシリーズからのミニマムな観点に過ぎず、MSV全体や一年戦争を俯瞰したマクロな視点には立っていない。

本書における各MSシリーズの紹介順と章内でのMSVの並びは、可能な限り時系列順としており、他系列機や直接的な関係を持つMSとの関連性も記述しているが、総論的なMSVの位置付けは言及してこなかった。そこで終章では、一年戦争やMS開発史におけるMSVの意義について解説していく。

MSVの開発史は、ジオン公国および地球連邦の戦略や戦術のみならず、一年戦争の各時期における両軍が置かれた状況、技術的・時間的制約などと深くリンクしていた。その関係性は、ある意味、ザクⅡやドム、ジムなどの一般的MSよりも密接で、MSVを時系列順に追うことは、一年戦争の流れをトレースすることに繋がるといっても過言ではな

い。本書での解説順が可能な限り時系列となっているのは、これが理由のひとつである。

一年戦争の推移との間に、顕著な関係が見られるのはジオン公国軍のＭＳＶだった。ミノフスキー粒子散布環境下での偵察活動に適応したザク強行偵察型、地球侵攻に適合した水中用ザクやザク・デザートタイプ、戦争の長期化と空間戦闘の継続を受けて開発された高機動型ザク、地球での戦況の多様化に対応したグフ重装型やドム・トロピカル・テストタイプ、戦局の悪化を受けて開発された高性能機のゲルググ高機動型やサイコミュ・システム試験用ザクといった流れがそれである。

ミノフスキー粒子散布環境下という新環境におけるＭＳ運用の模索、開戦前から決定事項となっていた地球侵攻への備え、開戦とブリティッシュ作戦の失敗、南極条約締結と長期消耗戦への移行、地球侵攻作戦の実施と地球全域の戦場化、戦線膠着と徐々に地球連邦軍に傾いたミリタリー・バランスなどの一年戦争の推移が、反映されていることが理解できる。やはり、兵器は必要に応じて開発されるものなのだ。

地球連邦軍はＭＳの歴史が短く、ＭＳＶの数も少ない。ＭＳ実用化以降の時間的な制約から、地球連邦軍系ＭＳＶの開発や運用は、一年戦争後期から末期に集中しているのである。だが、フルアーマー・ガンダムやガンキャノンⅡ、ジム・スナイパー・カスタムに代表される高性能な地球連邦軍系ＭＳＶは、重要かつ苛烈な一年戦争末期の戦況を想定、対応したものだったことは間違いない。

ジオン公国軍と地球連邦軍で異なるMSVの傾向

ジム・ライトアーマーの項などでも説明したが、ジオン公国軍と地球連邦軍では一般的MSは当然のこと、MSVの傾向にも違いが見られた。この背景には、MSの投入期間や戦略・戦術の相違以外にも、MS観やアプローチ法の差があったと考えられる。

ジオン公国軍のMSVは極めて多様で、統一した傾向は見られない。高機動型や熱帯用、水中用や偵察型、果ては飛行試験型やサイコミュ試験用など、実に幅広いのである。

ただし、これはジオン公国軍が無秩序なMS開発を行っていたのではなく（機動兵器開発の裾野が広がり過ぎた結果、現場が混乱したのは確かだが）、時期によってMSVの傾向が異なっているためと考えていい。

ジオン公国軍のMSVの傾向は、大きくふたつに分けることができる。地球侵攻作戦に始まる地上戦に対応した局地戦用MS、一年戦争後期の宇宙戦を想定した高性能機である（高機動型ザクやザク強行偵察型は、どちらにも属さない珍しいMSVだが、高機動型ザクは戦争の長期化が直接的な開発理由となっており、地球侵攻作戦以降の局地戦用MS開発と同様の流れにある機体だった）。

局地戦用機の系列は、ジオン公国軍系MSVの多くを占める機体だった。ザク・デザー

トタイプやグフ重装型のような陸戦タイプの印象が強いが、水中用ザクやアッグガイに代表される水陸両用ＭＳ、ＭＳ単独での飛行能力獲得を目指したグフ飛行試験型、特殊なところではトンネル掘削用のアッグがあり、陸戦のみならず水圏や空など、地球のあらゆる環境に適応したＭＳ群が開発されていた。

重力下／局地戦用のＭＳＶが多種多様なのは、適応すべき環境が多いこと、一年戦争の大半の期間、地球が主戦場だったことに因っている。必要性と期間の問題ということだ。

一年戦争末期に登場した宇宙用高性能機のＭＳＶは、期間的な事情から数が少ない。実用レベルに達していない機体もあるが、ゲルググ高機動型やサイコミュ・システム試験用ザク、パーフェクト・ジオングなどのように、ジオン公国軍の先端技術を集結したハイエンドのシリーズだった。一年戦争末期、ジオン公国軍はオッゴやギガンのような簡易機動兵器を開発していたが、それとは逆の機体が宇宙用高性能機のＭＳＶだったのである。

こうしたＭＳＶが開発された背景には、戦況悪化と戦線の宇宙移行以外にも、ジオン公国軍のＭＳ技術の向上、将兵の消耗、地球連邦軍のＭＳ投入といった事情が横たわっている。敵対組織である地球連邦軍の反攻が、ジオン公国軍を追い詰め、一騎当千の高性能機動兵器の開発を促したと考えていい。

ただでさえ強力なニュータイプの力を増大させるサイコミュ搭載機の開発は、この傾向が強く、兵力に劣るジオン公国軍にとって重要なファクターだった。ＭＳ単体の性能向上

は、高機動型ザクや地球侵攻用の局地戦用ＭＳでも見られる要素だが、一年戦争末期に登場したジオン公国軍系ＭＳＶは、特にこの傾向が顕著だった。

地球連邦軍のＭＳＶは局地戦用ではなく、前述のように高性能化を目指したものがほとんどである（ＭＳＶ以外に分類される機体には、ジム寒冷地用やデザート・ジム、アクア・ジムのような局地戦用機も見られる）。Ｇ－３ガンダムやガンキャノンⅡなどがそれで、一年戦争末期のジオン公国軍系ＭＳＶ同様、高性能機としての側面を持っていた。

これらの地球連邦軍系ＭＳＶは、従来機を改修した機体が多いが、地球連邦軍独自のコンセプトといえるものはフルアーマー・オペレーション対応のフルアーマー・ガンダム程度に過ぎない。狙撃任務に対応した総合性能向上機ジム・スナイパーカスタムは、ほぼ同様の思想で開発されたゲルググ・イェーガーがジオン公国軍に存在するため、独自のコンセプトとまではいえない。軽量・高機動なジム・ライトアーマーも、機動性向上の手段が異なるだけで、高機動型ザクやゲルググ高機動型に近い特性の機体だった。

それでも地球連邦軍系ＭＳＶが特殊だと考えられるのは、その発展過程に理由がある。地球連邦軍はＭＳのバリエーション展開に際し、ベースとなる機種を絞ると共に、複雑な改修を可能な限り行わなかった。結果、ＭＳＶはストレートな性能向上や改修が行われた。この結果、地球連邦軍はＭＳのノウハウが少なかったにも拘らず、短期間で高性能なＭＳＶを生み出すことに成功したのだった。

MSVが世に知らしめたエース・パイロットたち

技術や戦術以外にもMSVが生み出したもの、というより世に知らしめたものがあった。それが「エース・パイロット」と呼ばれる高練度パイロットたちである（そのほとんどは、実際にエース称号を持っていた）。

ジオン公国軍のエース・パイロットと言えば、〝赤い彗星〟シャア・アズナブルを筆頭に、〝青い巨星〟ランバ・ラル、〝黒い三連星〟のガイア、オルテガ、マッシュの3人、〝ソロモンの悪夢〟アナベル・ガトーらが有名である。しかし、他にも有名かつ強力なパイロットは存在しており、その多くはMSVと共に知られるようになった。

その代表が、高機動型ザクR・2タイプやゲルググ高機動型などを駆った〝真紅の稲妻〟ジョニー・ライデンと、高機動型ザクR・1Aタイプを任された〝ソロモンの白狼〟シン・マツナガである。他にも高機動型ザク・プロトタイプや高機動型ザク・ビーム兵器搭載型などでテスト・パイロットを務めたエリオット・レム、ザク・デザートタイプやドム・トロピカル・テストタイプなどを駆ってアフリカ戦線で名を挙げたロイ・グリンウッド、キマイラ隊でゲルググ・キャノンに搭乗したジェラルド・サカイ、同じくキマイラ隊でゲルググ・キャノンを操った地球連邦からの亡命者トーマス・クルツらが知られる。ザ

ク・キャノンを駆りニュータイプと噂されたイアン・グレーデン、同様にザク・キャノンに搭乗したアルフレディーノ・ラム、ザク・デザートタイプとグフの混成部隊スコルピオで隊長を務めたカーミック・ロム、希少な高機動型ザクR・2タイプを任されたロバート・ギリアムとギャビー・ハザードらもその名が知られている。

「MSのカンブリア爆発」を支えたMSVの意義と消滅

ザクIが誕生したわずか数年後に勃発したにもかかわらず、一年戦争では膨大な数のMSが開発された。その規模は「MSのカンブリア爆発」と形容できるレベルに達しており、MS開発史における最初の爆発的進化とバリエーション展開が起こったのだった。

その「MSのカンブリア爆発」が発生した一因が、MSVにあったことは確かである。

一年戦争開戦以前、ザクIIによってMSの基本形はほぼ完全に完成していた。開戦後に誕生した、陸戦MSのグフやドム、地球連邦軍のガンダムやガンキャノンなどが、MSの進化と多様化を促していくが、グフ試作実験機やプロトタイプ・ガンダムといった試作機系のMSVがその間を埋め、高機動型ザクやフルアーマー・ガンダムなどの発展型のMSVが、新たなMSの形態を生み出していったのだ。

百花繚乱のごとく誕生したＭＳＶは、一年戦争で少なからぬ活躍を見せたほか、新技術の礎となったものの、多くが終戦と共に消えていった。ＭＳＶの大半を開発したジオン公国の崩壊が主な理由であるが、残されたＭＳＶやそのデータは地球連邦軍の手に渡ったほか、アクシズを中心としたジオン公国軍残党によって持ち去られ、戦後のＭＳ開発に大きな影響を与えた。

特に、サイコミュ搭載ＭＳに先鞭を付けたサイコミュ・システム試験用ザクやパーフェクト・ジオング、ＭＳへの飛行能力付与を模索したグフ飛行試験型、換装システムにより１機で多様な装備形態を実現したゲルググ高機動型やゲルググ・キャノン、突出した高性能を示したＧ・３ガンダムなどの技術系譜は、Ｕ．Ｃ．００８０年代前半以後のＭＳ開発において大きな意味を持つことになった。ＡＭＸ・００４キュベレイやＲＸ・１７８ガンダムＭｋ・Ⅱは、ＭＳＶの恩恵を受けた顕著な例といえる。

そして、一年戦争でＭＳＶやＭＳＸ、４号機以降のガンダムやＲＸ・81ジーライン、イフリートに代表されるバリエーション機が誕生し、ＭＳ開発を加速したように、グリプス戦役以後の戦乱においてもＭＳＶに相当する派生機群が開発され、機動兵器に新たな方向性を示した。こうして、ある新型ＭＳの開発が、派生機を生み、その技術系譜に属する新型機が生まれるというサイクルは、連綿と続いていくのである。

機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録Ⅱ

平成22年7月2日初版第1刷発行

■編著
有限会社メガロマニア：高村泰稔／杉山和繁／坂口徳仁

■デザイン
石橋成哲

■イラストレーション
天神英貴：表紙・ピンナップ
Ⅰ-Ⅳ：ピンナップ・章扉
木下ともたけ：カット

■協力
株式会社サンライズ

発行人　高橋一平
発行所　株式会社竹書房
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2-7-3
電話　03-3264-1576（代表）
03-3234-6301（編集）
振替　00170-2-179210
竹書房ホームページ　http://www.takeshobo.co.jp

印刷・製本　図書印刷株式会社

● 定価はカバーに表示してあります。
● 乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。
● 本書は品質保持のため、予告なく変更や訂正を加える場合があります。
● 無断転載は禁止されています。

ISBN978-4-8124-4282-1　C0176
Printed in Japan
© 創通・サンライズ

竹書房文庫

機動戦士ガンダムの本

機動戦士ガンダム
ガンダム最強伝説
MEGALOMANIA 編著

機動戦士ガンダム
モビルスーツ
開発秘録
MEGALOMANIA 編著

機動戦士ガンダム
永遠のライバル
アムロとシャア
MEGALOMANIA 編著

ジオン公国軍のワークホースとして活躍したMS-06F ザクⅡ
伝説的な活躍で勇名を馳せたRX-78-2 ガンダム
後に歴史にその名を残すMSたちの活躍の陰で
複雑化する戦局に対応するために数多の派生型MSが生み出された――
本書ではMS開発史の狭間に存在するMSVと呼ばれる派生機体群を
MS開発や技術系譜の側面と政治的・軍事的側面の両方向から徹底検証する

© 創通・サンライズ

装丁原画:天神英貴
装丁:石橋成哲

MOBILE SUIT GUNDAM

機動戦士ガンダム U.C.0079 = モビルスーツ開発秘録 II

THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT II

メ1-4

機動戦士ガンダム

MS モビルスーツ 開発秘録Ⅱ

MEGALOMANIA編著

竹書房文庫

機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録 II

MOBILE SUIT GUNDAM
THE SECRET OF
MOBILE SUIT DEVELOPMENT II
U.C.0079

MS! モビルスーツバリエーションの秘められし歴史が明らかに!!

人型機動兵器MSの進化録

ジオン公国、地球連邦が生み出したMS V50余体を完全収録
その誕生から運用、開発史上の功績に至るまでを徹底検証
MSのミッシングリンクを繋ぐもうひとつのMS開発秘録

描き下しイラスト24点収録!!

竹書房文庫

9784812442821

ISBN978-4-8124-4282-1

C0176 ¥667E

定価 本体667円+税

1920176006677

THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT Ⅱ

宇宙世紀0079に勃発した一年戦争は、ミノフスキー粒子散布環境対応兵器MS（モビルスーツ）の揺籃期であった。絶大な戦闘能力、全高20mクラスの巨体に、人間を模したスタイルを持つMSは、一年戦争以後も「宇宙世紀のギガンテス」として戦場に絶対的存在感を示している。開戦当初は短期決戦と目されていた一年戦争は、双方の意に反して長期化し、戦場は拡大する。多彩に変化する戦況に対応するため、様々な形体をとるMSが派生展開されていく。

本書では、ジオン公国軍のワークホースとして一年戦争を戦い抜いたMS-06FザクⅡ F型や伝説的な活躍で勇名を馳せたRX-78-2 ガンダム、といった著名なMSの陰に隠れたMSVをクローズアップし、「兵器」としての視点で徹底検証。

ジオン公国軍と地球連邦軍が生み出したモビルスーツバリエーション50余体を完全収録したヴィジュアル兵器読本

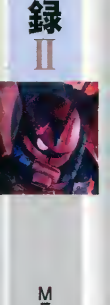
「MS-06R-1A 高機動型ザクR-2」
「MSN-01 サイコミュ・システム高機動試験機」
「MS-07B-3 グフ・カスタム」
「YMS-09D ドム・トロピカル・テストタイプ」
「MS-14C ゲルググ・キャノン」
「MSM-04G ジュアッグ」
「FA-78-1 フルアーマー・ガンダム」
「RGC-80 ジム・キャノン」——etc.

豪華イラストレーター陣：天神英貴・I-Ⅳ・木下ともたけ

メ1-4

機動戦士ガンダム

MS モビルスーツ 開発秘録 II



MEGALOMANIA 編著

竹書房文庫

機動戦士ガンダム モビルスーツ開発秘録 II

MOBILE SUIT GUNDAM
THE SECRET OF
MOBILE SUIT DEVELOPMENT II
U.C.0079

MEGALOMANIA 編著

竹書房文庫

9784812442821

ISBN978-4-8124-4282-1

C0176 ¥667E

定価 本体667円+税

1920176006677

THE SECRET OF MOBILE SUIT DEVELOPMENT Ⅱ

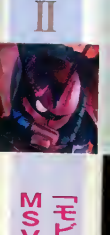
宇宙世紀0079に勃発した一年戦争は、ミノフスキー粒子散布環境対応兵器MS（モビルスーツ）の揺籃期であった。絶大な戦闘能力、全高20mクラスの巨体に、人間を模したスタイルを持つMSは、一年戦争以後も「宇宙世紀のギガンテス」として戦場に絶対的存在感を示している。開戦当初は短期決戦と目されていた一年戦争は、双方の意に反して長期化し、戦場は拡大する。多彩に変化する戦況に対応するため、様々な形体をとるMSが派生展開されていく。

本書では、ジオン公国軍のワークホースとして一年戦争を戦い抜いたMS-06FザクⅡ F型や伝説的な活躍で勇名を馳せたRX-78-2 ガンダム、といった著名なMSの陰に隠れたMSVをクローズアップし、「兵器」としての視点で徹底検証。誕生の時代背景から、開発と運用の歴史に至るまでを、本書描き下しイラストとともに完全収録する。究極のモビルスーツ読本第二弾がついに誕生!!

メ1-4

機動戦士ガンダム

MS モビルスーツ 開発秘録 II



「モビルスーツ」兵器読本第二弾
MSVの秘められし開発史を徹底検証

竹書房文庫